

# 基本計画書

基本計画書											
事項	記入欄						備考				
計画の区分	学部を設置										
フリガナ設置者	コクリツダガクカクジシフカカゾシダガク										
フリガナ大学の名称	フカカゾシダガク 福岡女子大学 (Fukuoka Women's University)										
大学本部の位置	福岡県福岡市東区香住ヶ丘1丁目1番1号										
大学の目的	広く知識を受け、専門の学芸を教授研究して、知的、道徳的及び創造的能力を備えた女性を育成し、もって文化の向上と社会の発展に寄与することを目的とする。										
新設学部等の目的	時代や社会の変化に柔軟に対応できる豊かな知識と確かな判断力、しなやかな適応力を持ち、アジアや世界の視点に立って、国内はもとより、海外の国や地域において、より良い社会づくりに貢献することのできる女性の育成を目指す。										
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地			
	国際文理学部 (International College of Arts and Sciences)	年	人	年次人	人		年月 第年次				
	国際教養学科 (Department of International Liberal Arts)	4	135	—	540	学士(国際教養)	平成23年4月 第1年次	福岡県福岡市東区香住ヶ丘1丁目1番1号			
	環境科学科 (Department of Environmental Science)	4	70	—	280	学士(環境科学)	平成23年4月 第1年次	同上			
	食・健康学科 (Department of Food and Health Sciences)	4	35	—	140	学士(食健康学)	平成23年4月 第1年次	同上			
	計		240	—	960						
同一設置者内における変更状況(定員の移行、名称の変更等)	文学部(廃止) 国文学科(△45) ※平成23年4月学生募集停止 英文学科(△45) ※平成23年4月学生募集停止 人間環境学部(廃止) 環境理学科(△30) ※平成23年4月学生募集停止 栄養健康科学科(△30) ※平成23年4月学生募集停止 生活環境学科(△30) ※平成23年4月学生募集停止										
教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数					
		講義	演習	実験・実習	計						
	国際文理学部 国際教養学科	200科目	111科目	13科目	324科目	124単位					
	国際文理学部 環境科学科	147科目	84科目	28科目	259科目	124単位					
国際文理学部 食・健康学科	102科目	70科目	38科目	210科目	124単位						
教員組織の概要	学部等の名称			専任教員等					兼任教員		
		教授	准教授	講師	助教	計	助手				
	新設	国際文理学部 国際教養学科			18人 (15)	14人 (13)	14人 (13)	1人 (1)	47人 (42)	0人 (0)	68人 (45)
		環境科学科			12 (11)	5 (5)	2 (2)	1 (1)	20 (19)	4 (4)	58 (43)
		食・健康学科			6 (6)	6 (6)	1 (1)	0 (0)	13 (13)	5 (5)	48 (42)
		計			36 (32)	25 (24)	17 (16)	2 (2)	80 (74)	9 (9)	92 (47)
	既設	該当なし			— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)
		計			— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)
	合計			36 (32)	25 (24)	17 (16)	2 (2)	80 (74)	9 (9)	92 (47)	

教員以外の職員の概要	職 種		専 任	兼 任	計					
	事 務 職 員		27 (24) 人	17 (17) 人	44 (41) 人					
	技 術 職 員		0 (0)	1 (1)	1 (1)					
	図 書 館 専 門 職 員		0 (0)	4 (4)	4 (4)					
	そ の 他 の 職 員		0 (0)	2 (2)	2 (2)					
	計		27 (24)	24 (24)	51 (48)					
校 地 等	区 分	専 用	共 用	共用する他の学校等の専用	計					
	校 舎 敷 地	37,898.60㎡	0㎡	0㎡	37,898.60㎡					
	運 動 場 用 地	5,961.78㎡	0㎡	0㎡	5,961.78㎡					
	小 計	43,860.38㎡	0㎡	0㎡	43,860.38㎡					
	そ の 他	12,035.69㎡	0㎡	0㎡	12,035.69㎡					
	合 計	55,896.07㎡	0㎡	0㎡	55,896.07㎡					
校 舎		専 用	共 用	共用する他の学校等の専用	計					
		17,903.03㎡ ( 17,903.03㎡)	0㎡ ( 0㎡)	0㎡ ( 0㎡)	17,903.03㎡ ( 17,903.03㎡)					
教室等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設	大学全体				
	15室	11室	48室	1室 (補助職員0人)	1室 (補助職員0人)					
専任教員研究室		新設学部等の名称			室 数					
		国際文学部			85室					
図 書 ・ 設 備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点			
	国際文学部	193,462 [45,564] (176,702 [42,484])	1,499 [105] (1,419 [81])	1 [ 1 ] (1 [ 1 ])	1,988 (1,188)	92 ( 92 )	0 ( 0 )			
	計	193,462 [45,564] (176,702 [42,484])	1,499 [105] (1,419 [81])	1 [ 1 ] (1 [ 1 ])	1,988 (1,188)	92 ( 92 )	0 ( 0 )			
図書館		面積	閲覧座席数		収 納 可 能 冊 数					
		3,098.60㎡	144		200,000					
体育館		面積	体育館以外のスポーツ施設の概要							
		1,441.12㎡	弓道場							
経 費 の 見 積 り 及 び 維 持 方 法 の 概 要	経費の見積り	区 分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	図書費には電子ジャーナル・データベースの整備費(運用コスト含む)を含む。 県外生の第1年次の納付金は、1,056千円
		教員1人当り研究費等	504千円	504千円	504千円	504千円	504千円	-千円	-千円	
		共同研究費等	13,723千円	13,723千円	13,723千円	13,723千円	13,723千円	-千円	-千円	
		図書購入費	35,006千円	20,006千円	20,006千円	20,006千円	20,006千円	-千円	-千円	
	設備購入費	28,500千円	28,500千円	28,500千円	28,500千円	28,500千円	-千円	-千円		
	学生1人当り納付金	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次			
		818千円	536千円	536千円	536千円	-千円	-千円			
学生納付金以外の維持方法の概要			福岡県(設立団体)からの運営費交付金により維持する。							

既設大学等の状況	大学の名称	福岡女子大学							所在地	
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学員定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度		
	文学部						1.07		福岡県福岡市東区香住ヶ丘1丁目1番1号	平成23年度より学生募集停止(文学部国文学科) 平成23年度より学生募集停止(文学部英文学科)
	国文学科	4	45	—	180	学士(文学)	1.06	昭和29年度		
	英文学科	4	45	—	180	学士(文学)	1.09	昭和29年度		
	人間環境学部						1.10		同上	平成23年度より学生募集停止(人間環境学部環境理学科) 平成23年度より学生募集停止(人間環境学部栄養健康科学科) 平成23年度より学生募集停止(人間環境学部生活環境学科)
	環境理学科	4	30	—	120	学士(人間環境学)	1.10	平成7年度		
	栄養健康科学科	4	30	—	120	学士(人間環境学)	1.10	平成7年度		
	生活環境学科	4	30	—	120	学士(人間環境学)	1.09	平成7年度		
	文学研究科								同上	
	国文学専攻	2	5	—	10	修士(文学)	0.50	平成5年度		
	英文学専攻									
	博士前期課程	2	5	—	10	修士(文学)	0.45	平成5年度		
	博士後期課程	3	3	—	9	博士(文学)	1.66	平成9年度		
	人間環境学研究科								同上	
	環境理学専攻	2	4	—	8	修士(人間環境学)	0.81	平成12年度		
	栄養健康科学専攻	2	4	—	8	修士(人間環境学)	1.81	平成12年度		
	生活環境学専攻	2	4	—	8	修士(人間環境学)	0.75	平成12年度		
	附属施設の概要	該当なし								



別記様式第2号(その2の1)

教育課程等の概要															
(国際文理学部 国際教養学科)															
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
ファーストイヤー・ゼミ	ファーストイヤー・ゼミⅠ	1前	1				○		17	14	4			兼32	
	ファーストイヤー・ゼミⅡ	1後	1				○		17	14	4			兼32	
	小計( 2 科目)		2	0	0		—		17	14	4	0	0	兼32	
学部共通科目	学術英語プログラム (AEP)	学術英語コミュニケーションⅠ	1前	1				○				8	1		
		学術英語コミュニケーションⅡ	1前	1				○				3			兼7
		学術英語コミュニケーションⅢ	1後	1				○				5			兼6
		学術英語コミュニケーションⅣ	2前	1				○				7	1		兼5
		学術英語リスニングⅠ	1前	1				○				7			兼2
		学術英語リスニングⅡ	1後	1				○				4	1		兼3
		学術英語リーディングⅠ	1前	1				○				7	1		兼4
		学術英語リーディングⅡ	1前	1				○				3	1		兼8
		学術英語リーディングⅢ	1後	1				○		2	2	6	1		兼3
		学術英語リーディングⅣ	1後	1				○		2	2	7	1		兼3
		学術英語リーディングⅤ	2前	1				○		2	2	6	1		兼3
		学術英語ライティングⅠ	1前	1				○				5	1		兼5
		学術英語ライティングⅡ	1後	1				○				7			兼4
		学術英語ライティングⅢ	1後	1				○				8			兼1
		学術英語ライティングⅣ	2前	1				○		2		6	1		兼5
	小計( 15 科目)		15	0	0		—		4	2	8	1	0	兼17	
学部共通科目	学術日本語プログラム (AJP)	学術日本語リーディングⅠ	1前		1			○				1			
		学術日本語リーディングⅡ	1後		1			○				1			
		学術日本語リーディングⅢ	2前		1			○				1			
		学術日本語ライティングⅠ	1前		1			○				1			
		学術日本語ライティングⅡ	1前		1			○							兼1
		学術日本語ライティングⅢ	1後		1			○				1			
		学術日本語ライティングⅣ	1後		1			○							兼1
		学術日本語ライティングⅤ	2前		1			○				1			
		学術日本語リスニングⅠ	1前		1			○				1			
		学術日本語リスニングⅡ	1後		1			○				1			
		学術日本語コミュニケーションⅠ	1前		1			○				1			
		学術日本語コミュニケーションⅡ	1後		1			○				1			
		学術日本語コミュニケーションⅢ	2前		1			○				1			
		学術日本語日本事情Ⅰ	1前		1			○				1			
		学術日本語日本事情Ⅱ	1後		1			○				1			
	小計( 15 科目)		0	0	15		—		0	0	2	0	0	兼1	
学部共通科目	アドバンスト・イングリッシュ	英語上級Ⅰ	2・3・4後		1			○		1					
		英語上級Ⅱ	2・3・4後		1			○				1			
		英語上級Ⅲ	2・3・4後		1			○				2			
		小計( 3 科目)		0	3	0		—		1	0	3	0	0	0
学部共通科目	外国語科目	中国語Ⅰ	1前		1			○		1	1				兼2
		中国語Ⅱ	1前		1			○		1					兼2
		中国語Ⅲ	1後		1			○		1	1				兼2
		中国語Ⅳ	1後		1			○		1					兼2
		中国語Ⅴ	2前		1			○		1					兼2
		中国語Ⅵ	2後		1			○		1					兼2
		韓国語Ⅰ	1前		1			○							兼1
		韓国語Ⅱ	1前		1			○				1			兼1
		韓国語Ⅲ	1後		1			○							兼1
		韓国語Ⅳ	1後		1			○				1			兼1
		韓国語Ⅴ	2前		1			○				1			兼1
		韓国語Ⅵ	2後		1			○				1			兼1
		ドイツ語Ⅰ	1前		1			○		1					
		ドイツ語Ⅱ	1前		1			○				1			
		ドイツ語Ⅲ	1後		1			○		1					
		ドイツ語Ⅳ	1後		1			○				1			
		ドイツ語Ⅴ	2前		1			○				1			
		ドイツ語Ⅵ	2後		1			○				1			
		フランス語Ⅰ	1前		1			○				1			
		フランス語Ⅱ	1前		1			○							兼3
		フランス語Ⅲ	1後		1			○							兼3
		フランス語Ⅳ	1後		1			○							兼3
		フランス語Ⅴ	2前		1			○			1				兼3
		フランス語Ⅵ	2後		1			○							兼3
		英語Ⅰ	1前		1			○							兼1
		英語Ⅱ	1前		1			○							兼1
		英語Ⅲ	1後		1			○							兼1
		英語Ⅳ	1後		1			○							兼1
	小計( 28 科目)		0	28	0		—		3	5	0	0	0	兼8	
学部共通科目	情報活用科目	情報インテリジェンス	1前・後		2			○							兼3 ※講義
		情報リテラシー	1前		2			○							兼3 ※講義
		小計( 2 科目)		2	2	0		—		0	0	0	0	0	兼3

別記様式第2号(その2の1)

教育課程等の概要															
(国際文理学部 国際教養学科)															
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
学部 共通科目	日本文化理解科目	日本の伝統文化	1前	2			○				1				
		現代日本文化	1前	2			○					1			
		福岡の文化と社会	1後	2			○				1				
		日本女性文化	1後	2			○				1				
		小計( 4 科目)		0	8	0		—		0	3	1	0	0	0
	語学研修科目	海外語学研修	1・2・3通		1			○			1				
		小計( 1 科目)		0	1	0		—		1	0	0	0	0	0
	体験学習科目	フィールドスタディ	1通		2				○		1				
		国際インターンシップ	2・3・4通		2				○		1				
		フィールドワーク	2・3・4通		2				○		1				
		サービスラーニング	2・3・4通		2				○		1				
		小計( 4 科目)		0	8	0		—		0	1	0	0	0	0
	総合科目	グローバリズムと多様性社会	1・2前	2			○			2		1			兼1
		地球環境と人類の未来	1・2前	2			○				2				兼3
		現代社会における生命と健康	1・2後	2			○				2				兼3
		小計( 3 科目)		0	6	0		—		2	4	1	0	0	兼7
	人文科学	国際文化論	1・2・3・4前	2			○				1				
		ジェンダー	1・2・3・4前	2			○				1				
		日本の言語と世界	1・2・3・4前	2			○					1			
		欧米言語文化概論	1・2・3・4前	2			○				1				
言語とコミュニケーション		1・2・3・4後	2			○					1				
歴史と文化		1・2・3・4後	2			○				1					
人間の思索		1・2・3・4前	2			○			1						
宗教学		1・2・3・4後	2			○				1					
	小計( 8 科目)		0	16	0		—		1	4	1	0	0	0	
社会科学	ジェンダーと法	1・2・3・4後	2			○				1					
	現代社会と法	1・2・3・4前	2			○			1						
	日本国憲法	2・3・4前	2			○			1						
	現代日本社会論	1・2・3・4前	2			○								兼1	
	今日の東アジア社会	1・2・3・4前	2			○								兼1	
	国際関係の成り立ち	1・2・3・4後	2			○			1						
	国際経済のしくみ	1・2・3・4前	2			○			1						
	組織運営のしくみ	1・2・3・4後	2			○			1						
	情報と社会	1・2・3・4後	2			○								兼1	
	小計( 9 科目)		0	18	0		—		4	1	0	0	0	兼3	
自然科学	持続可能社会の設計	1・2・3・4前	2			○								兼2	
	人をめぐる生命科学	1・2・3・4前	2			○								兼1	
	国際社会における食の安全・安心	1・2・3・4前	2			○								兼1	
	物質と環境	1・2・3・4後	2			○								兼1	
	物理学と現代社会	1・2・3・4後	2			○								兼1	
	教理学と現代社会	1・2・3・4後	2			○								兼1	
	科学論	1・2・3・4後	2			○								兼1	
	小計( 7 科目)		0	14	0		—		0	0	0	0	0	兼8	
芸術・感性	美術表現	1・2・3・4前	2					○						兼1	
	造形表現	1・2・3・4後	2					○						※講義	
	音楽表現Ⅰ	1・2・3・4前	2					○						兼1	
	音楽表現Ⅱ	1・2・3・4後	2					○						※講義	
	小計( 4 科目)		0	8	0		—		0	0	0	0	0	兼2	
健康スポーツ実習	健康スポーツ実習Ⅰ	1前	1					○						兼2	
	健康スポーツ実習Ⅱ	1後	1					○						兼2	
	小計( 2 科目)		0	2	0		—		0	0	0	0	0	兼2	
学部共通専門科目	異文化理解	2・3・4前	2			○			1						
	国際社会とジェンダー	3後	2			○				1					
	国際経済学	2後	2			○				1					
	生活と環境	2後	2			○								兼2	
	食料経済学	2後	2			○								兼1	
	食健康論	3前	2			○								兼2	
	社会調査法	2・3前	2			○								兼1	
	フィールド実践・研究推進論Ⅰ	2・3・4前	2			○				1					
	フィールド実践・研究推進論Ⅱ	2・3・4後	2			○				1					
	小計( 9 科目)		0	18	0		—		1	3	0	0	0	兼6	

教育課程等の概要																
(国際文理学部 国際教養学科)																
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
学 科 基 本 科 目	文化・歴史	日本文学入門	1後	2		○			1							
		欧米文学入門	1後	2		○				1						
		英語学入門	2前	2		○				1						
		哲学入門	1後	2		○			1							
		歴史学入門	2前	2		○				1						
		東アジア地域研究入門	1後	2		○				1						
	小計( 6 科目)			0	12	0	—			2	4	0	0	0	0	
	社会システム	法学入門	1・2前	2		○				1					兼1	
		政治学入門	1・2後	2		○										
		経済学入門	1・2前	2		○			1							
		経営学入門	1・2後	2		○			1							
		国際関係入門	1・2前	2		○			1							
		情報社会入門	1・2前	2		○									兼1	
		基礎数学	1前	2		○									兼1	
		基礎統計学	1後	2		○									兼1	
応用統計学		2前	2		○									兼1		
小計( 9 科目)			0	18	0	—			3	1	0	0	0	兼4		
学 科 科 目	概論・歴史・文化	日本史概論	1前	2		○										
		日本外交文化史 I	2前	2		○										
		日本外交文化史 II	2後	2		○										
		儒教思想史	1後	2		○									兼1	
		日本伝統芸能	2前	2		○				1						
		奈良時代の文化と文学	2前	2		○			1							
		平安・鎌倉時代の文化と文学	2後	2		○			1							
		江戸時代の文化と文学	2後	2		○			1							
		明治・大正時代の文化と文学	2前	2		○					1					
		書道 I (書道芸術)	1前	2		○									兼1	
		書道 II (書道実技)	1後	2		○							○		兼1	
		美学美術史	1・2後	2		○									兼1	
		日本文学史	2前	2		○					1				兼1	
		国語表現(音声・文法・表記)	2前	2		○			1							
		和漢比較文学	1後	2		○			1							
		近・現代日本文学の英訳研究	3後	2		○			1							
		中国古典文学 I	2前	2		○									兼1	
		中国古典文学 II	2後	2		○									兼1	
		日本語文化講読	2後	2				○			1				※講義	
		日本語文化文庫講読B(かな)	2前	2				○		1					※講義	
		日本語文化文庫講読A(漢文)	2後	2				○		1					※講義	
		日本文化の科学的解析	2・3前	2		○			2						兼2	
		日本文化史講義	3後	2		○						1			オムニバス	
	小計( 23 科目)			0	46	0	—			4	3	2	0	0	兼6	
	日 本 言 語 文 化 科 目	文学・語学	漢文学講義	3・4前	2		○			1						
			上代日本文学講義	3・4後	2		○			1						
			中古日本文学講義 I	3前	2		○									兼1
			中古日本文学講義 II	3後	2		○									兼1
			中世日本文学講義 I	3前	2		○			1						
			中世日本文学講義 II	3後	2		○			1						
			近世日本文学講義 I	3前	2		○				1					
			近世日本文学講義 II	3後	2		○				1					
			近代日本文学講義	3前	2		○						1			
現代日本文学講義			3後	2		○						1				
漢文学実践研究		4前	2				○		1					※講義		
古典文学実践研究		4前	2				○		1					※講義		
日本語音韻論		3前	2			○				1						
日本語表記論		3前	2			○			1							
日本語文法論		3後	2			○					1					
国語学実践研究		4前	2				○		1					※講義		
日本語教育概論		2前	2			○					1					
日本語教授法 I		2後	2			○					1					
日本語教授法 II		3前	2			○					1					
日本語教育授業研究		3・4後	2				○				1			※講義		
小計( 20 科目)			0	40	0	—			3	2	2	0	0	兼1		
演習	日本語文化演習 I	3前	2				○		3	2	3					
	日本語文化演習 II	3後	2				○		3	2	3					
	小計( 2 科目)			0	4	0	—			3	2	3	0	0	0	

教育課程等の概要																				
(国際文理学部 国際教養学科)																				
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考						
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手							
学 科 科 目	専 門 科 目	欧米言語文化概論	哲学概論	2前		2			○			1						兼1		
			欧米史概論	2後		2			○											
			英文学史	2前		2				○				1						
			米文学史	2前		2				○				1						
			ドイツ言語文化概論	2後		2				○					1					
			フランス言語文化概論	2後		2				○						1				
		小計( 6 科目)			0	12	0			—			2	3	0	0	0		兼1	
		英米の文化と文学	中世イギリスの文化と文学	3前		2				○			1							
			近・現代イギリスの文化と文学 I	3前		2				○				1						
			近・現代イギリスの文化と文学 II	3後		2				○					1					
			近・現代アメリカの文化と文学 I	2前		2				○			1							
			近・現代アメリカの文化と文学 II	3前		2				○			1							
			ポストモダン英語圏の文化と文学	2後		2				○			1							
		小計( 6 科目)			0	12	0			—			3	1	0	0	0		0	
		英語学	英語音声学	2後		2					○		1							
			英語文法論	3前		2					○			1						
			英語の歴史	2後		2				○			1							
			英語文化論	2後		2				○			1							
			英語とジェンダー	3後		2				○			1							
		小計( 5 科目)			0	10	0			—			2	1	0	0	0		0	
		英語コミュニケーション	英語コミュニケーション I	2後		2					○		1							兼1
			英語コミュニケーション II	3前		2					○									兼1
			英語通訳の理論と実践	3後		2					○									兼1
			英語文章表現演習 I	2後		2					○		1							兼1
			英語文章表現演習 II	3前		2					○		1							兼1
			英語翻訳の理論と実践	4前		2					○		1							兼1
		小計( 6 科目)			0	12	0			—			2	0	0	0	0		兼2	
欧米文化論	欧米文化理論	3後		2					○		1							兼1		
	科学と文学	3後		2					○									兼1		
	欧米文学と女性表象	3後		2					○		1							兼1		
	欧米文学と映像メディア	3前		2					○		1							兼1		
小計( 4 科目)			0	8	0			—			3	0	0	0	0		兼1			
欧米言語文化文献講読	英米言語文化文献講読 I	3前		2					○		1									
	英米言語文化文献講読 II	3前		2					○			1								
	英米言語文化文献講読 III	3後		2					○											
	英米言語文化文献講読 IV	3後		2					○		1									
	ドイツ言語文化文献講読 I	3前		2					○		1									
	ドイツ言語文化文献講読 II	3後		2					○		1									
	フランス言語文化文献講読 I	3前		2					○			1						隔年開講		
	フランス言語文化文献講読 II	3前		2					○			1						隔年開講		
小計( 8 科目)			0	16	0			—			4	3	0	0	0		0			
演習	欧米言語文化演習 I	3前		2					○		6	4								
	欧米言語文化演習 II	3後		2					○		6	4								
	小計( 2 科目)			0	4	0			—			6	4	0	0	0		0		
東アジア	東アジア地域関係論	3後		2					○									兼1		
	東アジアの歴史	2前		2					○									兼1		
	女性たちとアジア	2後		2					○			1						兼1		
	アジアの現代文化	2後		2					○									兼1		
	東アジアの法と社会	2後		2					○		1							兼1		
	東アジアの政治と社会	3前		2					○									兼1		
	東アジア経済論	3前		2					○			1						兼1		
	東アジアの環境	2後		2					○									兼1		
小計( 8 科目)			0	16	0			—			1	2	0	0	0		兼5			
中国	中国近現代史	2後		2					○		1									
	現代中国の文化	2前		2					○		1									
	中国社会論	2後		2					○											
	中国経済論	3前		2					○			1								
小計( 4 科目)			0	8	0			—			2	1	0	0	0		0			
韓国	朝鮮近現代史	2前		2					○									兼1		
	現代韓国の文化	2前		2					○									兼1		
	韓国社会論	2後		2					○		1							兼1		
	韓国経済論	3前		2					○									兼1		
小計( 4 科目)			0	8	0			—			1	0	0	0	0		兼3			



別記様式第2号(その2の1)

教育課程等の概要																		
(国際文理学部 国際教養学科)																		
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考				
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手					
学 科 科 目	東 ア ジ ア 地 域 研 究 科 目	中 国 語 ・ 韓 国 語	時事中国語講読	3後	2			○		1								
			時事韓国語講読	3後	2			○		1								
			中国語演習Ⅰ	3前	2			○		1								
			中国語演習Ⅱ	3後	2			○		1								
			韓国語演習Ⅰ	3前	2			○			1							
			韓国語演習Ⅱ	3後	2			○			1							
	小計( 6 科目)				0	12	0		—	2	1	0	0	0	0			
	演 習	東アジア地域研究演習Ⅰ	3前		2			○		3	2	1						
		東アジア地域研究演習Ⅱ	3後		2			○		3	2	1						
		小計( 2 科目)				0	4	0		—	3	2	1	0	0	0		
	国 際 開 発 ・ 国 際 協 力	国際関係論	2前		2			○		1								
		国際開発論	2後		2			○				1					兼1	
		開発法学	2後		2			○				1						
		国際機構法	3前		2			○				1						
		国際協力・NPO/NGO論	3後		2			○				1						
		コミュニケーション学	1・2・3・4前		2			○									兼1	
		異文化間コミュニケーション学	1・2・3後		2			○									兼1	
		グローバル社会と人の移動	3前		2			○				1						
		国際環境政策論	3前		2			○									兼1	
		小計( 9 科目)				0	18	0		—	1	2	1	0	0	0	兼3	
		国 際 関 係 科 目	国際法	2後		2			○			1						兼1
			国際紛争と数理学	2・3後		2			○									
			平和と安全保障	3前		2			○				1					
			国際政治史	3前		2			○				1					
	政治思想史		3後		2			○				1						
	政治理論		3前		2			○				1						
	比較政治学		2前		2			○		1								
現代日本政治	3後			2			○									兼1		
日本政治史	3前			2			○									兼1		
アメリカの政治と社会	3前			2			○									兼1		
ヨーロッパ政治史	3後			2			○				1							
現代ヨーロッパの政治と社会	3前			2			○				1							
南アジアの政治と社会	3前			2			○				1							
国際関係特別講義	3後		2			○			1	1								
小計( 14 科目)				0	28	0		—	1	3	0	0	0	0	兼4			
演 習	国際関係演習Ⅰ	3前		2			○		1	3								
	国際関係演習Ⅱ	3後		2			○		1	3								
	小計( 2 科目)				0	4	0		—	1	3	0	0	0	0			
国 際 経 済 ・ マ ネ ジ メ ン ト 科 目	国 際 マ ネ ジ メ ン ト	経営学	2前		2			○		1								
		国際経営学	2後		2			○									兼1	
		会計学	2前		2			○									兼1	
		国際企業会計	2後		2			○									兼1	
		ファイナンス	3前		2			○									兼1	
		日本・アジアの企業経営	3後		2			○									兼1	
		企業戦略	2前		2			○		1								
		経営管理論	2後		2			○		1								
		人的資源管理	3前		2			○									兼1	
		社会心理学	2後		2			○				1						
		行動心理学	3前		2			○				1						
		ビジネス英語	2前		2			○									兼1	
		環境ビジネス	3前		2			○									兼1	
		プロジェクトマネジメント論	3前		2			○									兼1	
		プロジェクトマネジメント演習	3後		2			○									兼1	
小計( 15 科目)				0	30	0		—	1	1	0	0	0	0	兼8			
国 際 経 済	ミクロ経済学Ⅰ	2前		2			○		1									
	ミクロ経済学Ⅱ	2後		2			○		1									
	マクロ経済学Ⅰ	2前		2			○		1									
	マクロ経済学Ⅱ	2後		2			○		1									
	計量経済学Ⅰ	2前		2			○		1									
	計量経済学Ⅱ	2後		2			○		1							兼1		
	財政学	3前		2			○		1									
	金融論	3前		2			○		1							兼1		
	経済政策	3前		2			○		1									
	地域経済	3後		2			○		1									
経済成長	3後		2			○		1										

別記様式第2号(その2の1)

教育課程等の概要															
(国際文理学部 国際教養学科)															
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
学 科 目 目	国際経済 マネジメント	開発経済学	3後	2		○			1					兼1 兼1 兼1 兼1 隔年開講	
		日本経済	3後	2		○									
		アメリカ経済	3後	2		○									
		EU経済	3後	2		○									
		経済英語	2後	2			○								
	小計( 16 科目)			0	32	0	—			2	0	0	0	0	兼5
	演習	国際経済・マネジメント演習 I	3前		2			○		3	2				
		国際経済・マネジメント演習 II	3後		2			○		3	2				
		小計( 2 科目)			0	4	0	—			3	2	0	0	0
	卒業研究	卒業研究演習	4通	4				○		17	13	4			
卒業論文		4通	4				○		17	13	4				
小計( 2 科目)			8	0	0	—			17	13	4	0	0		
教 職 科 目	教職基礎論	1後		2	○			1							
	教育哲学	3前		2	○			1							
	教育心理学	2前		2	○				1						
	教育行政学	2後		2	○									兼1	
	教育課程論	2前		2	○									兼1	
	国語科教育法 I	3前		2	○									兼1	
	国語科教育法 II	3後		2	○									兼1 隔年開講	
	国語科教育法 III	3後		2	○									兼1 隔年開講	
	国語科教育法 IV	4前		2	○									兼1	
	英語科教育法 I	3前		2	○									兼1	
	英語科教育法 II	3後		2	○						1			3年毎開講	
	英語科教育法 III	3後		2	○						1			3年毎開講	
	英語科教育法 IV	3後		2	○						1			3年毎開講	
	道徳教育の研究	3後		2	○			1							
	特別活動の研究	3後		2	○									兼1	
	教育方法学	2後		2	○					1					
	生徒指導論	3前		2	○					1					
	教育相談論	3後		2	○					1					
	教職実践演習(中・高)	4後		2			○		1	1					
	事前・事後指導	4通		1	○				1	1					
	中学校教育実習	2前		2					1	1					
	高等学校教育実習	4前		2					1	1					
	学校経営と学校図書館	3・4後		2	○									兼1 隔年開講	
	学校図書館メディアの構成	3・4前		2	○									兼1 隔年開講	
	学習指導と学校図書館	3・4前		2	○									兼1 隔年開講	
	読書と豊かな人間性	3・4前		2	○			1						隔年開講	
	情報メディアの活用	3・4後		2	○									兼1	
小計( 27 科目)			0	0	53	—			3	1	1	0	0	兼6	
合計( 324 科目)		—	27	490	68	—			18	14	14	1	0	兼101	

別記様式第2号(その2の1)

教 育 課 程 等 の 概 要													
(国際文理学部 国際教養学科)													
科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置				備考
			必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験 ・ 実 習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	
学位又は称号		学士(国際教養)		学位又は学科の分野			文学関係、法学関係、経済学関係						
卒 業 要 件 及 び 履 修 方 法						授 業 期 間 等							
<p>(卒業要件)以下の単位を含んで、124単位以上修得すること。</p> <p>◇学部共通科目:45単位以上</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ファーストイヤー・ゼミ:2単位必修</li> <li>○学術言語プログラム:15単位必修(日本語を母国語としない学生は、学術英語プログラムに代えて、学術日本語プログラムを履修することができる)</li> <li>○外国語科目:4単位以上選択(いずれか1言語Ⅰ～Ⅳを含む。)日本語を母国語とする学生は、英語Ⅰ～Ⅳを履修しても卒業要件単位に含めない。外国人留学生が外国語科目を選択する場合は、母国語以外の言語を履修すること。</li> <li>○情報活用科目:2単位必修</li> <li>○日本文化理解科目:2単位以上選択(国際教養学科開講科目の「日本史概論」、「儒教思想史」、「書道Ⅰ(書道芸術)」、「美学美術史」からも選択することができる)</li> <li>○共通基盤科目:20単位以上選択(総合科目:2単位以上選択、人文科学:2単位以上選択、社会科学:2単位以上選択、自然科学:6単位以上選択)</li> </ul> <p>◇学部共通専門科目:6単位以上</p> <p>◇学科科目:60単位以上</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○学科基本科目:10単位以上選択</li> <li>○専門科目:42単位以上選択</li> </ul> <p>うち32単位以上は、「日本語文化科目」、「欧米言語文化科目」、「東アジア地域研究科目」、「国際関係科目」、「国際経済・マネジメント科目」のいずれか同一の科目区分からその指定された必修科目(注)6単位を含んで履修するものとする。ただし、「東アジア地域研究科目」にあつては、当該科目区分から28単位以上を含んだ上で「国際関係科目」、「国際経済・マネジメント科目」の科目区分の科目と合せて32単位とすることができる。</p> <p>(注) 科目区分から指定された必修科目</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「日本語文化科目」:「日本文化の科学的解析」、「日本語文化演習Ⅰ」、「日本語文化演習Ⅱ」</li> <li>・「欧米言語文化科目」:「科学と文学」、「欧米言語文化演習Ⅰ」、「欧米言語文化演習Ⅱ」</li> <li>・「東アジア地域研究科目」:「東アジアの環境」、「東アジア地域研究演習Ⅰ」、「東アジア地域研究演習Ⅱ」</li> <li>・「国際関係科目」:「国際紛争と教理学」、「国際関係演習Ⅰ」、「国際関係演習Ⅱ」</li> <li>・「国際経済・マネジメント科目」:「環境ビジネス」、「国際経済・マネジメント演習Ⅰ」、「国際経済・マネジメント演習Ⅱ」</li> </ul> <p>○卒業研究:8単位必修</p> <p>ただし、卒業研究は専門科目の「日本語文化科目」、「欧米言語文化科目」、「東アジア地域研究科目」、「国際関係科目」、「国際経済・マネジメント科目」うち、履修要件を満たした科目区分において行う。</p> <p>◇学部共通科目及び学部共通専門科目並びに他学科を含む学科科目(食・健康学科が指定する科目を除く)から選択履修:13単位以上</p> <p>※履修科目の登録の上限(年間):45単位(「教職科目」等を除く。なお、教授会が認めた場合には上限を超えて履修することができる。)</p>						1学年の学期区分			2 学期				
						1学期の授業期間			15 週				
						1時限の授業時間			90 分				



別記様式第2号(その2の1)

教育課程等の概要															
(国際文理学部 環境科学科)															
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
ファーストイヤー・ゼミ	ファーストイヤー・ゼミⅠ	1前	1				○		12	5	2			兼48	
	ファーストイヤー・ゼミⅡ	1後	1				○		12	5	2			兼48	
	小計( 2 科目)		2	0	0		—		12	5	2	0	0	兼48	
学部共通科目	学術英語プログラム (A E P)	学術英語コミュニケーションⅠ	1前	1				○							兼9
		学術英語コミュニケーションⅡ	1前	1				○							兼10
		学術英語コミュニケーションⅢ	1後	1				○							兼11
		学術英語コミュニケーションⅣ	2前	1				○							兼13
		学術英語リスニングⅠ	1前	1				○							兼9
		学術英語リスニングⅡ	1後	1				○							兼8
		学術英語リーディングⅠ	1前	1				○							兼12
		学術英語リーディングⅡ	1前	1				○							兼12
		学術英語リーディングⅢ	1後	1				○							兼12
		学術英語リーディングⅣ	1後	1				○							兼13
		学術英語リーディングⅤ	2前	1				○							兼14
		学術英語ライティングⅠ	1前	1				○							兼11
		学術英語ライティングⅡ	1後	1				○							兼11
		学術英語ライティングⅢ	1後	1				○							兼9
		学術英語ライティングⅣ	2前	1				○							兼14
	小計( 15 科目)		15	0	0		—		0	0	0	0	0	兼32	
学部共通科目	学術日本語プログラム (A J P)	学術日本語リーディングⅠ	1前		1			○							兼1
		学術日本語リーディングⅡ	1後		1			○							兼1
		学術日本語リーディングⅢ	2前		1			○							兼1
		学術日本語ライティングⅠ	1前		1			○							兼1
		学術日本語ライティングⅡ	1前		1			○							兼1
		学術日本語ライティングⅢ	1後		1			○							兼1
		学術日本語ライティングⅣ	1後		1			○							兼1
		学術日本語ライティングⅤ	2前		1			○							兼1
		学術日本語リスニングⅠ	1前		1			○							兼1
		学術日本語リスニングⅡ	1後		1			○							兼1
		学術日本語コミュニケーションⅠ	1前		1			○							兼1
		学術日本語コミュニケーションⅡ	1後		1			○							兼1
		学術日本語コミュニケーションⅢ	2前		1			○							兼1
		学術日本語日本事情Ⅰ	1前		1			○							兼1
		学術日本語日本事情Ⅱ	1後		1			○							兼1
	小計( 15 科目)		0	0	15		—		0	0	0	0	0	兼3	
学部共通科目	アドバンスド・イングリッシュ	英語上級Ⅰ	2・3・4後		1			○							兼1
		英語上級Ⅱ	2・3・4後		1			○							兼1
		英語上級Ⅲ	2・3・4後		1			○							兼2
		小計( 3 科目)		0	3	0		—		0	0	0	0	0	兼4
学部共通科目	外国語科目	中国語Ⅰ	1前		1			○							兼4
		中国語Ⅱ	1前		1			○							兼3
		中国語Ⅲ	1後		1			○							兼4
		中国語Ⅳ	1後		1			○							兼3
		中国語Ⅴ	2前		1			○							兼3
		中国語Ⅵ	2後		1			○							兼3
		韓国語Ⅰ	1前		1			○							兼1
		韓国語Ⅱ	1前		1			○							兼2
		韓国語Ⅲ	1後		1			○							兼1
		韓国語Ⅳ	1後		1			○							兼2
		韓国語Ⅴ	2前		1			○							兼2
		韓国語Ⅵ	2後		1			○							兼2
		ドイツ語Ⅰ	1前		1			○							兼1
		ドイツ語Ⅱ	1前		1			○							兼1
		ドイツ語Ⅲ	1後		1			○							兼1
		ドイツ語Ⅳ	1後		1			○							兼1
		ドイツ語Ⅴ	2前		1			○							兼1
		ドイツ語Ⅵ	2後		1			○							兼1
		フランス語Ⅰ	1前		1			○							兼4
		フランス語Ⅱ	1前		1			○							兼3
		フランス語Ⅲ	1後		1			○							兼3
		フランス語Ⅳ	1後		1			○							兼3
		フランス語Ⅴ	2前		1			○							兼4
		フランス語Ⅵ	2後		1			○							兼3
		英語Ⅰ	1前		1			○							兼1
		英語Ⅱ	1前		1			○							兼1
		英語Ⅲ	1後		1			○							兼1
		英語Ⅳ	1後		1			○							兼1
	小計( 28 科目)		0	28	0		—		0	0	0	0	0	兼16	
学部共通科目	情報活用科目	情報インテリジェンス	1前・後	2				○				1			兼2 ※講義
		情報リテラシー	1前	2				○				1			兼2 ※講義
		小計( 2 科目)		2	2	0		—		0	0	1	0	0	兼2

別記様式第2号(その2の1)

教育課程等の概要																
(国際文理学部 環境科学科)																
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
学部共通科目	日本文化理解科目	日本の伝統文化	1前	2			○								兼1	
		現代日本文化	1前	2			○								兼1	
		福岡の文化と社会	1後	2			○								兼1	
		日本女性文化	1後	2			○								兼1	
		小計( 4 科目)		0	8	0		—		0	0	0	0	0	兼4	
	語学研修科目	海外語学研修	1・2・3通		1			○								兼1
		小計( 1 科目)		0	1	0		—		0	0	0	0	0	兼1	
	体験学習科目	フィールドスタディ	1通		2				○							兼1
		国際インターンシップ	2・3・4通		2				○							兼1
		フィールドワーク	2・3・4通		2				○							兼1
		サービスラーニング	2・3・4通		2				○							兼1
		小計( 4 科目)		0	8	0		—		0	0	0	0	0	兼1	
	総合科目	グローバリズムと多様性社会	1・2前		2			○			1					兼3
		地球環境と人類の未来	1・2前		2			○			2	1				兼2
		現代社会における生命と健康	1・2後		2			○			2	1				兼2
		小計( 3 科目)		0	6	0		—		5	2	0	0	0	兼7	
	人文科学	国際文化論	1・2・3・4前		2			○								兼1
		ジェンダー	1・2・3・4前		2			○								兼1
		日本の言語と世界	1・2・3・4前		2			○								兼1
		欧米言語文化概論	1・2・3・4前		2			○								兼1
言語とコミュニケーション		1・2・3・4後		2			○								兼1	
歴史と文化		1・2・3・4後		2			○								兼1	
人間の思索		1・2・3・4前		2			○								兼1	
宗教学		1・2・3・4後		2			○								兼1	
	小計( 8 科目)		0	16	0		—		0	0	0	0	0	兼6		
社会科学	ジェンダーと法	1・2・3・4後		2			○								兼1	
	現代社会と法	1・2・3・4前		2			○								兼1	
	日本国憲法	2・3・4前		2			○								兼1	
	現代日本社会論	1・2・3・4前		2			○								兼1	
	今日の東アジア社会	1・2・3・4前		2			○								兼1	
	国際関係の成り立ち	1・2・3・4後		2			○								兼1	
	国際経済のしくみ	1・2・3・4前		2			○								兼1	
	組織運営のしくみ	1・2・3・4後		2			○								兼1	
	情報と社会	1・2・3・4後		2			○								兼1	
		小計( 9 科目)		0	18	0		—		0	0	0	0	0	兼8	
自然科学	持続可能社会の設計	1・2・3・4前		2			○			2					オムニバス	
	人をめぐる生命科学	1・2・3・4前		2			○			1					兼1	
	国際社会における食の安全・安心	1・2・3・4前		2			○									
	物質と環境	1・2・3・4後		2			○			1						
	物理学と現代社会	1・2・3・4後		2			○				1					
	教理学と現代社会	1・2・3・4後		2			○			1						
	科学論	1・2・3・4後		2			○								兼1	
	小計( 7 科目)		0	14	0		—		5	1	0	0	0	兼2		
芸術・感性	美術表現	1・2・3・4前		2				○							兼1	
	造形表現	1・2・3・4後		2				○							※講義	
	音楽表現Ⅰ	1・2・3・4前		2				○							兼1	
	音楽表現Ⅱ	1・2・3・4後		2				○							※講義	
	小計( 4 科目)		0	8	0		—		0	0	0	0	0	兼2		
健康スポーツ実習	健康スポーツ実習Ⅰ	1前		1				○							兼2	
	健康スポーツ実習Ⅱ	1後		1				○							兼2	
	小計( 2 科目)		0	2	0		—		0	0	0	0	0	兼2		
学部共通専門科目	異文化理解	2・3・4前		2			○								兼1	
	国際社会とジェンダー	3後		2			○								兼1	
	国際経済学	2後		2			○			1	1				兼1	
	生活と環境	2後		2			○								オムニバス	
	食料経済学	2後		2			○								兼1	
	食健康論	3前		2			○								兼2	
	社会調査法	2・3前		2			○								兼1	
	フィールド実践・研究推進論Ⅰ	2・3・4前		2			○								兼1	
	フィールド実践・研究推進論Ⅱ	2・3・4後		2			○								兼1	
	小計( 9 科目)		0	18	0		—		1	1	0	0	0	兼8		

教育課程等の概要														
(国際文理学部 環境科学科)														
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	
学科基本科目	基礎数学	1前	2			○								兼1
	基礎物理学	1前		2		○				1				
	基礎化学	1前	2			○			1					
	基礎生命科学	1前	2			○			1	1				オムニバス
	生態系の生物学	1後		2		○			1					
	基礎統計学	1後		2		○					1			
	応用統計学	2前		2		○								
	環境科学概論	2前	2			○			4					兼1
	コンピュータサイエンス	1前		2		○								オムニバス
	プログラミング	2後		2		○					1			※演習
	環境法総論	1後		2		○								兼1
	経済学入門	1・2前		2		○								兼1
	環境とジェンダー	2後		2		○								兼1
小計( 13 科目)			10	16	0	-			5	2	1	0	0	兼4
学科科目	環境物質科目	基礎物理化学	2前		2		○			1				
		応用物理化学	2後		2		○			1				
		有機化学	2前		2		○			1				
		基礎分析化学	1後		2		○			1				
		無機化学	2前		2		○			1				
		高分子化学	2後		2		○			1				
		環境物理学	3前		2		○				1			
		環境材料学	3前		2		○			1				
		環境有機化学	2後		2		○			1				
		環境分析化学	2後		2		○				1			
		大気環境科学	3前		2		○				1			
		土壌環境科学	3後		2		○							
		水質環境科学	3前		2		○			1				
	地球環境科学	3後		2		○								
	環境機器分析学	2後		2		○				1				
	東アジアの環境	2後		2		○				1				
	基礎物理学実験	2前		1				○		1	1			
	基礎化学実験	2前		1				○				1	1	
	有機化学実験	2後		1				○		1			1	
	高分子化学実験	3前		1				○		1			1	
	環境物質基礎実験	2後		1				○		1			1	
	環境分析化学実験	3前		1				○		1			1	
	機器分析学実験	3後		1				○		1			1	
	地球環境科学実験	3後		1				○					1	
	基礎物理化学演習	2後		1				○		1				
	応用物理化学演習	3前		1				○		1				
	環境科学演習	2後		1				○		1				
	環境物質論および実習 I	3前		2			○		4	2				※実習、オムニバス
	環境物質論および実習 II	3後		2			○		4	2				※実習
小計( 29 科目)			0	47	0	-			5	2	1	1	3	兼2
環境生命科目	遺伝子の生物学	1後		2		○								兼1
	生命の分子的基盤	2前		2		○			1					
	生体の機能学	2前		2		○			1					
	分子生物学	2後		2		○								兼1
	遺伝学	3前		2		○				1				
	バイオインフォマティクス	3後		2		○				1				
	細胞の生物学	1後		2		○				1				
	発生生物学	3前		2		○				1				
	系統進化学	3後		2		○								兼1
	動物生理学	2後		2		○			1					
	生物統計学	2後		2		○								兼1
	環境生理学	3前		2		○			1					
	生態学 I	2前		2		○			1					
	生態学 II	3後		2		○								兼1
	保全生物学	3前		2		○				1				
	環境評価学	2後		2		○								兼1
生命科学演習 I	2後		1				○	1						
生命科学演習 II	3前		1				○		1					
生命科学演習 III	3前		1				○	1						
生命科学演習 IV	3後		1				○	1						
生命科学演習 V	3後		1				○		1					
生命科学基礎実験	2前		1				○		1			1		
発生生物学実験	3前		1				○		1			1		

教育課程等の概要															
(国際文理学部 環境科学科)															
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
専門科目	環境生命科目	動物生理学実験	3前	1				○	1					1	※実習、オムニバス ※実習
		生態学実験	3前	1				○	1					1	
		環境生理学実験	2後	1				○	1					1	
		環境生命論および実習Ⅰ	3前	2			○		3	2					
		環境生命論および実習Ⅱ	3後	2			○		3	2					
	小計( 28 科目)			0	46	0	—			3	2	0	0	3	兼6
	環境生活科目	エコライフスタイル学	2前	2			○			1					兼1  兼1
		化学物質管理	2後	2			○			1					
		都市空間デザイン	3後	2			○			1					
		循環・廃棄物管理	2前	2			○			1					
		内空間環境工学	2前	2			○			1					
		環境生活学	2前	2			○			1					
		環境人間工学	3前	2			○			1					
		環境生活生理学	2後	2			○			1					
		環境衛生学	2前	2			○			1					
		生活環境デザイン	2後	2			○			1					
		環境リスク	2後	2			○				1				
		環境生活基礎実験	2後	1					○	1				1	
		エコ・リサイクル実験	2後	1					○	1				1	
		環境影響検査法	3前	1				○		1					
環境生活演習Ⅰ		3前	1				○		1						
環境生活演習Ⅱ	3前	1				○		1							
環境生活演習Ⅲ	3前	1				○		1							
環境生活演習Ⅳ	3前	1				○		1							
環境生活論および実習Ⅰ	3前	2			○			3	1				※実習、オムニバス		
環境生活論および実習Ⅱ	3後	2			○			3	1				※実習		
小計( 20 科目)			0	33	0	—			4	1	0	0	1	兼2	
国際環境政策科目	環境法Ⅰ	2前	2			○								兼1	
	環境法Ⅱ	2後	2			○								兼1	
	国際機構法	3前	2			○								兼1	
	地域環境政策論	1後	2			○			1						
	国際環境政策論	2前	2			○			1						
	国際協力・NPO/NGO論	3後	2			○								兼1	
	社会環境設計論	3前	2			○					1				
	環境統計学	3前	2			○					1			※演習	
	環境(負荷)評価	3後	2			○								兼1	
	ミクロ経済学Ⅰ	2前	2			○								兼1	
	環境経済学	2後	2			○					1				
	国際環境経済論	3前	2			○					1				
	環境ビジネス	3前	2			○								兼1	
	環境会計論	2前	2			○								兼1	
	企業経営と環境	2後	2			○								兼1	
	環境影響論	3後	2			○					1				
	環境マネジメント演習Ⅰ	2前	1				○				1				
	環境マネジメント演習Ⅱ	2後	1				○				1				
	環境マネジメント演習Ⅲ	3前	1				○		1						
環境マネジメント特別講義Ⅰ	3後	2			○			1							
環境マネジメント特別講義Ⅱ	3後	2			○					1					
環境マネジメント特別講義Ⅲ	3後	2			○			1							
国際環境政策論および実習Ⅰ	3前	2			○			1		2			※実習、オムニバス		
国際環境政策論および実習Ⅱ	3後	2			○			1		2			※実習		
小計( 24 科目)			0	45	0	—			2	0	2	0	0	兼8	
関連科目	東アジアの歴史	2前	2			○								兼1	
	国際開発論	2後	2			○								兼1	
	アジアの現代文化	2後	2			○								兼1	
	東アジアの法と社会	2後	2			○								兼1	
小計( 4 科目)			0	8	0	—			0	0	0	0	0	兼4	
卒業研究	卒業研究演習	4通	4				○		12	5	2				
	卒業論文	4通	4				○		12	5	2				
小計( 2 科目)			8	0	0	—			12	5	2	0	0	0	
教職科目	教職基礎論	1後			2	○								兼1	
	教育哲学	3前			2	○								兼1	
	教育心理学	2前			2	○								兼1	
	教育行政学	2後			2	○								兼1	
	教育課程論	2前			2	○								兼1	
	理科教育法Ⅰ	3前			2	○								兼1	
	理科教育法Ⅱ	3後			2	○								兼1 3年毎開講	
	理科教育法Ⅲ	3後			2	○								兼1 3年毎開講	
	理科教育法Ⅳ	3後			2	○								兼1 3年毎開講	
	道徳教育の研究	3後			2	○								兼1	
	特別活動の研究	3後			2	○								兼1	
	教育方法学	2後			2	○								兼1	



別記様式第2号(その2の1)

教育課程等の概要														
(国際文理学部 環境科学科)														
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	
教職科目	生徒指導論	3前			2	○								兼1
	教育相談論	3後			2	○								兼1
	教職実践演習(中・高)	4後			2		○							兼2
	事前・事後指導	4通			1	○								兼2
	中学校教育実習	2前			2			○						兼2
	高等学校教育実習	4前			2			○						兼2
	学校経営と学校図書館	3・4後			2	○								兼1 隔年開講
	学校図書館メディアの構成	3・4前			2	○								兼1 隔年開講
	学習指導と学校図書館	3・4前			2	○								兼1 隔年開講
	読書と豊かな人間性	3・4前			2	○								兼1 隔年開講
情報メディアの活用	3・4後			2	○								兼1	
小計( 23 科目)			0	0	45	-			0	0	0	0	0	兼9
合計( 259 科目)		-	37	327	60	-			12	5	2	1	4	兼119
学位又は称号		学士(環境科学)		学位又は学科の分野			理学関係							
卒業要件及び履修方法						授業期間等								
<p>(卒業要件)以下の単位を含んで、124単位以上修得すること。</p> <p>◇学部共通科目:41単位以上</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ファーストイヤー・ゼミ:2単位必修</li> <li>○学術言語プログラム:15単位必修(日本語を母国語としない学生は、学術英語プログラムに代えて、学術日本語プログラムを履修することができる)</li> <li>○外国語科目:日本語を母国語とする学生は、英語Ⅰ～Ⅳを履修しても卒業要件単位に含めない。外国人留学生が外国語科目を選択する場合は、母国語以外の言語を履修すること。</li> <li>○情報活用科目:2単位必修</li> <li>○日本文化理解科目:2単位以上選択(国際教養学科開講科目の「日本史概論」、「儒教思想史」、「書道Ⅰ(書道芸術)」、「美学美術史」からも選択することができる)</li> <li>○共通基盤科目:20単位以上選択(総合科目:2単位以上選択、人文科学:4単位以上選択、社会科学:4単位以上選択、自然科学:2単位以上選択)</li> </ul> <p>◇学部共通専門科目:6単位以上</p> <p>◇学科科目:60単位以上</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○学科基本科目:10単位必修</li> <li>○専門科目:42単位以上選択</li> </ul> <p>うち28単位以上は、「環境物質科目」、「環境生命科目」、「環境生活科目」、「国際環境政策科目」のいずれか同一の科目区分からその指定された必修科目(注)16単位を含んで履修するものとする。さらに、当該科目区分以外の3科目区分からそれぞれ4単位以上履修するものとする。</p> <p>「関連科目」から2単位以上選択</p> <p>(注) 科目区分から指定された必修科目</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「環境物質科目」:「有機化学」、「基礎分析化学」、「無機化学」、「高分子化学」、「環境分析化学」、「基礎化学実験」、「環境物質基礎実験」、「環境物質論及び実習Ⅰ」、「環境物質論及び実習Ⅱ」</li> <li>・「環境生命科目」:「遺伝子の生物学」、「生命の分子的基盤」、「生体の機能学」、「細胞の生物学」、「生命科学基礎実験」、「発生生物学実験」、「動物生理学実験」、「生態学実験」、「環境生命論及び実習Ⅰ」、「環境生命論及び実習Ⅱ」</li> <li>・「環境生活科目」:「エコライフスタイル学」、「循環・廃棄物管理」、「内空間環境工学」、「環境生活学」、「環境衛生学」、「生活環境デザイン」、「環境生活論及び実習Ⅰ」、「環境生活論及び実習Ⅱ」</li> <li>・「国際環境政策科目」:「環境法Ⅰ」、「地域環境政策論」、「国際環境政策論」、「環境統計学」、「環境経済学」、「環境会計論」、「国際環境政策論及び実習Ⅰ」、「国際環境政策論及び実習Ⅱ」</li> </ul> <p>○卒業研究:8単位必修</p> <p>ただし、卒業研究は専門科目の「環境物質科目」、「環境生命科目」、「環境生活科目」、「国際環境政策科目」のうち、履修要件を満たした科目区分において行う。</p> <p>◇学部共通科目及び学部共通専門科目並びに他学科を含む学科科目(食・健康学科が指定する科目を除く)から選択履修:17単位以上</p> <p>※履修科目の登録の上限(年間):45単位(「教職科目」等を除く。なお、教授会が認めた場合には上限を超えて履修することができる。)</p>						1学年の学期区分		2 学期						
						1学期の授業期間		15 週						
						1時限の授業時間		90 分						



別記様式第2号(その2の1)

教育課程等の概要																
(国際文理学部 食・健康学科)																
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
ファーストイヤー・ゼミ	ファーストイヤー・ゼミ I	1前	1					○			6	6	1		兼54	
	ファーストイヤー・ゼミ II	1後	1					○			6	6	1		兼54	
	小計( 2 科目)		2	0	0			—			6	6	1	0	0	兼54
学部共通科目	学術英語プログラム (AEP)	学術英語コミュニケーション I	1前	1				○								兼9
		学術英語コミュニケーション II	1前	1				○								兼10
		学術英語コミュニケーション III	1後	1				○								兼11
		学術英語コミュニケーション IV	2前	1				○								兼13
		学術英語リスニング I	1前	1				○								兼9
		学術英語リスニング II	1後	1				○								兼8
		学術英語リーディング I	1前	1				○								兼12
		学術英語リーディング II	1前	1				○								兼12
		学術英語リーディング III	1後	1				○								兼12
		学術英語リーディング IV	1後	1				○								兼13
		学術英語リーディング V	2前	1				○								兼14
		学術英語ライティング I	1前	1				○								兼11
		学術英語ライティング II	1後	1				○								兼11
		学術英語ライティング III	1後	1				○								兼9
		学術英語ライティング IV	2前	1				○								兼14
	小計( 15 科目)		15	0	0			—			0	0	0	0	0	兼32
学部共通科目	学術日本語プログラム (AJP)	学術日本語リーディング I	1前			1		○								兼1
		学術日本語リーディング II	1後			1		○								兼1
		学術日本語リーディング III	2前			1		○								兼1
		学術日本語ライティング I	1前			1		○								兼1
		学術日本語ライティング II	1前			1		○								兼1
		学術日本語ライティング III	1後			1		○								兼1
		学術日本語ライティング IV	1後			1		○								兼1
		学術日本語ライティング V	2前			1		○								兼1
		学術日本語リスニング I	1前			1		○								兼1
		学術日本語リスニング II	1後			1		○								兼1
		学術日本語コミュニケーション I	1前			1		○								兼1
		学術日本語コミュニケーション II	1後			1		○								兼1
		学術日本語コミュニケーション III	2前			1		○								兼1
		学術日本語日本事情 I	1前			1		○								兼1
		学術日本語日本事情 II	1後			1		○								兼1
	小計( 15 科目)		0	0	15			—			0	0	0	0	0	兼3
学部共通科目	アドバンスド・イングリッシュ	英語上級 I	2・3・4後			1		○								兼1
		英語上級 II	2・3・4後			1		○								兼1
		英語上級 III	2・3・4後			1		○								兼2
		小計( 3 科目)		0	3	0			—			0	0	0	0	0
学部共通科目	外国語科目	中国語 I	1前			1		○								兼4
		中国語 II	1前			1		○								兼3
		中国語 III	1後			1		○								兼4
		中国語 IV	1後			1		○								兼3
		中国語 V	2前			1		○								兼3
		中国語 VI	2後			1		○								兼3
		韓国語 I	1前			1		○								兼1
		韓国語 II	1前			1		○								兼2
		韓国語 III	1後			1		○								兼1
		韓国語 IV	1後			1		○								兼2
		韓国語 V	2前			1		○								兼2
		韓国語 VI	2後			1		○								兼2
		ドイツ語 I	1前			1		○								兼1
		ドイツ語 II	1前			1		○								兼1
		ドイツ語 III	1後			1		○								兼1
		ドイツ語 IV	1後			1		○								兼1
		ドイツ語 V	2前			1		○								兼1
		ドイツ語 VI	2後			1		○								兼1
		フランス語 I	1前			1		○								兼4
		フランス語 II	1前			1		○								兼3
		フランス語 III	1後			1		○								兼3
		フランス語 IV	1後			1		○								兼3
		フランス語 V	2前			1		○								兼4
		フランス語 VI	2後			1		○								兼3
		英語 I	1前			1		○								兼1
		英語 II	1前			1		○								兼1
		英語 III	1後			1		○								兼1
		英語 IV	1後			1		○								兼1
	小計( 28 科目)		0	28	0			—			0	0	0	0	0	兼16
学部共通科目	情報活用科目	情報インテリジェンス	1前・後			2		○								兼3 ※講義
		情報リテラシー	1前			2		○								兼3 ※講義
		小計( 2 科目)		2	2	0			—			0	0	0	0	0

別記様式第2号(その2の1)

教育課程等の概要																
(国際文理学部 食・健康学科)																
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
学部共通科目	日本文化理解科目	日本の伝統文化	1前		2		○								兼1	
		現代日本文化	1前		2		○								兼1	
		福岡の文化と社会	1後		2		○								兼1	
		日本女性文化	1後		2		○								兼1	
		小計( 4 科目)			0	8	0	—			0	0	0	0	0	兼4
	語学研修科目	海外語学研修	1・2・3通		1			○								兼1
		小計( 1 科目)			0	1	0	—			0	0	0	0	0	兼1
	体験学習科目	フィールドスタディ	1通		2				○							兼1
		国際インターンシップ	2・3・4通		2				○							兼1
		フィールドワーク	2・3・4通		2				○							兼1
		サービスマーケティング	2・3・4通		2				○							兼1
		小計( 4 科目)			0	8	0	—			0	0	0	0	0	兼1
	総合科目	グローバル化と多様性社会	1・2前		2		○									兼4
		地球環境と人類の未来	1・2前		2		○									兼5
		現代社会における生命と健康	1・2後		2		○									兼5
		小計( 3 科目)			0	6	0	—			0	0	0	0	0	兼14
	人文科学	国際文化論	1・2・3・4前		2		○									兼1
		ジェンダー	1・2・3・4前		2		○									兼1
		日本の言語と世界	1・2・3・4前		2		○									兼1
		欧米言語文化概論	1・2・3・4前		2		○									兼1
言語とコミュニケーション		1・2・3・4後		2		○									兼1	
歴史と文化		1・2・3・4後		2		○									兼1	
人間の思索		1・2・3・4前		2		○									兼1	
宗教学		1・2・3・4後		2		○									兼1	
小計( 8 科目)			0	16	0	—			0	0	0	0	0	兼6		
社会科学	ジェンダーと法	1・2・3・4後		2		○									兼1	
	現代社会と法	1・2・3・4前		2		○									兼1	
	日本国憲法	2・3・4前		2		○									兼1	
	現代日本社会論	1・2・3・4前		2		○									兼1	
	今日の東アジア社会	1・2・3・4前		2		○									兼1	
	国際関係の成り立ち	1・2・3・4後		2		○									兼1	
	国際経済のしくみ	1・2・3・4前		2		○									兼1	
	組織運営のしくみ	1・2・3・4後		2		○									兼1	
	情報と社会	1・2・3・4後		2		○									兼1	
	小計( 9 科目)			0	18	0	—			0	0	0	0	0	兼8	
自然科学	持続可能社会の設計	1・2・3・4前		2		○									兼2	
	人をめぐる生命科学	1・2・3・4前		2		○									兼1	
	国際社会における食の安全・安心	1・2・3・4前		2		○					1					
	物質と環境	1・2・3・4後		2		○									兼1	
	物理学と現代社会	1・2・3・4後		2		○									兼1	
	数理学と現代社会	1・2・3・4後		2		○									兼1	
	科学論	1・2・3・4後		2		○									兼1	
小計( 7 科目)			0	14	0	—			0	0	1	0	0	兼7		
芸術・感性	美術表現	1・2・3・4前		2				○							兼1	
	造形表現	1・2・3・4後		2				○							※講義	
	音楽表現 I	1・2・3・4前		2				○							兼1	
	音楽表現 II	1・2・3・4後		2				○							※講義	
小計( 4 科目)			0	8	0	—			0	0	0	0	0	兼2		
健康スポーツ実習	健康スポーツ実習 I	1前		1				○		1					兼1	
	健康スポーツ実習 II	1後		1				○		1					兼1	
	小計( 2 科目)			0	2	0	—			1	0	0	0	0	兼1	
学部共通専門科目	異文化理解	2・3・4前		2		○									兼1	
	国際社会とジェンダー	3後		2		○									兼1	
	国際経済学	2後		2		○									兼1	
	生活と環境	2後		2		○									兼2	
	食料経済学	2後		2		○									オムニバス	
	食健康論	3前		2		○				1		1			兼1	
	社会調査法	2・3前		2		○									兼1	
	フィールド実践・研究推進論 I	2・3・4前		2		○									兼1	
	フィールド実践・研究推進論 II	2・3・4後		2		○									兼1	
	小計( 9 科目)			0	18	0	—			1	1	0	0	0	兼8	

別記様式第2号(その2の1)

教育課程等の概要															
(国際文理学部 食・健康学科)															
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
学科基本科目	調理学	1前		2		○				1					
	調理学基礎実習	1後		1				○		1				1	
	生化学Ⅰ	1前		2		○			1						
	生化学Ⅱ	1後		2		○			1						
	基礎実験	1前		1				○		1					
	基礎化学	1前		2		○									
	化学	1前		2		○									
	基礎生命科学	1前		2		○									
	基礎数学	1前		2		○									
	基礎統計学	1後		2		○									
	応用統計学	2前		2		○									
英文講読	3前		2		○				1						
小計( 12 科目)			0	22	0	-			1	3	0	0	1	兼6	
グローバル社会の食と健康	保健医療福祉論	1前		2		○									
	実践栄養活動論	1前		2		○			1						
	国際食文化論	1前		2		○				1					
	栄養マネジメント論	2後		2		○			1						
	公衆栄養学	3前		2		○			1						
	公衆栄養学実習	3前		1				○	1				1		
	公衆栄養学臨地実習	3後		1				○	1				1		
	国際健康栄養科学	2前		2		○				1					
	実践疫学	2後		2		○				1	1				
	地域ブランド論	3前		2		○				1					
	食物危機管理論	3後		2		○				1					
	公衆衛生学	2前		2		○			1						
	公衆衛生学実習	3後		1				○					1	兼1	
小計( 13 科目)			0	23	0	-			2	2	0	0	1	兼3	
人間の体と心の健康	生化学実験	1後		1				○	1					1	
	基礎栄養学実験	2前		1				○	1					1	
	人間構造機能学Ⅰ	1後		2		○			1						
	人間構造機能学Ⅱ	2前		2		○			1						
	人間構造機能学実験Ⅰ	2前		1				○	1				1		
	人間構造機能学実験Ⅱ	2後		1				○	1				1		
	臨床医学論	2後		2		○								兼1	
	栄養生理学	2後		2		○				1					
	栄養生理学実験	2後		1				○		1				1	
	分子生物学	2後		2		○								兼1	
小計( 10 科目)			0	15	0	-			2	1	0	0	2	兼2	
保健・医療・福祉・介護における食と健康	基礎栄養学	1後		2		○			1						
	生物物理・統計論	1後		2		○				1					
	食行動科学理論	1後		2		○			1						
	食事摂取基準論	2前		2		○			1						
	栄養教育論	2前		2		○			1						
	栄養教育論実習	2後		1				○	1				1		
	ライフステージ栄養学	2後		2		○			1				1	兼1	
	ライフステージ栄養学実習	2後		1				○	1				1		
	栄養カウンセリング論	2後		2		○								兼1	
	スポーツ栄養学	3後		2		○								兼1	
	臨床栄養管理学	2後		2		○				1					
	臨床栄養管理学実習	3前		1				○		1			1		
	研究解析論	3後		2		○				1					
	臨床薬理学	3前		2		○								兼1	
	臨地実習事前・事後指導	3通		1				○	2	2					
	食事療法学	3前		2		○				1					
	食事療法学実習	3後		1				○		1				1	
	病態栄養学	3前		2		○								兼1	
栄養治療学	3後		2		○								兼1		
臨床栄養アセスメント	3前		2		○				1						
臨床栄養臨地実習	3後		2				○		2			1			
小計( 21 科目)			0	37	0	-			3	3	0	0	2	兼4	

別記様式第2号(その2の1)

教育課程等の概要																
(国際文理学部 食・健康学科)																
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
学 科 目	専 門 科 目	食の安全・安心と機能	微生物学		2		○									
			微生物学実験	1後	1				○					1		
			食品安全学	2前	2		○									
			食品安全学実験	2前	1				○						1	
			バイオテクノロジー論	2後	2		○									
			食品機能学	3後	2		○									
			食品機能学実験	1後	2		○				1					
			食品加工・貯蔵学	2前	1				○							1
			食品分析化学	2後	2		○									
			食品分析化学実験	3前	2		○									
			給食経営管理論Ⅰ	3前	1				○							1
			給食経営管理論Ⅱ	3前	2		○									
			給食経営管理実習Ⅰ	2前	2		○									
			給食経営管理実習Ⅱ	2後	1				○							1
			給食の運営(校外実習)	3前	1				○							1
	調理学応用実習	3前	1				○							1		
	調理科学	2前	1				○							1		
	調理科学実験	2後	2				○							1		
	食経営管理論	3前	1				○							1		
	食経営管理論	3後	2				○									
小計( 19 科目)				0	29	0	-			1	4	1	0	5	0	
演習科目	食・健康科学基礎演習		3後	1				○			6	6	1			
	食・健康科学総合演習		3後	1				○			6	6	1			
	小計( 2 科目)				2	0	0	-			6	6	1	0	0	
卒業研究	卒業研究演習		4通	4				○			5	6	1			
	卒業論文		4通	4					○		5	6	1			
	小計( 2 科目)				8	0	0	-			5	6	1	0	0	
教 職 科 目	教職基礎論		1後		2	○									兼1	
	教育哲学		3前		2	○									兼1	
	教育心理学		2前		2	○									兼1	
	教育行政学		2後		2	○									兼1	
	教育課程論		2前		2	○									兼1	
	学校栄養教育法Ⅰ		2前		2	○									兼1	
	学校栄養教育法Ⅱ		2後		2	○				2	1				オムニバス	
	道德教育の研究		3後		2	○									兼1	
	特別活動の研究		3後		2	○									兼1	
	教育方法学		2後		2	○									兼1	
	生徒指導論		3前		2	○									兼1	
	教育相談論		3後		2	○									兼1	
	教職実践演習(栄養教諭)		4後		2			○			1					
	栄養教諭教育実習事前・事後指導		3前		1				○		1					
	栄養教諭教育実習		3後		1				○		1					
小計( 15 科目)				0	0	28	-			2	1	0	0	0	兼5	
合計( 210 科目)			-	29	258	43	-			6	6	1	0	5	兼114	

別記様式第2号(その2の1)

教 育 課 程 等 の 概 要														
(国際文理学部 食・健康学科)														
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	
学位又は称号	学士(食健康学)		学位又は学科の分野			家政学関係								
卒業要件及び履修方法							授業期間等							
(卒業要件)以下の単位を含んで、124単位以上修得すること。 ◇学部共通科目:41単位以上 ○ファーストイヤー・ゼミ:2単位必修 ○学術言語プログラム:15単位必修(日本語を母国語としない学生は、学術英語プログラムに代えて学術日本語プログラムを履修することができる) ○外国語科目:日本語を母国語とする学生は、英語Ⅰ～Ⅳを履修しても卒業要件単位に含めない。外国人留学生が外国語科目を選択する場合は、母国語以外の言語を履修すること。 ○情報活用科目:2単位必修 ○日本文化理解科目:2単位以上選択(国際教養学科開講科目の「日本史概論」、「儒教思想史」、「書道Ⅰ(書道芸術)」、「美学美術史」からも選択することができる) ○共通基盤科目:20単位以上選択(総合科目:2単位以上選択、人文科学:4単位以上選択、社会科学:4単位以上選択、自然科学:2単位以上選択) ◇学部共通専門科目:6単位以上 ◇学科科目:52単位以上 ○学科基本科目:4単位以上選択 ○専門科目:2単位必修、38単位以上選択 ○卒業研究:8単位必修 ◇学部共通科目及び学部共通専門科目並びに他学科を含む学科科目から選択履修:25単位以上  ※履修科目の登録の上限(年間):45単位(「教職科目」等を除く。なお、教授会が認めた場合には上限を超えて履修することができる。)							1学年の学期区分				2 学期			
							1学期の授業期間				15 週			
							1時限の授業時間				90 分			





授 業 科 目 の 概 要				
(国際文理学部 国際教養学科)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
ファーストイヤー・ゼミ	ファーストイヤー・ゼミ I	<p>教養教育を享受し十全なアカデミックライフを送るための基本となるスタディースキルおよび論理的思考能力と的確な日本語の運用能力の育成を図る。</p> <p>その目的の下、ファーストイヤー・ゼミIでは、「学術言語プログラム」と関連させながら、図書館利用法、文献資料の収集・活用法、情報収集と編集の方法などの基本的なスキルに始まり、文章表現、プレゼンテーション、日本語による討論を通じて実践的な主体的学習能力を育成する。</p> <p>本学で学ぶことの意義を学生に自覚させ、学習の動機付けを図るため、本学固有の学校文化(大学史や教育理念等)に関する教育やキャリア形成の導入学習を実施する。また、フィールドスタディの事前学習としても活用する。</p> <p>長期留学生向けには、日本語の基礎教育の一環とする。</p>	講師以上の教員全員が輪番制で担当する。	
	ファーストイヤー・ゼミ II	<p>ファーストイヤー・ゼミ Iで養った論理的思考能力と言語による運用能力をさらに発展させるために、担当教員の指導の下、特定のテーマについて学生が調査・研究・発表をおこなう。発表においては、学生同士のピア・レビューをおこなうことにより、主体的な学習の結果に対する相互の批判能力を養う。</p> <p>また、フィールドスタディの事後学習としても活用する。</p>	講師以上の教員全員が輪番制で担当する。	
学部共通科目	学術言語プログラム(AEP)	学術英語コミュニケーション I	<p>福岡女子大学(FWU)で英語を駆使して知的にかつ充実した学生生活を送るための「必須の知的生活術」を修得する。</p> <p>大学の部局や施設の名称、授業の履修システム、学期のスケジュールの立て方、学習や生活面の助言の受け方、図書館やメディア・センターの活用法、クラブやボランティア活動、キャリア設計など、英語により理解し、英語により問題解決する態度を養う。身近にある英語を発見し、英語でコミュニケーションをとる意義を考える。また英語での自己紹介のグループでの練習を通してほかの学生との係わり合いを深めていく。</p>	
		学術英語コミュニケーション II	<p>学術英語リーディングIIと連動したクラス運営をおこなう。</p> <p>報道記事、科学コラム、エッセイ、小説などを扱う読解授業の思考をさらに深めるためグループ・ディスカッション(簡単な発表と質疑応答)を中心におこなう。同時にコミュニケーションの相手と情報や意見交換をする上で必要なアウトプットのためのスキルを学ぶ。口頭での発表の場合には話す速度、声の大きさ、抑揚などを身につけることも必要である。音読などで英語を声に出す練習を取り入れたり、聞いて理解してもらうための言葉の選び方、パラフレーズの練習も取り入れていく。</p>	
		学術英語コミュニケーション III	<p>学術英語コミュニケーション I、IIで学んだことを発展させ、スキルとストラテジーの活用を促す。</p> <p>ブレイン・ストームやマインド・マップなどの手法を取り入れ、情報の整理をする練習をする。既習科目の仕上げとして「ポスター発表」に向けた準備と発表をおこない、コミュニケーションの発表者と聴取者としての側面を実践的演習形式で学ぶ。発表者に対しては、学術英語コミュニケーション Iで修得した図書館の活用法と情報収集法の定着を確認し、聴取者へはノート・テイキング、質疑応答の方法の定着ぶりを確認する。</p>	

授 業 科 目 の 概 要					
(国際文理学部 国際教養学科)					
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考		
学部 共通 科目	学術 言語 プログラム	学術英語プログラム(AEP)	学術英語コミュニケーションⅣ	学術英語リーディングⅤと連動。学術英語コミュニケーションⅢまでに学んだことを生かし、専門領域に特化した高度な内容について発言することを目標とする。 決まり文句や表現を含めた効果的なディスカッション方法を学ぶことで、話題変更の方法、グループで交わされた意見の集約、意見の分析の仕方を体得する。学術英語リーディングⅤで読んだ資料を基に、学術英語コミュニケーションⅢで学んだブレイン・ストーミングやマインド・マップを使い学生自身が興味と知識をもつ話題に関し発表課題を決定し、学期末にはファイナル・プレゼンテーションを行う。同時に質疑応答をおこない受講者間で批評・評価をおこなう。	
			学術英語リスニングⅠ	英語で開講されるアカデミックな講義を理解し効果的にノートをとれるよう訓練をおこなう。 まず音声学の基礎、特にアメリカ英語に見られる音の変化を学ぶ。さらに英語のバリエーションに触れ、それぞれの特徴を学ぶ。これらを精聴することで英語の音を身につける練習をする。また英語での講義の基本構成を学んだ後、ノート・テイキングの技術と授業後に理解の展開を図るためのノート構成法を学ぶ。ここでは多聴がとりいれられ、短い講義やショート・トークから要点をつかむ練習をする。	
			学術英語リスニングⅡ	学術英語リスニングⅠで学んだ知識の定着を図るためにe-learningを用いた多聴をおこなう。 学術英語リスニングⅠでいろいろな英語に慣れたので、ここではやや長い会話や講義を聞いてその内容を把握する練習をする。またコミュニケーションによるインタラクティブな側面を重視しTAによるチュートリアルをおこなう。学術英語コミュニケーションⅡと連動して、アウトプットのためのリスニング指導をおこなう。要点をつかみ、その内容に対する質問を考えるという一連の作業を練習することにより、受動的なリスニングから能動的なリスニングへの転換を図る。	
			学術英語リーディングⅠ	大学に入るまでに学んだ文法事項を再確認し、文から段落、セクションに至る談話の構造を理解して正確に文章を把握する力を身につける。長文を読む準備として、文章同士の論理的なつながりも理解できるようにする。また、パラフレーズの考えを導入して日本語から英語、英語から日本語の語彙だけでなく、英語で発信するための英語から英語への語彙の増加も目指す。 これらの目標を達成するために精読とともに、次の段階の英語を英語として理解する力の育成のために多読も取り入れていく。	
			学術英語リーディングⅡ	学術英語コミュニケーションⅡと同じ教材を使用する。このクラスでは主に受動能力が問われる読解力から、発信する能力への橋渡しが目標とされる。そのため、報道記事、科学コラム、エッセイ、短い小説など様々な内容の英文に触れ、それぞれの特徴を理解し、内容を理解することを中心に授業を展開する。 また小さなグループの中でその内容について英語で口頭発表し、学生自身の意見も簡単な英語を使って言えるようにする。また語彙の育成や多読も学術英語リーディングⅠに引き続き行われる。	

授 業 科 目 の 概 要					
(国際文理学部 国際教養学科)					
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考		
学部 共通 科目	学術 言語 プログラム	学術英語プログラム (AEP)	学術英語リーディングⅢ	学術英語リーディングⅠ、学術英語リーディングⅡで学んだことを発展させ、さらに読解能力を高める。 学生の専門と関係の深い国際、環境、食・栄養等を扱う内容を対象に、多読・速読の訓練を行い、長文を読んで大意を汲み取りつつ、思考のフレームを構築する。また読解を深めるために読んだ内容を図表化するなどのリーディング・ストラテジーの導入も行う。語彙の育成などの必要に応じて、コンピュータの自学システムを活用する。 さらに自分で興味を持った簡単な英語の記事や論文をインターネットで探して読む練習も取り入れ、「自分で学ぶ姿勢」を育成する。	
			学術英語リーディングⅣ	学術英語ライティングⅢと同じ教材を使用する。学術英語リーディングⅠ、学術英語リーディングⅡで学んだことを発展させ、さらに読解能力を高める。質の高い英語で書かれた論文や小説に親しむ。また精読によって英文の構造が持つ論理性に配慮できるようにする。 学術英語リーディングⅢに引き続き、自分で学ぶ姿勢の育成のためにも、興味のある分野で簡単なリサーチを行い、英語によるレポートを書き、読んだものの内容を要約するとともにその内容に客観的な批評を加味する。またそれを口頭発表することで発信力の育成にもつなげる。	
			学術英語リーディングⅤ	学術英語リーディングⅠからⅣで学んだことを生かし、さらに高度な内容の長文を多読できるようにする。クラスによって「国際」「環境」「食」などの専門領域に特化した英文が集中的に読めるものを用意し、学生が想定する専門と興味に応じて受講できるようにする。 また学術英語ライティングⅣでの資料として英文で書かれた研究論文を読み、要点をまとめ、批評し、論文を書く準備をする。ひとつの論文だけではなく、複数の論文や資料を読み、それらをまとめる練習をする。	
			学術英語ライティングⅠ	節および文の基本的なつくりを学び、センテンス単位から、さらにパラグラフ単位の文章を書く力をつける。同時開講の学術英語リーディングⅠと連動させ、語彙を増やし表現力を高める。学術英語ライティングⅠとⅡは共通のテキストを使用する。 日本人の英文では主語のあいまいなものが多く、能動的な表現を避ける傾向にある。簡単な英文でも読む側がわかりやすい英文を書く能力は、特に研究論文の場合に必要な。読みやすい英文を身につけるために受講生の作文は、教員が添削し、その結果をクラス全体にフィードバックする。	
			学術英語ライティングⅡ	学術英語ライティングⅠをふまえ、500語程度のショート・エッセイを書く練習をする。学術英語ライティングⅠとⅡは共通のテキストを使用する。 ひとつの話題に関して自分なりに簡単なリサーチをし、複数のパラグラフを論理的に積み重ねて、効果的に情報を伝える力をつける。表現方法や構成について、受講生どうしで批評し合い、協同編集を経て読み手に理解される文章の書き方を実践的に学ぶ。受講生のエッセイは、教員が添削し、その結果をクラス全体にフィードバックする。	

授 業 科 目 の 概 要					
(国際文理学部 国際教養学科)					
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考		
学部共通科目	学術英語プログラム(AEP)	学術英語ライティングⅢ	同時開講の学術英語リーディングⅣと連動した授業を展開する。 リーディングのクラスで扱うテキストの要約を行うことを通して、文章の論理的構成を理解し、自身の作文に応用できるようにする。また要約に加え、テキストに対する批評を書くことを通して、自分の考えを論理的に伝える方法を学ぶ。表現方法や構成について、受講生どうしで批評し合い、協同の編集作業を経て、読み手に理解される文章の書き方を実践的に学ぶ。受講生の作文は、教員が添削し、その結果をクラス全体にフィードバックする。		
		学術英語ライティングⅣ	各自の専門に沿ったテーマを定め、関連文献を読んだり、データの収集・分析などを行い、その結果を踏まえ、自身の考察を含めた学術小論文(3000語10ページ程度)を書くことを目標とする。 学術論文に用いられる表現や、文献の引用の仕方など、論文執筆に向けた技術的な指導も行う。表現方法や構成について、受講生どうしで批評し合い、読み手に理解される論文の書き方を実践的に学ぶ。小論文は教員が評価し、その結果をクラス全体にフィードバックする。		
	学術言語プログラム	学術日本語プログラム(AJP)	学術日本語リーディングⅠ	様々なテーマの比較的短い論理的文章を読む。授業では、レポートや学術論文などの論理的文章を読むのに必要な文法知識、構造に関する知識を学び、各自の専門分野の論文を独力で読んでいくための基礎的読解力をつける。また、レポートや論文の文体・語彙・表現に慣れ、内容・論旨を正確に把握する力を身につける。	
			学術日本語リーディングⅡ	「リーディングⅠ」で学んだことを発展させ、さらに読解力を高める。いくつかのテーマに関する一定の長さの文章を精読し、内容を正確に理解しクラスで共有したうえで、異なる視点からの関連資料を読む。読んだ資料の論点を整理し、まとめて発表し、自分の意見を述べ、クラスで話し合う。また、文中の語彙・表現に関しても、適宜説明し、理解・習得させる。	
			学術日本語リーディングⅢ	「リーディングⅠ・Ⅱ」で学んだことを生かし、さらに高度な内容の長文を多読できるようにする。「国際教養」クラスと「環境科学」「食・健康」クラスに分け、各専門領域に関する分野の基礎知識が得られる文章を用意し、専門科目を学ぶための読解力をつける。各学生に読む部分を分担させ、内容をまとめさせ、発表させる。同じ専門の学生同士で協働することにより、理解を深めさせる。	
			学術日本語ライティングⅠ	レポートや論文に必要な論理的な文章の書き方の基礎を学ぶ。まず「文の基本」として、今まで習ってきた文法項目や表現の再確認を行い、ミスのない正確な文章が書けるようにする。また、文章表現の規則を学び、文と文のつながりを考えて、まとまった内容の文章を分かりやすく書く練習をする。「リーディングⅠ」と連動し、論理的文章に使われる語彙・表現の習得を進める。学生の作文は、教師が添削し、それをクラス全体にフィードバックする。	

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文理学部 国際教養学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学部共通科目 学術言語プログラム 学術日本語プログラム(AJP)	学術日本語ライティングⅡ	新聞記事や論説文を読むためには、書き言葉に特有の漢字語彙の学習が必要となる。非漢字圏の学生はもちろん、漢字圏の学生も漢字熟語の運用についてはなかなか習得が難しい。この授業では、学生が自分の専門分野や興味の対象に応じて、漢字語彙力を伸ばせるよう、専門分野別に「アカデミックな読解のための共通漢字」を拡張していく。前期では、基礎漢字の再確認もしながら、また、読み書きだけでなく文中での用法や使用場面などを含めた練習活動を行う。	
	学術日本語ライティングⅢ	「ライティングⅠ」を踏まえ、論理的文章の書き方を学んでいく。後期では、レポートなどを書くために必要な論理の組み立て方や文章の書き方を学ぶ。論理的展開や表現のモデルを示した読み物を読み、それを参考に作文課題に取り組む。また、引用や討論などに必要な要約力の養成にも力を入れる。要約するテキストは「リーディングⅡ」と連動させる。学生の作文は、仲間同士の合評(ピア・レビュー)を経た後、教師が添削し、それをクラス全体にフィードバックする。	
	学術日本語ライティングⅣ	「ライティングⅡ」に引き続き、専門分野別「アカデミックな読解のための共通漢字」を学んでいく。前期ではテキスト16課中の8課を学ぶので、後期では残り8課を学習する。読解、作文、口頭コミュニケーションなどの活動とも関連づけた総合的な学習も取り入れ、その後の専門性の高い文献を読むための基礎を作ると同時に、自立して専門漢字語彙を習得していける力を養う。	
	学術日本語ライティングⅤ	レポートや論文作成に必要な文章の書き方を学ぶことを目指す。そのために、1年次開講の「ライティングⅠ」「ライティングⅢ」での学習事項を応用しながら以下の1.～3.のことができるようになるように取り組んで行き、各学生の専門に沿った最終課題(期末レポート)完成という成果に結び付ける。 1. 論理的な思考方法を身につける 2. 論理的な文章の展開方法を学び、それを意識して文章の構成を考える 3. 説明的な文章をなるべく多く読む。読む時には、内容だけでなく文章の構成や論理の組み立て方にも注意する	
	学術日本語リスニングⅠ	日本語の音声・音調の特徴を知り、必要な情報を聞きとる・発話意図をつかむ・話の展開を予測する・大意をつかむ等の聴解ストラテジーを身につける。大学の講義の基本構成を理解し、効果的にノートがとれるような訓練を行う。また、各自の自分の発音についても弱点を知り、相手に分かるように聞いてもらえるための練習をする。	
	学術日本語リスニングⅡ	様々な音声素材を聞き、場面や状況を把握したり、スピーチレベルから話者の関係を理解したりして、正確な内容理解に繋げる。聞いて分かる語彙を増やし、高度な内容、抽象的な内容も聞けるようにする。また、聞いた内容をまとめて話す・書く練習も行う。録画したTV番組などから、ある程度まとまった日本人の話聞かせ、ノートをとり、聞いた内容を簡潔にまとめて発表させる。	
	学術日本語コミュニケーションⅠ	日本語の口頭能力向上を目指すための授業。 自分が今興味を持っていることについて、詳しく説明できるようになること。話をした相手に自分と同じように興味を持ってもらえるようになること。また、日本人や日本語を勉強している人と話をしている、円滑に会話が続けられるようになるための授業活動を行う。その後、現代的な話題について扱ったテキストの内容理解および理解した内容に関するグループディスカッションを行う。	

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文理学部 国際教養学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学部 共通 科目	学術 日本語 プログラム (AJP)	学術日本語コミュニケーションⅡ	「コミュニケーションⅠ」で学んだことを発展させ、スキルアップを促す。さまざまな授業の仕上げとして「ポスター発表」に向けた準備と発表を行い、コミュニケーションの発表者と聴取者としての側面を実践的演習形式で学ぶ。発表者に対しては、図書館の活用や情報収集法の定着、聴取者へはノート・テイキング、質疑応答の方法の定着ぶりを確認する。ビジターとして日本人学生にも参加してもらう。
		学術日本語コミュニケーションⅢ	「リーディングⅢ」「ライティングⅤ」と連動。「コミュニケーションⅡ」で学んだことを生かし、専門領域に特化した高度な内容について発言できることを目標とする。決まり文句や表現を含めた効果的なディスカッションの方法を学ぶことで、話題変更の方法、グループで交わされた意見の集約、意見の分析の仕方を体得する。学期末にはファイナル・プレゼンテーションと質疑応答を行い、受講者間で批評・評価を行う。
		学術日本語日本事情Ⅰ	日本語を駆使して、大学で知的にかつ充実した学生生活を送るための「必須の知的生活術」を習得する。また、日本語で授業を受け、日本人学生とともに学び、寮生活を送るために必要な日本についての基本的知識(生活・地理・社会)を再確認する。また、世界の中の日本と自国を客観的に見る視野を持ち、自国について紹介したり、説明したりできるようになる。
		学術日本語日本事情Ⅱ	新聞やTVニュース・番組、雑誌などから、現代日本社会で起きていることを知り、その背景にある歴史や文化、日本人の考え方などを学ぶ。現代日本における諸問題が自国のメディア、世界のメディアでどのように扱われているかにも目を向け、理解を深めさせる。
アド バン スト ・ イン グリ ッ シ ユ	英語上級Ⅰ	必修の学術英語をすべて履修した学生に対して、開講される授業科目である。したがって学術英語プログラムでは取り入れられていない種類の英語を学ぶことができ、より高度で総合的な英語力の育成を目的とする。  English and Films 映画は視覚、聴覚教材として優れており、映画を媒体として、文化・環境・自然・食・健康に関する問題を考察する。併せて、映画の見方や映画の文法を学びつつ、教室の枠を越えた英語との接触を促す効果をねらう。	
	英語上級Ⅱ	必修の学術英語をすべて履修した学生に対して、開講される授業科目である。したがって学術英語プログラムでは取り入れられていない種類の英語を学ぶことができ、より高度で総合的な英語力の育成を目的とする。  English Literature for Non-major 英語を学ぶ上で、英語圏の文化に対する興味は学習動機を高めるといふ役割を果たすことが多い。やさしい作品を原文のまま読み、英語特有の表現や場面描写を学び、作品の特徴を理解する。併せて、文学作品を分析・解釈するに際して、政治、哲学、思想、心理学などの知見を総動員する必要があることを学び、読む行為は学際的営みであることを体得する。	

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文学部 国際教養学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学部 共通科目  外国語科目	英語上級Ⅲ	<p>必修の学術英語をすべて履修した学生に対して、開講される授業科目である。したがって学術英語プログラムでは取り入れられていない種類の英語を学ぶことができ、より高度で総合的な英語力の育成を目的とする。</p> <p>General English for Science 科学技術に関する語彙や表現を学ぶことによって、さらに高度な論文を読む練習をする。また英語での論文を発表することを念頭に置き、American Psychological Association(APA)のマニュアルに従って研究論文の基本的な構造を学ぶ。</p>	
	中国語Ⅰ	<p>中国語入門 この科目の目的は口語中国語の基礎力を身につけることにある。とくに正しい発音のマスターと初歩文法の学習に主力をそそぐ。書き取りを重視する。 【発音】中国語の母音・子音・声調を、聞き分けることができ、自分で発音でき、ピンイン(ローマ字による中国語表記法)で書き取れるように訓練する。 一音節から二音節、さらに短文になっても、声調が正しくできることが目標である。 前期は発音とピンインの習得に時間の7割、簡単な断定文、形容詞文、動詞文の学習に時間の3割を使う。 【ピンインと漢字】発音の習得とあわせて、ピンインによる表記法を学ぶ。 【単語・文章・運用】教科書の単語と文章を使って、簡単な中国語の読み書きができるようになることが目標である。</p>	
	中国語Ⅱ	<p>中国語入門 この科目の目的は口語中国語の基礎力を身につけることにある。とくに正しい発音のマスターと初歩文法を用いた簡単な会話ができるようになることを目標とする。発音応用訓練を重視する。 【発音】中国語の母音・子音・声調を、聞き分けることができ、自分で発音でき、ピンイン(ローマ字による中国語表記法)で書き取れるように訓練する。 一音節から二音節、さらに短文になっても、声調が正しくできることが目標である。 前期は発音とピンインの習得に時間の7割、簡単なあいさつ、自己紹介等の練習に時間の3割を使う。 【ピンインと漢字】発音の習得とあわせて、ピンインによる表記法を学ぶ。 【単語・文章・運用】教科書の単語と文章を使って、状況に応じた簡単な中国語を自分で言えるようになることが目標である。</p>	
	中国語Ⅲ	<p>中国語Ⅰ履修済みの学生向け。 学んだ発音とピンイン表記法を生かして大学中国語初級文法の学習と応用を継続する。口頭作文の能力のレベルアップに力を入れる。テキストの例文を100%身につけ、それを自分で書き、口で話し、そして聞き取れるまで練習する。</p>	
	中国語Ⅳ	<p>初級会話を中心とする授業で、中国語の発音と初歩文法を一応習得した学生を対象とする。ある程度の中国語読解力が必要である。 聞き取りと会話力の強化に全力を注ぐ。テキストの内容はもちろん、簡単な日常会話から設定した話題をめぐって会話訓練を行う。</p>	

授 業 科 目 の 概 要				
(国際文学部 国際教養学科)				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学部 共通 科目	外国 語 科 目	中国語V	初級中国語を一応習得した者を対象とし、すでに学んだ発音、語彙、文法を復習しながら、中級レベルの表現や文法を覚え、語彙の拡大や表現力の向上、特に実用会話能力を身につけることを目指す。 教材としては大学生中国語中級レベルに相当するものを選ぶ。	
		中国語VI	この授業は、中国語の初級文法を一通り終え、継続学習を希望する者を対象とする。実用性を重視し、日常生活や、仕事の場面でよく使われる平易な会話文から入り、徐々に程度を高めて今日の中国社会の姿や中国人の生活習慣、ものの考え方などに触れながら、「聴く、話す、読む、書く、訳す」という五つの技能を身につける。長文の読解や作文などに特に重点を置く。 教材としては大学生中国語中級レベルに相当するものを選ぶ。	
		韓国語I	韓国語学習の入門として、基本的な日常会話を題材に、韓国語の文字を覚え、正しい発音を身に付けることを目標にする。 具体的には、簡単な挨拶と会話に始まり、韓国語の基本母音と子音、激音と濃音、発音のルールを学習する。徹底して口語韓国語の習得を図り、韓国人とコミュニケーションを図る積極的な姿勢を持つことを目指す。	
		韓国語II	韓国語Iを補完する学習として、ここでは基礎的は文法を徹底して学習する。前半は日常会話で簡単な表現を題材にして、文法の初歩を学び、後半では平易な文章を読むことが出来るよう韓国語の文法基礎を習得する。テキストの例文を100%身につけ、文法的解説ができるようにする。	
		韓国語III	韓国語I(前期)の授業を踏まえ、韓国語によるコミュニケーションの訓練を中心に授業を展開する。円滑な会話を行うには、先ずは定型表現を習得するとともに、描写、要求、依頼、質問、主張などの自己表現を行うために必要な構文と語彙の習得が求められる。本授業では、こうした表現力の養成を中心に行う。	
		韓国語IV	韓国語II(前期)の授業を踏まえ、韓国語の文法と言語構造についての理解を図る。文法と構文問題に焦点を当て、中から上級程度の言語構造の理解を図る。また、中級程度の読解教材を用いて、韓国語を正確に読み取る力を養成する。	
		韓国語V	韓国語で書かれた文献を正確に読み取る読解力を養成する。1年次に習得した文法構造を再確認しながら、より高度な構造と語彙で書かれたテキストを扱う。併せて韓国語による作文力をも養成し、書くこと・表現することを意識しながら読解活動を行う姿勢を養う。	
		韓国語VI	2年生前期の韓国語Vで用いた教材を更に発展させ、環境や食・健康問題、或いは国際関係論を扱った韓国語で書かれたテキストを正確に読み取る読解力を養成する。併せて韓国語による作文力をも養成し、書くこと・表現することを意識しながら読解活動を行う姿勢を養う。	



授 業 科 目 の 概 要				
(国際文学部 国際教養学科)				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学部 共通 科目	外国 語 科 目	ドイツ語Ⅰ	<p>新たな外国語を学ぶことの意義を確かめて、ドイツ語圏の多方面の魅力的な文化に親しみながら、ドイツ語の単語と文法知識を身につけることを目標にする。</p> <p>名詞の性や、名詞・冠詞類の格変化、そして動詞の人称変化等の、ドイツ語に特有の文法事項に習熟し、英語や日本語と対比のもとに言語の多様性を理解する。</p> <p>国際化・グローバル化の進む現代に、多文化共生の平和な社会を築いていくという観点から、ドイツ言語文化の日常的な調査をうながして、人間力向上の一貫としてのドイツ語学習を動機づける。</p>	
		ドイツ語Ⅱ	<p>第2外国語の学習によって日本語と英語と異なる文法法則と出会い、言語の多様性を体得し、多言語学習をとおして日本語が固有に持つ世界観を広げる。</p> <p>この授業では会話とリスニングを中心的に学習するが、小クラスであることを活かし、会話練習に十分な時間を割く。ドイツ語の正しい発音を身に付け、自己紹介から自分状況を簡単なドイツ語で表現する訓練を行う。</p> <p>国際化・グローバル化の進む現代に、多文化共生の平和な社会を築いていくという観点から、ドイツ言語文化の日常的な調査をうながして、人間力向上の一貫としてのドイツ語学習を動機づける。</p>	
		ドイツ語Ⅲ	<p>新たな外国語を学ぶことの意義を確かめて、ドイツ語圏の多方面の魅力的な文化に親しみながら、ドイツ語の単語と文法知識を身につけることを目標にする。</p> <p>前置詞や、助動詞、文構造、そして時制等の、ドイツ語に特有の文法事項に習熟し、英語や日本語と対比のもとに言語の多様性を理解する。</p> <p>国際化・グローバル化の進む現代に、多文化共生の平和な社会を築いていくという観点から、ドイツ言語文化の日常的な調査をうながして、人間力向上の一貫としてのドイツ語学習を動機づける。</p> <p>ドイツ語Ⅰとドイツ語Ⅱ、ドイツ語Ⅳとあわせて、ドイツ語検定試験4級レベルに達する。</p>	
		ドイツ語Ⅳ	<p>第2外国語の学習によって日本語と英語と異なる文法法則と出会い、言語の多様性を体得し、多言語学習をとおして日本語が固有に持つ世界観を広げる。</p> <p>既習の語彙・構文やコミュニケーション・スキルに基づいて、身の回りの生活環境(大学や町)を口頭と筆記で描写する能力を養い、様々なリスニング材料によって聴取能力を強化する。ドイツ語Ⅰとドイツ語Ⅱ、ドイツ語Ⅲとあわせて、ドイツ語検定試験4級レベルに達する。</p>	
		ドイツ語Ⅴ	<p>一年生時に受講したドイツ語に基づいて、簡単なテキストを耳で理解し、テキストを解説し、テキストの語彙を使いながら、テキストについて自分の意見を表現する。また、新しい文法事項を学生によるテキストの要約活動や問題提供をとおして学ぶ手法を取り入れる。多様なテキストによってドイツの多面的な文化・社会・環境の理解を促進させる。</p> <p>時制(過去形)や、副文、関係代名詞、そして受動態、ドイツ語に特有の文法事項に習熟し、英語や日本語と対比のもとに言語の多様性を理解する。</p> <p>国際化・グローバル化の進む現代に、多文化共生の平和な社会を築いていくという観点から、ドイツ言語文化の日常的な調査をうながして、人間力向上の一貫としてのドイツ語学習を動機づける。</p>	

授 業 科 目 の 概 要				
(国際文学部 国際教養学科)				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学部 共通 科目	外国 語 科 目	ドイツ語Ⅵ	<p>ドイツ映画をつかって、聴取能力を強化し、その歴史的・社会的な背景を学習することによってドイツの理解を高める。映画を台本や簡単な参考文献の解読によりドイツ語のテキストの扱いを慣れ、学生一人一人自分でドイツ語のインターネットで情報を検索することによって、ドイツ語でのネットになじませ、あらゆる研究にドイツを視野に入れさせる。</p> <p>国際化・グローバル化の進む現代に、多文化共生の平和な社会を築いていくという観点から、ドイツ言語文化の日常的な調査をうながして、人間力向上の一貫としてのドイツ語学習を動機づける。</p> <p>ドイツ語Ⅴとドイツ語Ⅵは一年生の目標であるドイツ語検定試験4級取得を踏まえて、ドイツ語検定試験3級レベルを目指す。</p>	
		フランス語Ⅰ	<p>新たな外国語を学ぶことの意義を確かめて、フランス語圏の多方面の魅力的な文化に親しみながら、フランス語の単語と文法知識を身につけることを目標にする。</p> <p>名詞の性や、名詞・冠詞類の格変化(名詞につく冠詞類の各変化)、そして動詞の人称変化(動詞の活用)、前置詞、不規則動詞の直説法現在形、非人称構文、さらに時制(近接未来・近接過去)等の、フランス語に特有の文法事項に習熟し、英語や日本語と対比のもとに言語の多様性を理解する。</p> <p>国際化・グローバル化の進む現代に、多文化共生の平和な社会を築いていくという観点から、フランス言語文化の日常的な調査をうながして、人間力向上の一貫としてのフランス語学習を動機づける。</p>	
		フランス語Ⅱ	<p>第2外国語の学習によって日本語と英語と異なる文法法則と出逢い、言語の多様性を感じ、言語の中で表れている社会関係によって世界観が広がる。この授業は会話とリスニングを中心的に学習する。小クラスで多くの会話の練習ができ、教員が細かく指導できる。</p> <p>フランス語の発音と簡単な挨拶から始める。自己紹介から自分の周囲の状況を簡単なフランス語で表現し、表現された他人の状況と似ている(類似点のある)話しを聞き取ることを練習する。選択的聞取を意識させ、短いリスニング問題で練習する。</p> <p>国際化・グローバル化の進む現代に、多文化共生の平和な社会を築いていくという観点から、フランス言語文化の日常的な調査をうながして、人間力向上の一貫としてのフランス語学習を動機づける。</p>	
		フランス語Ⅲ	<p>新たな外国語を学ぶことの意義を確かめて、フランス語圏の多方面の魅力的な文化に親しみながら、フランス語の単語と文法知識を身につけることを目標にする。</p> <p>前置詞や、不規則動詞の活用、非人称構文、そして時制(現在、近接未来、近接過去)等の、フランス語に特有の文法事項に習熟し、英語や日本語と対比のもとに言語の多様性を理解する。</p> <p>国際化・グローバル化の進む現代に、多文化共生の平和な社会を築いていくという観点から、フランス言語文化の日常的な調査をうながして、人間力向上の一貫としてのフランス語学習を動機づける。</p> <p>フランス語Ⅰとフランス語Ⅱ、フランス語Ⅲとあわせて、フランス語検定試験4級レベルに達する。</p>	

授 業 科 目 の 概 要				
(国際文理学部 国際教養学科)				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学部 共通 科目	外国 語 科 目	フランス語Ⅳ	<p>第2外国語の学習によって日本語と英語と異なる文法法則と出会い、言語の多様性を感じ、言語の中で表れている社会関係によって世界観が広がる。</p> <p>フランス語Ⅰとフランス語Ⅱで学習した語彙やコミュニケーション・スキルに基づいて、自分の周囲の環境(大学や町)を口頭と筆記で描写する能力を促進し、様々なリスニング資料によって聞き取り能力を強化する。自習的なリスニング練習を新しい情報技術で促進する。</p> <p>国際化・グローバル化の進む現代に、多文化共生の平和な社会を築いていくという観点から、フランス言語文化の日常的な調査をうながして、人間力向上の一貫としてのフランス語学習を動機づける。</p> <p>フランス語Ⅰとフランス語Ⅱ、フランス語Ⅲとあわせて、フランス語検定試験4級レベルに達する。</p>	
		フランス語Ⅴ	<p>一年生のときに受講したフランス語に基づいて、簡単なテキストを耳で理解し、テキストを解読し、テキストの語彙を使いながら、テキストについて自分の意見を表明する。新しい文法を学生の要約や問題提供で伝える。多様なテキストによってフランスとフランス語圏の多面的な文化・社会・環境の理解を促進させる。</p> <p>時制(直説法半過去・直説法大過去、複合過去)や、現在分詞、関係代名詞、そして受動態、などフランス語Ⅲで学習した文法事項を、テキストの文章を読解しながら応用する。フランス語に特有の文法事項に習熟し、英語や日本語と対比のもとに言語の多様性を理解する。</p> <p>国際化・グローバル化の進む現代に、多文化共生の平和な社会を築いていくという観点から、フランス言語文化の日常的な調査をうながして、人間力向上の一貫としてのフランス語学習を動機づける。</p>	
		フランス語Ⅵ	<p>フランス映画をつかって、聞き取り能力を強化し、その歴史的・社会的な背景を学習することによってフランスの理解を高める。映画の台本や簡単な参考文献の解読によりフランス語のテキストの扱いに慣れ、学生一人一人が自分でフランス語のインターネットで情報を検索することによって、フランス語でのネットになじませ、あらゆる研究にフランスの言語・文化を視野に入れさせる。</p> <p>国際化・グローバル化の進む現代に、多文化共生の平和な社会を築いていくという観点から、フランス言語文化の日常的な調査をうながして、人間力向上の一貫としてのフランス語学習を動機づける。</p> <p>フランス語Ⅴとフランス語Ⅵは一年生の目的であるフランス語検定試験4級を踏まえて、フランス語検定試験3級レベルを目指す。</p>	
		英語Ⅰ	<p>このクラスは初級のクラスとして次の段階に進むために、基本的な英文の復習をし、文章の中や会話の中での使用に慣れる。英語特有の音の変化を学ぶことで、英語での会話やアナウンスを聞くことになれる。ピンポイントで情報を聞き取る練習、全体の意味を把握する練習と同時にシャドウイング、ディクテーション、音読などの練習を取り入れ全体的なレベルアップを図る。同時に英語学習の根底をなす語彙の習得にも力を入れる。また次の段階への準備として多読の基礎を身につける。最後に英語の文化に触れ、動機付けや学習意欲の継続と向上を目指す。</p>	

授 業 科 目 の 概 要				
(国際文学部 国際教養学科)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学部 共通 科目	外国語科目	英語Ⅱ	このクラスでは初級から中級への移行を確実なものにし、さらに英語力を高めることを目的とする。そのため初級でマスターした構文を復習するとともに、さらに複雑な構文を理解し、身につける練習をする。語彙の習得、および多読も引き続き重視し、授業の中に取り入れていく。よく使われるイディオムにも目をむけ、授業の中で紹介し習得を促す。教材として使用する英文は一般的な教科書の英文に加え、手紙、スピーチ、Eメール、簡単な小説などバラエティに富む内容となるよう気を配る。	
		英語Ⅲ	このクラスは中級のクラスとして現在の力を確実なものにし、次の段階に進む準備をすることを目的とする。中級の英語力を四技能すべてにおいて確実にし、さらに上級へと伸ばすために、より長い英文を読み、聞き、要点をまとめるといったアクティビティを取り入れる。また今まで習得したことを基に自分の意見を述べる練習をする。新聞、ニュース、インターネットなどから適切なものを教材として取り入れていく。	
		英語Ⅳ	このクラスでは中級から上級へ進むことを目的とする。特にアカデミックな読み物に対応できる語彙の習得、長い文章の要点の把握などに重点が置かれる。そのために精読とともに多読も取り入れ、英文を短時間で読む練習も予定している。またスピーチやプレゼンテーションを行うことにより、意見の発信を行う練習も取り入れる。 この授業に参加することによって自分の学習を計画し、学習進捗のテンポを自分で把握することが望まれる。	
	情報活用科目	情報インテリジェンス	この講義では、コンピュータやそのネットワークを利用して、主体的にさまざまな情報源から情報を収集し、その内容を吟味し、自分の知識として再構築していくための方法について学習する。また、その過程において必要となる、より深いコンピュータやその関連知識について学習する。具体的には、インターネット検索の方法(技術論、検索結果の信憑性の吟味、その活用方法)、書誌情報の検索およびその結果の活用方法、インターネット上の統計調査データの活用方法、表計算ソフトの高度な利用法などである。	講義 6時間 演習 24時間
		情報リテラシー	この講義では、コンピュータを活用していくために必要な基本操作を習得する。基本ソフト(OS)、文書作成ソフトウェア、表計算ソフトウェア、プレゼンテーションソフトウェア、ウェブブラウザの操作および活用方法について、演習を行う。また、ファイルやフォルダの扱いについて習得する。演習の中では、より効率的にコンピュータを操作できるように、ショートカットキーの活用や、タッチタイピングの習得を積極的に行う。	講義 6時間 演習 24時間
	日本文化理解科目	日本の伝統文化	日本の伝統文化の多様性、社会と文化の相互作用、国際交流を考える。 国際交流が盛んな時代のなかで、日本に住む我々はいかなる情報を自分のものとし、また発信するかが問われている。本授業では、日本の伝統文化に焦点を当て、国際人として立つに必要な素養を養う。伝統文化は近現代に限定された範囲(能・歌舞伎・文楽)だけではなく、庶民の喜びや苦しみ、活気を表す様々な芸能でもある。伝統芸能が代々集積したアイディアの倉庫であり、それを自由に使う素材でもある。このような素材から自分の生き方のためのヒントが得られる。グローバル化の中で自分のアイデンティティ形成のためのヒントが得られる。グローバル社会をにらみ、温故知新を本授業により実体験する。	

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文学部 国際教養学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学部 共通 科目	現代日本文化	19世紀末のジャポニズム以降、日本文化が欧米の文化にどのような影響を与えたか、また欧米における〈イメージとしての日本〉が、日本にどのように逆輸入されたかを考察する。ジャポニズムという現象を異文化理解の一つのあらわれとして捉え、絵画や文学の個々の作品にどのような日本的モチーフが含まれているかというだけではなく、思想史、建築、ファッション、音楽などの多分野に及ぶ、広く社会的・文化的な現象として理解したい。講義の流れは、帝国主義とジャポニズムの関係、ジャポニズムとオリエンタリズムの関係、非西洋圏におけるジャポニズムの問題を考察した後、現在進行形でのアニメ・マンガが欧米やアジア圏でどう読まれているかという国際的な文化交流の問題を具体的に考察する。 「オリエンタリズム」「エキゾチシズム」といった概念を解説し、現代文化の具体的な事例を挙げながら論考する。例としては、文学、映画における「日本」表象、国内外におけるアニメの「日本らしさ」、グローバル化する「MANGA」とそこに見出される「日本」等を考えている。	
	福岡の文化と社会	福岡の文化と社会を、社会言語学的観点を中心としつつ、幅広く福岡学・博多学の観点から、地域の文化を反映する小説・雑誌資料、方言音声資料、地方CM・マンガ・アニメ等の画像・映像資料、関連する歴史的観光資源等の情報媒体を種々交えて、分析し紹介する。 福岡県内は、①福岡都市文化圏、②北九州都市文化圏、③久留米都市文化圏の三大都市文化圏に区画でき、それぞれが言語上の筑前方言区画圏、豊前方言区画圏、筑後方言区画圏に対応している。この社会的文化圏と地域言語圏との区画対応を軸に、それぞれの具体的な地域方言文化について、歴史・言語・地理等のさまざまな観点を織り交ぜて福岡県文化の特徴を捉えて行く。 筑前方言資料となる博多の禅僧仙厓の語録や、『はまおぎ』(久留米浜荻)等、歴史的文献のことばと現代方言との対照など、あまり知られていない福岡地域言語社会文化の歴史的な展開の諸相についても紹介する。	
	日本女性文化	近代以降の日本の女性をめぐる文化的諸相について紹介し、そのあり様を理解することを目的とする。女性がかつてどのような生活を送っていたのか、教育、労働、家庭、生殖、地域、余暇、自己表現など、様々な視点から考える。 授業形態は主に講義形式であるが、適宜グループ討論も取り入れる。可能な限り視聴覚教材を用い、理解の助けとしたい。毎回質問・感想票を回収し、理解度を把握し、次回授業の初めに質問に対する回答、補足を行なうことにより、理解を深める。	
語学 研修 科目	海外語学研修	長期休暇中の海外での語学研修プログラムに参加する者を対象に、事前と事後の指導学習を行う。本学が提携する教育機関での研修プログラムを原則とするが、研修時間と内容が要件に適合する場合には「海外語学研修」として認定するものとする。 事前学習として、①海外研修の諸注意点、②研修の目的と課題設定、③訪問国と日本及び福岡に関する研修言語による紹介、をワークショップ形式で行う。 事後学習としては、研修成果を発表し合い、併せてレポートの作成を行う。	

授 業 科 目 の 概 要				
(国際文学部 国際教養学科)				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学部 共通 科目	体験 学習 科目	フィールドスタディ	本科目の目的は、現場体験を通して、ファーストイヤー・ゼミⅠで学んできたテーマについての理解を深めることである。同時に、現場で学ぶという営みを他者と共に自ら積極的に作りあげるために、コミュニケーション能力や自己管理能力、段取り・調整能力、適応力の涵養を目指す。また、現場で当事者や実務者から学ぶにあたって必要となる社会的マナーや、聞く・訊く力そして共感・想像力を培う。現場で学んだことをもとに、ファーストイヤー・ゼミⅡでの学びにつなげていく。	
		国際インターンシップ	「グローバル化」に関連した課題を設定し、インターンシップを実施する。履修条件は、「学部共通専門科目」のいずれかを履修していること、また、現実社会にある組織で原則90時間以上の就業体験を実施すること。設定した「グローバル化」に関連した課題の解決に向けた提案を、報告書作成および報告会実施を通して発信する。これによって、テーマに関する専門知識を深めると共に、コミュニケーション能力、自己管理能力、企画立案能力、課題解決志向性の涵養を目指す。専門分野にかかわらず、広く履修生を募集する。現実社会の問題を就業体験を通して学ぶことで、専門分野に囚われない多角的な視点と就業観を培うことを大切にする。	
		フィールドワーク	実社会に関する／実社会を対象とした／実社会における社会調査（例：質問票調査、エスノグラフィー、フィールドワーク）を実施する。履修条件は、「学部共通専門科目」のいずれかを履修していること。「学部共通専門科目」で学んだ知識をもとに、具体的調査を実施する体験を通して、社会調査の意味と意義、方法、倫理、そして調査対象に関する専門知識を深める。同時に、調査を遂行するに必要な、コミュニケーション能力、自己管理能力、企画立案能力、課題解決志向性の涵養を目指す。専門分野にかかわらず、広く履修生を募集する。現実社会の問題を社会調査実施を通して学ぶことで、専門分野に囚われない多角的な視点と就業観を培うことを大切にする。	
		サービスラーニング	本科目では、実社会における何らかの課題を解決するために活動する組織に入り、課題について学びながら、課題解決に向けた活動を実施する。履修条件は、「学部共通専門科目」のいずれかを履修していること。課題解決のための試行錯誤を通して、社会を構成する一員としての自覚を深め、その社会へserveする（仕える）視点を養う。また、現実社会で活動するために必要な、コミュニケーション能力、自己管理能力、企画立案能力、課題解決志向性の涵養を目指す。専門分野にかかわらず、広く履修生を募集する。現実社会の課題解決について、実体験を通して学ぶことで、専門分野に囚われない多角的な視点と就業観を培うことを大切にする。	

授 業 科 目 の 概 要					
(国際文学部 国際教養学科)					
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考		
学部 共通 科目	共通 基盤 科目	総合 科目	グローバル化と多様性 社会	近代からの科学技術の発展、経済活動の拡大、にともなって、政治、社会、経済活動における人、物、情報の流通は地域、国境を越えて拡大の一途をたどり、文化の画一化による固有文化の消滅等、従来の社会が保有していた多様性に象徴される豊かさがなくなると同時に、民族間紛争、富の集中偏在、資源枯渇、環境破壊など、人類の存続に関わる重大な問題が発生している。 このグローバル化の本質とその影響は、社会と人の暮らし、科学技術等の視点から多面的に捉えて始めて理解されるものである。本講義は、4人の教員がそれぞれの専門分野からグローバル化について解説し、グローバル社会に対する理解を目指す。  (オムニバス方式/全15回)  (46 甲斐 裕 / 4回) グローバリズムの担い手、情報メディアとインターネット (01 大住圭介 / 4回) グローバル経済と地域経済 (02 堀江浩一郎 / 4回) グローバル世界と地域社会 (42 鈴木絢女 / 3回) グローバリゼーションとライフスタイル	オムニバス方式
			地球環境と人類の未来	環境問題の現状について、身近な日本の廃棄物問題から説き起こし、地球規模に広がる大気汚染問題等について、自然現象と人間の活動のそれぞれに起因する環境変動に考慮しつつ、自然科学および社会科学の視点から分析をおこなう。その分析を踏まえながら、人類と自然とのあるべき関係とは何かを考え、環境先進国の事例などを参考にしつつ、実現可能な人間社会の取るべき政策について講義をおこなう。  (オムニバス方式/全15回)  (20 吉村利夫 / 3回) プラスチックの現状と廃棄の問題を、特に日本国内について解説する。 (21 馬 昌珍 / 3回) 地球環境と大気汚染について、東アジアの現状と対策に焦点をあてて解説する。 (14 佐藤一紀 / 3回) 日常生活に存在する化学物質およびその毒性について解説する。 (6 Holst, Sven-Ohle / 3回) 環境先進国であるドイツの廃棄物処理の現状や政策などについて解説する。 (9 Jayasena Pathmasiri / 3回) 地球規模の環境問題について国際社会はどのように考えるべきか、何ができるかについて、政治学の立場から講義をおこなう。	オムニバス方式
			現代社会における生命と健康	現代社会のグローバル化と生命科学の進展は、これまでの生命と健康についての考え方を根底から揺さぶりつつある。この講義では、生命の問題を自然科学のみならず、国際的な政治・経済や宗教・倫理といった観点から考察を加えつつ、生命科学がこれまで前提としてきた機械的な生命観について批判的な考察を試みることにより、学生自らが個々の生命観、健康観を深めていくことを目標とする。  (オムニバス方式/全15回)  (45 小泉 修 / 3回) 脳死と臓器移植をめぐる生命科学 (52 田村典明 / 3回) 生物の遺伝子改変と健康 (57 弓削昌弘 / 3回) 感染症の拡大と現代社会の健康観 (24 吉田 信 / 3回) 国際社会における命と健康の問題 (31 御園敬介 / 3回) 歴史的宗教観が生命と健康の考え方に与える影響	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要					
(国際文理学部 国際教養学科)					
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考		
学部 共通科目	共通 基盤 科目	人文 科学	国際文化論	文化の流通と諸国のイメージ 明治維新ごろから西洋の文化が大量に日本に入ってきた。そのプロセスで西洋側と日本側の思想的な背景やその実施をみる。また、日本の文化がジャポニズムとして西洋の文化に影響を与えた。この時期に構築したイメージが長い間に継続され、戦争と経済成長によって新しい一面が加わった。ポストモダニズムでモダニズムの限界を感じて、日本の現代文化が世界のポップス文化の重要な要素となった。	
			ジェンダー	男と女をとりまく歴史と現状を確認し、自分たちの生活を考える手がかりを得ることを目的とする。 人間にはさまざまなカテゴリーがあるが、「男女」も人間を分けるカテゴリーのひとつである。ここでは男女間の権力関係のあり方について、その歴史や現状を具体的な事例を挙げて確認し、それに基づき私たちの生活を考えるてがかりとする。 授業形態は主に講義形式であるが、適宜グループ討論も取り入れる。 毎回質問・感想票を回収し、理解度を把握するとともに、次回授業の初めに質問に対する回答、補足を行なうことにより、理解を深める。	
			日本の言語と世界	世界の諸言語と比較することで見えてくる日本語の特徴について学ぶ。また、日本語が日本人だけではなく、広く世界の人々に学ばれ使われている現状に目を向けさせ、日本語を国際的な視点から捉える姿勢を養う。具体的な授業内容としては、「日本語の語彙・文法・音声・表記の特徴」「日本人の言語行動」「外国人からみた日本語」「日本語のバリエーション」「多文化共生社会と日本語」等を講じる。本授業は、海外に出て日本語や日本文化を教えようという、学生への動機付けの意味も持つ。	
			欧米言語文化概論	ギリシャ・ローマやゲルマンの神話・伝説、キリスト教の伝説など、ヨーロッパの多層的な文化をつくりあげている様々な要素を、中世以来の文献や文学作品、現代に伝わる単語の語源などを通して紹介し、欧米言語文化の世界への導入とする。 また中世から近代にかけて、ラテン語から自国語使用へと移行していく様子を、当時の文献や文学作品における言語使用の状況や辞書・文法書の出版の歴史などを通して概観し、さらにグローバル社会における英語の地位および英語の多様性についても触れることで、社会と言語の関係についても考えるきっかけとする。	
			言語とコミュニケーション	人間のコミュニケーションの特徴や、コミュニケーションにおいて言語が果たす役割について学ぶ。具体的な授業内容としては、「人間のコミュニケーションと動物のコミュニケーションの違い」「人間のコミュニケーションを構成する要素（会話のストラテジー、ポライトネス、相づち、スタイルシフト、言語コミュニケーションと非言語コミュニケーション）」等について講じ、異文化間コミュニケーションについても触れる。	
		歴史と文化	今日の歴史学において、文化史と呼ばれる領域における研究活動の進展には目覚ましいものがある。政治史や制度史を中心とした従来の歴史研究においてマージナルなものとして見過ごされてきた人や事象を正面から分析対象にする文化史研究は、歴史認識の方法を豊かにするとともに、歴史学の枠組みを拡大し続けた。この授業では、こうした文化史的観点から、近世ヨーロッパ(16世紀から18世紀)における宗教と道徳の問題について講義を行う。		



授 業 科 目 の 概 要			
(国際文理学部 国際教養学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学部 共通科目	人文科学	人間の思索	自分とは何か。人生とは何か。社会とは何か。学問とは何か。そして、そもそも人間とは何者か。そういう哲学的な問いと思索の入り口に、受講者を誘い導くことを科目の目標とする。 初学者に配慮して、現代の世界に生きる自分自身への問いを、考察の出発点に置く。そして受講者の問題提起と議論の展開に沿って、授業を柔軟に運営する。 哲学史上の関連テキストを紹介し、解説することも行うが、何よりも学生の思考能力の鍛錬をめざし、毎回のグループ討論や小レポート等の活動を重視する。
		宗教学	現代社会において、宗教は生活や制度の中心的な位置を占めていないように見える。しかし、今日、宗教が原因で文化レベルにおける世界的な対立が激化していることは疑いようがないし、また、個人のレベルでも、宗教は様々なかたちで、人々の生活に影響を落とし続けている。どれが正しい宗教で、何を信仰することが正しい選択なのかという価値判断はさておき、この授業は、キリスト教文化圏を主たる対象としつつ、他宗教との比較論的視座も取り入れながら、そもそも宗教とは何なのかという点を歴史的に概説し、その現代的意義を探ろうとするものである。
	社会科学	ジェンダーと法	わが国の法制度をジェンダーの視点から学ぶことを通して、男女共同参画社会を創造し生き抜くために必要な基礎的法知識を獲得するとともに、法や社会制度を批判的にみる力を養う。授業計画としては、ジェンダー概念について概説し、ジェンダー統計を用いて日本の現状を把握させた上で、雇用および労働・家族・性と生殖・性暴力・社会保障および税制などの個別分野について、労働法・民法・刑法などの関連諸法および現行制度の内容と問題点を解説し、男女共同参画社会を支えるしくみとしてふさわしい法制度のあり方を考察する。
		現代社会と法	本科目では、実際の裁判例を題材として、法律が社会のなかでどのような機能や役割を果たしているのかを講じる。とくに、憲法の人権問題に関する事例を取り上げ、初学者に「公正性(正義)」という法的感覚に触れさせる。また、事例学習を通して、法学への問題意識と学問的関心をもたせる。 具体的な授業計画としては、①人権からみた憲法の役割、②刑罰からみた刑法の機能、③結婚からみた民法の機能などである。
		日本国憲法	本科目は、日本国憲法の基本理念を理解して、人々の生活における基本的人権の意義を受講者に探求させるところにその目的がある。この憲法は、制定されてすでに60年以上が経過する。日本国憲法が、国民生活との関係でどのように機能しているのか、また、国民の多くは憲法にどのような意識を有しているのかについて受講生と共に考察する。特に、実際に裁判で争われた憲法の事例を紹介しつつ、現在の人権保障の状況を明らかにする。憲法9条など、岐路に立っている現憲法のあり方(憲法改正)についても取り扱う。 具体的な授業計画としては、①憲法の基本構造、②基本的人権の総論、③各種の人権問題、④集団安全保障と恒久平和主義などを取り上げる。

授 業 科 目 の 概 要					
(国際文理学部 国際教養学科)					
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考		
学部 共通 科目	共通 基盤 科目	社会科学	現代日本社会論	現代日本は、経済生活においては格差社会を、社会生活においては少子高齢化を、地域生活においては過疎化を経験しています。かつてないほどの激しいこれらの変化は、日本の社会を大きく変貌することを求めています。総じてこれらの問題が発生する原因として、社会力の低下があげられます。家族の個人化にともなって、地域を支える人材、財源、組織の弱体化が、地域社会の崩壊をもたらしています。上記のような問題意識を通じて現代日本社会に対する理解を深めることを講義の目的とします。	
			今日の東アジア社会	今日の東アジア（*東南アジア諸国および中国、韓国、日本、台湾、北朝鮮からなる地域）の社会は、（1）異なる言語、宗教、文化を持つ集団からなる一方で、（2）急速な経済発展に伴う都市化や格差拡大をはじめとする急激な社会変化、（3）グローバル化に伴う意識の変化という共通した変化を経験している。この授業は、東アジア地域の社会の実態や変化について学び、これからの東アジア地域を見る目を養うことを目的としている。	
			国際関係の成り立ち	本講は ○現代の国際関係（国家間関係を中核）の原型を作ったとされる17世紀半ばの欧州政治体制とその時代、そして今日から見た同体制の意義等に言及する。 ○国際関係コース生にとり不可欠であるのみならず、深刻な環境、人口等の地球的問題に国家間関係が直面するような現代社会に生きる知恵を学ぶ意味で多くの一般学生の受講も望む。授業形態は講義の形をとるが、受講者の好奇心、主体性を引き出すために、個別に時間外議論、追加レポートの提出等も受け付ける。 ○授業計画の要旨以下のとおり： 1) 17世紀ヨーロッパの歴史環境 2) ウェストファリア条約下の新政治体制（構造、関与主体） 3) 「誰のための平和と戦争」：神聖ローマ帝国、国王と貴族、国家とブルジョワジー、国家政府と市民社会。	
			国際経済のしくみ	本講義では、最初に、グローバリゼーションのもとでの国際的な経済取引に関する状況をデータにより概観する。それを前提として、各国民経済の物的なつながりと金融的なつながり、つまり国際的な財取引の問題と国際金融の問題について初等的な内容を平易に解説する。まず、国際的な財取引の問題を考察するために、微視的な視点から、財の貿易に関する基本的な議論を行い、種々の政策の問題を議論する。さらに、巨視的な観点から、経常収支と資本収支の決定に関する議論を展開し、それを踏まえて、国際金融の仕組み、特に外国為替市場の機能に関して解説を行う。	
			組織運営のしくみ	ヒトは集団や組織と関わりあいながら、社会生活を営み、経済活動を繰り広げている。特に組織の時代といわれる現代社会では、ヒトと組織の関係は重要である。組織は経済活動を営む企業から行政をつかさどる政府や地方公共団体、さらにはボランティアな活動で市民生活をサポートするNPOなど実に多様である。それらの組織は固有の原理で編成され、特有の原則で運営されている。身近な組織を取り上げてケースディスカッションを取り入れながら、ヒトがより良い生活を営むために、組織とどのような関係を結び、どのように活動すべきなのか、またヒトはそのためどのように働くのかを組織論をベースにして考えてみる。	

授 業 科 目 の 概 要				
(国際文理学部 国際教養学科)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学部 共通科目	共通 基盤 科目	社会科学	情報と社会 グローバル化をもたらす本質は、放送、新聞等のマスメディアや、インターネットなどのコンピュータネットワーク等による膨大な情報の交流、交信であるといっても過言ではない。マスメディアによる情報の世界同時共有、政治社会活動や企業活動における情報活用、研究教育分野や文化活動における情報の収集・利用など、情報の活用を抜きにして今日の社会は維持存続できない。マスメディア、コンピュータネットワーク等による情報の社会的機能と価値について、社会科学と情報科学の両面から解説する。	
		自然科学	持続可能社会の設計 人間社会と自然環境が共生する社会の構築を目指すために必要な考え方(理論)や方法論について、様々な側面から総合的に学ぶ。 (オムニバス方式/全15回) (51 大中忠勝/8回) 生活の中で消費されている資源やエネルギーの実態について講義し、持続可能社会構築に必要な事項について検討させる。 (50 森田 健/7回) 生活の中で行われる自然環境と人間の関わりを考えることを通して、共生するシステム構築に必要な事項について検討させる。	オムニバス方式
		自然科学	人をめぐる生命科学 生命科学・脳科学の立場からヒトとは何かを考える。ヒトを他の動物と違った独特の存在にしているのは、脳機能の飛躍的な発達によってである。その意味では、脳科学の立場からヒトを考えてみることは、自然科学の視点での新しい人間像の考察に結びつく。自分自身について知るために、皆で「ヒトとは何か」を考えてみる。 具体的な講義内容は、ヒトの出現の歴史、ヒトの脳：言語を使ったコミュニケーション、ヒトの脳：睡眠と夢、ヒトの脳：ヒトの感覚と感覚世界、ヒトの脳：学習記憶のしくみ、脳科学の視点からヒトを考える：神経伝達物質によって操られるヒトの神経機能などである。	
		自然科学	国際社会における食の安全・安心 食は、生存にとって最も根本的な問題であり、安全でない食料が流通する社会は人間の存在を根底から危うくしかねない。輸入食品に依存している日本においては、食品の経路・経緯が多様化しているため、食品の安全性を確保することが以前と比べても複雑で難しい問題となってきている。本講義では食品の安全・安心に関して、BSEやGMOなど、これまでに発生した問題とその原因を解説する。さらに、食の安全・安心を守るために行われている行政、企業、消費者の対応、世界各国の対応を紹介する。	
		自然科学	物質と環境 地球環境の中での物質循環の様子とその物質循環によってどのような影響が環境に及ぼされるかをグローバルな視点から学習する。さらに、地球温暖化・オゾン層破壊・光化学スモッグ・ダイオキシン・酸性降下物・放射性物質汚染など化学物質の関係した種々の環境問題について、その原因物質の化学的な性質や化学変化について学習し、さらに、それを踏まえて問題が生じるメカニズムや環境への具体的な影響や対策等について、最近の報告資料(環境白書・環境省や経済産業省のパンフレット)等をもとに学習する。	

授 業 科 目 の 概 要				
(国際文学部 国際教養学科)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学 部 共 通 科 目	自 然 科 学	物理学と現代社会	20世紀は物理学の世紀と言われるように新たな発見と理論の発展により、人類の世界像が大きく変わった。それに伴ない、科学技術という言葉がよく使われることからわかるように科学の発展と、我々の身近な生活の利便性を大きく発展させた技術の進歩は密接に関わっている。前半では、19世紀末から20世紀前半に続く物理学の理論の発展を軸に科学技術の発展を概観し、流れをつかむために必要な概念について解説する。後半では、20世紀後半から21世紀初頭にかけての物理学の社会へ直接関わる事柄への応用について解説する。	
		数理学と現代社会	数学・数理論理学は、社会を支える通信等のシステムや、産業、生活に用いる機器について、その原理をなす非常に重要な機能を果たしている。たとえば、飛行機をはじめとする機械の設計性能計算、構造物の設計計算、金融経済に代表される経済活動の分析、予測、それらの計算道具としてのコンピュータの原理等々、ほとんどすべてのシステムに数学が利用されている。数学が現代社会でどのように利用されているか、その理論はどのようなものか、理論と応用の両面を有機的に関連づけて解説する。	
		科学論	現代社会の人類にとっての課題の多くは、20世紀に爆発的に進歩した科学技術のもたらしたものである。科学技術がどのように我々の社会生活に影響を及ぼし、我々のものの考え方に食い込んでいるか、科学技術発展の負の側面に留意して探求する。特に、核エネルギーの利用について、その科学的基礎知識を学び、世界と日本における各施設の現状について考察する。	
学 部 共 通 科 目	芸 術 ・ 感 性	美術表現	論理のみでは不足する、五感活用によるコミュニケーションの手段が芸術であり美術はこの範疇の代表的な一つである。「美術表現」においては絵画表現(実技)を通して、視覚コミュニケーションの基礎を習得させ、柔軟な思考法を身に付けさせ、幅広く世界に通用する人材の育成を試みる。	実技 24時間 講義 6時間
		造形表現	造形は視覚に訴える芸術の総称であり、絵画や彫刻を始め、工芸・デザインなどがある。したがって、広義には美術表現の一種と言えるが、この授業においては、一般通年による、純粋美術以外の造形(デザイン、工芸など)をテーマとする。 さらに前期開講の「美術表現」と同様、視覚コミュニケーションの「リテラシー」の基本を、実際の表現(実技)を通して習得させる。	実技 24時間 講義 6時間
		音楽表現Ⅰ	論理のみでは不足する、五感活用によるコミュニケーションの手段が芸術であり、音楽はこの範疇の代表的な一つである。「音楽表現Ⅰ」においては唱歌の歌詞に込められた感情の表現などを通して、音楽によるコミュニケーションの基礎的手法を習得させ、柔軟な発想法を身に付けさせることによって、幅広く世界に通用する人材の育成を試みる。	実技 24時間 講義 6時間
		音楽表現Ⅱ	「音楽表現Ⅱ」においては、言語や論理からは得られない音楽の感情表現のコミュニケーションの方法に、同じ感情表現の方法である、絵画や美術の多様なイメージを結びつけ、課題曲の表現を唱歌でもって多視点的・多角的に試みる。	実技 24時間 講義 6時間

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文理学部 国際教養学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学部 共通科目	健康 スポ ーツ 実習	健康スポーツ実習Ⅰ 健康や体力、スポーツに対する認識を深め、生涯をとおして心身の健康の保持増進をはかるため、その知識や方法を習得する事を目的として実習を行う。スポーツ実践をとおして自己管理能力、他者とのコミュニケーション能力に基づいた集団の運営能力、集中力を身につけることを目指す。筋力、持久力、柔軟性など自分の体力を認識した上でバランスのとれた体力の向上を目指し、生涯にわたって運動習慣が継続できる実践能力を体得する。また運動の習慣も身につける。健康スポーツ実習Ⅰでは、その中で、健康や体力づくりに重点を置き、その知識や方法を習得する事を主な目的として実習を行う。	
		健康スポーツ実習Ⅱ 健康や体力、スポーツに対する認識を深め、生涯をとおして心身の健康の保持増進をはかるため、その知識や方法を習得する事を目的として実習を行う。スポーツ実践をとおして自己管理能力、他者とのコミュニケーション能力に基づいた集団の運営能力、集中力を身につけることを目指す。筋力、持久力、柔軟性など自分の体力を認識した上でバランスのとれた体力の向上を目指し、生涯にわたって運動習慣が継続できる実践能力を体得する。また運動の習慣も身につける。健康スポーツ実習Ⅱでは、その中で、スポーツ実践をとおして、他者とのコミュニケーション能力を身につけることを主な目的として実習を行う。	
学部 共通 専門 科目	異文化理解 「グローバル化」という言葉は聞こえはよいが、実際には多くの問題を含んでいる。本科目は、文化背景の異なる人々がグローバル社会で暮らす際、どのような問題があり、それらはどのような要因で発生しているのか、また、解決策にはどのようなものがあるのかについて講義していく。具体的には、(1)偏見、ステレオタイプ、(2)Uカーブ、Wカーブ、(3)カルチャーショック、(4)異文化適応、(5)異文化間コミュニケーション能力といった側面を理解してもらう。		
	国際社会とジェンダー ジェンダーの視点から提示される国際的な諸課題のなかで、法的・政治的な性格のものを取り上げて検討することを通して、国際関係および国際社会を多面的にとらえる力を養う。女性差別撤廃条約による女性の人権の国際的保障、国際機構におけるジェンダー平等およびジェンダー主流化の取組、女性に対する暴力をめぐる国際刑事手続などを検討の対象とする。女性差別撤廃条約を特に重視し、国際人権保障の史的展開、条約の成立過程と日本の参加、禁止される差別の内容、条約の履行確保制度等について詳説する。		
	国際経済学 本講義では、国際経済学のオーソドックスな基礎理論、制度的機構の基本的な仕組み、および現在の国際経済問題などを取り上げます。前半は国際貿易論、後半は国際金融論を中心に講義します。国際貿易、直接投資、国際金融、主要な国際経済事象の動向を的確に把握し、現状分析を行うのに必要な基本的知識・理論・分析手法の習得を目指します。各受講者がこの講義を通じ、日本の直面する国際経済問題をよりの確に理解できるようになることを期待します。 授業の最初の1時間には、講義要項に基づいて講義します。残りの30分には、講義の内容に合わせて、日本経済新聞などの関連記事について解説したり、ビデオを見たり、質疑応答をしたりします。質問が出ないときには、出席をとるかわりに感想文を書いてもらいます。新聞やTVニュースで取り上げられた経済問題と結び付けて、分かりやすく講義することを心がけます。		

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文学部 国際教養学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 部 共 通 専 門 科 目	生活と環境	<p>日本を含む東アジア地域において、これからの環境調和型社会を創生するために理解しておかなければならない現状社会での環境問題、あるいはそのような状況に陥ったこれまでの経緯、さらには、東アジア地域における過去の種々の公害の歴史について学ぶ。ヒトの生活活動が今日の環境問題や健康リスクを及ぼしているかの歴史的経緯を明らかに、健康影響を低減させる制度(法律などを含む)の構築について学ぶ。(生活と環境に関する総合的講義)</p> <p>【オムニバス方式/全15回】            (47 野馬 幸生/8回) 東アジア地域における循環資源の適正管理と資源回収過程における環境影響把握について            (61 錦谷 まりこ/7回) 環境リスク把握と軽減策について</p>	オムニバス方式
	食料経済学	<p>食に関する諸問題に経済学的視点からアプローチするために、経済学の基礎理論を学び、さらに国内および世界で発生している食料・農業・農村に関する問題について理解を深める。関連科目(地域ブランド論、食経営管理論、食物危機管理論)を学ぶための入門科目であるため、関連科目を履修する前に受講しておくことを推奨する。</p>	
	食健康論	<p>食事・栄養は運動、休養と共に健康の維持・増進の重要な要素である。昨今その重要性は認識され、健康食品やサプリメントなどの情報の氾濫も招いている。食生活において過不足しているものを補正する目的で、これらの健康食品を利用する場合、逆に基本的な食生活がおろそかになり、健康を損なう可能性もある。当講義では、栄養機能食品や健康食品などに関する正しい知識を得ることで、機能表示、有用性、安全性、医薬品との相互作用を理解し、適切な利用により健康の維持・増進に役立てる知識を得ることを目的とする。</p>	
	社会調査法	<p>この授業では、どのような調査を社会調査というのか、社会調査はどのような意義を持っているのか、社会調査法の種類(質的調査、量的調査、質問票調査、インタビュー調査、参与観察法など)及びそれぞれの調査方法の長所と短所について概説する。それぞれの調査法について具体例に触れながら授業を進める。</p>	
	フィールド実践・研究推進論 I	<p>本科目の目的は、国内外のフィールド訪問やインターンシップ、スタディツアー、ボランティア等、現場での学びや体験を行うのに必要な能力そしてスキルを試行しながら学習することである。「能力」や「スキル」は、「現場」や「関心分野」へのまなざしや心構えに支えられて初めて機能していることを理解し、実践につなげていくことを学ぶ。特に、「調査する」「実践する」自分と、「調査される」「実践される」あるいは「一緒に調査する」「一緒に実践する」他者の関係性を意識し、行動できるようになることを重視する。</p>	

授 業 科 目 の 概 要				
(国際文理学部 国際教養学科)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学部 共通 専門 科目	フィールド実践・研究推進論Ⅱ	国内外で実施したフィールド訪問やインターンシップ、スタディツアー、ボランティア等の現場での学びや体験についてふりかえり、学習したことに関して何らかの解決策を提案する報告書をまとめ、報告会を実施することで、自身の学習を発信することが本科目の目的である。フィールド実践・研究推進論Iおよびフィールドスタディ、フィールドワーク、国際インターンシップ、サービスマーケティングのいずれかを履修していることが履修条件となるが、フィールド実践・研究推進論Iで設定した目標に対して、実際の学習体験を照らし合わせ、自分自身の成長と共に、課題を洗い出すことで、今後のキャリア(大学での学習および就業)についての方向性を創り出す。		
	日本文学入門	日本文学の基礎的な事項を学ぶ。大学での学問研究への導入をはかる講義である。学生が文学と文学研究のおもしろさを知るために、資料批判から研究論文批判まで、幅広く自由な思考を展開できることをめざす。 「日本文学」の研究は、高等学校の「国語」の授業の延長にすぎないという先入観を取り除く。 文学テキストは、学生が主体的に形作るものである。そうした主体性を発揮することができる基礎的な力を徹底的に身につけてもらう。授業テーマは「口承と書承について」「変体仮名とは何か?」「近代小説を原文で読もう」「研究論文の読み方」「文学史の問題点」など。 「日本文学テキストの作成」「古典文学の常識」「文献の入手の仕方」「入試小論文から大学レポートへ」「作品論と作家論」等。		
	欧米文学入門	現代の日本では活字離れが叫ばれ、文学より映画・漫画・ゲームなどが人気を博している。こうしたナラティブ(物語)の新興形式にも魅力はあるが、文学には文字の集積にしか伝えることのできない面白さがあり、この授業ではそれを講義したい。ただ楽しむことから一歩進んで、作品を専門的にどのように解釈・分析するかを、日本とは違う欧米独自の歴史的・文化的背景、またナラトロジーなどの文芸批評理論を考慮しながら学ぶ。視覚情報全盛の時代にあって、より複雑で論理的思考を必要とする文字情報を使いこなすことは現代社会を生き抜く上で必要な能力である。		
	英語学入門	言語の基本的な仕組みを、音韻論、形態論、統語論の観点から、主に英語を例に学ぶ。言語一般の基本的構造を学ぶとともに、英語学研究への入門とする。 言語の最小の単位である音素について解説し、英語と日本語を例に、言語による音の使い分けについて論じた後、形態素から語、さらにいくつかの階層を経て、文が構成される言語の仕組みを学ぶ。印欧語や初期の英語に対し、現代の英語、さらに日本語など、言語の多様性を学ぶとともに、例えば英語が屈折型タイプから分析型タイプに移行してきたように、言葉が変化するものであることも学ぶ。		
学科 基本 科目	文化・歴史	哲学入門	存在とは何か。認識とは何か。善とは何か。世界とは何か。西洋古代以来の哲学史上枢要の問いと直に向き合い、哲学的な問いと思索の本格的な始動を誘発する。 存在論や認識論の抽象的な問いの発生の必然性を、歴史的言語文化的なコンテキストのもとに理解させて、現代世界に不可避不可欠の問題設定にまで導いてゆく。 哲学史上の関連テキストを詳細に解説し、いくつかの専門術語の援用も促しつつ、何よりも学生の哲学思考の能力の向上をめざして、毎回のグループ討論や小レポート等の活動を重視する。	

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文学部 国際教養学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 基 本 科 目	文化・歴史	歴史学入門	歴史学は、これまで、様々な新しい方法論や研究分野を開拓するかたちで発展してきた。それは、政治史や経済史から社会史や文化史へと、主たるアプローチが変遷してきたことに端的に表れている。この授業は、近代フランスを例にとり、その「歴史」をどう理解するかについて講義するものであるが、その目的は、理解を可能にする様々な方法や切り口を具体的に解説することにより、ただ出来事を暗記するのではない歴史学とは何かという大きな問いを發し、それに対する一定の説明を学生に伝えることにある。
		東アジア地域研究入門	東アジア地域の人と暮らしをめぐるトピックを、文化人類学の視点から紹介し、さらなる研究へとすすめる第一歩とする。具体的には、中国、韓国、中華圏に属する台湾、香港、マカオなどについて歴史、政治、法制度、社会、文化、民俗、国際関係など多方面からのアプローチを試みる。 授業形態は主に講義形式であるが、適宜グループ討論も取り入れる。可能な限り視聴覚教材を用い、理解の助けとしたい。毎回質問・感想票を回収し、理解度を把握するとともに、次回授業の初めに質問に対する回答、補足を行なうことにより、理解を深める。
	社会システム	法学入門	本科目の目標は、①法がどのようにして国と社会を支えるしくみとして機能しているかを理解すること、②法学の基本的な専門用語を理解し使いこなせるようになること、③社会問題に対して法的にアプローチする方法を身に付けることである。「法とはなにか」「法の目的」「法の分類」「法と裁判」などの法哲学的な総論部分の学習を経て、「憲法」「民法」「刑法」等の国内法の要点を解説する各論部分に進む。さらに、国内法とは全く異なる基盤と特徴を有する国際法の存在を示し、専門科目での学習に繋げる。
		政治学入門	政治学についての基本的な知識を身につけることを目的として、講義をすすめます。講義の方法としては、まず政治学についての基礎的単語、たとえば議会制民主主義、選挙制度などの内容を講義し、それをもとに政治システム全体がどのように構成されているかについて、お話します。その中で、受講生のみなさんが無意識の中においても、どれだけ深く政治にかかわっているかを理解できるように、講義を構成します。最後に、ケーススタディーとして、日本政治に触れたいと考えています。
		経済学入門	グローバル化が益々進行している今日、経済はあらゆる分野に大きな影響を及ぼしている。新聞やテレビなどで日々報道されている多様な経済現象を正しく理解するためには、経済の正しい見方や経済メカニズムの基本原則に対する理解と応用力が重要である。本講義では、経済学の基本知識、特にミクロ経済学やマクロ経済学の基本概念を学びながら多様な経済現象についての理解を深めることを目的とする。
		経営学入門	経営学について全く知識のない学生に対して、高学年時に履修する経営専門科目の効果的な理解の為に経営学の基礎知識取得を目的として開講される。経営の概念について学んだあと、マーケティング、生産管理、ロジスティクス、組織・人事管理、経営戦略、リーダーシップの各項目を比較的平易な表現による講義を通して学んでいく。実践的な理解を深めるため、学生に身近な企業(例えばソニー)を紹介し、経営学がどのように生かされているか紹介する。学生の理解を確認するために、プレゼンテーション・小テストを課す。



授 業 科 目 の 概 要				
(国際文理学部 国際教養学科)				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学 科 基 本 科 目	社 会 シ ス テ ム	国際関係入門	本講は ○国際関係の歴史と、現代の仕組み、過程、争点、そして展望を平易に説明する。とりわけ今日地球が直面する主要な課題への地球的な取り組みを念頭におきながら、国際関係の中核をなす、国家間関係と、国家以外の主体の関わりを区別して言及する。 ○国際関係が我々の日常生活にいかに浸透しつつあるかを説くことで、個人までが国際関係により積極的に関わる動機付けと可能性を提供する。 ○授業計画の要旨以下のとおり： 1) 国際関係の歴史の変遷（国家間中心から、国際機関や多国籍企業、国際NGOが合流、競合・協力しあう関係へ） 2) 国際関係の仕組み・争点（国連、IMF/世界銀行等における世界的貧困、紛争への対策） 3) 国際関係の展望（国家間関係の相克と限界）。	
		情報社会入門	グローバル化の原動力の一つである情報システムは、マスメディアとインターネットである。この二つのシステムについてその機能と原理を知り、その利と不利とを知って有効活用をはかることは持続可能性社会の実現に欠かせない。本講義ではマスメディアとインターネットの仕組みについて概説し、それらによって情報がどのように処理運用され、社会に活用されているか、また個人の生活にどのように関わっているか、将来を見通しながら現状を解説する。	
		基礎数学	今日、数学はデータ処理、データ解析の道具として様々な分野で利用されている。それは統計学、解析学、計算機数学などに代表されるものであるが、その基礎となる数学は微分積分学と線形代数学である。本講義では微分積分の基礎概念とその計算手法、及び線形代数における行列の性質、演算手法、また行列式概念とその性質、その応用法について学ぶ。	
		基礎統計学	この講義では、さまざまな分野の研究における調査・実験によって得られたデータを分析する上で必要となる、統計解析手法の基礎を学ぶ。前半では、得られたデータを、その特徴を表現するいくつかの値に要約したり、データについて直感的な理解をするために可視化したりする記述統計について学ぶ。後半では、母集団から得られた標本データとその確率的な性質に基づいて母集団の性質を推測する統計的推測および、検証すべき仮説についての評価を行う統計的仮説検定について学習する。	
		応用統計学	基礎統計学で学んだ記述統計、統計的推測、統計的仮説検定の知識に基づき、分割表の検定、分散分析、ノンパラメトリック仮説検定、回帰・相関に関する統計的推測などの発展的内容を学ぶ。また、実際のデータを使った例を多く扱い、実践的なデータ解析についての能力を身につける。	

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文理学部 国際教養学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 科 目  専 門 科 目  日 本 言 語 文 化 科 目  概 論 ・ 歴 史 ・ 文 化	日本史概論	「日本」という枠組みの成り立ちを考える。その際、世界史的視点、特に中国を中心とする「東アジア世界」という観点からとらえることによって概観したい。史料の読解・検討に基づいて提示される考え方や学説を紹介し、歴史を「理解する」「記憶する」側から、「批判する」「考える」側へのきっかけとなるようにしたい。	
	日本外交文化史 I	古代から続いた遣隋使・遣唐使・遣新羅使等による外交の目的と手段、その行為によってもたらされた法制度や文物が我が国に及ぼした影響について考える。また、「異国」との戦争が中世の日本にあたえた影響についてもふれたい。 外国と対等にわたりあうために、日本は「文化国家」を標榜せねばならなかったのであるが、具体的にはどのような手段をとっていたのか、また、それがどのような結果をもたらしたのか、文化史的に探っていく。	
	日本外交文化史 II	近世以降では、主に明清・朝鮮・和蘭と江戸幕府との外交史の動向、幕府の鎖国観と国内各地で進んだ社会構造の「組織化」、産業流通の影響による都市文化の興隆、諸藩の経済改革による社会観の変質、幕末の対アジア観の変化と国防意識などを学ぶ。明治期以降では、帝国主義的な列強に対する近代日本の国家意識と外交姿勢の様相について学ぶ。その際、知識人層の対外観を明らかにするために、横井小楠や福澤諭吉などの政治思想についても積極的にとりあげていきたい。	
	儒教思想史	前半では『論語』をはじめとする儒教の経典の主要部分を解説しながら、古代～中世の日本がそれらをどう学び摂取したのか、系譜的に追究する。後半では江戸時代の日本の朱子学者の思想と活動を中心に、それらが日本の社会にもたらした影響等について究めていく。	
	日本伝統芸能	(英語による講義) 日本の伝統文化の多面性と奥行きを探検する。 日本の伝統芸能が多様な様相をもっている。様々な芸能の映像をとおして、長い歴史において日本伝統芸能の多面性を理解する。社会的な背景をみて、代表的な芸能の発展の様子を探る。後半に日本の代表的な芸能の二つ能と歌舞伎を比較する。映像を使って方式や美学をみて、テキストのなかでその背景にある世界観を調べていく。	
	奈良時代の文化と文学	『万葉集』をベースにして、奈良時代の制度や習俗、当時の女性の恋愛観と結婚の実態などを学んでいく。 文学作品の正確な理解には、歴史的事実と背景にある考え方を知る必要があることを実感し、また、歌の題詞や左注から必要な情報(作歌状況など)を読み取る訓練も試みる。さらに、補足プリントを使用して、律令制度、記紀神話、漢籍の利用についても触れる。	

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文学部 国際教養学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 科 目  専 門 科 目  日 本 言 語 文 化 科 目	概 論 ・ 歴 史 ・ 文 化	平安・鎌倉時代の文化と文学	平安・鎌倉時代の文化と文学について基礎的な知識を習得することを目標とする。日本の文化と文学全体への幅広い視点を養う契機とする。 作品の枠内に留まらず、政治・宗教・芸術などに対する同時代人たちの価値観の分析を通して、平安・鎌倉時代の文化全般の基本的な理解を深める。 本講では、「鏡物」と呼ばれる歴史物語を補助テキストとして解説しながら、それらの作品の背景にある様々な文化事象について説明する。 講義の最終段階では、自分なりの「時代の文化観」を見出してもらえれば、講義としては成功であると考えます。
		江戸時代の文化と文学	近世前期から後期にかけて出版された絵本類を手がかりとして、江戸時代の文化的事項を理解させながら、現代と近いようで遠いこの時期について、当時の習慣・風俗、文学や出版、国語政策などの文化事象に及ぶ様々な問題を、広く講ずる。内容としては、「上方こども絵本」や「江戸の黄表紙」などにみる江戸時代の風俗、書物の大きさと価値、法令から見た江戸時代、時代劇のウソ・ホントなどについて、述べていく。また、時に応じて映像資料を用いることもある。
		明治・大正時代の文化と文学	都市を描いた明治大正時代の作品を通読し、文化と文学の相関を考察する。テーマは都市。作品に描かれた都市の分析によって、文化が文学にどのように作用し、文学が文化にどのように反映しているか、基本的な問題を検証する。履修者がそれぞれの作品について独自の読みを提示できるよう、文学作品の反覆表現を読む方法を実践する。
		書道Ⅰ(書道芸術)	書道は言語機能であると同時に文字文化を根幹とした文学・美学・美術であり「道」である。本講義ではその書道文化と教育の史的展開と意義を考究する。授業テーマは「書論・カリグラフィ論」「中国書道史概説」「行書と楷書」「日本書道史概説」「日本書道史概説」「草書かなの成り立ちと発展」「王朝かなの読解」「漢字かな交じり書論」「書道・書写教育法と教育論」「実用書道と文化」等。
		書道Ⅱ(書道実技)	教職課程において書道は不可欠で、中国・日本書道古典法帖により、毛筆書道の基本である用筆・運筆法を学ぶ。前半では法帖臨書により書道の基本動作である執筆法と文字構成法を学び、楷書と行書のリズムの違いが理解できるようにする。後半では日本のかな文字の書技向上をめざし、手紙や俳句和歌等の揮毫・散らし書き表現の実習を行い、作品の仕上げを通して書道実技の修得を目指す。
美学美術史	日本の彫刻と絵画のなかから、とくに優品とされてきたものを幾つかとりあげ、それぞれの作品について、同時代の作例や関連作品を参照することによって、かたちや、線や色にふくまれる伝統的要素と、あらたに付加された要素を確認し、美術史のうえでの位置づけを紹介する。また、作品は文化のひとつの結実であるという観点から、それらが制作された時代や、制作にかかわった人々についても言及する。		

授 業 科 目 の 概 要						
(国際文理学部 国際教養学科)						
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考			
学 科 科 目	専 門 科 目	日 本 言 語 文 化 科 目	概 論 ・ 歴 史 ・ 文 化	日本文学史	日本文学の主要な作品と作者、文学的事項の全般について、奈良時代から平安時代、鎌倉時代、室町時代、江戸時代、近現代まで通史的に概観し、その基本的概念と用語を入門的に学ぶ。具体的な授業内容としては、各時代の社会的状況と背景を踏まえながら、その時代の文学作品の様式と方法について、代表的な例を取り上げながら解説していく。受講者が日本の文学観・歴史観や思潮等についても理解を深め、総合的に捉え直した見識をもつことを目標とする。	
				国語表現（音声・文法・表記）	専門的レポートや論文、報告文など、目的によって異なる表現や文体を分析し活用する能力を習得させる。教職にも役立つよう、音声・音韻・アクセントの問題についても触れる。なお、自己を表現する国語能力を高めるため、俳諧・狂歌などの実作や様々な文章作成を行い、その合評会なども試みたい。	
				和漢比較文学	大陸との交流が我国の文化と文学に及ぼした影響の大きさを理解し、漢字文化圏の中に在って発展してきた日本文学の特性について考える機会とし、日本文学を国際的な視点から捉える姿勢を養う。 具体的には、国文学における漢籍の役割、翻訳・翻案、和歌や物語への応用などについて講義していくことになるが、国文学および日本漢文学を理解していく上で、必要な基礎事項をもあわせて学ぶ。	
				近・現代日本文学の英訳研究	村上春樹、小川洋子、吉本ばなな、桐野夏生など、現代日本の著名な作家たちの作品への導入を図る。日本語の原文を参照しながら、英語による講義および討論によって、現代の日本社会の重要な特徴がどのように作品に反映されているかを考える。ジェンダー、トラウマの影響、家族像の変化、集団と個の問題、仕事の可能性の制約への不満、現代における芸術の意義などがトピックとして考えられる。 受講生は英語能力のほか、日本語の読解能力を備えていることが望ましい。日本人学生にも、日本の生活や文化について英語でコミュニケーションするよい機会として受講を勧めたい。翻訳に伴う諸問題を考察するだけでなく、日英両言語での有用な語彙、文型、コミュニケーション技術も獲得を目指す。	
				中国古典文学Ⅰ	本講義では、先秦以来各時代の主要な韻文作品をとり上げつつ、その時代を代表する文学ジャンルを中心に、その形態に関する知識、作品の背後にあるもの、中国文学史全体での位置づけなどを総合的に学習する。①既習の漢文に関する知識を再確認する。②中国文学史の全体的な流れを理解する。③個々の作品についての知識を獲得し、理解を深める。	
				中国古典文学Ⅱ	漢・劉向『列女伝』を読む。中国古代の人々が抱いた「理想の女性像」「問題視すべき女性像」について考察する。①中国古代における女性像に関する知識を得る。②中国古典の世界への広い視野を獲得する。③散文作品の講読を通じて、各自漢文訓読の知識を再確認する。	

授 業 科 目 の 概 要				
(国際文学部 国際教養学科)				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学 科 科 目  専 門 科 目  日 本 言 語 文 化 科 目	概 論 ・ 歴 史 ・ 文 化	日本言語文化講読	留学生・帰国子女の日本言語文化理解を深めるため、話し言葉文体と書き言葉文体の違いに特に留意しながら、さまざまな文体を使用した日本語文献資料群を順次講読する。 講読資料は、小説・詩・随筆等の主要日本文学作品に加えて、作家の手紙、新聞・雑誌記事等を用いる。単なる言葉の意味調べではなく、日本語文章から人物関係、場面等を的確に把握し、文脈全体を丹念に読解して行く。 学生は、未知のあるいは理解不足の日本語語彙を国語辞典・古語辞典・漢和辞典などの日本辞書を適切な方法で検索する訓練だけでなく、周辺の言葉とともに形成される意味体系の確認等と交え、豊かな日本語文化を身につけるトレーニングを進める。 漢字文化圏からの留学生においては、漢字表記が同じである日本の漢語との意味用法のズレなどについても丁寧に確認して行く。	講義 6時間 演習 24時間
		日本言語文化文献講読B (かな)	中世の写本や近世の刊本などの原文影印資料を講読する。 変体仮名(くずし字)の読み方も練習しつつ、作品が成立したと想定される時代の人々がどのように作品に向き合い、読んでいったのかを実体験する。 基本的な解読作業と注釈行為を通して、古文解釈の方法を繰り返し訓練する。日本語の文章のしくみや発想の源泉を、原資料の本文に常に立ち返って学んでいく姿勢を身につける。 関連して、写本や版本の書誌についても講義の中では言及する。「書道」と併せて受講すると、より効果的である。	講義 6時間 演習 24時間
		日本言語文化文献講読A (漢文)	漢文は日本文学のあらゆる領域の根源である。それゆえ、この授業では、漢文表記の文献を読解するための「勘」を養い、その根拠となる基礎知識を身につける。 ①旧漢字(異体字を含む)の表記に慣れる。 ②漢文の構造に慣れる。 ③勘を働かせて的確に効率的に辞書を引く。 これらが出来ようになることを具体的な目標とし、写本、版本、活字本の漢文資料を読んでいく。併せて巻物・版本等を実際に手にして、漢籍についての書誌学的事項を楽しみながら学ぶ。	講義 6時間 演習 24時間
		日本文化の科学的解析	日本文化は自然に沿って形成されているといわれる。その象徴ともいえる天然素材が「紙」と「絹」である。この授業では、その特質を科学的側面と文化的側面の両面から検証する。 講義科目ではあるが、適宜、顕微鏡を使用するなど、分析のための小実験を取り入れて、科学的な理解を深める。また、日本人の生活およびその空間の中で、「紙」と「絹」がどのように利用されて、わが国特有の文化を形成してきたのかという文化的側面についても触れる。さらに、これらの学びの中で得た知識や考え方を、日本の文化と文学を理解する上でどのように活かすことが可能か、についても考えていく。  (オムニバス方式/全15回)  (③ 月野文子/3回) 歌の比喩表現と古代の「衣(きぬ)」/古記録にみる絹布 (⑩ 吉村利夫/4回) 「紙」素材としてのセルロースの特徴/衣料素材としての「絹」の特徴 (⑳ 森田 健/4回) 日本の生活空間の光と紙と絹/光の心理・生理への影響 (㉒ 今井 明/4回) 料紙と文学活動/家具調度から読む歌物語	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要							
(国際文学部 国際教養学科)							
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考				
学 科 科 目	専 門 科 目	日 本 言 語 文 化 科 目	文 学 ・ 語 学	概 論 ・ 歴 史 ・ 文 化	日本文化史講義	文化を考えるうえで「死」は重要なキーワードである。本講義では、生者と死者との関係、とくに生者による死者の鎮魂に着目して中世という時代の特色をとらえたい。 中世の史料や説話などには、死者が生者に対して鎮魂を求める例が多々みえる。なぜ、それほどまでに死者は苦しむのか。生者は、どのような対応をとらなければならないのか。生者と死者との関係から築かれる政治・文化・社会構造や、それと密接に関係する中世人の壮大な世界観について考察する。	
				漢文学講義	漢詩の理解を深めるために、漢詩制作の「場」について考えていく。 故実書や古記録類などの記述から、漢詩制作が儀礼の場と密接に結びついていたことを確認し、さらに、それらの漢文資料を駆使して、詩会の具体的なイメージが掴めるよう図解説明しながら講義を進めていく。また、漢詩を作るための「韻書」や「詩語集」などについても触れ、当時の漢詩人たちが漢詩を組み立てていく過程を再現してみる。		
				上代日本文学講義	「皇位継承」と「記紀神話」の二つの事柄を念頭において、上代の文学を見渡すことを試みる。従来、別個に扱われることが多かった『古事記』『懷風藻』『万葉集』等を同じ思想で貫かれているものとして捉えなおし分析していく。 とくに、「儀礼」と「賛美」の要素を切り口として講ずるため、口承や歌謡の問題についても述べることになる。		
				中古日本文学講義Ⅰ	古典文学作品を読むためには、作品が形成された時代背景を知ることが必要である。特に平安時代の物語・日記文学は恋愛等男女の人間関係や心理描写に特徴があり、それらを理解するためには当時の婚姻制度を始めとする男女関係の諸相への知識が不可欠である。それ故、まず平安時代の婚姻制度を明らかにし、それに基づいて蜻蛉日記・源氏物語の女性達の描かれ方を中心に、古典作品を読み解いていく。古典読解の基本的知識、資料の読解における留意事項、文学作品を取り扱う際の基本的視点など、古典に関する総合的力を身に付けることをねらいとする。		
				中古日本文学講義Ⅱ	今日我々が手にする古典文学作品は、成立当時の姿であるのかという問題を提起し、文学作品における、書名、伝来、本文、形態、享受等の問題を考える。平安時代の文学作品が時代を超えて伝わってきた過程を検証し、文化史的・様式史的視点の確立に努め、諸作品に関する高度の知識を身につける。また、文献資料を科学的に見る基礎的な視点を獲得し、優れた文化を後世に伝える重要性を理解することをねらいとする。		
				中世日本文学講義Ⅰ	鎌倉時代の和歌・連歌と芸能を中心に講義する。代表的作品を詳細に解説しながら、各作品の歴史的・文化的背景の理解を踏まえた上、総合的な視野を身につけることを目的とする。一時限に一テーマの形で、講義を進める。毎時間のノートの整理を確実にし、必要事項は記憶すること。ひとつの作品を決めて進行する授業ではないので、指示された文学作品・研究書・研究論文は学生各自で読了することを求める。なお、中世韻文学の様式およびその系譜と周縁的問題についても適宜、補足しつつ講じてゆく。		

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文学部 国際教養学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 科 目  専 門 科 目  日 本 言 語 文 化 科 目  文 学 ・ 語 学	中世日本文学講義Ⅱ	<p>中世散文学の様式論および文学的風土と人物伝考証について論じる。日記・説話・軍記物語・歴史物語などを中心に、代表的作品を詳細に解説しながら、各作品の歴史的・文化的背景をしっかりと理解する。</p> <p>そのうえで、中世文学の総合的な視野を得ることをめざす。一時限に一テーマの形で、講義を進めるので、毎時間のノートの整理を確実にし、必要事項は記憶すること。一作品を決めての授業ではないので、指示された文学作品・研究書・研究論文は学生各自で読了すること。</p> <p>授業テーマは「院政期文学の特徴」「院政期と武士の台頭」「保元物語と平治物語」「武者の世」の到来と軍記物語(記録から物語へ)」「『平家物語』の成立」「女性の日記と男性の日記」「『愚管抄』と慈円の思想」「説話の登場人物とその時代」「今昔物語集・二話一類様式」「擬古物語から御伽草子への展開」「方丈記と徒然草の読解」等。</p>	
	近世日本文学講義Ⅰ	<p>芭蕉を中心に俳諧の諸問題について考察する。連句俳諧や俳文の諸作品を読み解きながら、中世の連歌から近世俳諧への展開、「俳諧」の系譜とその定義の変化を辿り、「俳諧」とは何か、「連句」や「俳諧」的な表現はなぜ行われるのかを考える。関連して、古典学者の俳諧観、国学者による俳諧批判、俳諧の文学的な位置づけ、近代の「俳句」との違い、等にも触れる。「俳諧」の特質や意義を知り、その解釈力を養うことによって、言語文化に対する総合的視点を修得することを目的とする。</p>	
	近世日本文学講義Ⅱ	<p>浮世草子と読本を中心に、代表的な作品を分析・考察し、江戸時代の散文作品の特質を学ぶ。前半では井原西鶴『西鶴諸国ばなし』等、後半では上田秋成『春雨物語』や山東京伝『復讐奇談安積沼』等を読み、各作品世界内の状況設定と構成、登場人物の関係性等を読み解く方法を学ぶ。また、典拠や趣向の近世独特の利用方法、複数の作品間の比較考察など、解釈のための総合的な視点を養う。近世前期から中後期にかけての社会思潮の変化や、出版文化の状況等についても併せて考えていく。</p>	
	近代日本文学講義	<p>夏目漱石の前期・中期の全小説を読み、漱石の前期・中期の小説の特色を把握する。対象作品は『吾輩は猫である』『倫敦塔』『カーライル博物館』『幻影の盾』『琴のそら音』『一夜』『薙露行』『趣味の遺伝』『坊っちゃん』『草枕』『二百十日』『野分』『虞美人草』『坑夫』『夢十夜』等である。部分的な読みではなく、各作品間の根底に流れているものを見とおす。</p>	
	現代日本文学講義	<p>「家族」と「家」をテーマとした作品を読み、文学に反映された文化、歴史、社会、国際関係など多角的な問題を分析する。持家、借家、団地、アパート、ワンルームマンションなど、時代によって様々な建築の構造、住まいのかたちが生まれてくる。「家族」と「家」という主題は、農村と都市、都心と郊外、移民、植民地侵出、戦争、敗戦、引き揚げ、高度成長、海外へからの移住や移民、ひきこもりなどの社会問題と深く結び付いている。作品に描かれた時代と文化の特質を理解し、それぞれの作品について独自の読みを提示することを目的とする。対象作品は、武田泰淳『蝮のすえ』(1947)、小島信夫『抱擁家族』(1965)、安部公房『燃えつきた地図』(1967)、津島佑子『光の領分』(1979)、村上春樹『ファミリー・アフェア』(1985)、リービ英雄『星条旗の聞こえない部屋』(1992)、角田光代『空中庭園』(2002)等を予定している。</p>	

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文学部 国際教養学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 目 専 門 科 目 日 本 言 語 文 化 科 目 文 学 ・ 語 学	漢文学実践研究	漢文を専門的かつ実践的に学ぶ。3年次までの授業の応用・発展的な内容である。漢詩文をテーマとして卒業論文を書く学生ばかりでなく、訓読に自信を付けたい学生の積極的な受講を歓迎する。	講義 6時間 演習 24時間
	古典文学実践研究	日本言語文化演習Ⅰ・Ⅱの発展・応用段階として位置づけられる授業である。 研究の前提となる基本的姿勢と技術の取得を目標とする。特に日本文学・日本文化を調査考察するのに必要な、専門の基本参考図書などを十二分に使いこなせるように実践的学習を行う。日本言語文化を学ぶための基礎的な知識、正確な分析力と表現力を身につけることを目標とする。	講義 6時間 演習 24時間
	日本語音韻論	日本語音韻文化の特色について共時的・通時的な両面から、専門的な知識を身につける。深化の著しい音韻研究については、共時的な面で音韻研究の理論と方法論を、通時的な面で日本国内の歴史的文献資料のみでなく、中国資料、韓国資料、インド悉曇学資料、ヨーロッパ洋学資料といった外国資料を用いた音韻研究法について会得する。 「日本語の音の特色」「音韻変化の原理と諸相」「日本語音韻資料の概要」「現代共通語音韻・アクセント」「地域方言音韻・アクセント」「日本語アクセント研究」「日本漢字音研究」「音韻史(含アクセント史)の諸問題」等の内容構成で学びを深める。	
	日本語表記論	日本語表記は、漢字や仮名(かな・カナ)あるいはアルファベットといった複数の文字体系を駆使して行われている。このような日本語表記の特色に目を向け、文字・表記に関わる種々の問題を考えていく。ついで、近年研究の進展の著しい表記研究の成果を総括することにより、広く言語生活に関わる表記実態を知らしめ、さらに、研究の姿勢と資料の扱いを会得させる。内容としては、「文字体系の性格差」「仮名遣いと仮名文字遣い」「明治期活字・旧漢字旧仮名」「文字・表記の諸問題」などを講ずる。	
	日本語文法論	日本語文法の体系的な知識や、日本語文法研究の基本的な考え方を身につけることを目的とする。他言語との比較や、外国人日本語学習者の視点など、日本語を外から観察する視点も取り入れながら、高校までの学校文法では捉えきれない、日本語文法の諸特徴を学んでいく。授業内容としては、「文の種類と構造」「格」「ヴォイス」「テンス・アスペクト」「モダリティ」「連体修飾・連用修飾」「従属節の特徴」「語順」「文の成分と品詞」「動詞の自他」「用言の活用」等を講じる。	
国語学実践研究	日本語文化演習Ⅰ・Ⅱの発展応用として、受講者自身が主体的に設定した日本語学の課題について、調査分析を行わせることを通して、研究態度や調査技術等を修得させる。随時、研究に際して陥りやすい問題点や見落としやすい死角について講じることにより、資質を高めさせる。ここでは、江戸時代後期の絵本である合巻を材料に、文体や表記について研究を深める。	講義 6時間 演習 24時間	



授 業 科 目 の 概 要				
(国際文学部 国際教養学科)				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学 科 科 目  専 門 科 目  日 本 言 語 文 化 科 目	文 学 ・ 語 学	日本語教育概論	外国人に日本語を教える「日本語教員」の仕事について理解を深め、以降の学習の足掛かりを築くことを目的とする。また併せて、母語話者として無意識的に習得した日本語を意識化し、非母語話者(学習者)の視点から捉え直す訓練も行う。具体的な授業内容としては、まず、日本語教育と国語教育の違いや、日本語教員になる方法といった導入的な事柄を解説し、その後、日本語教員が行う仕事の内容(ニーズ分析、レディネス調査、シラバスの作成、教材の使い方、授業の実施、テストの作成と評価法、等)を一つ一つ取り上げて解説していく。	
		日本語教授法Ⅰ	様々な外国語教授理論を知り、日本語を教える際の理論的な基盤を築くことを目的とする。まず、欧米を中心に提唱されてきた主要な外国語教授法(たとえばオーラル・メソッド等)を取り上げ、それぞれの教授法の特徴、背景にある考え方、長所と短所等を解説する。その後、それらが日本語教育の分野にどのように取り入れられ、どのような成果や課題をもたらしたかを解説する。	
		日本語教授法Ⅱ	日本語教授法Ⅰで学んだ教授理論を踏まえながら、外国人学習者にとって理解が難しい学習項目や、誤りやすい学習項目の指導方法を、個々の事例に即して学んでいく。取り上げるトピックは、「格助詞の誤用」「ハとガ」「活用の誤用」「品詞の見分け方」「敬語の種類と運用」「指示語コ・ソ・アの使い分け」「授受動詞アゲル・クレル・モラウの使い分け」「条件表現バ・ト・タラ・ナラの使い分け」「ノダ文の使い方」「複文の時間表現」等である。	
		日本語教育授業研究	日本語教育の指導案の作り方や教壇での教え方を実践的に学ぶ演習である。国内外の日本語教育機関で実際に使われている日本語教科書を演習テキストとして用いる。受講者が一人一課ずつ担当し、その課の言語行動目標、提出項目、導入方法、練習問題、指導上の注意点、予測される学習者の反応、先行研究で提案されている教え方、他の教科書との相違点等を詳細に検討して報告する。その後、クラスでの討論を経て、その課の指導案を作成し、模擬授業を行って教授能力を高める。	講義 6時間 演習 24時間
		日本語文化演習Ⅰ	(07 矢野 準) 4年次で日本語学の卒業論文を作成するための準備段階として、所謂、工具書類(辞書・索引など)を十分に使いこなせるようにするため、導入として「『国書総目録』の活用術」、「『古辞書索引』の活用術」、「『古典対照語い表』について」、「辞書や索引のウソ」、「電子情報の怖さ」などを講義する。その後、本居宣長の『古今集』注釈書『古今集遠鏡』を資料として、受講生に、語彙・語法などの課題を定めた研究発表を行わせ、質疑応答を経て、課題解決の方法論の基礎を培わせる。	
演習				

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文学部 国際教養学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科科目 専門科目 日本語文化科目 演習	日本語文化演習 I	<p>(09 今井 明) 鎌倉時代の歌人、藤原定家の家集を素材として、誕生・成長・仕事・交友・死など伝記的事項を確認し、人生の様々な場面で詠まれた和歌資料を分析する。 古典文学を研究する上で必要な方法論や、文献の利用方法について、幅広く実践的に学習する。 文献を通して、時代・人間・価値観を考えるという、人文科学の基礎的な方法を、和歌文献・歴史文献・地理文献などの分析を通じて身につける。</p> <p>(10 月野 文子) 漢詩文の読解に必要な辞書・索引類や基本資料の扱い方に習熟し、(典拠)を意識しながら、その影響、応用などの諸問題を考えていく。 テキストとして『和漢朗詠集』を使用し、特に漢詩文の部分に重点を置いて演習を進めていく。受講生各自が発掘した問題点と課題を、参考資料を駆使して解き明かし、その過程を順序だてて論理的に説明する訓練を行う。 毎時間、教員が助言と補足説明をする時間を設ける。</p> <p>(18 坂本 浩一) 日本語には、比較的安定して変化・揺らぎの少ない書き言葉的なものと、比較的变化の大きな話し言葉的なものがある。本演習では後者の話し言葉的なものを中心に近代までの文献資料から具体的な用例を抽出し、昔から今にいたる言葉の揺れ動きを把握するとともに、話し言葉的な文体を構成する言語的要素の細かな検討を行う。日本国内に豊富に残された文献の会話体資料を用いる。 具体的研究課題としては、語彙レベルにおいて音韻上の変化形(音訛形)によってもたらされる話し手の属性(年齢差・男女性差・職業階層差・卑俗性など)の分析や、会話中の漢語・外来語の使用状況や古めかしい言い回し等から観察される表現者の属性分析、また会話における敬語を含む繊細な対人配慮表現といった日本語コミュニケーション文化に特有な待遇表現全般にわたる検討などを取りあげる。これらのテーマについて計量学的な面、意味用法分析の面などから多角的に研究して行く。</p> <p>(21 大久保 順子) 古典紀行文と連歌俳諧の作品研究。作品本文の担当箇所を各履修者で分担し、語句の注釈から本文の解釈を進め、章や句の意味および構成上の特質をつかむ。さらに、作品成立の背景、典拠や関連作品等の調査を行い、解釈上の問題点や表現効果を考察していく。歌枕と紀行文の発想とその享受史についても学ぶ。受講者が調査と演習発表、さらにレポート作成指導を通して、参考資料文献の利用や先行研究の参照等、古典文学研究の基本的な方法論を実践的に修得することを目標とする。</p> <p>(13 橋本 直幸) 日本語教育分野の研究論文を読んで、研究方法や論文の書き方を学び、4年生での卒業論文制作のための基礎力を付けることを目的とする。受講生は、日本語教育学会の学会誌『日本語教育』に掲載されている研究論文から興味のあるものを一つ選び、その論文の概要(目的・結論・論拠)、専門用語や前提的事項の解説、その論文に対する自分の意見などをレジюмеにまとめて発表する。</p>	

授 業 科 目 の 概 要				
(国際文理学部 国際教養学科)				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学 科 科 目	日 本 言 語 文 化 科 目	演 習	<p>日本言語文化演習Ⅰ</p> <p>(38 渡邊 俊) 鎌倉幕府研究の最重要史料である『吾妻鏡』を精読する。ゼミは報告者を中心に展開する。報告者は、担当箇所について綿密に調査し、レジュメを作成したうえで発表する。そして、報告内容にもとづいて教員とゼミ参加者全員が討論する、という形式をとる。したがって、出席はもちろんのこと、予習も必須である。 史料解釈の基礎的な力とともに、議論する力をも養いたい。</p> <p>(41 鈴木 暁世) 近代小説演習。学生が各自作家を選び、その作品について調査し、資料を作成して配布して、口頭発表する。発表後、教員および演習に参加し、聴講した学生を交えて、質疑応答の討論に移る。前期、後期に発表した内容をそれぞれレポートにまとめて提出する。自分で選び調べた作家、および作品について独自の見識と読みを、口頭発表、レポートを通して提示すること。作家と作品の選択を通して自分の適性を知ること、作家と作品に対する独自の見識と読みを模索し、卒業論文のテーマを発見することをねらいとする。</p>	
			<p>日本言語文化演習Ⅱ</p> <p>(07 矢野 準) 4年次での日本語学の卒業論文作成のための能力養成を目的とする。前期の演習Ⅰでの成果を生かし、受講生各自がそれぞれの興味に応じて主体的に調査資料を選択の上、音韻、語彙、語法、文字・表記などに関する課題を以て研究発表を行う。具体的な方法は、担当学生の創意工夫に任せるが、その適否などを含む内容については、発表後の質疑応答や別途の助言を通じて、深化させる。</p> <p>(09 今井 明) 『平家物語』の登場人物の概説と代表的な説話を分析する。人物の説明は穏当か、代表的説話が挿入されているのはどのような場面か、前後の人物とはどのように対比されているか、などをていねいに分析してゆく。 併せて、古典文学を研究する上で必要な方法論や、文献の利用方法について、幅広く実践的に学習する。『平家物語』の豊かな享受史についても幅広く学ぶ。 また、文献を通して、時代・人間・価値観を考えるという、人文科学の基礎的な方法も身につける。</p> <p>(10 月野 文子) 前期に習得した技術(資料の扱い方・物の考え方)をもとに、自らのテーマ設定によって調査研究を行う。授業時には、受講生の中から毎回の発表担当者を予め決めておき、各自のテーマに沿った調査結果を資料に纏め、口頭発表を行い、それをもとに質疑応答あるいは討論する。 また、卒業論文の題目設定に向けて、研究方法や論文の書き方のイメージを掴むために、漢詩文分野の研究論文を読んでディスカッションを行うことも予定している。</p>	

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文理学部 国際教養学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 科 目	日本言語文化演習Ⅱ	<p>(18 坂本 浩一) 本演習では、変化・揺らぎの少ない書き言葉的なものに対して、歴史的に大きく変化してきた話し言葉的なものを対象とした研究を、近代までの国内文献資料にアジア・ヨーロッパ人が関与した外国資料・洋学資料も交えて、より高度なレベルで行う。日本国内に残る文献の会話体資料を検討の中心対象に据えながら、話し言葉の変化に言及している日本人の記述や研究書、さらに中世から近代にかけてアジア・ヨーロッパの外国人が日本語を観察・研究した日本語会話資料や日本文典等を交えるなど、国際的な視野にも立って日本語の話し言葉の歴史的变化の特徴をより鮮明に浮き立たせる。外国資料の具体例として、中世・近世期では日中対訳の唐話資料類、朝鮮資料『捷解新語』、キリシタン宣教師による『天草本ヘイケ』『イソホ』等、幕末明治期では欧米人サトウ『会話篇』、チャンブレン『日本口語文典』等の日英対訳資料類が挙げられる。</p> <p>(21 大久保 順子) 古典の散文学作品の解釈研究。説話または浮世草子の作品本文の担当箇所を履修者で分担し、語句の注釈から本文の解釈を進め、章話章段の意味と展開および構成上の特質をつかむ。その上で、作品の背景、典拠類話や関連作品等の調査を加え、各話のテーマや表現の特色、先行研究で指摘される問題をも検討しつつ、解釈上の問題点について考察する。受講者が調査と演習発表、さらにレポート執筆作成指導を通して、総合的な調査研究方法を実践的に修得することを目標とする。</p> <p>(13 橋本 直幸) 日本語教育分野の研究方法を演習形式で実践的に学び、4年生での卒業論文制作に向けた訓練を行う。受講生は具体的な研究課題を設定し、「先行論文の精読」「調査(用例調査やアンケート調査)」「調査結果の分析・考察」を行って、各段階で進捗状況を報告する。報告内容を討論し、その結果を踏まえて新たに必要調査・分析・考察等を行い、研究を完成させる。</p> <p>(38 渡邊 俊) 前期に引き続いて『吾妻鏡』を精読する。なお、後期では、『吾妻鏡』のなかから各自の興味・関心にもとづいて課題を発見し、そのテーマについて調査・発表する機会をもうける。その際、『吾妻鏡』だけでなく、他の史料や先行研究についても検討して、自身の論を構築してもらいたい。 課題を発見し、そして課題解決のために研究し、史料的根拠と先行研究をふまえて論証するといった一連の作業を通じて、卒業論文作成の足がかりをつかみたい。</p> <p>(41 鈴木 暁世) 現代小説演習。学生が各自作家を選び、その作品について調査し、資料を作成して配布して、口頭発表する。発表後、教員および演習に参加し、聴講した学生を交えて、質疑応答の討論に移る。前期、後期に発表した内容をそれぞれレポートにまとめて提出する。自分で調べた作家、および作品について独自の見識と読みを、口頭発表、レポートを通して提示すること。作家と作品の選択を通して自分の適性を知ること、作家と作品に対する独自の見識と読みを模索し、卒業論文のテーマを発見することをねらいとする。</p>	
専 門 科 目	日本言語文化科目		
	演習		

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文学部 国際教養学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 科 目  専 門 科 目  欧 米 言 語 文 化 科 目  欧 米 言 語 文 化 概 論	哲学概論	西洋近代の主観 - 客観対立図式の根底には、デカルトの物心二元論の枠組みがある。明治の知識人をも悩ませた主客対立を、カントの理性批判は、根本から覆そうと格闘した。そして現代の思索も、同じ問題の克服を課題にすえている。そういう近現代の哲学の骨格を精確に理解することが目標である。 そのために観念論、実在論、唯心論、唯物論といった哲学的な立場を取り上げて、批判的に考察する。 関連テキストを素材として、学生自身の考察と討論の発展を促し、高度な哲学的思考能力の向上をめざす。	
	欧米史概論	欧米文明の形成と変容について、古代から現代まで概観する。欧米文明を学ぶ現代的意味を再考すると同時に、広義の異文化理解である歴史学的な観点を学ぶ。具体的には、欧米文明には、近現代社会に圧倒的な刻印を押した「普遍的な」文明の側面と、欧米固有の価値観や心性に基づく「ローカルな」文化の側面の二重の性格が複雑に絡まり合っていることを理解する。この際、欧米文明自体の定義や実際のあり方自体が、異文化接触(衝突)と自己表象の相関関係のもと、時代を通して変容し続けてきたことに注意する。	
	英文学史	英文学の代表的な作家・作品について、その背景となる時代や思想との関連づけに留意しながら、中世から20世紀に至るまで時系列に沿って紹介する。世界が多様化した現在も、欧米人にとって英文学の素養があるかどうかは教養人であるかどうかの判断材料になることが多く、それはたとえば政治家・科学者であっても例外ではない。文学者が取り組んできた諸問題には現代人でも共有するものも多く、違う時代の価値観や問題を学ぶと共に、現代とのその関連を考えることも重要となるだろう。	
	米文学史	主として19～21世紀のアメリカの文学を、小説、エッセイ、詩、劇という4ジャンルにわたる歴史的流れとして講義解説する。文学の言語表現から、更にそれを取り囲む文化の諸相(政治、経済、社会制度、思想状況)まで理解することが文学史の理解には不可欠である。ゆえに幅広く詳細に時代の社会文化状況を解説し、その状況のなかで文学がどのような表現行為を取り、どのように時代の社会状況を解釈し、一般の読者に様々な生き方を例示していったかを解説する講義を行う。	
	ドイツ言語文化概論	文学が文化の一部であり、文化の他の分野と密接な関わりを持つ。文化はまた歴史との相互的な関係を持っている。このような背景の前にドイツの文化の流れをみて、ヨーロッパ隣国との影響をうけながら、ヨーロッパ諸国と違った発展をみる。また、その背景の前にドイツ文学作品を紹介して、考える。学生が日本語訳されたドイツ文学作品を読んで、特徴的な部分を抜粋して、その抜粋を解釈して、授業で発表する。	
フランス言語文化概論	現代の英語偏重の影で見落とされがちだが、フランスはかつて世界の覇権を巡ってイギリスと長く対立し、政治的・文化的にヨーロッパの中心であった。その影響は旧植民地の国々を通じて今も世界中に根強い。またフランス人はフランス語に強い誇りを持ち、その言語は今も国連やオリンピックの公用語であるほか、その厳密さや明晰さは論理的思考に特に適しているとされる。この授業ではそうしたフランス語が生み出してきた思想や文学について講義する。英語による思考を相対化するためにも学生には有益と考えられる。		

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文学部 国際教養学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 科 目  専 門 科 目  欧 米 言 語 文 化 科 目  英 米 の 文 化 と 文 学	中世イギリスの文化と文学	イギリス近・現代の文化と文学の理解に歴史的奥行きを与えるために、イギリスの中世から近代初期に書かれた文学作品を当時の社会文化的コンテクストと関連づけながら理解する。具体的には、中世に主要な作品ジャンルであるクロニクル(歴史もの)とロマンス(騎士道もの)群を通覧し、それらが初期近代に活版印刷の形でどのように受容されるかを考察する。この過程で、テキスト媒体の変化(写本から刊本へ)、読者の作品参加と著者意識の誕生、作品の口誦性から本文の固定、などの問題を併せて検討する。	
	近・現代イギリスの文化と文学Ⅰ	近・現代のイギリスおよびその文化圏における文学について学び、そこに描き出される様々な文化的事象の分析を通じて欧米社会に関する理解を深める。文学に描かれるテーマは、一見普遍的なものでも、背景となる時代の社会や精神によってその現れ方が異なり、その意味で文化的なものである。Ⅰでは「自己と他者の関係」をキーワードに、「自己と他者」、「女性の生き方」、「ポストコロニアリズム」などの問題意識が具体的なテキストにおいてどのように扱われているかを講義する。上記の文化的背景を反映している物であれば、従来のキャンノンとされる文学作品にこだわらず教材とするテキストを採用する。	
	近・現代イギリスの文化と文学Ⅱ	近・現代のイギリスおよびその文化圏における文学について学び、そこに描き出される様々な文化的事象の分析を通じて欧米社会に関する理解を深める。文学に描かれるテーマは、一見普遍的なものでも、背景となる時代の社会や精神によってその現れ方が異なり、その意味で文化的なものである。Ⅱでは「社会の現実と理想」をキーワードに、「地方と都市」「不安と恐怖」「ユートピアとディストピア」「現実とは何か」などの問題意識が具体的なテキストにおいてどのように扱われているかを講義する。上記の文化的背景を反映している物であれば、従来のキャンノンとされる文学作品にこだわらず教材とするテキストを採用する。	
	近・現代アメリカの文化と文学Ⅰ	この授業では、ホーソーン、ポー、ホイットマン、ディキンソン、トウェイン、キャザー、ステューヴンズ、スタインベック、サルンジャー、カポーティなど、19世紀から21世紀にかけてのアメリカの文学作品に表された主な文化的特徴や社会問題を考える。これらの代表的な小説・劇・詩を題材に、文学作品を理解するための分析法を講義する。ジェンダー、環境問題、イデオロギーの影響、家族像の変化などの社会問題も視野に入れる。学生にも口頭で、またレポートにおいて、英語で意見を述べる機会が多く与えられる。上記のような社会問題に関する語彙、多様な構文を使いこなす力、発表のスキル、分析力を養う。	
	近・現代アメリカの文化と文学Ⅱ	「近・現代のアメリカの文化と文学」を、政治・経済・社会制度、社会思想など多面的な視点から光を当ててアメリカの文化と文学作品の解釈を行う。はじめに概論的に「近・現代アメリカ文化・文学の流れ」を概説し、そのなかから特定の時代の特定の文学作品が何を読者に示そうとしているかを資料解説と作品精読によって明らかにする。 アメリカの19世紀のロマン主義文学(ホーソーン、メルヴィル、ソロー等)から20世紀のロスト・ジェネレーションの文学(ヘミングウェイ、フォークナー、ドス・パソス、フィッツジェラルド等)までを概説した後、この科目「近・現代アメリカの文化と文学Ⅱ」では、主として20世紀前半期の文化と文学に関して作品講義を行う。	

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文学部 国際教養学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 科 目  専 門 科 目  欧 米 言 語 文 化 科 目  英 語 学	英米の文化と文学	<p>ポストモダンの時代(1960年代以降現在まで)の英語圏の文化と文学を、1960年代以降の世界的なポストモダン思想状況・文化状況の概説からはじめて、英米を中心とした英語圏の文学作品にそれがどのように表現されているかを概説する。</p> <p>具体的には、まずアメリカとイギリスのポストモダン文化と文学の概説から始め、その影響を受けた他の英語圏の国々、たとえばインド、カナダ、南アフリカ、などのポストモダン文化と文学に考察範囲を広げる。授業では、英米を中心とした英語圏の最新の文学作品のテキスト精読を行い、討論によって受講生の理解を深める教育を行う。</p>	
	英語音声学	<p>英語コミュニケーション能力育成の基礎である音声面について、講義と演習を交えて必要な技能と知識を習得する。国際語としての英語には&lt;多様な英語&gt;が存在するが、英国と米国で使用されている標準的な音声とイントネーションに関する理論を学習すると同時に、みずから正しい発音を身につけるために実践的練習を行う。また、コミュニケーション能力を育成するために自立した学習者となるべく、音声面におけるさまざまな学習法の実験を体験する。</p> <p>併せて、母語においても明晰な言葉づかいをする姿勢を身につけ、自らのキャリア形成に役立てる。</p>	
	英語文法論	<p>現代英語の文法構造(助動詞や仮定法の用法など)に関する論文を読む。当該構造に対する理解を深めるとともに、1つのテーマについて、時代や地域、文体による差など、様々な観点から議論の展開が可能であり必要であることを学ぶ。</p> <p>また英語話者によって書かれ、活字になっている論文であっても、内容を無批判に受け入れるのではなく、これまでに培った英語に対する知識と理解を土台に、主体的に読み、著者の主張の妥当性を自ら判断する姿勢を身につける。</p> <p>英語による学術論文を丁寧に読んでいくことにより、英語の読解力と作文の力も養う。</p>	
	英語の歴史	<p>インド・ヨーロッパ祖語から分化した英語が、語形変化に依存する本来の屈折型タイプの言語から、語順や助動詞、前置詞などに依存するタイプの言語に変質していく実態や、それらの変化をもたらした要因を、英語をとりまく外面的な歴史との関わりをまじえて学ぶ。</p> <p>また英語が受けた様々な音韻上の変化を観察し、同時に正書法にも触れながら、乖離が激しいとされる現代英語の発音とスペリングの関係にも言及する。</p> <p>語彙についても、ローマ時代から現在までに起きた様々な形の言語接触により、現在の英語の語彙が形成された歴史を学ぶ。</p>	
	英語文化論	<p>英語圏の文化と英語の多様性を学ぶ。「英語」と「文化」を定義し、英語文化の起源と発達の様相を概観する。イギリスとアメリカの世界展開が英語に及ぼした影響や、イギリスとアイルランドの地域方言と地域文化、その他世界の様々な英語について取り上げる。英語を媒体とした国際社会における現代のポピュラー文化や、IT社会における英語の新しい様相にも触れる。</p> <p>英語と文化の諸相を示し、3・4年次のゼミでの英語をテーマにした研究の可能性の幅を広げる。</p>	

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文理学部 国際教養学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 科 目  専 門 科 目  欧 米 言 語 文 化 科 目	英語学	英語とジェンダー 話者や指示対象たる人物の性別が、言語表現にどう反映するかを学ぶ。男女の性役割や性別に基づく自己意識が言葉使いに具現化される実相を、英語と日本語との共通点と相違点に注目しながら、通時・共時的に観察する。 具体的には、一方の性に特有の話し言葉、発音や抑揚、場面による言葉の使い分けや語彙選択にみられる性差、性別について偏向した表現、統語法(特に代名詞の選択)や語形成(指示対象の性別を表す接辞など)にみられる性差を取り上げ、日常の表現に性差別の危険が潜んでいることを認識し、差別を避ける術を身につける。	
	英語コミュニケーション I	主に旅行で使われる英語表現を聴き取り受け答えをする能力を養う。トピック毎に分けられた単元に従ってレッスンを行う。リスニングのポイントとして、キーワードを掴むこと、スピーキングについては役に立つ日常表現を覚え、モデルとなる会話例を応用して会話する練習とする。人に頼らず英語でコミュニケーションができる力を養成する。受講生どうしや担当教員と、英語で基礎レベルの会話をするところから始めることで自信をつけ、海外旅行などで外国人と英語で会話を楽しむことを目標とする。	
	英語コミュニケーション II	「英語コミュニケーション I」に続き、さらに上級のコミュニケーション能力を養成する。将来仕事で英語を使うことを見据え、英語でのプレゼンテーションやディベート、スピーチのレッスンを行う。高い聴解力、情報処理力、相手の話したことを批評し、即応する表現力を身につけ、また円滑な異文化間コミュニケーションを図るために知っておくべき慣習、タブーなどの文化的な要素や、歴史や社会についても知見を広められるような材料を用いた授業を行う。	
	英語コミュニケーション	英語通訳の理論と実践 授業の到達目標を「話された、もしくは書かれた英文を高速で情報処理(速読・速聴)できること」及び「自分の考えを口頭もしくは文章で表現できること」とする。大量の英語を読む・聞くことから英語を発信するという技能訓練とあわせて、日本語・英語の背後にある「文化」への理解を深める。 「英語通訳入門」では通訳の基礎となるスキルや知識を身につけることに加え、特に日本語力と文化周辺のさまざまな背景知識も同時に習得する。学期末には、日本の文化、歴史、社会、経済などについて英語プレゼンテーションを実践でおこなう。	
	英語コミュニケーション	英語文章表現演習 I この授業は、練習問題を使って受講生のライティングのレベルを確認することから始め、受講生の英語力に応じた作文の指導を行う。受講者どうしで作文を評価し合うことで英語の表現力や文章構成力を向上させる。エッセイや学術論文の形で効果的に自分の考えを英語で表現する力をつける。	
	英語コミュニケーション	英語文章表現演習 II 英語のライティング能力を高めるレッスンを行う。受講者どうしで作文を評価し合うことで英語の表現力や文章構成力を向上させる。「英語文章表現演習 I」から発展した上級のコースとして、学術論文を書くことを視野に指導を行う。具体的には、トピックとタイトルの選択、要約の執筆、文を論理的に組み立て内容的に適切でつながりのある文章を作りあげ、繰り返しの練習を避けるために同義語を有効に使用する方法や、引用出典の明示の仕方、文献目録の作成の仕方などを学ぶ。卒業論文やあるいはさらに大学院レベルで英語論文を書く力を養成するのがこのコースの目的である。	



授 業 科 目 の 概 要			
(国際文学部 国際教養学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 科 目  専 門 科 目  欧 米 言 語 文 化 科 目  欧 米 文 化 論	英語コミュニケーション	<p>「翻訳の理論と実践」を演習形式で教授する。多様な文章の翻訳の技術を習得させるために、最初の5回の授業では、分かりやすく美しい文章にするための具体的に注意すべき翻訳上の重要な基本テクニックを参考書を利用して概説する。</p> <p>その後の10回の授業では、受講生の翻訳文の添削指導を行うことによって英日翻訳の技巧を実践的に教授する。評論文、小説文、詩文、ルポルタージュ文、伝記文等多様な文章を使って翻訳技法を指導する。</p>	
	欧米文化理論	<p>欧米の批評理論は、ポストモダン批評の形を取って、ポストコロニアリズム批評、新歴史主義批評、フェミニズム批評、メディア批評など多くの文化理論を生み出した。これは文学に留まらず、政治制度、経済システム、社会制度、文化制度など幅広い分野を理論的に分析する文化解釈の学問となった。</p> <p>この科目では、文化理論の全体像を概説した後、それぞれの文化批評理論に代表的な著書、論文が存在するので、それらを年度別にローテーションで精読することで理論の理解を深め、文化解釈の方法が理解できるように指導する。</p>	
	科学と文学	<p>西洋中世では科学はいまだ文学世界の中にあった。科学の誕生につながる自然や経験による観察は、伝統的な「自由七科」にもとづく知的営みのおかれていた。自由人が身につけるべきリベラル・アーツが手仕事に従事する民衆職人のメカニカル・アーツに勝る、との理解に拠る。こうした思考の枠組みに地殻変動が生じるのが、16-17世紀の頃であろう。</p> <p>16世紀後期ルネッサンスの科学は、占星術、錬金術に代表されるように、中世に片足を置く神秘主義的傾向の強い「科学」であった。そしてガリレオ・ガリレイ、ケプラー、ニュートンらによって近代科学の原理的方法が樹立される、いわゆる「17世紀科学革命」を迎える。</p> <p>本授業では、科学と文学の区分とその克服を歴史的に通覧し、いわゆる文理の近代的パラダイムが立ち上がる16-17世紀に焦点を当てながら、科学に関わるものの見方（とくに当時の医学・医療観）が文学テキストにどのように表象されているかを探る。文理統合という新しい知のありようを、科学と文学の体系化の歴史から学んでみたい。</p>	
	欧米文学と女性表象	<p>主として英語圏で制作された絵画や文学作品を対象に、女性表象がどのように形成され、変容してきたかを通史的に考察し、理想の女性像が折々の社会・文化的、政治的要因により条件づけられてきた様子を観察する。一つのアプローチとして、新・旧約聖書で描かれるイヴとマリア図像を取り上げ、その受容ぶりを特に15世紀と19世紀の文学作品に登場する女性像と関係づけながら考察する。</p> <p>この授業を通して、受講生は現代を生きる女性と自身の姿を相対化することになる。</p>	
欧米文学と映像メディア	<p>この授業では文学と映像メディアを考察し、特に映画を「読む」、すなわち、娯楽として受動的に楽しむだけでなく、専門的に分析するための技術を獲得することを目的とする。映画の脚本や原作だけでなく、カメラワーク、視覚的象徴、編集、音響効果、音楽、特殊効果、演技法なども考慮する。21世紀のメディアに溢れる社会問題である、ジェンダー、テクノロジーの発達、イデオロギーの影響、家族像の変化などについての理解も深める。映画論・文芸論の鍵となる概念を学ぶだけでなく、課題を通じて英語できちんと話し、書く力も身に着ける。</p>		

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文学部 国際教養学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 科 目  専 門 科 目  欧 米 言 語 文 化 科 目  欧 米 言 語 文 化 文 献 講 読	英米言語文化文献講読Ⅰ	本授業は、同時に開講される授業科目「中世イギリスの文化と文学(講義)」と関連させながら授業を展開する。演習として授業のねらいは、中英語及び初期近代英語で書かれた作品を正しく読み取り、かつ作品世界が内在する社会的・文化的問題を的確に探りあて、解釈する力を養うことであるが、講義において話題となる、著者と庇護者及び著者と読者の関係性、著作権、テキスト論(本文、パラテキスト、コンテキスト)、読書のあり方(音読と黙読)、などの問題を実際のテキスト読解作業を通して検証する。	
	英米言語文化文献講読Ⅱ	英語圏の文化・社会・文学を理解するためには、その言語である英語を正確に理解することが必須である。この授業では、教材となる英語テキストを選び、それを授業内で講読する。テキストの内容を理解すると同時に、英語の精読能力も鍛える。テキストはイギリス、またはかつてその文化圏にあった地域(アイルランド、オーストラリア、インドなど)のものを使用する。授業は学生の発表が中心となり、クラスでの討論も交える。また教授者が文化的知識を補足する。	
	英米言語文化文献講読Ⅲ	古英語を学びながら、アングロ・サクソン時代に書かれた説教散文や聖人伝、年代記などを読む。 現代英語に対する知識や理解をベースに、古英語を学び、テキストを精読することにより、初期の英語から、どのような要因により、どのような変化を経て、現代の様々な文法構造等が生み出されるに至ったかを具体的に観察していく。変質した部分と普遍的な部分とを知ることにより、現代英語の本質をさらに深く理解する。同時にアングロ・サクソン時代の文献を読むことにより、アングロ・サクソンの社会や文化に対する理解も深める。	
	英米言語文化文献講読Ⅳ	この授業では、19世紀から21世紀にかけてのアメリカの文学作品を講読して、その文化的特徴や社会問題を考える。これらの代表的な小説・劇・詩を題材にテキストの分析を実践することで、文学作品を理解する。キャラクター、設定、文体、シンボル、テーマなどの特徴が実例で検討される。また、ジェンダー研究、神話批評、文化批評、ポストコロニアル理論などの文芸批評や理論の初歩にも触れる。図書館やインターネットでの資料検索についての指導、論理的に説得力を持ってそれらを活用する方法も学ぶ。ジェンダー、環境問題、イデオロギーの影響、家族像の変化などの社会問題も視野に入れ、グローバル社会の市民となるための教養を身につける。	
	ドイツ言語文化文献講読Ⅰ	ドイツ近現代の哲学を中心に、広く哲学史上の文献を講読することにより、論理的で抽象的な文献の読解能力および哲学的思考能力を向上させることを目標とする。 そのために、文献が置かれた言語文化的なコンテキストを把握したうえで、現代の問題状況から見た文献の思想圏の意義と限界を見極める。 過去の哲学文献を批判的に読解することをとおして、学生自身の思索と討論を触発することが重要であり、毎回の授業は読解と討論と総括の三部構成で展開される。	
	ドイツ言語文化文献講読Ⅱ	この演習では、現在のドイツにおいて論じられている教育問題に関するドイツ語文献を取り上げて、その内容を正確に理解することを目標とする。 正確な理解ができるためには、ドイツ語能力のみならず、論じられている教育問題の背景に関する知識も不可欠であるので、その点にも配慮して演習を進める。 さらに、文献の読解から学生自身がみずから問題点を発見することにつながるような討論を行う。	

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文学部 国際教養学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 目  専 門 科 目  欧 米 言 語 文 化 科 目  演 習	フランス言語文化文献講読 I	欧米とその文化圏の歴史・社会を理解するためにテキストを講読して理解を深める授業。この授業ではフランスまたはその言語文化圏(カナダ・アルジェリア・ヴェトナムなど)の文化・歴史・社会を対象とする。授業では指定した文献を読み、その内容について学生がまとめて発表し、その後クラスでの討論に移る。教授者は必要な知識や情報を補足し、討論の司会をする。文献は必ずしもフランス語ではなく、日本語のものを中心に使用する予定だが、受講生はフランス語を既に履修していることが望ましい。	隔年開講
	フランス言語文化文献講読 II	欧米とその文化圏の歴史・社会を理解するためにテキストを講読して理解を深める授業。この授業ではフランスまたはその言語文化圏(カナダ・アルジェリア・ヴェトナムなど)の文化・歴史・社会を対象とする。授業では指定した文献を読み、その内容について学生がまとめて発表し、その後クラスでの討論に移る。教授者は必要な知識や情報を補足する。授業後期では学生の中から討論の司会者も指名する。文献はフランス語のものを中心に使用するので、受講生はフランス語を既に履修している必要がある。	隔年開講
	欧米言語文化演習 I	<p>(04 馬場 弘利)</p> <p>この科目は卒業論文につながる「欧米言語文化演習 I」であるから基礎的演習となる。欧米の言語文化、つまり文学、語学、思想、教育、歴史等の中から受講者が卒論テーマにしようとするものを選択させ演習の形式で授業を行う。テキスト解釈、文献・資料・研究書の解説、論文作成法までを指導する。担当者(馬場)の場合は、アメリカのポストモダン文化・文学についての演習となる。</p> <p>英語で卒論を書く学生には、英語による論文構成法をMLAの規則に従って教授する。日本語で卒論を書く学生も基本的にはMLAの規則に従うように指導する。このような具体的な論文作成規則の教育とともに、「序論・テーマ設定と解釈・結論」などのような論文内容の論理的な展開の仕方も細かく指導する。</p> <p>(06 Pugh, Charles Scott)</p> <p>セミナー形式で、19世紀以降のアメリカ文学の代表的作品、または第二次大戦後の演劇や映画を集中して研究する。たとえばホーソーン、ポー、スタインベックの短篇や、ホイットマン、ディキンソン、スティーヴンズの詩、ヒッチコックやカザンの映画が題材として考えられる。</p> <p>学生は授業で英語での討論に参加し、発表する。また、卒論に向けて研究・分析・英作文のスキルを磨く。アメリカ文学や映画の研究を通じて文化的理解を深めることのみならず、グローバル世界でのキャリアに欠かせない、英語を使つての分析力と説得力を強化することを目的とする。</p> <p>(08 向井 剛)</p> <p>卒業論文につながる言語文化演習である。本演習では、言語研究の一領域として、ことばの共時的研究と通時的研究の2つの研究方法とそれについて習得する。そのいずれにおいても、主要な先行研究を紹介した後、社会言語学の方法とともにコーパス言語学のツールと知見を紹介する。導入の後、英語で卒論を書く学生には、調査・分析結果をMLAの書式に従って執筆するための指導を行う。日本語で卒論を書く学生も基本的にはMLAの規則に従うように指導する。リサーチ・プロポーザルの作り方とともに、序論、テーマ、結論などのような論文内容の展開の仕方も細かく指導する。</p>	

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文理学部 国際教養学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科 科目	欧米言語文化演習 I	<p>(11 Warren, Nicholas William) この授業では、イギリスの文化と言語について学ぶ。文化を語る際のいくつかのキーワード(「ステレオタイプ」等)を確認した後、外国人の視点で日本を再考することを試みる。さらにイギリスの文化と言語に視点を移し、個々の事例を挙げながらイギリスの文化を考える。イギリス文化の歴史的背景にも触れるが、この授業の主たるテーマは、現代イギリスの文化と言語を知ることである。 異文化間、また異なる言語間の差異、特にイギリスにおけるそれに関する学生の意識を高める。特にイギリス社会での女性の役割とその言語への影響に注目する。</p> <p>(14 森 邦昭) この演習では、現在のドイツにおいて論じられている教育問題に関するドイツ語文献もしくは日本語文献を取り上げて、その内容を正確に理解することを目標とする。 正確な理解ができるためには、ドイツ語もしくは日本語の読解力のみならず、論じられている教育問題の背景に関する知識も不可欠であるので、その点にも配慮して演習を進める。 さらに、文献の読解から学生自身がみずからの問題点を発見して、それを研究していくことにつながるような討論を行う。</p> <p>(15 望月 俊孝) 哲学的な視点から、自我、精神、自然、身体、言語、文化等、広めの事象に関連する幅広い分野の文献を多数読破して、事柄の意味を問い直し、新たに理解し、考察し、討論する。その地道な作業を積み重ねることで、学生の批判的で総合的な思考力を養うことを目標とする。 文献探索の技能を習得したうえで、学生自身が各自の関心に基づいて研究テーマを設定し、多数の文献を収集する。そして主要文献を選んで精読、批評、討議する。 4年次生の卒業研究草稿も適宜紹介し、批評、討論して、受講生の卒業研究に向けての動機づけをはかる。</p> <p>(20 Holst, Sven-Ohle) ヨーロッパ人の社会文化生活、特にレジャー生活である観光や祭り、を簡単なドイツ語やフランス語の文献も参考にしながら、事柄の意味を問い直し、新たに理解し、考察し、討論する。その作業を積み重ねることで、学生の総合的な思考力を養うことを目標とする。 文献探索の技能を習得したうえで、学生が各自の関心に基づいて研究テーマを設定し、多数の文献を収集する。そして主要な文献を選んで精読、批評、討議することをおして卒業研究に向けての動機づけをはかる。</p> <p>(23 宮川 美佐子) セミナー形式で、19世紀から現代にかけてのイギリス、またはかつてその文化圏にあった地域(アイルランド、オーストラリア、インドなど)の小説や論説を読む。学生の発表が中心となり、担当学生の発表後はクラス討論する。テキストの研究を通じてそこに描き出された社会や文化について理解を深めることのみならず、グローバル世界でのキャリアに欠かせない、正確な英語の理解、英語による論理的思考能力、英語運用能力を強化することを目的とする。</p>	
専 門 科 目	欧 米 言 語 文 化 科 目	演 習	

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文学部 国際教養学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 科 目	専 門 科 目	欧 米 言 語 文 化 科 目	演 習
	欧米言語文化演習 I	<p>(26 村長 祥子) 英文法、英語史の分野で卒業論文執筆を希望する学生を対象とする。 授業では、1つの共通のテーマ(英語の格の用法、仮定法の用法など)を設定し、関連文献を主体的・批判的に読むことから始める。複数の先行研究の論点や主張の相違を理解し、情報を取捨選択、再構成して自分の言葉で提示する力をつける。 先行研究での議論を土台に、各自の関心に応じてさらにテーマを絞り、特定の語法について、歴史や地域差、文体による差など、どのような観点からどのような議論の展開が可能または必要であるかを自ら考え、課題に対して取り組んでいく。</p> <p>(31 御園 敬介) 欧米文化圏において生み出された文化と文学について理解を深めることを目的としつつ、近現代フランス文学・思想の中から幾つかの短い作品(翻訳でよい)を選んで輪読する。ただし、受講生の関心に応じてフランス以外の国の言語文化に関わる文献を扱うこともある。ゼミは参加者の積極的な発言により有意義な時間となるものであるから、担当者にはレジュメを、それ以外の学生には該当部分に関する質問点を準備してもらい、教授者が司会を務めながら作品の思想的・文学的背景を随時解説する形式で進められる。</p>	
	欧米言語文化演習 II	<p>(04 馬場 弘利) この科目は卒業論文につながる「欧米言語文化演習 II」であるので、「欧米言語文化演習 I」より高度な演習となる。欧米の言語文化、つまり文学、語学、思想、教育、歴史等のなかから受講者が卒論テーマの候補と考えるものを選択させ演習形式で授業を行う。テキスト解釈、文献・資料・研究書の解説、論文作成法までを指導する。担当者(馬場)の場合は、アメリカのポストモダン文化・文学についての演習となる。英語で卒論を書く学生には、英語による論文構成法をMLAの規則に従って教授する。日本語で卒論を書く学生も基本的にはMLAの規則に従うように指導する。このような具体的な論文作成規則とともに、「序論・テーマ設定と解釈・結論」などのような論文内容の論理的展開の仕方も細かく指導する。</p> <p>(06 Pugh, Charles Scott) Iより高度なセミナー形式で、19世紀以降のアメリカ文学の代表的作品、または第二次大戦後の演劇や映画を集中して研究する。教授者のアドバイスを受けながら、可能な範囲で、受講生は卒論に直接つながりうる知識やスキルを伸ばすことを目的として、題材となる作品を選ぶことができる。各受講生は英語で発表し、その後全員での討論に移る。資料収集のためのインターネットや図書館の適切な利用、口頭発表、正しい書式で書かれた英文レポート、協働作業に伴う社会性がいずれも重要となる。</p> <p>(08 向井 剛) 卒業論文につながる言語文化演習である。本演習では、言語文化研究の今一つの領域として、作品受容論のテーマを掲げて、イギリス中世及び近代初期の作品が後世どのように読み取られ、受容されたかを、社会的・文化的観点からテキスト異同の分析や語り直しの検討を通して考察する。 導入の後、英語で卒論を書く学生には、調査・分析結果をMLAの書式に従って執筆するための指導を行う。日本語で卒論を書く学生も基本的にはMLAの規則に従うように指導する。リサーチ・プロポーザルの作り方とともに、序論、テーマ、結論などのような論文内容の展開の仕方も細かく指導することにより、4年次の卒業論文作成につなげる。</p>	

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文学部 国際教養学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 科 目	欧米言語文化演習Ⅱ	<p>(11 Warren, Nicholas William) 17世紀初頭から現代に至るまでの英語辞書の編纂の歴史を、最初期のものからジョンソン、ウェブスター、そして特にオックスフォード英語辞典に重点をおきながら概観し、さらに今後辞書が向かうであろう将来の方向性について議論する。この授業の大きな特徴は、辞書編纂の理論や専門用語、定義を学んだうえで、理論を実践に移すことである。受講生は自らが選んだトピックについて、小辞典を編纂する作業を行い、辞書編纂の実際を体験する。</p> <p>(14 森 邦昭) この演習では、現在のドイツにおいて論じられている教育問題に関するドイツ語文献もしくは日本語文献を取り上げて、その内容を正確に理解することを目標とする。 正確な理解ができるためには、ドイツ語もしくは日本語の読解力のみならず、論じられている教育問題の背景に関する知識も不可欠であるので、その点にも配慮して演習を進める。 さらに、文献の読解から学生自身がみずからの問題点を発見して、それを研究して発表することにつながるような討論を行う。</p> <p>(15 望月 俊孝) 卒業研究として打ちこむことのできる、明確なテーマ設定を目標に、演習Ⅰよりも限定された事象の関連文献を収集させ、精読、批評、討議の作業を継続する。 主要文献の精読や、関連文献のレビュー以外にも、学生自身の論考の文章化をうながして、これをめぐる批評、討議の作業も徐々に演習に取り入れてゆく。 提出期限の近づく4年次生の卒業研究草稿も紹介し、批評、討論することで、受講生の卒業研究に向けての動機づけを強化する。</p> <p>(20 Holst, Sven-Ohle) 学生各自の関心に基づいてヨーロッパ人の社会文化生活を簡単なドイツ語やフランス語の文献も参考にし、日本の状況を比較しながら、事柄の意味を問い直し、新たに理解し、考察し、討論する。その作業を積み重ねることで、学生の総合的な思考力を養うことを目標とする。 文献探索の技能を習得したうえで、学生が各自の関心に基づいて研究テーマを設定し、多数の文献を収集する。そして主要文献を選んで精読、批評、討議することをとおして卒業研究に向けての動機づけをはかる。</p> <p>(23 宮川 美佐子) セミナー形式で、19世紀から現代にかけてのイギリス、またはかつてその文化圏にあった地域(アイルランド、オーストラリア、インドなど)の小説や論説を読む。学生の発表が中心となり、担当学生の発表後はクラス討論する。また、欧米言語文化演習Ⅰより学生の発表量が増えるほか、さらに専門度を深め、卒論に向けて研究・分析・作文のスキルを磨く。テキストの研究を通じてそこに描き出された社会や文化について理解を深めることのみならず、グローバル世界でのキャリアに欠かせない、正確な英語の理解、英語による論理的思考能力、英語運用能力を強化することを目的とする。</p>	
専 門 科 目	演習		
欧 米 言 語 文 化 科 目			

授 業 科 目 の 概 要						
(国際文学部 国際教養学科)						
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考			
学 科 科 目	専 門 科 目	欧 米 言 語 文 化 科 目	演 習	<p>欧米言語文化演習Ⅱ</p> <p>(26 村長 祥子) 「欧米言語文化演習Ⅰ」に続き、英文法、英語史の分野で卒論執筆を希望する学生を対象とする。「演習Ⅰ」同様、共通のテーマを設定し、先行研究の論点や主張の相違を理解し、情報を取捨選択、再構成して自分の言葉で提示させる。その上でさらにテーマを絞り、どのようなアプローチが可能または必要であるかを自ら考えさせる。 電子コーパスなどの言語資料やテキストからデータを収集し分析する方法を具体的に実践し、データをどう解釈しどのような結論を導き出せるかを受講生どうしで議論する。英語論文を書くうえでの技術的な指導も行う。</p> <p>(31 御園 敬介) 欧米文化圏の文化と文学について理解を深めることを目的とする。近現代フランス文学・思想の中から幾つかの短い作品を選んで輪読する。受講生のフランス語能力にもよるが、短いフランス語テキストを扱うことを予定している。また、要望があればフランス以外の国の言語文化に関わる文献を扱うこともある。担当者にはレジュメを、それ以外の学生には該当部分に関する質問点を準備してもらい、教授者が作品の思想・文学的背景を随時解説する形で進められる。テキストとその背景を分析する手法を身に付けることも目標の一つとなる。</p>		
				東アジア地域関係論	<p>現在、東アジア（*東南アジア諸国および中国、韓国、日本、台湾、北朝鮮からなる地域）では、民間レベルでの経済関係の緊密化に加えて、金融危機や疾病などの国境を越えた問題への対処、および経済統合の更なる促進のための国家間協力が進展している。他方で、同地域は、台湾問題や政治体制の多様性、急速な社会変化に伴う国内政治の不安定化といった要素も抱えている。このようなダイナミクスを理解するために、本講義では、(1) 東アジアの国家に影響を与えた国際環境、(2) 国家間協力の実態、(3) 国家を超えた人や企業のつながりについて、学ぶ。</p>	
				東アジアの歴史	<p>東アジアは、歴史的に文化交流が活発であり、かつ経済的にも競争と協調関係にあるものの、一方で領土権・歴史認識問題などで政治的にも敏感な問題を抱えている。したがって、日中韓の緊密な連携を模索するためには多角的な研究とアプローチが必要であり、アジアのゲートウェーの地にある福岡女子大学は先端研究機関としてその解決に向けた責務を果たすべき立場にある。それゆえに東アジアの歴史を論じながら、文理を越境する東アジアに関する幅広い視野を持ち、環境、エネルギー、貧困、医療、災害、都市問題、水問題のような、東アジア地域に山積する地域共通課題を適切に認識し、それに対する対応策を構築、評価できるように、努力する。</p>	
	東 ア ジ ア	東 ア ジ ア		女性たちとアジア	<p>アジアにおける女性のあり様は多様であるが、グローバリゼーションの加速により今後、さらなる変化が起きると考えられる。ここではジェンダーの視点から、アジア地域(中国、韓国、インド、インドネシア、フィリピン、タイなど)における女性の具体的な状況を紹介し、私たち自身の生活をその中に位置づけることを目的とする。 授業形態は主に講義形式であるが、適宜グループ討論も取り入れる。可能な限り視聴覚教材を用い、理解の助けとしたい。毎回質問・感想票を回収し、理解度を把握し、次回授業の初めに質問に対する回答、補足を行なうことにより、理解を深める。</p>	

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文学部 国際教養学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 科 目  専 門 科 目  東 ア ジ ア 地 域 研 究 科 目  東 ア ジ ア	アジアの現代文化	本講義は、アジアにおける近現代の美術に現れた「文化的」な特質を受講生と共に考察するところにその目的がある。これらの美術は、西洋の模倣でもなく、伝統の繰り返しでもない、変化しつづけるアジアの「いま」を生きる作者の心的な描写である。従来の「美術」の枠にとらわれない、アジア美術の独自性や固有の美意識を示した作品を取り上げながら、新たなアジア文化の価値とその意義を紐解いていくことにする。具体的な授業計画としては、①アジア美術の近代から現代の潮流、②アジアの民俗芸術および大衆芸術、③現代における伝統美術および工芸などである。	
	東アジアの法と社会	本科目では、東アジア諸国の法について、各国の社会でいかなる役割や機能を果たしているのかを明らかにする。単に法制度だけではなく、人々の生活にある法意識や法感覚まで分け入り、東アジアの生活実態における法のあり方を学習する。「法律」という切り口で東アジアの社会に接近しようとするのである。 具体的な授業計画としては、①現代中国法と社会、②現代台湾法と社会、③現代北朝鮮法と社会、④現代韓国法と社会などである。	
	東アジアの政治と社会	東アジア（*東南アジア諸国および中国、韓国、日本、台湾、北朝鮮からなる地域）の各国について、それぞれの国が（1）どのような国際環境や社会的条件の中で、（2）どのような政治の仕組みを作ったのか、そして、（3）経済成長や政治の安定化の実現にどのように成功/失敗したのかを、体系的に学ぶ。これを通じて、日本とその他の東アジア地域との関わり方について、主体的に考える能力を構築することを目的としている。	
	東アジア経済論	近年、アジアは世界経済の成長センターと目され、その成長潜在力から21世紀はアジアの時代とまで言われるようになりました。この授業では、東アジアの経済を取り上げ、東アジア諸国の経済状況、今後の展望と課題などについて講義します。アジアに対する関心を高め、国際的な理解を深められることを期待します。 新聞やTVニュースで取り上げられた東アジアの経済問題と結び付けて、分かりやすく講義することを心がけます。東アジアの経済事情だけでなく、各国の風習、文化なども必要に応じて紹介し、映像などを適宜取り入れます。	
	東アジアの環境	アジア地域では、化石燃料の燃焼、家庭での木炭燃焼、森林火災などの様々な発生源から、汚染物質が大量に大気中に放出され、酸性雨、微小粒子や光化学オゾンの増加などの大気環境問題を引き起こしている。中でも中国をはじめとするアジアの発展途上国では今後も著しい経済成長が予想され、問題が一層深刻化して、健康や食糧生産、生態系に影響を及ぼすことが懸念される。特に東アジアにおいては、中国などから大量の汚染物質が流れ込むことにより、越境大気汚染が問題となっている。本講義では、中国を始めとする東アジアにおける大気汚染の現状と将来、並びに大陸からの酸性雨や光化学オキシダント、黄砂等の越境汚染について学習する。 また、アジアにおける環境問題等が発生する背景となったアジアの文化あるいは社会構造等については、国際教養学科における専門科目（東アジア地域研究科目・国際関係科目等）を環境科学科の専門科目として履修させることにより、その教育を行う。	



授 業 科 目 の 概 要					
(国際文学部 国際教養学科)					
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考		
学 科 科 目	専 門 科 目	東 ア ジ ア 地 域 研 究 科 目	中国		
			中国近現代史	本講義は、アヘン戦争から始まる中国近現代史について、近代の始まりから、辛亥革命などを経て中華人民共和国成立までの百年に及ぶ戦争と動乱の歴史と、新中国誕生以来1970年代末の改革開放に至るまでの大躍進、文化大革命などの政治により社会的混乱が続いた激動の時代および中国に著しい経済発展と社会変貌をもたらした改革開放という新しい時代の歴史について学ぶ。代表的な事件や出来事を通じてその歴史の流れを概観し、生きた中国近現代歴史について考察する。	
			現代中国の文化	アヘン戦争後中国はいかに数千年の伝統がある老大国の封建文化から脱皮したのか。西洋に倣い、富国強兵の中でいかに自国の文化を保持できたのか。現代中国の文化と伝統文化との関係はどんなものか。五四以後の中国の社会的背景を読むことで、異文化としての中国文化を理解し、その特色を考える。中国現代(五四時代という文化の大転換期から)文学の流れを俯瞰しつつ、各時期における代表的な作家およびその作品を読み解くことで、中国現代社会の進化および文化の変形していく過程を理解することに主眼を置く。	
			中国社会学論	本講義は、社会科学的アプローチにより経済成長が著しく、社会変動が激しい現代中国社会に接近し、さまざまな分野における現実の問題と課題について考察する。そのために、現代中国社会の基本知識と専門知識を学ぶことによって、中国社会への理解を深めつつ、受講者の国際的な視野を広げ、柔軟な思考力と判断力を育てる。とくに、改革・開放以降の中国社会の変貌に焦点を当てる。	
			中国経済論	中国では、1978年に経済改革と対外開放政策が実施され、著しい経済発展を遂げ、市場経済化が進展しつつあります。中国の経済はどのように発展してきたのでしょうか、中国の現状はどのようになっているのでしょうか、今後の中国経済の行方はどうなるのでしょうか。この授業では、中国についての一般的な基礎知識から始め、現在の中国経済のしくみ、中国経済の問題、国際社会の中での中国経済、日本経済とのかかわりなどについて、受講者との議論を交えながら、分かりやすく講義します。	
			韓国		
朝鮮近現代史	日韓の歴史認識において主要テーマとなる韓国併合の成立過程と、1945年まで続く日本の朝鮮統治を、国際関係、琉球処分との比較、天皇制との関係、外地法の位置づけを中心に講義していく。 さらに、第二次大戦終結後の在日朝鮮人の国籍問題、1950年に始まる朝鮮戦争とその後の韓国・北朝鮮の分断についても言及する。この講義を通して、固定観念ではなく史料に基づいた歴史認識を身につけるとともに、日韓の近現代史に自らの「問い」を投げかけられるようになることを目標とする。				
現代韓国の文化	韓国の言語・文化・地域情報などのアプローチから、世界の最貧国を脱してサムソン電子や浦項製鉄など世界最先端の技術を生み出す産業国家へと成長した韓国の原因を解明すると共に、その社会構造を把握する。加えて、韓国文化事項の暗記的理解ではなく、 1, その地域の理解に取り組むなかでみずからの知識や体験を相対化し、オリジナルな思考を育む 2, 東アジアにおける共同体の重要性を理解し、東アジア秩序に関するヴィジョンを共有する ように、本講義を通して努力する。				

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文理学部 国際教養学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 科 目  専 門 科 目  東 ア ジ ア 地 域 研 究 科 目  中 国 語 ・ 韓 国 語	韓国社会論	本講義では、韓国社会の基底的な集団である「家族」の法律問題について講究する。とくに、家族における「姓」の機能に焦点を当てながら、儒教的な家族が韓国社会でどのように変容しているのかを明らかにする。家族の「かたち」から韓国社会の特徴や問題点を受講者に捉えさせる。さらに、父系血統中心の家族のあり方からジェンダー問題を探究しつつ、日韓における社会の比較を試みる。 具体的な授業計画としては、①「氏姓」の違いからみた日韓の比較、②現代家族法と伝統性、③多様な家族のかたち、④日韓での家族問題の共有などである。	
	韓国経済論	東アジアにおいて韓国は、日本に続き、急速な経済成長を実現した国として注目されている。また、日本にとっては隣国、九州にとっては隣接する地域として、韓国経済の影響は大きい。本講義では、韓国経済成長の条件を醸成した1980年代以前の成長プロセス準備過程を概観し、その後の経済成長への影響について解説する。加えて、グローバル化の1990年代以降における、韓国経済の日米経済へのキャッチアップ過程に注目し、その原動力となった韓国の技術イノベーションや、サムスン等のグローバル企業の活動に触れる。	
	時事中国語講読	21世紀世界的に大ブームの中国語に慣れ親しみ、それを学ぶ楽しさを見出してほしい。 日本人の漢字教養を十分に生かし、生きている現代中国語に触れ、日常社会に使われる中国語を学習し、また社会問題などを中国語で読むことができる能力を身につけたい。 この目標をもとに、特に次の点に重点を置く。 (1) 中国語の基本を固めつつ、政治、経済、法律など幅広い中国語の学習 (2) とくにリーディングの能力を高めるためのテクニックの学習 (3) 時事中国語の文化的背景の理解	
	時事韓国語講読	本授業は、社会学、政治学、法学など、社会科学に関する韓国語文献を読解する。社会科学特有の概念や表現の仕方を習熟して、現地の論文や専門書を読むことができるスキルを身につける。さらに、原文の講読を通して、実際の韓国社会の問題状況を発見する。「東アジア地域研究演習ⅠⅡ」および「卒業研究」で韓国の一次資料をテキストとして学習できる前提能力を養う。 具体的な授業計画としては、①翻訳方法の概説 ①韓国語テキストの提示と選定理由の説明、②各分担の翻訳発表とその内容把握などである。	
	中国語演習Ⅰ	「中国語ⅠからⅣ」の単位を取得し、中国語の力をさらに伸ばしたい学生を対象とする。 この授業では、聴力、会話、読み、書きの四つの面において、中国語の表現力の向上を目的とする。授業では、一部可視的な教材を導入することでオリジナル中国語に触れる機会が多くなる。また、中国文化に対する理解を深めるために、インターネットを活用して中国のニュース報道、名所旧跡、風俗習慣を紹介する。中国のヒット映画の鑑賞、中国語の歌の勉強および漢詩朗読の特別演習も予定している。	

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文学部 国際教養学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 科 目	中 国 語 ・ 韓 国 語	中国語演習Ⅱ	「中国語演習Ⅰ」に引き続き、中国語の力をさらに伸ばしたい学生を対象とする。 この授業では、聴力、会話、読み、書きの四つの面において、中国語の表現力の向上を目的とする。授業では、一部可視的な教材を導入することでオリジナル中国語に触れる機会が多くなる。また、中国文化に対する理解を深めるために、インターネットを活用して中国のニュース報道、名所旧跡、風俗習慣を紹介する。中国のヒット映画の鑑賞、中国語の歌の勉強および漢詩朗読の特別演習も予定している。
		韓国語演習Ⅰ	「韓国語Ⅴ、Ⅵ」に引き続き、様々なトピックにもとづいた会話文を中心にして実践力を身につけていくことを目的とする。聞く、話す、読む、書く能力をバランスよく身につけていくと同時に、会話のトピックを通じて韓国文化の素養も身につけていく。
		韓国語演習Ⅱ	「韓国語演習Ⅰ」に引き続き、聴く、話す、読む、書くという方面から学習を展開していき、韓国の言語文化知識を向上させることを目指す。日韓文化の共通点と違いを理解し、その中での一つをテーマとして発表する。韓国の言語と文化の様々なトピックにおける理解をしながら、中級レベルの言語能力と文化の理解力を培うことを目的とする。
	東 ア ジ ア 地 域 研 究 科 目	東アジア地域研究演習Ⅰ	(12 尹 豪) 中国、韓国を中心とする東アジア地域の社会、経済、文化、政治などについて総合的に学ぶ。学生の課題選定による研究発表と全員で行なうディスカッションを通じて、東アジア地域の文化、社会、経済への理解を深め、国際的な視点に立つ柔軟な思考力、総合的な判断力を培う。コミュニケーション能力を高め、グローバル化と時代の変化への対応能力を養成し、国際化時代の流れの中で東アジアで活躍できる人材を目指す。  (13 武 継平) 本演習では、中日両国の言語比較対照と現代文学を中心に特定のテーマについて学ぶ。テーマに関する分野は中国や日本における言語、文学、歴史、社会、文化など多方面にわたり、自分の関心のあり、卒業論文につなげるようなテーマを選定し、研究を進める。先生の指導を受けながら、各自選定の研究テーマについて調査、分析を行い、同じ授業の仲間と議論して授業計画により発表を行なう。 具体的な計画としては、①研究方法の概説、②文献検索および収集の方法、③発表と討論などである。  (16 岡 克彦) 本演習では、韓国・北朝鮮の社会と法制度に関するテーマで卒業論文を作成するために、論文作成の技術、発表、討論の仕方などを学ぶ。まず受講生に関心のあるテーマについての日本語の文献を解説することで、地域研究の基本知識と日本における同地域の学問状況を把握する。と共に、レジュメの作成、発表および討論の過程を通して、論文を書くための諸技術を習得する。 具体的な授業計画としては、①研究方法の概説、②文献検索および収集の方法、③発表と討論などである。

授 業 科 目 の 概 要					
(国際文学部 国際教養学科)					
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考		
学 科 科 目	専 門 科 目	東 ア ジ ア 地 域 研 究 科 目	演 習		
				東アジア地域研究演習 I	<p>(19 宮崎 聖子)</p> <p>ここでは日本における地域社会と家族、個人のあり方を中心に、農村社会学、地域社会学、家族社会学、民俗学等にかかわる古典的、基本的な文献を講読する。それを通じて、国際社会の中の日本や私たち自身を分析的に洞察する手法を身につける。</p> <p>授業形態は主に演習形式で、学生が文献を読んで報告し、全員で討論を行なう。それにより効果的なプレゼンテーションを身につけ、また学際的な研究方法に触れる機会とする。</p> <p>(32 金 希京)</p> <p>東アジア地域研究演習 I では、小人数で特定の研究テーマについて学ぶ。テーマに関する分野は中国や韓国における言語、文学、歴史、社会、文化など様々で、自分の関心のある分野を専門としている先生の指導を受けながら、特定の研究テーマについて調査、分析を行い、同じ授業の仲間と討論する。</p> <p>(42 鈴木 絢女)</p> <p>東アジア地域研究演習 I では、小人数で特定の研究テーマについて学ぶ。テーマに関する分野は中国や韓国における言語、文学、歴史、社会、文化など様々で、自分の関心のある分野を専門としている先生の指導を受けながら、特定の研究テーマについて調査、分析を行い、同じ授業の仲間と討論する。</p>
			東アジア地域研究演習 II	<p>(12 尹 豪)</p> <p>中国、韓国を中心とする東アジアの社会、経済、文化、政治への理解をさらに深めることにより、東アジア研究の専門性を養成する。学生の自主選定による研究課題の発表と討論、質疑応答を通じて、研究発表およびプレゼンテーション能力の向上を図る。東アジア地域の多様性を理解し、「課題発見・課題解決」型の研究能力を身に付け、主体的実践力を向上させ、東アジア地域での活躍を目指す。</p> <p>(13 武 継平)</p> <p>本演習は、小人数で中国と日本の原典の講読を通して中日両国を中心とする東アジアの社会、政治および文化一般への理解を深め、学際的な研究方法に触れつつ、東アジア研究の独特な観察力と分析力を養成することを目指す。卒業論文における研究課題の設定により具体的な方向性やヒントを獲得することを目標とする。授業形態は演習形式である。学生が文献を読んで報告発表し、全員でディスカッションを行なう。</p> <p>具体的な計画としては、魯迅、郭沫若、佐藤春夫、芥川龍之介、太宰治などの文学原典を読む。</p> <p>(16 岡 克彦)</p> <p>本演習は、「同演習 I」および「時事韓国語講読」の授業を踏まえて、受講生の関心のあるテーマについて現地韓国の一次資料、韓国語の文献を使って、先行研究を批判的に解説し、調べた内容を適切に発表する方法を身につける。「同演習 I」で培った論文作成の技術をさらに洗練させると同時に、卒業論文における研究課題の設定により具体的な方向性やヒントを獲得することを目標とする。</p> <p>具体的な授業計画としては、①韓国法制資料入門、②研究資料の報告、③履修者の研究発表などである。</p>	

授 業 科 目 の 概 要					
(国際文学部 国際教養学科)					
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考		
学 科 科 目	専 門 科 目	東 ア ジ ア 地 域 研 究 科 目	演習		
			東アジア地域研究演習Ⅱ	<p>(19 宮崎 聖子)</p> <p>ここでは、東アジア(中国、香港、台湾、韓国など)における地域社会と家族、社会組織のあり方を中心に、文化人類学、社会学、歴史学など基本的な文献の講読をおこなう。そのことを通して、それぞれの社会に対する理解を深め、分析的に考察する力を養うことを目的とする。</p> <p>授業形態は主に演習形式で、学生が文献を読んで報告し、全員で討論を行なう。それにより、効果的なプレゼンテーションを身につけ、また学際的な研究方法に触れる機会とする。</p> <p>(32 金 希京)</p> <p>「東アジア地域研究演習Ⅰ」を発展していき、同じ授業の仲間の前で発表する。中国語・韓国語の運用能力と共に、東アジアの歴史と文化を知り、理解力及び異文化間の問題解決力を身につけていくことを目指す。東アジアの諸民族の社会と文化を学んで理解し、習得した言語や知識を用いて、言語や文化の違い、利害関係によるさまざまな問題を解決する能力を培う。</p> <p>(42 鈴木 絢女)</p> <p>4年次の卒業研究や卒業論文を視野に入れた演習を行う。</p>	
			国際関係論	<p>本講は ○国際関係史を紐解いたのち、現代世界の主要な政治、経済、社会的な事象を共同体、国家政府、地球社会のレベルから包括的に考察して、現代世界の鳥瞰図を描くとともに、世界のなかでの日本を位置づける。</p> <p>○現代世界の主要な事象を包括的に「説明」するための思考回路(すばやい因果関係の抽出、「なぜ、なぜならば」の問答等)を育成する。</p> <p>○授業計画の要旨以下のとおり：1) 共同体レベルでは、民族・宗教・地域紛争とその管理等、2) 国家政府レベルでは、隣国間の軍拡競争とその管理等、3) 地球社会レベルでは、温暖化やインフルエンザ・ウイルス拡大の阻止を巡る主体(政府、企業、NGO、国際機関)間の条件交渉等、にそれぞれ言及する。</p>	
国際関係・国際協力	国際開発論	<p>グローバル社会では、人の活動、経済活動の拡大に伴って、農林水産、鉱物、エネルギー等の資源を大量に消費し、その量はさらに急激に増大している。このような資源の多くは開発途上国にあり、資源開発のために自然破壊、環境破壊を引き起こし、その国の人々の健康を阻害し、生存をも脅かす事態が発生している。本講義では、国際開発の実態の紹介と、それに対する各国の取り組みや国際的な対応について、国際法の視点を中心に考察する。</p>			
		開発法学	<p>本講義は、アジアやアフリカを中心とした開発途上国における「法」が、これらの国々の社会発展にいかなる役割と問題性を抱えているのかを解明する。まず市場原理を導入するに当たって、経済法など、近代西欧法システムの法整備に重点が置かれた(開発国家体制)。その一方で、伝統的な部族法や家族法など、その地域特有の固有法が、「開発」の名の下に変質し、失われ始めた。現代法システムと固有法との乖離と拮抗の問題から「開発国家体制」の特徴とその問題状況を把握する。</p> <p>具体的な授業計画としては、①開発法学への案内、②開発国家の人権と文化、③市場システムと法、④グローバリゼーション下の法と社会などである。</p>		

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文学部 国際教養学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 科 目  専 門 科 目  国 際 関 係 科 目  国 際 開 発 ・ 国 際 協 力	国際機構法	相互依存とグローバル化が深化する国際社会において、国家間の利害関係を調整し、国際社会の共通利益を実現するために、国際機構を通じた国際協力がどのような法的枠組のもとで行われているかを学ぶ。国際機構の史的展開、種類と活動、国際法主体性と特権免除、内部構造と権限、国際公務員制度などを主な内容とする。さらに、国際機構の成立と発展がもたらす国際社会の組織化という現象が、分権社会の法としての国際法に及ぼす影響についても考察することにより、国際関係の法的理解を一層深める。	
	国際協力・NPO/NGO論	現在の国際社会は、単に諸国家が共存する時代から、国家やそれ以外のNGOなどのアクターが積極的に協力し合わなければならない時代へと移行しつつある。しかしながら、その現実には、政治的にも経済的にも様々な矛盾に満ちている。そうした矛盾はどのように解消されようとしているのか。そこで、本講義は国際開発協力を中心に、国際協力のあゆみや国際協力の仕組みなどについて考えながら、そうした問題について検討する。特に、国際協力のトップドナーである日本は国際協力分野でどのような貢献をしてきたかを考察する。 実施される授業計画の要旨次のとおり：1) 国際協力とは何か、2) 国際社会の現状：なぜ国際協力が求められるのか、3) 南北問題と国際協力、4) 日本の国際協力(ODA)と開発援助、4) 日本のNGOと国際平和協力、5) 国際協力のジレンマなど。	
	コミュニケーション学	人間は、周りの人々とコミュニケーションしながら成長していく。コミュニケーションの行動原理を理解し、人間が社会生活していく上で必要なコミュニケーションのメカニズムについての知識を得ることを目的としている。具体的には、偏見やステレオタイプがいかに人間のコミュニケーション行動に影響を与えるか、意見交換や議論をする際の言語、非言語の役割、未知の状況でコミュニケーションを円滑にするための(新社会人、新大学生など)知識などを教授する。これは、近年、コミュニケーションができない日本人が増えているという現状を踏まえた上で、コミュニケーション行動の原理を教える講義である。	
	異文化間コミュニケーション学	グローバル化に対応できる人材育成を目的とした授業である。文化背景の異なる人々に対する心理的反応を理解した上で、異文化の人々とコミュニケーションするとはどういうことかを考えさせる。	
	グローバル社会と人の移動	グローバル化に伴う「人の移動」は、労働力の移動という観点のみならず、人に付随する言語、習慣、生活様式など、いわば文化一式も併せて移動するという点も重要であり、移動する人自身、および受け入れ国にさまざまな影響を与えている。この講義では、日本の事例をはじめ、国際移動に伴う人々の文化・社会的な変容に焦点を当て、異文化社会における共存と課題について考える。 授業計画の要旨以下のとおり：1) 現在の国境を越える移動の特徴 2) 国際移動が国家と個人にもたらす挑戦 3) 事例紹介(送り出し国→西アフリカ諸国、メキシコ、フィリピン、受け入れ国→スペイン、米国、独、日本)。	
	国際環境政策論	気候変動、オゾン層破壊、廃棄物の越境移動、酸性雨などの地球規模や国境を越えた環境問題が発生し、国や国際機関等では条約の締結、国内法の整備、経済的手法の導入、調査・研究、技術開発などさまざまな政策が実施されてきている。本講義では、問題の内容とその背景事情、解決に向けた取組を学び、政策の手法とその効果を考える。また、国際的な環境問題の事例について、条約交渉の過程などを深く掘り下げて学ぶ。	

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文学部 国際教養学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 科 目  専 門 科 目  国 際 関 係 科 目  国 際 政 治	国際法	国際法の基本的な概念や制度の学習を通して、論理的思考力を養い、国際関係を法的にとらえる力を身に付けるとともに、3年次以降の国際法関連科目(演習を含む)に必要な基礎知識を学ぶ。国際法の歴史、国際法の法源、国際法と国内法の関係、国際法の主体、国家責任法、領域および海洋法、国際裁判制度を主な内容として、国際法の形成・適用・解釈の基本的なあり方と、分権的な国際社会を基盤とする国際法の法規範としての特色を正確に理解する。	
	国際紛争と数理学	国際紛争は、国家、民族など間の利害、宗教の対立等、様々な原因によって引き起こされるものであるが、そのときの当事者(国、民族)が取った行動、取るべき行動について、ゲーム理論の分析手法とその観点から解説し、平和維持の方略について考察する。1960～1990年に掛けての冷戦時代に、核戦争を回避できたのも、ゲーム理論を用いた分析・評価が有効に働いたからだといわれている。このような具体的事例とその数学モデルを用いて、紛争防止、紛争解決の方略について考察する。	
	平和と安全保障	平和と安全保障とは何か、その基本的な概念や枠組み、方法論について、主に国際関係、国際政治の視点から概説する。グローバル化が叫ばれる中で世界がどのような問題を抱えているのか、それらに対してどのような取り組みが行われようとしているのか、それらの問題はわたしたちとどのように関わりがあるのか、といった問題について考える。 特に、国際紛争の平和的処理手段、戦争の違法化と武力行使禁止、集団安全保障制度、国連平和維持活動、軍縮・軍備管理、武力紛争法について、関連する国際法上の規則や制度の正確な理解を図るとともに、それらと日本の関わりについて検討する。	
	国際政治史	この講義では、国際政治の歴史を学ぶことにより、歴史的事象のみならず、国際政治を理解する基本的な枠組みや諸概念の理解を目標とする。17世紀の国家間体系の成立を基点としながら、ナショナリズム、両大戦と冷戦構造の形成と崩壊を軸に講義を進めていく。講義では、映像および音声資料を使用することで、受講生の理解を深めるとともに、講義の感想および質問を毎回提出してもらい、次回に回答することで双方向性を確保することに努める。	
	政治思想史	この講義では、政治的現象と関わる様々な思想、例えば善悪や正義、公正、権力といった思想が、西欧の政治思想においてどのように受け止められてきたのか理解することを目標とする。講義では、政治共同体の営みについて深い哲学的考察を展開したギリシャから、現代の多文化主義に至るまでを広範に考察していく。講義では、毎回の感想および質問を提出してもらい、次回に回答することで双方向性を確保し、受講生の理解を確保することに努める。	
政治理論	この講義では、政治現象を理論的に理解するための基本的な枠組みや諸概念を学び、知識を習得することを目標とする。権力や正統性、政治システムといった政治学の基本的な概念のみならず、政党や官僚制といった政治集団についても学ぶことにより、現実政治に対する理解を深める。講義では、映像および音声資料を使用することで、受講生の理解を深めるとともに、講義の感想および質問を毎回提出してもらい、次回に回答することで双方向性を確保することに努める。		

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文学部 国際教養学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 科 目  専 門 科 目  国 際 関 係 科 目  国 際 政 治	比較政治学	本講は、○政治学上鍵となる概念(近代化、政治発展、民主化、政治文化等)や組織名称(制度、政党、選挙、利益集団等)を用いて国家の構造的特徴、機能、パフォーマンス等を相互に比較する。 ○上記にある国家間「比較」が、特定の国家の外交政策上の武器として(例えば、他の国家を「権威主義体制」「軟性国家」「破綻国家」呼ばわりする)しばしば利用されたことを注意喚起しつつ、「学問の中立性」について合わせて言及する。 ○授業計画の要旨以下のとおり: 1) 概念としての「近代化」と「政治発展」、2) 実態としての「近代化」や「民主化」、3) 国家社会間比較の功罪。	
	現代日本政治	現代の日本政治について、制度と課題の2つの面から講義をすすめます。まず制度としては、①選挙制度、②政党システム、③地方分権などの基礎的枠組みのお話をします。これらの制度理解を下に、現代日本政治が抱えている政策課題についてお話します。具体的には、①財政赤字問題、②年金、福祉問題、③雇用問題、などです。日本政治について、その制度的仕組みと、日本政治が抱える政策課題を通じて、日本政治を身近に感じることができる講義を計画しています。	
	日本政治史	本授業では、戦前期日本の政治史について取り上げます。特に「大正デモクラシー」から満州事変を経て、政党政治が崩壊し、軍部の台頭によって日本が「ファッショ化」し、日中戦争、アジア・太平洋戦争へと突き進んでいく政治過程を検討していきます。その際、一国主義的な視角ではなく、当時の同時代性ないしは共時性に着目しながら、日本が「ファッショ化」していく過程を捉え直していきます。また、当時の国際関係のなかで日本を位置づけながら、日本の対外政策、特にアジア政策についても検討していきたいと思います。	
	アメリカの政治と社会	本講義は、「アメリカ合衆国とは何か」という問いに対する答えを政治、外交、社会という三つの視点から探求することを目指します。したがって、(1)アメリカ人の自己認識やアイデンティティに関する議論から出発し、(2)アメリカ人の自己認識が政治にどう反映されているか、さらには(3)アメリカ人の自己認識の対外的表現としての、国際社会におけるアメリカ人の使命観とアメリカ外交との関連をどう考えるか、を軸に話を進めます。	
	ヨーロッパ政治史	現在、ヨーロッパ共同体(EU)として国際社会に影響力を持つヨーロッパの政治について学んでいく。 講義では、ヨーロッパ大陸諸国における絶対主義の崩壊から国民国家形成への歴史的過程を学ぶとともに、国民国家形成後の各国の政治体制についても基本的な知識を習得していく。 講義では、毎回の感想および質問を提出してもらい、次回に回答することで双方向性を確保し、受講生の理解を確保することに努める。	
	現代ヨーロッパの政治と社会	この講義では、現在の国際社会に強い影響力を持つヨーロッパ共同体(EU)について政治的観点から知識を習得することを目標とする。講義では、ヨーロッパ共同体の歴史について学ぶとともに、現在のEUの行政機構やEUと加盟各国の政治的関係、さらに共通政策についても学んでいく。講義では、EUに関するニュース/ドキュメンタリー映像や音声資料を活用することで、受講生の理解を深める。また、講義の感想および質問を毎回提出してもらい、次回に回答することで双方向性を確保することに努める。	



授 業 科 目 の 概 要			
(国際文学部 国際教養学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 科 目  専 門 科 目  国 際 関 係 科 目	南アジアの政治と社会	今日の世界において南アジアは新たなダイナミズムを得るにいたっている。南アジア地域は、過去15年間に、かなりの国際的な認知度を獲得してきた。この地域の重要性の高まりに起因する諸要因の中でも、核の拡散や、主要なグローバル経済大国としてのインドの急速な発展、新市場の台頭、国境を越えたテロ問題といった諸問題が際立っている。こうした問題について、わたしたちが理解し行動するためには、既存の政治学や社会学などの学問の垣根を越えて、「学際的」にものごとを捉える視点が求められている。そのために本講義では南アジアにおける文化、社会、政治、経済の発展の歴史と現在について、その地域的な固有性とともグローバルなつながりを理解することを試みる。	
	国際関係特別講義	<p>(02 堀江 浩一郎)</p> <p>本講は ○世界各地で長期化する地域紛争を紹介しつつ、紛争長期化の主因と紛争管理・打開への道筋を議論する。 ○地域紛争には、夫々の間で様々な共通項と特殊性があることを、且つ紛争解決に向けて国際社会による持続的・体系的な取り組みが不可欠であることを学習する。 ○授業計画の要旨以下のとおり：1) 長期化した地域紛争の特質 2) 事例紹介(朝鮮半島、ミャンマー、パレスチナ、イラク、アフガニスタン、コンゴ、スーダン等) 3) 長期化した地域紛争の展望。</p> <p>(27 Jayasena, Pathmasiri)</p> <p>本講義は世界各地のさまざまな長期化する地域紛争を紹介しつつ、紛争長期化の主因と紛争管理・打開への道筋を議論する。 地域紛争には、夫々の間で様々な共通項と特殊性があることを、且つ紛争解決に向けて国際社会による持続的・体系的な取り組みが不可欠であることを学習する。 授業計画の要旨以下のとおり：1) 長期化した地域紛争の特質 2) 事例紹介(朝鮮半島、チベット独立問題、スリランカ紛争、アフガニスタン紛争、パレスチナ問題、イラクの宗教・民族問題、ルワンダ内戦、ソマリア内戦、バスク独立紛争、チェチェン紛争等) 3) 紛争予防、4) 平和構築。</p>	
	国際関係演習 I	<p>(02 堀江 浩一郎)</p> <p>本演習は ○国際関係論に関する広いテーマを扱うことで集まった受講者と教員が合致、協力して運営する授業である。 ○国際関係について 1) 問題意識の向上、2) 説明能力の改善 3) プレゼンテーション形式の見直し をめざす。そのために受講者が自主的に教室での報告、設定したテーマに関する議論の発起、レポート提出等を歓迎する(教員はこれを誘導)。更に学外専門家との討論、学外での講演への合同参加等、演習受講者間の共通行動の幅を広げる。 ○授業計画の要旨 以下のとおり：1) 受講者と教員との間で演習の運営方法・形式について合意 2) 受講者による報告と教室全体での議論 3) 受講者による国際関係シミュレーションの実施。</p>	

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文理学部 国際教養学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 科 目  専 門 科 目  国 際 関 係 科 目  演 習	国際関係演習 I	<p>(24 吉田 信)</p> <p>現在の国際関係を理解するためには、これまでの国際関係を歴史的に検討する必要がある。国際関係演習 I では、近現代の国際関係をいくつかのテーマにわけ、歴史的概要を整理するとともに、現在の国際関係にこれらのテーマがどのような形で受け継がれているのか、文献や映像資料を用いて理解を深めることを目的としている。</p> <p>演習は、参加者が各自テーマを設定し、報告をおこなう形式で進めていく。報告者には、選択したテーマに関する専門的知識、および報告に必要な技術の修得が期待される。また、他の参加者に対しては、報告者に対するコメントを各自が事前に準備し、積極的な討論を展開することが期待される。</p> <p>(25 深町 朋子)</p> <p>現実の国際関係において、国際法がどのように解釈され適用されているかを理解することを目的として、主に国際法の総論部分に関する文献輪読や判例研究を行う。個人もしくはグループによる報告に基づいて、全員で質疑応答および討論を行う形式を基本とするが、参加者の人数および到達度に応じて、架空(ないし単純化した)事例についてのレポート提出や模擬裁判等を行い、国際法の運用能力や論理的な議論構築力の養成に努める。</p> <p>(27 Jayasena, Pathmasiri)</p> <p>本演習では、平和と安全保障を中心に、広く国際関係、平和研究に関する研究を行う。国と国の関係や、国連などの国際機関の役割、またNGOや個人などの様々な非政府の行動主体の活動などを幅広く検討することによって、国際政治の仕組みや動きを理解し、どのようにしたら国際社会がより平和で公正なものとなるか、といった問題について考えていく。前期は国際関係や平和研究の理論に関する文献を、受講生の関心の高いイシューに応じて取り上げる。</p> <p>演習の進め方としては、テキストの読み込みと受講者による発表と討論が中心となる。演習でどのようなテキストを取り上げ、いかなる具体的なテーマに重点を置いていくかについては、履修生と相談のうえ決める。</p>	
	国際関係演習 II	<p>(02 堀江 浩一郎)</p> <p>本演習は ○国際関係演習 I を継続した授業である。但し国際関係演習 II からの中途加入を妨げない。○卒業論文演習に原則引き継がれる。</p> <p>(24 吉田 信)</p> <p>国際関係演習 II では、演習 I により習得した国際関係の歴史に関する基礎的知識を前提に、現在の国際関係の諸問題を政治・経済的視点から分析・検討することを目的としている。これにより、国際関係を歴史・政治・経済という複合的な視点から分析する視座を獲得する。演習は、参加者が各自テーマを設定し、報告をおこなう形式で進めていく。報告者には、選択したテーマに関する専門的知識、および報告に必要な技術の修得が期待される。また、他の参加者に対しては、報告者に対するコメントを各自が事前に準備し、積極的な討論を展開することが期待される。</p>	

授 業 科 目 の 概 要						
(国際文理学部 国際教養学科)						
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考			
学 科 科 目	専 門 科 目	国 際 関 係 科 目	演習			
			国際関係演習Ⅱ	<p>(25 深町 朋子)</p> <p>国際法の解釈と適用の実際について理解を深めることを目的として、主に国際法の各論部分に関する文献輪読や判例研究を行う。文献は和文を基本とするが、判例については可能な限り英文の判決サマリーもしくは判決原文を用いることにより、専門的な語学力を涵養する。個人もしくはグループによる報告に基づいて、全員で質疑応答および討論を行うほか、参加者の人数および到達度に応じて、架空(ないし単純化した)事例についてのレポート提出や模擬裁判等を行い、国際法の運用能力や、論理的な議論構築力を高める。</p> <p>(27 Jayasena, Pathmasiri)</p> <p>本演習は国際関係演習Ⅰを継続した授業です。</p> <p>演習の前半は、受講生共通のテーマにより、前期の学習を継続し、関連した新たなトピックを扱うことで理解を深めます。後半は、受講生ひとりひとりが卒業論文に通じるテーマを見つけるためのプレゼンテーションを中心に演習を行います。</p> <p>演習はゼミ方式で行います。ゼミは、①各自の独自テーマに基づくプレゼンテーション、②上記内容に基づく演習、の二つの方法によって実施します。</p>		
			経営学	<p>私たちの多くは企業の活動を通じて富を生みだし、豊かさ(福利厚生)を得ている。その意味で現代社会における経済活動の主役は企業であるといえる。企業はヒト、モノ、カネ、情報などの資源を駆使しながら、経済性を高めるべく、合理的な活動を繰り返している。ここではその仕組みを原理的に理解することにした。企業論の立場から会社はなぜ生まれたのか、会社とは何か、そのガバナンスはどのようになっているか、企業の社会的責任はどのように問われそして果されるのか等を問い、経営論の立場から、富の生産プロセスとその運営、そしてそれにかかわる人間のあり方を問うことになる。</p>		
			国際経営学	<p>内需の掘り起こしだけでなく、外需の開拓が不可避の時代になったが、異文化の難題を克服して国際ビジネスをスムーズに進めるには、課題も多い。関連する要因をできるだけ広く解きほぐしながら、グローバル化時代のビジネスをどう構築するかを講じる。口述中心に講じるが、毎回ミニッツ・ペーパーで2項目、2用語の整理・提出を求める。事例の紹介を重視しつつ、国際経営の歴史的な背景や現状、問題点から将来の展望に至る理解を深める。難題は多いが、興味ある題材も尽きない科目である。</p>		
会計学	<p>簿記を含む会計システムを中心にして、企業会計に関する基本概念、記録・計算方法、および開示手段となる財務諸表の体系と内容について学ぶ。</p> <p>まず現代の経済社会における企業会計の目的やそれが果たしている役割を概説する。つぎに企業会計の基礎を形成している考え方を紹介する。ここでは、会計公準、会計主体、損益計算構造、企業会計原則の一般原則を中心に説明する。その後、記録・計算方法として貸借複式簿記の基本的なしくみについて学習する。最後に、日本における財務諸表の体系と様式を中心として日本の財務会計制度を概説する。</p>					
		国際経済・マネジメント科目	国際マネジメント	国際企業会計	<p>国際的な会計基準の意義や役割、そしてそれらが日本の企業会計に対して及ぼす影響について学ぶ。</p> <p>まず国際的な会計基準の内容に入る前に、かかる会計基準の適用対象となる連結財務諸表について概説する。つぎに証券取引市場やコーポレート・ガバナンスなどに対して、財務報告制度・企業会計基準がどのように関与しているかを説明する。最後に日本の企業会計基準、国際的な会計基準である国際財務報告基準(IFRS)、米国財務会計基準(US-GAAP)の概要を紹介し、これらの位置付けや相違について概説する。</p>	

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文学部 国際教養学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 科 目  専 門 科 目  国 際 経 済 ・ マ ネ ジ メ ン ト 科 目  国 際 マ ネ ジ メ ン ト	ファイナンス	「ファイナンス」とは、企業経営のうち資金に関係する分野を対象とした学問である。具体的には、資金調達、資金運用(投資決定)、配当政策を対象としている。さらに、資金調達の場合として、あるいは資金運用の一手段として、証券市場の役割や機能も対象としている。 そのため、本講義では、資金調達、資金運用(投資決定)、配当政策および証券市場の役割や機能について講義を行う。その際、特に証券市場が企業経営とどのような関連性を持つのかについて具体的な事例を踏まえつつ、解説を行う。	
	日本・アジアの企業経営	アジアでは、多国籍化した日本企業を核に、NIEs企業・ASEAN企業・中国企業がそれぞれに担う、細分化された個々の生産工程を重層的に結びつけた生産のネットワークが域内全体に張り巡らされているが、こうした企業間国際分業とそれに対応した企業経営を理解させることを目標に、身近な企業の事例も紹介しつつ、講義する。近年のFTAの急増や中国・インド市場の急成長といった経営環境の激変とそれへの対応についても、統計数値や新聞報道等を利用して解説を加える。	
	企業戦略	企業の経済活動は競争環境の中で展開されている。そのため企業は他社にまさる競争優位を築こうと、市場と対話しながら独自の経営の仕組みを生み出している。モノ作りでは研究開発戦略が重要であるし、製品市場への対応はマーケティング戦略が鍵を握っている。グローバル化する経済への対応も重要である。研究開発、生産そして販売にいたる企業活動を通じて、その戦略課題と対応を明らかにしつつ、企業の戦略行動を事例をまじえて講義する。	
	経営管理論	経営管理論は経営の管理ノウハウよりもそれらが生み出されてきた背後の論理と管理の基本原則について講義する。経済の歴史や企業の発展にそって、経営管理がどのように展開されてきたのか、現代の企業が抱える管理の課題と対応は何かをめぐって、古典的管理論から知識創造の経営にいたる理論の系譜とその意義を、具体的な企業事例を踏まえて取り上げる。また1980年代以降に注目を集めてきた日本的経営をめぐって、事例を取り上げながら理論的考察を加えることになる。	
	人的資源管理	まず働くことの意味を理解することにした。そのために企業や各種組織の中の間人関係について様々な角度から分析してみる。その上で、仕事への意欲(ワーク・モチベーション)、集団とそのリーダーシップ、職場での人間関係とコンフリクトなどを考えてみる。また、わが国に顕著な集団主義と小集団活動の姿について触れながら、学習する組織の実態についても講義する。 現代では、職業能力としてコンピテンシーが問われることが多いが、その内容について検討を加える。これらを踏まえて、日本の対極にある米国の人的資源管理の実際を学ぶことにしたい。	
	社会心理学	様々な社会的場面における人間心理の解明を目指す社会心理学の理解を通して、対人関係や社会現象に対して洞察力を深め、多様な視点で捉えられるようになることを目指す。 対人認知、集団認知、社会的影響等に焦点を当て、自らを取り巻く生活環境や多様化・国際化が進展する社会における個人の心理と環境との相互作用を考察し、分析的に事態を捉え、より良い方策を検討しうる実践的な知力を養う。 授業形態は講義を基本とするが、テーマごとの小レポート、集団討議、シミュレーション課題による参加型の授業も展開する。	

授 業 科 目 の 概 要				
(国際文学部 国際教養学科)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学 科 科 目  専 門 科 目  国 際 経 済 ・ マ ネ ジ メ ン ト 科 目  国 際 経 済	国 際 マ ネ ジ メ ン ト	行動心理学	<p>人間行動の科学的理解とその技法について学び、個人内の心的過程や外界からの情報処理過程が人間行動に与える影響、また行動が自己や物的・人的環境に与える影響等について、心理学的な視点から解釈できるようになることを目標とする。</p> <p>特に「適応」の概念に注目し、日常生活における心の健康、より良い社会のあり方に利する人間の適応行動や互恵的行動について考察していく。</p> <p>授業形態は講義を基本とするが、レポート課題、集団討議・発表、心理検査を利用する等、参加型の授業も展開する。</p>	
		ビジネス英語	<p>この授業では、ビジネスに必要とされる基礎的なボキャブラリーと会話表現を学ぶ。また、新聞記事などを題材にして、今日のビジネスにおける、時事問題やホットな 이슈を理解する。</p> <p>なお、講義では、英語を「使う」ことに慣れることを主たる目的とし、グループディスカッションやプレゼンテーションなど、英語を話し、聞く時間を多く取る。</p>	隔年開講
		環境ビジネス	<p>クリーンエネルギー、水質汚濁防止、土壌汚染防止、浄化、リサイクルなど多岐にわたる環境ビジネスの事例とこれからの社会における環境ビジネスの展望について学習する。</p>	
		プロジェクトマネジメント論	<p>プロジェクト管理体系のバイブルと云うべき「PMBOK」(ピンボック)について講述する。</p> <p>PMBOKは、アメリカのNPO組織であるPMIという標準化・教育のための組織が編んだもので、建築業界のベストプラクティスをまとめたものをその起源とし、IT業界、さらにはあらゆる企業内プロジェクトに多用されている。</p> <p>PMBOKでは、プロジェクトを遂行する際に、スコープ(プロジェクトの目的と範囲)、時間、コスト、品質、人的資源、コミュニケーション、リスク、調達、統合管理の9つの観点(「知識エリア」と呼ばれている)でマネジメントを行なうことで、プロジェクトの経営に必要な、知識やツール等を駆使して、最適な計画を立案し適切に実行、監視コントロールすることで、製品やサービス(成果物)を納期内に製造・創造し提供する一連の経営手法を学習する。</p>	
		プロジェクトマネジメント演習	<p>プロジェクトマネジメントで学んだ管理手法を組み合わせ、新規プロジェクトにおける計画線表の作成等を演習する。</p> <p>さらに自主課題テーマを学生が選択してプロジェクト策定における想定課題などマーケティングの見地からも検証する。</p> <p>またプロジェクトマネジメントにおける企業ケースをディスカッションし、実践的な論理を学習する。</p>	
		マイクロ経済学Ⅰ	<p>経済を理解するにあたって最も重要なのは市場経済のメカニズムに対する理解である。本講義ではまず、各経済主体の行動理論、特に消費者の行動と生産者の行動に関する理論を学んだ上、それらに基づいて機能している市場経済のメカニズムについて学ぶ。また、多くの応用例を用いてマイクロ経済学の理論が現実の経済社会にどのように適用されているかについて検討する。</p>	
	マイクロ経済学Ⅱ	<p>本講義では、マイクロ経済学Ⅰで学んだ各経済主体の行動理論や市場メカニズムをベースに市場で起こる諸問題について解説する。まず、厚生経済学を理解するために必要な効率性の概念を説明し、次に独占や寡占などの不完全競争市場のメカニズムと問題点について解説する。また、なぜ市場失敗が起こるかについて外部性と公共財を中心に検討することによってマイクロ経済学理論に対する理解を深める。</p>		

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文学部 国際教養学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 科 目  専 門 科 目  国 際 経 済 ・ マ ネ ジ メ ン ト  国 際 経 済	マクロ経済学Ⅰ	本講義の目標は、学生が経済学を本格的に学習するための基礎として、国民経済の巨視的な仕組みを学習し、簡単なマクロ経済モデルによる分析を理解し、さらに、経済政策の有効性を考えることができるようにする。マクロ経済学Ⅰでは、最初に、マクロの経済循環について説明し、GDP、国民所得等の基本的な集計量を解説する。その後、マクロ経済学の基本的なフレームワーク(45度線分析、IS-LM分析)を丁寧に説明する。	
	マクロ経済学Ⅱ	マクロ経済学Ⅱでは、マクロ経済学Ⅰの議論を深化・拡張させる。まず、マクロ経済学Ⅰの結果を踏まえて、標準的なAD-AS分析のフレームワークを丁寧に説明する。さらに、マクロ経済学には、いくつかの論点で依然と論争が存在しているので、その点を理解させるために、マクロ経済理論・政策に関連する幾つかの論争(名目的調整に関する新しい古典派経済学とニューケインジアン論等)について解説する。最後に、マクロ経済学Ⅰで前提とされていた基本的な消費関数、投資関数、流動性選好表等の関数のミクロ的基礎を説明する。	
	計量経済学Ⅰ	本講義では、初歩的な計量分析の基礎理論を平易に解説する。最初に、経済成長に関するデータの概況を説明し、幾つかの経済成長に関連する実証分析を紹介し、学生の関心を喚起する。その後、標準的な回帰分析を丁寧に説明し、経済現象に特徴的な事象を解明するための計量経済学的手法について理論的に解説する。具体的には、攪乱項の不均一分散が存在するケースを取り扱い、ついで、攪乱項に系列相関が存在するケースを取り扱う。	
	計量経済学Ⅱ	計量経済学Ⅰでは、基礎的な計量経済学の理論に関する初等的な講義がなされる。計量経済学Ⅰの知識を前提として、実際に経済現象を分析するためにはパソコン・ソフトを使って、種々の操作をしなければならない。計量経済学Ⅱでは、計量経済学Ⅰと応用統計学の知識を前提として、EViews等による計量経済分析ソフトを使用して、実際に経済現象を処理する初歩的な講義・実習を行う。 1. インターネットによる日本経済に関するデータの入手方法 2. 日本経済に関する記述統計のデータ処理 3. 回帰分析による日本経済の分析 4. 経済データに特有の性質を処理するための計量分析 5. 経済理論と推定結果の関連についての解釈の仕方	
	財政学	本講義は、マクロ経済学とミクロ経済学の基礎理論を前提として、議論される。財政学は公共投資、租税政策、公債発行など政府の様々な経済行動を分析対象とする経済学の一分野である。現代社会において財政は益々複雑になっており、それを理解するためには制度及び理論に対する知識の習得が不可欠である。本講義では、現代財政のメカニズムについて財政理論を用いながら日本の現状を中心に解説する。また、財政の役割と課税の問題、さらに地方分権問題を考えることにより財政についての理解を深める。	

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文学部 国際教養学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 科 目  専 門 科 目  国 際 経 済 ・ マ ネ ジ メ ン ト 科 目  国 際 経 済	金融論	マクロ経済学とミクロ経済学の基礎理論の履修を前提として、経済の潤滑油である金融の問題を考えるための基礎を学習し、学生自ら金融現象を理解できるように講義する。 まず、交換経済における金融の機能と役割を説明し、情報の非対称性との関連で金融仲介機能について解説する。 ついで家計部門と企業部門の金融行動を議論し、モジリアニ・ミラー理論等の投資行動の決定に関する理論を紹介する。その後、短期金融市場の機能と資本市場の機能・特性に関する分析を行う。	
	経済政策	本講義では、マクロ経済学の知識を前提として、学生自ら現実の経済政策を理解し、適切に評価・解釈する能力を身に付けることを目標とする。特に、マクロ経済学とマクロ経済政策の関連について概説する。現実の景気対策としての観点から、財政政策と金融政策の機能とそれに関連する種々の問題について議論し、現在直面している深刻な雇用・失業問題と政策の問題を考察する。最後に、長期的な視点から、知的基盤社会におけるR&Dとイノベーション政策に関連する興味深い最近のトピックスを議論する。	
	地域経済	本講義では、ミクロ経済学の基礎理論の履修を前提として、地域経済学の概要と日本の地域経済の現状理解について説明し、地域経済の抱える問題・課題について検討する。特に、地域の空間構造、企業の立地理論、集積の経済が地域経済に与える影響、都市経済及び地域経済政策などの問題を経済理論と同時に具体的な事例を取り上げながら解説することによって地域経済に関する関心を高める一方、地域が抱える諸問題とその対策に関する理解を深める。	
	経済成長	本講義では、マクロ経済学の知識を前提として、経済成長に関する理論的な議論を解説する。最初に、世界における経済成長の現状について概観する。それを踏まえて経済成長論に必要な種々の基礎的な概念を説明し、基本的モデルを展開する。本講義では、説明を容易にするために主として離散時間型のモデルを使用する。まず、新古典派の特徴を表しているソロー＝スワン・モデルと可変的な貯蓄率を伴うモデル（キャス＝クープマンズ・モデル）について平易に解説する。そのような新古典派の成長モデルの限界を明確にした上で、簡単な内生的成長モデルを紹介し、その意義を考察する。最後に、ファンダメンタルな要因としての環境・制度・社会資本と経済成長についての最近の議論を概説する。	
	開発経済学	本講義では、マクロ経済学とミクロ経済学の知識を前提として、開発途上国が共通に抱えている種々の問題の背後にある論理を説明し、学生自ら開発途上国の問題を冷静に分析できるようになることを目標とする。まず、ミクロ的視点から講義を開始する。開発途上国における農村からの移住と都市失業問題、農村におけるシェアクロッピング制に関連する問題、及び都市と農村からなる連動市場における種々の問題をミクロ的視点から解説する。マクロ視点からは、経済成長の講義と連携しながら、産業構造の変化と経済発展の問題、制度・社会資本・地球環境と経済発展の問題を平易に議論する。	

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文学部 国際教養学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 科 目  専 門 科 目  国 際 経 済 ・ マ ネ ジ メ ン ト 科 目	国 際 経 済	日本経済	本講義では、日本経済の戦後の発展過程を概観しつつ、現代社会が直面している様々な問題に対して、それらに対応するための具体的な政策事例に触れながら検討を行う。特に、財政、雇用、社会保障、教育といった分野が考察の中心である。 講義の前半では、マクロ経済学、ミクロ経済学、計量経済学で展開されている基礎的な理論について紹介する機会を設ける。また、講義の後半では、「財政や社会保障の持続可能性」や「所得格差の推移と国際比較」といった近年特に注目されている政策課題について関心を払い、過去の実証分析を踏まえ、うたえで丹念な検証を行うこととする。
		アメリカ経済	レーガン政権(1980年代以降)から今日にかけてのアメリカ経済の趨勢について、以下の3つの面から講義をおこなう。 1. サブプライムローン問題の発生とその影響(マクロ面から同国経済を解説) 2. アメリカ産業・企業の革新性について(ミクロ面から同国経済を解説) 3. 地域・都市における経済の状況と問題点(地域の面から同国経済を解説) なお、マクロ経済学・ミクロ経済学・計量経済学の知識を前提として講義を行うが、必要であれば、追加的にその都度簡単な説明を加える。
		EU経済	本講義では、欧州石炭鉄鋼共同体に始まり現在の欧州連合(EU)にいたる欧州の統合について、その世界史的意味を考える。そして、初期の共同体制度が連邦制、アメリカ合衆国などをモデルとした政治的統合を視野に入れつつ、域内自由化、市場統合、単一通貨導入といった経済的統合を手段として進められた統合プロセスを決定的に方向づけた様子を示し、共同体方式と加盟諸国との間で展開されてきた統合の力学を明らかにする。これにより今後の世界のなかで欧州統合が進む方向を展望する。
		経済英語	この授業では、経済に関するボキャブラリーと表現を学び、経済学の論文やテキストが理解できるようになることを目指す。 なお、講義では、英語を実践的に「読み」「書き」「議論」することを目的とし、今日的な経済問題などを題材に、グループディスカッションやプレゼンテーション、レポートの作成を行う。 「ビジネス英語」を受講していることが望ましい。
	演 習	国際経済・マネジメント演習 I	(01 大住 圭介) 国際経済・マネジメント演習では、最近の経済発展理論、経済成長論の成果を学習し、それを前提として、世界の経済発展の状況を分析するための手法を学習させ、世界経済の潮流を把握できるように指導する。 国際経済・マネジメント演習 I では、経済発展論と経済成長論の基本的な学習を前提として、最近の議論の状況について検討する。特に、大住圭介他訳『(ヘルプマン) 経済成長のミステリー』(九州大学出版会)を使用して、(1) 経済発展と制度・政治経済 (2) 経済発展と社会資本・文化 (3) 経済発展と地球環境等の問題について、自由に議論し、新しい論点に気づかせる。



授 業 科 目 の 概 要			
(国際文学部 国際教養学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科科目 専門科目 国際経済・マネジメント科目 演習	国際経済・マネジメント演習 I	<p>(03 塩次 喜代明) テーマは現代の会社と経営である。 演習では二つのことを目指す。まず経営学の専門書を正しく読み取り、それを自分の言葉として発表できるように演習を進めつつ、学生諸君の自らの学習を通じて専門知識の習得を目指す。次に、発表の場を活かして、討議能力の向上を図る。他者の発表に潜むロジックの適否を判断し、討議を通じてそのロジックを明らかにしつつ、自分の意見を修正したり、相手の意見に修正を求めたりする能力を醸成する。また、討議の材料には専門書のみならず、経営の具体的な事例も対象になる。</p> <p>(17 李 友炯) 本授業の目的は、基本的に経済理論に重点をおきながら、国際経済の諸問題について学ぶことによって卒業研究のテーマ設定やその準備をすることである。2年次まで学習した経済学の諸理論や方法論を復習しながら、それらが国際経済の分析にどのように応用されるかについて学習する。授業は演習形式で行い、テキストの各章を割り当てられた受講者の発表と討論によって授業を進める。</p> <p>(28 張 艶) 受講者が関心のある国(たとえば、米国、カナダ、日本、中国、韓国、シンガポール、イギリス、フランス、ドイツ、イタリア、オーストラリアなど)の経済や国際貿易・直接投資・国際金融問題などについて、発表し、そして全員で討論を行います。教員は発表者に対して参考文献を提供したり、レジュメの作成や発表等についての指導を行ったりします。それにより効果的なプレゼンテーションを身につけ、また学際的な研究方法に触れる機会とします。学生の国際感覚、海外への関心などが徐々に高まると期待できます。</p> <p>(22 鈴木 有美) 経済活動のマネジメントにおいて、人事の管理は、企業活動を基盤で支える重要な要素である。企業で働く人たちの意識や心理について、国内企業おける場合、国際企業における場合など、様々な事例の文献を参照しながら検証し、分析する。このときできるだけ多くの英語による文献を資料として用いて、実践的な英語に触れるようにする。</p>	
	国際経済・マネジメント演習 II	<p>(01 大住 圭介) 国際経済・マネジメント演習 II では、国際経済・マネジメント演習 I の議論を前提として、具体的に世界の各地域の経済発展の状況を自ら把握できるように指導する。個別の経済発展を理解するには、理論的・計量分析に加えて、地域的・歴史的・制度的視点からの分析も不可欠である。国際経済・マネジメント演習 II では、最初に、グラボウスキー他『経済発展の政治経済学』を輪読することを通して、世界の各地域の経済発展の状況を把握する。その後、特に、経済発展が顕著なインド経済と中国経済の経済発展の状況について、詳細に分析をする。</p> <p>(03 塩次 喜代明) 演習 II の基本テーマは企業の戦略行動である。 現代の企業にかかわる課題を取り上げ、それにまつわる専門書をめぐって討議する。演習 II では専門書を多く読みこなし、それらを取りまとめて、論文につながるレポートの作成を目指したい。自分の意見を確かなロジックとして大きな文章で表現する能力を涵養したい。</p>	

授 業 科 目 の 概 要				
(国際文学部 国際教養学科)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学 科 科 目  専 門 科 目  国 際 経 済 ・ マ ネ ジ メ ン ト 科 目  演 習	国際経済・マネジメント 演習Ⅱ	<p>(17 李 友炯)</p> <p>本授業は、基本的に経済理論に重点をおきながら、国際経済の諸問題について学ぶことによって卒業研究のテーマ設定やその準備をすることを目的とする。特に、貿易、環境など国際経済における各国の諸政策について経済理論だけではなく実証の面からも検討することによって国際経済に関する理解を深める。授業は演習形式で行い、テキストを割り当てられた受講者の発表と討論によって授業を進める。</p> <p>(28 張 艶)</p> <p>受講者が関心のある国（たとえば、米国、カナダ、日本、中国、韓国、シンガポール、イギリス、フランス、ドイツ、イタリア、オーストラリアなど）の経済や国際貿易・直接投資・国際金融問題などについて、発表し、そして全員で討論を行います。教員は発表者に対して参考文献を提供したり、レジュメの作成や発表等についての指導を行ったりします。それにより効果的なプレゼンテーションを身につけ、また学際的な研究方法に触れる機会とします。学生の国際感覚、海外への関心などが徐々に高まると期待できます。</p> <p>(22 鈴木 有美)</p> <p>国際経済マネジメントⅠで学習した内容を深めるため、それを基に、より詳細かつ広範な事例の文献を参照し、企業で働く人たちの意識や心理について検証、分析を深化する。事例によっては実際の企業等で実際にデータを集め検証する。この過程で自らの興味あるテーマを選定し、卒業研究の主題を設定する準備をする。</p>		
学 科 科 目	卒 業 研 究	卒業研究演習	学生が設定した学習目標に沿って学科基本科目、専門科目を履修した後、主体的に設定した課題について、毎週のセミナーを通じてその課題に関する知識の習得、課題の分析を経て、課題解決に至る研究計画を策定する指導を行う。その計画に沿って、資料収集、セミナーを行って課題解決に至る迄の研究を指導する。このとき必要に応じて関連する他学科、他コースの科目を履修する。この全過程を通じて、学生の主体性を尊重し、学生自らが課題に取り組む姿勢を養うとともに分析、判断、洞察による課題解決能力を養成する。	
		卒業論文	国際教養学科の学科基本科目、専門科目を履修した後、設定した課題について卒業研究を行い、それによって培った知識、能力を基に、その課題について自ら解決に至る道を探って完成に至るまでの指導を行うとともに、その研究課程と、それによって得られた結論について、明晰な日本語あるいは外国語による論文を作成する指導を行う。	

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文学部 国際教養学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教 職 科 目	教職基礎論	<p>教職の意義と教員の役割、研修やサービスや身分保障などを含む教員の職務内容について、基礎的な知識を習得させ、教職への適切な導入を図るとともに、進路選択に資する各種機会を提供することを目標とする。</p> <p>教職の意義と教員の役割については、現状の課題を踏まえていねいな解説を行う。教員の職務内容については、各職務内容を関連させながら解説を行う。</p> <p>授業の方法は主に講義であるが、協同学習方式を適宜取り入れる。毎回の授業内容を復習させるために400字の作文を課題として課し、その作文を担当者が添削したものを発表させて討論させる。</p>	
	教育哲学	<p>教育に関する理念や歴史や思想について、必要な知識を確実に習得するだけでなく、そもそも教育がどうあるべきかを考え抜き、そのみずからの考えを現行の教育制度において積極的に適切に実践しようとする態度と能力を養うことを目標とする。</p> <p>主として、教育研究方法論、欧米教育思想史、日本教育思想史の3分野に分けて授業を行うが、この3分野が相互に関連するような展開を行う。</p> <p>授業の方法は主に講義であるが、協同学習方式を適宜取り入れる。毎回の授業内容を復習させるために400字の作文を課題として課し、その作文を担当者が添削したものを発表させて討論させる。</p>	
	教育心理学	<p>障害のある幼児児童生徒に関しても適切に言及しながら、幼児児童生徒の心身の発達や学習の過程について、教育心理学の視点から確実な理解を図ることを目指す。</p> <p>教育全般の営みに関わる心理学的諸問題に対する理解を深め、教育者としての基礎的素養を高めるとともに、教育現場の中で人間心理の諸法則を発見する力、人間心理に基づく教育実践を展開する力を養う。</p> <p>授業形態は講義を基本とするが、協同学習方式を適宜取り入れる。テーマごとに小レポートを課し、それを基に集団討議・発表や振り返り作業を行う。</p>	
	教育行政学	<p>日本の教育に関する社会的、制度的、経営的事項について、確実な理解を図ることを目標とする。</p> <p>教育は単独で存在しているのではなく、政治や経済や社会に深く結びついて存在しているため、教育政策がゆらぐことを理解させ、教育政策の動向を読み解く理論と方法を学ばせる。</p> <p>授業の方法は主に講義であるが、協同学習方式を適宜取り入れる。毎回の授業内容を復習させるために400字の作文を課題として課し、その作文を担当者が添削したものを発表させて討論させる。</p>	
	教育課程論	<p>日本の学校における教育課程(カリキュラム)の意義とその編成方法について、確実な理解を図ることを目標とする。</p> <p>教師の仕事は、何を、何のために、どう学習させ、学習成果をどう評価するかを思案し実践することであることを理解させ、その理論と方法を学ばせる。</p> <p>授業の方法は主に講義であるが、協同学習方式を適宜取り入れる。毎回の授業内容を復習させるために400字の作文を課題として課し、その作文を担当者が添削したものを発表させて討論させる。</p>	

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文学部 国際教養学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教 職 科 目	国語科教育法Ⅰ	国語科教育法Ⅰ(概論)では、「国語科教育」に関する体系的理解を深めるため、また国語科教員の知識としても不可欠な基本的事項を学ぶことを目的とする。授業内容としては「国語科教育の本質と意義」「学習指導要領」といった導入的な事柄をはじめ、「学習指導案とは何か」「教材研究とは何か」「国語科教育の歴史」「国語科教師像とは何か」「国語科教育の現状と展望」等の各問題を取り上げ、参考資料を随時取り入れて解説していく。	
	国語科教育法Ⅱ	国語科教育法Ⅱ(基礎論)では、国語科教育法Ⅰで学んだ基礎的事項を基に、国語科教育の授業、教材研究、成績評価等、学習指導方法の理論的基盤を学ぶことを目的とする。学習指導要領に基づく教材内容の理解、表現、言語事項等、その要点や考え方を解説する。さらに、教材研究から学習指導への展開、単元と授業計画、段階的な読みの指導、効果的な発問、指導言の与え方等、学習指導の基礎的な方法についても、実際の中学校・高等学校の教科書教材を示しつつ詳述していく。	隔年開講
	国語科教育法Ⅲ	国語科教育法Ⅲ(教材研究)では、国語科教育法Ⅰで学んだ国語教育理論、国語科教育法Ⅱで学んだ学習指導方法を基に、実際に国語科教科書の各ジャンルの教材を取り上げ、各教材の特色と具体的な指導案を示しつつ講義を行う。現代文・古文・漢文という広範な分野の教材それぞれの学習指導案を適切に作成し、授業を計画する方法の修得を目的とする。代表的な文学教材の指導法と解釈をめぐる論争等、文学語学研究や国語教育研究の動向も参照し、問題を検討していく。	隔年開講
	国語科教育法Ⅳ	国語科教育法Ⅳ(授業研究)では、国語科教育法Ⅰ・Ⅱ・Ⅲで学んだ教育指導要領、国語教育理論、学習指導方法、教材研究の各要点を総合的に関連づけた講義を行う。また併せて、指導計画に沿った授業研究演習や、実習の報告討論等も行う。実際の国語教科書教材による学習指導案作成と授業計画実施について、受講者が実践的に学び、指導能力を養うことを目的とする。実際の教室の生徒との「ことば」の対応など、言語生活の指導上のスキルの工夫についても考えていく。	
	英語科教育法Ⅰ	英語を効果的に教えるためにはいろいろな教授法を体得していることが必要である。このクラスでは、中学校、高等学校の英語教師になるために必要とされる英語科教育の基礎理論を学ぶとともに、その理論を実際の教育場で活用するための具体的な指導技術を習得し実践力を身につける。また、指導案作成の方法についても学ぶ。	
	英語科教育法Ⅱ	英語科教育法ⅡではⅠで学んだ知識を生かし、さらに深めるために学習者の抱える問題に焦点を当てて講義を展開する。特に学習者の一人ひとりの違いから生まれる問題に関して、英語で書かれた論文や資料を読み、討論する。受講者は実際に学習者の問題を見つけ、その問題をどう解決するかに関する発表を行うことにより、問題解決能力を養うことが期待される。また近年注目されているフォーカス・オン・フォームや学習ストラテジーなどを取り上げ、その特徴を学ぶ。	3年毎開講

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文学部 国際教養学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教 職 科 目	英語科教育法Ⅲ	英語科教育法Ⅲでは英語科教育法Ⅰで紹介された教授法や近年の教授傾向を復習するとともに、実際に学生自身が受けた過去の語学の授業を振り返る。そこから日本における英語科教授法の歴史と特徴を学ぶ。自分自身の経験を客観的に振り返りそこから学ぶ態度を養うことにより、「自ら伸びる教師」を目指す。また教師に必要な資質や能力を考え、それらに関する論文や資料を読むことにより、目標となる「教師像」を確立する準備をする。簡単なインタビュー・リサーチをして「教師であること」を考える機会を設ける。	3年毎開講
	英語科教育法Ⅳ	英語科教育法Ⅳではこれまで学んできたことを生かし、教育実習の準備をする。特にクラスルーム・オブザベーションの方法を学び、各オブザベーション法の背後にある言語理論を学ぶ。また実際にこれらの方法を授業内で試すことにより、より客観的に授業を参観し、分析する能力を身に着ける。さらに「自ら学ぶ教師」の育成のために自分の興味を持った英語教育分野で簡単なリサーチを行う。問題発見能力の育成、批判的な読み方の育成、研究発表能力の育成を目指す。	3年毎開講
	道徳教育の研究	日本の学校教育における道徳教育の意義と役割を確実に理解させ、学校の教育活動において道徳の指導が効果的にできるための能力を養うことを目標とする。 そもそも道徳を教えるということはどういうことかという問題、道徳教育の歴史、道徳教育の現状を踏まえたうえで、実際の道徳授業の事例研究を行う。 授業の方法は主に講義であるが、協同学習方式を適宜取り入れる。毎回の授業内容を復習させるために400字の作文を課題として課し、その作文を担当者が添削したものを発表させて討論させる。	
	特別活動の研究	教育課程(カリキュラム)の意義とその編成の方法を踏まえたうえで、特別活動の指導法について、確実な理解を図ることを目標とする。 特別活動の特質、目標構成、内容構成、指導計画の作成と実施の仕方、特別活動の現状と課題などについて理解させ、特別活動における実践的指導力の基礎を身に付けさせる。 授業の方法は主に講義であるが、協同学習方式を適宜取り入れる。毎回の授業内容を復習させるために400字の作文を課題として課し、その作文を担当者が添削したものを発表させて討論させる。	
	教育方法学	情報機器や教材の活用の仕方についても必要に応じて紹介しながら、教育の方法と技術について、確実な理解を図ることを目標とする。 学習指導の原理から、生徒の価値ある学びを支援するために必要な知識、資質や技量について考察し、授業構成を知識の伝達モデルのみならず、学習者と教材あるいは学習者同士の関係モデルとしても捉えられる視点を養う。 授業形態は講義を基本とするが、協同学習方式を適宜取り入れる。個人およびグループ学習、全体討論、担当者によるまとめ学習、各自の確認学習等、指導過程を体験させる。	

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文学部 国際教養学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教 職 科 目	生徒指導論	<p>生徒の人格的発達形成およびキャリア形成を促すための生徒指導・進路指導の理論と実践方法について理解を深めることを目標とする。</p> <p>生徒を取り巻く様々な状況、学校教育における様々な生徒指導・進路指導の実態を把握し、生徒指導・進路指導の問題点と課題を考える力を培い、生徒一人ひとりの生きる力の育成を目指した生徒理解・指導・援助への実践性を養う。</p> <p>授業形態は講義を中心に、適宜グループによる事例研究や体験学習を行う。また検討成果等についてのレポート、発表、全体討論などを課す。</p>	
	教育相談論	<p>傾聴の大切さを中心にカウンセリングの基本的な考え方と技法の基礎について学び、生徒・保護者・教師等に対する教育相談について確実な理解を図ることを目標とする。</p> <p>教育現場における問題の解釈や対応の他、学校内での支援体制や外部機関との連携についての理解も深め、問題への対処だけでなく予防のための教育実践としても捉えられる視点を養う。</p> <p>授業形態は講義を中心に、適宜ブレインストーミング、ディスカッション等のグループワーク、およびロールプレイ等の体験学習を行う。また課題レポート、発表、全体討論などを課す。</p>	
	教職実践演習(中・高)	<p>教職課程の総まとめとして、大学4年間で学生が学んだ学習知と教育実習等で得られた実践知の統合を図り、確かな教師力を涵養することを目標とする。</p> <p>特に、教師としての使命感や責任感や教育的愛情、社会性や対人関係能力、幼児児童生徒理解や学級経営力、教科の指導力について、教員養成段階で必要とされる水準に確実に達するようにする。</p> <p>履修カルテに基づいてこれまでの学習を振り返りつつ、発表・討論・ロールプレイング・模擬授業等を演習として行う。</p>	
	事前・事後指導	<p>この科目は、高等学校教育実習と連動した科目であり、この実習の事前に5回、事後に3回授業を実施する。</p> <p>第1回 事前指導Ⅰ(実習の心得)</p> <p>第2回 事前指導Ⅱ(事務手続きと模擬授業)</p> <p>第3回 事前指導Ⅲ(高等学校長による講義)</p> <p>第4回 教育実地研究Ⅰ(高等学校での授業観察と合評会)</p> <p>第5回 教育実地研究Ⅱ(高等学校研修主任による指導)</p> <p>第6回 事後指導Ⅰ(高等学校長による講義)</p> <p>第7回 事後指導Ⅱ(模擬授業)</p> <p>第8回 事後指導Ⅲ(模擬授業とまとめ)</p>	
	中学校教育実習	<p>本学近隣の4つの中学校(福岡市立香椎第1中学校、香椎第2中学校、香椎第3中学校、城香中学校)において、中学校教育現場を実際に観察させ、必要に応じて教育活動に参加させる「観察・参加実習」を行う。</p> <p>この実習では、教職を志望する2年次学生に、教職の何たるかを実感・体得させることによって、実習後の勉学意欲を増進させることを重視する。</p> <p>効果的な実習成果が得られるように、各時間の教育活動過程について記録をとったうえで、それをまとめるかたちでの「観察・参加実習日誌」を作成させる。</p>	

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文学部 国際教養学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教 職 科 目	高等学校教育実習	<p>学生がこれまでに培ってきた能力を高等学校の教育現場で発揮させることによって、教師の仕事の意義と役割を深く理解させることを目標としている。</p> <p>実習を通して、学習指導・生徒指導・学級経営等を十分に行うことができるようになるだけでなく、学生自身の人生観・職業観・社会観をさらに深めさせる。</p> <p>このような体験によって得られた成果を、教職課程の最後の総まとめである教職実践演習で振り返ることができるようにする。</p>	
	学校経営と学校図書館	<p>学校教育において学校図書館が果たす役割を明らかにして、学校図書館の理念、発展過程とその課題、教育行政とのかかわり、学校図書館経営のあり方などをはじめとして、学校図書館全般についての基本的理解を形成することを目標とする。</p> <p>学校図書館経営の責任者として司書教諭が担うべき任務と役割を明らかにして、学校内の協力体制づくりや司書教諭としての研修の重要性について解説する。今日の学校教育の諸課題を踏まえて、学校図書館の教育的意義と司書教諭の果たすべき任務を明確に理解させるために、意欲的で創造的な活動を学生に促す学習内容を提供する。</p> <p>主な内容は、次の4項目である。(1)学校図書館の理念と教育的意義、(2)教育行政と学校図書館、(3)学校図書館の経営、(4)司書教諭の任務と役割。</p>	隔年開講
	学校図書館メディアの構成	<p>学校図書館メディアの構成に関する理解と実務能力の育成を目指すとともに、司書教諭としての基本的な考え方の構築を図ることを目標とする。</p> <p>高度情報社会における学習環境の変化に伴うメディアの教育的意義と役割について取り上げ、各種メディアの種類と特性について理解させ、適正な資料の選択と収集を目的とした評価を行うことができる能力を育成する。</p> <p>主な内容は、次の5項目である。(1)高度情報社会における学校図書館メディア、(2)学校図書館におけるメディアの種類と特性、(3)学校図書館メディアの構築、(4)学校図書館メディアの組織化の意義と展開、(5)学校図書館メディアの組織化の実際。</p>	隔年開講
	学習指導と学校図書館	<p>学校図書館は学習指導の展開に寄与するという役割を有するので、学習指導を行う場合に学校図書館メディアをどう活用するかについて理解させることを目標とする。</p> <p>児童生徒が学校図書館に備えられた多様なメディアを活用して自主的、効果的、かつ積極的な学習を行うためには、学習目的に合致したメディアを選択収集し、活用し、学習結果をまとめて発表する能力が一定の計画のもとに育成されていなければならない。この能力は、高度情報社会ではきわめて重要である。</p> <p>主な内容は、次の5項目である。(1)教育課程の展開と学校図書館、(2)主体的学習と学校図書館メディア活用能力の育成、(3)学習過程における学校図書館メディア活用、(4)学習指導における学校図書館の利用、(5)学校図書館における情報サービス。</p>	隔年開講

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文学部 国際教養学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教 職 科 目	読書と豊かな人間性	<p>司書教諭には、児童生徒の豊かな人間性の涵養に資するために、全教職員の指導活動を援助し、父母や社会の人々に働きかけるなどの活躍が要求されている。このことを踏まえた上で、児童生徒の発達段階に応じた読書教育の理念と方法について理解を深めさせることを目標とする。</p> <p>読書から遠ざかっている児童生徒の現状や、読みの多様化が進展している実態から、児童生徒に読書を促し、読書の生活化を図る方法を探る。</p> <p>主な内容は、次の5項目である。(1)児童生徒の読書の意義と目的、(2)発達段階に応じた読書の指導と計画、(3)児童生徒向け図書の種類と活用、(4)読書の指導方法、(5)家庭、地域、公共図書館等との連携。</p>	隔年開講
	情報メディアの活用	<p>学校図書館における多様な情報メディアの特性と活用方法を理解させることを目標とする。</p> <p>各メディアは、それが扱う情報形態の特性・特色のみならず、物理的媒体としての特性・特色をもつ。これを生かした活用方法を習得させ、同時に情報メディアが有する「負の要素」にも目を向けさせて、それに児童生徒が染まらないように指導することの重要性についても認識させる。</p> <p>主な内容は、次の5項目である。(1)高度情報社会と人間、(2)情報メディアの特性と選択、(3)視聴覚メディアの活用、(4)コンピュータの活用、(5)学校図書館メディアと著作権。</p>	



授 業 科 目 の 概 要				
(国際文理学部 環境科学科)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学部 共通科目	ファーストイヤー・ゼミ	ファーストイヤー・ゼミ I 教養教育を享受し十全なアカデミックライフを送るための基本となるスタディースキルおよび論理的思考能力と的確な日本語の運用能力の育成を図る。 その目的の下、ファーストイヤー・ゼミIでは、「学術言語プログラム」と関連させながら、図書館利用法、文献資料の収集・活用法、情報収集と編集の方法などの基本的なスキルに始まり、文章表現、プレゼンテーション、日本語による討論を通じて実践的な主体的学習能力を育成する。 本学で学ぶことの意義を学生に自覚させ、学習の動機付けを図るため、本学固有の学校文化(大学史や教育理念等)に関する教育やキャリア形成の導入学習を実施する。また、フィールドスタディの事前学習としても活用する。 長期留学生向けには、日本語の基礎教育の一環とする。	講師以上の教員全員が輪番制で担当する。	
		ファーストイヤー・ゼミ II ファーストイヤー・ゼミ I で養った論理的思考能力と言語による運用能力をさらに発展させるために、担当教員の指導の下、特定のテーマについて学生が調査・研究・発表をおこなう。発表においては、学生同士のピア・レビューをおこなうことにより、主体的な学習の結果に対する相互の批判能力を養う。 また、フィールドスタディの事後学習としても活用する。	講師以上の教員全員が輪番制で担当する。	
	学術言語プログラム (AEP)	学術英語コミュニケーション I 福岡女子大学(FWU)で英語を駆使して知的にかつ充実した学生生活を送るための「必須の知的生活術」を修得する。 大学の部局や施設の名称、授業の履修システム、学期のスケジュールの立て方、学習や生活面の助言の受け方、図書館やメディア・センターの活用法、クラブやボランティア活動、キャリア設計など、英語により理解し、英語により問題解決する態度を養う。身近にある英語を発見し、英語でコミュニケーションをとる意義を考える。また英語での自己紹介のグループでの練習を通してほかの学生との係わり合いを深めていく。		
		学術英語コミュニケーション II 学術英語リーディング II と連動したクラス運営をおこなう。 報道記事、科学コラム、エッセイ、小説などを扱う読解授業の思考をさらに深めるためグループ・ディスカッション(簡単な発表と質疑応答)を中心におこなう。同時にコミュニケーションの相手と情報や意見交換をする上で必要なアウトプットのためのスキルを学ぶ。口頭での発表の場合には話す速度、声の大きさ、抑揚などを身につけることも必要である。音読などで英語を声に出す練習を取り入れたり、聞いて理解してもらうための言葉の選び方、パラフレーズの練習も取り入れていく。		
		学術英語コミュニケーション III 学術英語コミュニケーション I、II で学んだことを発展させ、スキルとストラテジーの活用を促す。 ブレイン・ストームやマインド・マップなどの手法を取り入れ、情報の整理をする練習をする。既習科目の仕上げとして「ポスター発表」に向けた準備と発表をおこない、コミュニケーションの発表者と聴取者としての側面を実践的演習形式で学ぶ。発表者に対しては、学術英語コミュニケーション I で修得した図書館の活用法と情報収集法の定着を確認し、聴取者へはノート・テイキング、質疑応答の方法の定着ぶりを確認する。		

授 業 科 目 の 概 要				
(国際文理学部 環境科学科)				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学部 共通 科目	学術 英語 プログラム (AEP)	学術英語コミュニケーションⅣ	学術英語リーディングⅤと連動。学術英語コミュニケーションⅢまでに学んだことを生かし、専門領域に特化した高度な内容について発言することを目標とする。 決まり文句や表現を含めた効果的なディスカッション方法を学ぶことで、話題変更の方法、グループで交わされた意見の集約、意見の分析の仕方を体得する。学術英語リーディングⅤで読んだ資料を基に、学術英語コミュニケーションⅢで学んだブレイン・ストーミングやマインド・マップを使い学生自身が興味と知識をもつ話題に関し発表課題を決定し、学期末にはファイナル・プレゼンテーションを行う。同時に質疑応答をおこない受講者間で批評・評価をおこなう。	
		学術英語リスニングⅠ	英語で開講されるアカデミックな講義を理解し効果的にノートをとれるよう訓練をおこなう。 まず音声学の基礎、特にアメリカ英語に見られる音の変化を学ぶ。さらに英語のバリエーションに触れ、それぞれの特徴を学ぶ。これらを精聴することで英語の音を身につける練習をする。また英語での講義の基本構成を学んだ後、ノート・テイキングの技術と授業後に理解の展開を図るためのノート構成法を学ぶ。ここでは多聴がとりいれられ、短い講義やショート・トークから要点をつかむ練習をする。	
		学術英語リスニングⅡ	学術英語リスニングⅠで学んだ知識の定着を図るためにe-learningを用いた多聴をおこなう。 学術英語リスニングⅠでいろいろな英語に慣れたので、ここではやや長い会話や講義を聞いてその内容を把握する練習をする。またコミュニケーションによるインタラクティブな側面を重視しTAによるチュートリアルをおこなう。学術英語コミュニケーションⅡと連動して、アウトプットのためのリスニング指導をおこなう。要点をつかみ、その内容に対する質問を考えるという一連の作業を練習することにより、受動的なリスニングから能動的なリスニングへの転換を図る。	
		学術英語リーディングⅠ	大学に入るまでに学んだ文法事項を再確認し、文から段落、セクションに至る談話の構造を理解して正確に文章を把握する力を身につける。長文を読む準備として、文章同士の論理的なつながりも理解できるようにする。また、パラフレーズの考えを導入して日本語から英語、英語から日本語の語彙だけでなく、英語で発信するための英語から英語への語彙の増加も目指す。 これらの目標を達成するために精読とともに、次の段階の英語を英語として理解する力の育成のために多読も取り入れていく。	
		学術英語リーディングⅡ	学術英語コミュニケーションⅡと同じ教材を使用する。このクラスでは主に受動能力が問われる読解力から、発信する能力への橋渡しが目標とされる。そのため、報道記事、科学コラム、エッセイ、短い小説など様々な内容の英文に触れ、それぞれの特徴を理解し、内容を理解することを中心に授業を展開する。 また小さなグループの中でその内容について英語で口頭発表し、学生自身の意見も簡単な英語を使って言えるようにする。また語彙の育成や多読も学術英語リーディングⅠに引き続き行われる。	

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文理学部 環境科学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学部 共通 科目	学術 英語 プ ロ グ ラ ム (A E P)	学術英語リーディングⅢ	学術英語リーディングⅠ、学術英語リーディングⅡで学んだことを発展させ、さらに読解能力を高める。 学生の専門と関係の深い国際、環境、食・栄養等を扱う内容を対象に、多読・速読の訓練を行い、長文を読んで大意を汲み取りつつ、思考のフレームを構築する。また読解を深めるために読んだ内容を図表化するなどのリーディング・ストラテジーの導入も行う。語彙の育成などの必要に応じて、コンピュータの自学システムを活用する。 さらに自分で興味を持った簡単な英語の記事や論文をインターネットで探して読む練習も取り入れ、「自分で学ぶ姿勢」を育成する。
		学術英語リーディングⅣ	学術英語ライティングⅢと同じ教材を使用する。学術英語リーディングⅠ、学術英語リーディングⅡで学んだことを発展させ、さらに読解能力を高める。質の高い英語で書かれた論文や小説に親しむ。また精読によって英文の構造が持つ論理性に配慮できるようにする。 学術英語リーディングⅢに引き続き、自分で学ぶ姿勢の育成のためにも、興味のある分野で簡単なリサーチを行い、英語によるレポートを書き、読んだものの内容を要約するとともにその内容に客観的な批評を加味する。またそれを口頭発表することで発信力の育成にもつなげる。
		学術英語リーディングⅤ	学術英語リーディングⅠからⅣで学んだことを生かし、さらに高度な内容の長文を多読できるようにする。クラスによって「国際」「環境」「食」などの専門領域に特化した英文が集中的に読めるものを用意し、学生が想定する専門と興味に応じて受講できるようにする。 また学術英語ライティングⅣでの資料として英文で書かれた研究論文を読み、要点をまとめ、批評し、論文を書く準備をする。ひとつの論文だけではなく、複数の論文や資料を読み、それらをまとめる練習をする。
		学術英語ライティングⅠ	節および文の基本的なつくりを学び、センテンス単位から、さらにパラグラフ単位の文章を書く力をつける。同時開講の学術英語リーディングⅠと連動させ、語彙を増やし表現力を高める。学術英語ライティングⅠとⅡは共通のテキストを使用する。 日本人の英文では主語のあいまいなものが多く、能動的な表現を避ける傾向にある。簡単な英文でも読む側がわかりやすい英文を書く能力は、特に研究論文の場合に必要な。読みやすい英文を身につけるために受講生の作文は、教員が添削し、その結果をクラス全体にフィードバックする。
		学術英語ライティングⅡ	学術英語ライティングⅠをふまえ、500語程度のショート・エッセイを書く練習をする。学術英語ライティングⅠとⅡは共通のテキストを使用する。 ひとつの話題に関して自分なりに簡単なリサーチをし、複数のパラグラフを論理的に積み重ねて、効果的に情報を伝える力をつける。表現方法や構成について、受講生どうしで批評し合い、協同編集を経て読み手に理解される文章の書き方を実践的に学ぶ。受講生のエッセイは、教員が添削し、その結果をクラス全体にフィードバックする。

授 業 科 目 の 概 要					
(国際文理学部 環境科学科)					
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考		
学部共通科目	学術英語プログラム(AEP)	学術英語ライティングⅢ	同時開講の学術英語リーディングⅣと連動した授業を展開する。 リーディングのクラスで扱うテキストの要約を行うことを通して、文章の論理的構成を理解し、自身の作文に応用できるようにする。また要約に加え、テキストに対する批評を書くことを通して、自分の考えを論理的に伝える方法を学ぶ。表現方法や構成について、受講生どうして批評し合い、協同の編集作業を経て、読み手に理解される文章の書き方を実践的に学ぶ。受講生の作文は、教員が添削し、その結果をクラス全体にフィードバックする。		
		学術英語ライティングⅣ	各自の専門に沿ったテーマを定め、関連文献を読んだり、データの収集・分析などを行い、その結果を踏まえ、自身の考察を含めた学術小論文(3000語10ページ程度)を書くことを目標とする。 学術論文に用いられる表現や、文献の引用の仕方など、論文執筆に向けた技術的な指導も行う。表現方法や構成について、受講生どうして批評し合い、読み手に理解される論文の書き方を実践的に学ぶ。小論文は教員が評価し、その結果をクラス全体にフィードバックする。		
	学術言語プログラム	学術日本語プログラム(AJP)	学術日本語リーディングⅠ	様々なテーマの比較的短い論理的文章を読む。授業では、レポートや学術論文などの論理的文章を読むのに必要な文法知識、構造に関する知識を学び、各自の専門分野の論文を独力で読んでいくための基礎的読解力をつける。また、レポートや論文の文体・語彙・表現に慣れ、内容・論旨を正確に把握する力を身につける。	
			学術日本語リーディングⅡ	「リーディングⅠ」で学んだことを発展させ、さらに読解力を高める。いくつかのテーマに関する一定の長さの文章を精読し、内容を正確に理解しクラスで共有したうえで、異なる視点からの関連資料を読む。読んだ資料の論点を整理し、まとめて発表し、自分の意見を述べ、クラスで話し合う。また、文中の語彙・表現に関しても、適宜説明し、理解・習得させる。	
		学術日本語リーディングⅢ	「リーディングⅠ・Ⅱ」で学んだことを生かし、さらに高度な内容の長文を多読できるようにする。「国際教養」クラスと「環境科学」「食・健康」クラスに分け、各専門領域に関する分野の基礎知識が得られる文章を用意し、専門科目を学ぶための読解力をつける。各学生に読む部分を分担させ、内容をまとめさせ、発表させる。同じ専門の学生同士で協働することにより、理解を深めさせる。		
		学術日本語ライティングⅠ	レポートや論文に必要な論理的文章の書き方の基礎を学ぶ。まず「文の基本」として、今まで習ってきた文法項目や表現の再確認を行い、ミスのない正確な文章が書けるようにする。また、文章表現の規則を学び、文と文のつながりを考えて、まとまった内容の文章を分かりやすく書く練習をする。「リーディングⅠ」と連動し、論理的文章に使われる語彙・表現の習得を進める。学生の作文は、教師が添削し、それをクラス全体にフィードバックする。		
	学術日本語ライティングⅡ	新聞記事や論説文を読むためには、書き言葉に特有の漢字語彙の学習が必要となる。非漢字圏の学生はもちろん、漢字圏の学生も漢字熟語の運用についてはなかなか習得が難しい。この授業では、学生が自分の専門分野や興味の対象に応じて、漢字語彙力を伸ばせるよう、専門分野別に「アカデミックな読解のための共通漢字」を拡張していく。前期では、基礎漢字の再確認もしながら、また、読み書きだけでなく文中での用法や使用場面などを含めた練習活動を行う。			

授 業 科 目 の 概 要				
(国際文理学部 環境科学科)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学部共通科目	学術言語プログラム 学術日本語プログラム(AJP)	学術日本語ライティングⅢ	「ライティングⅠ」を踏まえ、論理的文章の書き方を学んでいく。後期では、レポートなどを書くために必要な論理の組み立て方や文章の書き方を学ぶ。論理的展開や表現のモデルを示した読み物を読み、それを参考に作文課題に取り組む。また、引用や討論などに必要な要約力の養成にも力を入れる。要約するテキストは「リーディングⅡ」と連動させる。学生の作文は、仲間同士の合評(ピア・レビュー)を経た後、教師が添削し、それをクラス全体にフィードバックする。	
		学術日本語ライティングⅣ	「ライティングⅡ」に引き続き、専門分野別「アカデミックな読解のための共通漢字」を学んでいく。前期ではテキスト16課中の8課を学ぶので、後期では残り8課を学習する。読解、作文、口頭コミュニケーションなどの活動とも関連づけた総合的な学習も取り入れ、その後の専門性の高い文献を読むための基礎を作ると同時に、自立して専門漢字語彙を習得していける力を養う。	
		学術日本語ライティングⅤ	レポートや論文作成に必要な文章の書き方を学ぶことを目指す。そのために、1年次開講の「ライティングⅠ」「ライティングⅢ」での学習事項を応用しながら以下の1.～3.のことができるようになるように取り組んで行き、各学生の専門に沿った最終課題(期末レポート)完成という成果に結び付ける。 1. 論理的な思考方法を身につける 2. 論理的な文章の展開方法を学び、それを意識して文章の構成を考える 3. 説明的な文章をなるべく多く読む。読む時には、内容だけでなく文章の構成や論理の組み立て方にも注意する	
		学術日本語リスニングⅠ	日本語の音声・音調の特徴を知り、必要な情報を聞きとる・発話意図をつかむ・話の展開を予測する・大意をつかむ等の聴解ストラテジーを身につける。大学の講義の基本構成を理解し、効果的にノートがとれるような訓練を行う。また、各自の自分の発音についても弱点を知り、相手に分かるように聞いてもらえるための練習をする。	
		学術日本語リスニングⅡ	様々な音声素材を聞き、場面や状況を把握したり、スピーチレベルから話者の関係を理解したりして、正確な内容理解に繋げる。聞いて分かる語彙を増やし、高度な内容、抽象的な内容も聞けるようにする。また、聞いた内容をまとめて話す・書く練習も行う。録画したTV番組などから、ある程度まとまった日本人の話を聞かせ、ノートをとり、聞いた内容を簡潔にまとめて発表させる。	
		学術日本語コミュニケーションⅠ	日本語の口頭能力向上を目指すための授業。 自分が今興味を持っていることについて、詳しく説明できるようになること。話をした相手に自分と同じように興味を持ってもらえるようになること。また、日本人や日本語を勉強している人と話をしている、円滑に会話が続けられるようになるための授業活動を行う。その後、現代的な話題について扱ったテキストの内容理解および理解した内容に関してのグループディスカッションを行う。	

授 業 科 目 の 概 要				
(国際文理学部 環境科学科)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学部 共通科目	学術 言語 プログラム	学術日本語コミュニケーションⅡ	「コミュニケーションⅠ」で学んだことを発展させ、スキルアップを促す。さまざまな授業の仕上げとして「ポスター発表」に向けた準備と発表を行い、コミュニケーションの発表者と聴取者としての側面を実践的演習形式で学ぶ。発表者に対しては、図書館の活用や情報収集法の定着、聴取者へはノート・テイキング、質疑応答の方法の定着ぶりを確認する。ビジターとして日本人学生にも参加してもらう。	
		学術日本語コミュニケーションⅢ	「リーディングⅢ」「ライティングⅤ」と連動。「コミュニケーションⅡ」で学んだことを生かし、専門領域に特化した高度な内容について発言できることを目標とする。決まり文句や表現を含めた効果的なディスカッションの方法を学ぶことで、話題変更の方法、グループで交わされた意見の集約、意見の分析の仕方を体得する。学期末にはファイナル・プレゼンテーションと質疑応答を行い、受講者間で批評・評価を行う。	
		学術日本語日本事情Ⅰ	日本語を駆使して、大学で知的にかつ充実した学生生活を送るための「必須の知的生活術」を習得する。また、日本語で授業を受け、日本人学生とともに学び、寮生活を送るために必要な日本についての基本的知識(生活・地理・社会)を再確認する。また、世界の中の日本と自国を客観的に見る視野を持ち、自国について紹介したり、説明したりできるようになる。	
		学術日本語日本事情Ⅱ	新聞やTVニュース・番組、雑誌などから、現代日本社会で起きていることを知り、その背景にある歴史や文化、日本人の考え方を学ぶ。現代日本における諸問題が自国のメディア、世界のメディアでどのように扱われているかにも目を向け、理解を深めさせる。	
	アド バン スト ・ イン グリ ッ シ ュ	英語上級Ⅰ	必修の学術英語をすべて履修した学生に対して、開講される授業科目である。したがって学術英語プログラムでは取り入れられていない種類の英語を学ぶことができ、より高度で総合的な英語力の育成を目的とする。  English and Films 映画は視覚、聴覚教材として優れており、映画を媒体として、文化・環境・自然・食・健康に関する問題を考察する。併せて、映画の見方や映画の文法を学びつつ、教室の枠を越えた英語との接触を促す効果をねらう。	
		英語上級Ⅱ	必修の学術英語をすべて履修した学生に対して、開講される授業科目である。したがって学術英語プログラムでは取り入れられていない種類の英語を学ぶことができ、より高度で総合的な英語力の育成を目的とする。  English Literature for Non-major 英語を学ぶ上で、英語圏の文化に対する興味は学習動機を高めるといふ役割を果たすことが多い。やさしい作品を原文のまま読み、英語特有の表現や場面描写を学び、作品の特徴を理解する。併せて、文学作品を分析・解釈するに際して、政治、哲学、思想、心理学などの知見を総動員する必要があることを学び、読む行為は学際的営みであることを体得する。	

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文理学部 環境科学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学部 共通科目  外国語科目	英語上級Ⅲ	<p>必修の学術英語をすべて履修した学生に対して、開講される授業科目である。したがって学術英語プログラムでは取り入れられていない種類の英語を学ぶことができ、より高度で総合的な英語力の育成を目的とする。</p> <p>General English for Science 科学技術に関する語彙や表現を学ぶことによって、さらに高度な論文を読む練習をする。また英語での論文を発表することを念頭に置き、American Psychological Association (APA)のマニュアルに従って研究論文の基本的な構造を学ぶ。</p>	
	中国語Ⅰ	<p>中国語入門 この科目の目的は口語中国語の基礎力を身につけることにある。とくに正しい発音のマスターと初歩文法の学習に主力をそそぐ。書き取りを重視する。 【発音】中国語の母音・子音・声調を、聞き分けることができ、自分で発音でき、ピンイン(ローマ字による中国語表記法)で書き取れるように訓練する。 一音節から二音節、さらに短文になっても、声調が正しくできることが目標である。 前期は発音とピンインの習得に時間の7割、簡単な断定文、形容詞文、動詞文の学習に時間の3割を使う。 【ピンインと漢字】発音の習得とあわせて、ピンインによる表記法を学ぶ。 【単語・文章・運用】教科書の単語と文章を使って、簡単な中国語の読み書きができるようになることが目標である。</p>	
	中国語Ⅱ	<p>中国語入門 この科目の目的は口語中国語の基礎力を身につけることにある。とくに正しい発音のマスターと初歩文法を用いた簡単な会話できるようになることを目標とする。発音応用訓練を重視する。 【発音】中国語の母音・子音・声調を、聞き分けることができ、自分で発音でき、ピンイン(ローマ字による中国語表記法)で書き取れるように訓練する。 一音節から二音節、さらに短文になっても、声調が正しくできることが目標である。 前期は発音とピンインの習得に時間の7割、簡単なあいさつ、自己紹介等の練習に時間の3割を使う。 【ピンインと漢字】発音の習得とあわせて、ピンインによる表記法を学ぶ。 【単語・文章・運用】教科書の単語と文章を使って、状況に応じた簡単な中国語を自分で言えるようになることが目標である。</p>	
	中国語Ⅲ	<p>中国語Ⅰ履修済みの学生向け。 学んだ発音とピンイン表記法を生かして大学中国語初級文法の学習と応用を継続する。口頭作文の能力のレベルアップに力を入れる。テキストの例文を100%身につけ、それを自分で書き、口で話し、そして聞き取れるまで練習する。</p>	
	中国語Ⅳ	<p>初級会話を中心とする授業で、中国語の発音と初歩文法を一応習得した学生を対象とする。ある程度の中国語読解力が必要である。 聞き取りと会話力の強化に全力を注ぐ。テキストの内容はもちろん、簡単な日常会話から設定した話題をめぐって会話訓練を行う。</p>	

授 業 科 目 の 概 要				
(国際文理学部 環境科学科)				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学部 共通 科目	外国 語 科 目	中国語Ⅴ	初級中国語を一応習得した者を対象とし、すでに学んだ発音、語彙、文法を復習しながら、中級レベルの表現や文法を覚え、語彙の拡大や表現力の向上、特に実用会話能力を身につけることを目指す。 教材としては大学生中国語中級レベルに相当するものを選ぶ。	
		中国語Ⅵ	この授業は、中国語の初級文法を一通り終え、継続学習を希望する者を対象とする。実用性を重視し、日常生活や、仕事の場面でよく使われる平易な会話文から入り、徐々に程度を高めて今日の中国社会の姿や中国人の生活習慣、ものの考え方などに触れながら、「聴く、話す、読む、書く、訳す」という五つの技能を身につける。長文の読解や作文などに特に重点を置く。 教材としては大学生中国語中級レベルに相当するものを選ぶ。	
		韓国語Ⅰ	韓国語学習の入門として、基本的な日常会話を題材に、韓国語の文字を覚え、正しい発音を身に付けることを目標にする。 具体的には、簡単な挨拶と会話に始まり、韓国語の基本母音と子音、激音と濃音、発音のルールを学習する。徹底して口語韓国語の習得を図り、韓国人とコミュニケーションを図る積極的な姿勢を持つことを目指す。	
		韓国語Ⅱ	韓国語Ⅰを補完する学習として、ここでは基礎的は文法を徹底して学習する。前半は日常会話で簡単な表現を題材にして、文法の初歩を学び、後半では平易な文章を読むことが出来るよう韓国語の文法基礎を習得する。テキストの例文を100%身につけ、文法的解説ができるようにする。	
		韓国語Ⅲ	韓国語Ⅰ(前期)の授業を踏まえ、韓国語によるコミュニケーションの訓練を中心に授業を展開する。円滑な会話を行うには、先ずは定型表現を習得するとともに、描写、要求、依頼、質問、主張などの自己表現を行うために必要な構文と語彙の習得が求められる。本授業では、こうした表現力の養成を中心に行う。	
		韓国語Ⅳ	韓国語Ⅱ(前期)の授業を踏まえ、韓国語の文法と言語構造についての理解を図る。文法と構文問題に焦点を当て、中から上級程度の言語構造の理解を図る。また、中級程度の読解教材を用いて、韓国語を正確に読み取る力を養成する。	
		韓国語Ⅴ	韓国語で書かれた文献を正確に読み取る読解力を養成する。1年次に習得した文法構造を再確認しながら、より高度な構造と語彙で書かれたテキストを扱う。併せて韓国語による作文力をも養成し、書くこと・表現することを意識しながら読解活動を行う姿勢を養う。	
		韓国語Ⅵ	2年生前期の韓国語Ⅴで用いた教材を更に発展させ、環境や食・健康問題、或いは国際関係論を扱った韓国語で書かれたテキストを正確に読み取る読解力を養成する。併せて韓国語による作文力をも養成し、書くこと・表現することを意識しながら読解活動を行う姿勢を養う。	



授 業 科 目 の 概 要				
(国際文理学部 環境科学科)				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学部 共通 科目	外国 語 科 目	ドイツ語Ⅰ	<p>新たな外国語を学ぶことの意義を確かめて、ドイツ語圏の多方面の魅力的な文化に親しみながら、ドイツ語の単語と文法知識を身につけることを目標にする。</p> <p>名詞の性や、名詞・冠詞類の格変化、そして動詞の人称変化等の、ドイツ語に特有の文法事項に習熟し、英語や日本語と対比のもとに言語の多様性を理解する。</p> <p>国際化・グローバル化の進む現代に、多文化共生の平和な社会を築いていくという観点から、ドイツ言語文化の日常的な調査をうながして、人間力向上の一貫としてのドイツ語学習を動機づける。</p>	
		ドイツ語Ⅱ	<p>第2外国語の学習によって日本語と英語と異なる文法法則と出会い、言語の多様性を体得し、多言語学習をとおして日本語が固有に持つ世界観を広げる。</p> <p>この授業では会話とリスニングを中心に学習するが、小クラスであることを活かし、会話練習に十分な時間を割く。ドイツ語の正しい発音を身に付け、自己紹介から自分状況を簡単なドイツ語で表現する訓練を行う。</p> <p>国際化・グローバル化の進む現代に、多文化共生の平和な社会を築いていくという観点から、ドイツ言語文化の日常的な調査をうながして、人間力向上の一貫としてのドイツ語学習を動機づける。</p>	
		ドイツ語Ⅲ	<p>新たな外国語を学ぶことの意義を確かめて、ドイツ語圏の多方面の魅力的な文化に親しみながら、ドイツ語の単語と文法知識を身につけることを目標にする。</p> <p>前置詞や、助動詞、文構造、そして時制等の、ドイツ語に特有の文法事項に習熟し、英語や日本語と対比のもとに言語の多様性を理解する。</p> <p>国際化・グローバル化の進む現代に、多文化共生の平和な社会を築いていくという観点から、ドイツ言語文化の日常的な調査をうながして、人間力向上の一貫としてのドイツ語学習を動機づける。</p> <p>ドイツ語Ⅰとドイツ語Ⅱ、ドイツ語Ⅳとあわせて、ドイツ語検定試験4級レベルに達する。</p>	
		ドイツ語Ⅳ	<p>第2外国語の学習によって日本語と英語と異なる文法法則と出会い、言語の多様性を体得し、多言語学習をとおして日本語が固有に持つ世界観を広げる。</p> <p>既習の語彙・構文やコミュニケーション・スキルに基づいて、身の回りの生活環境(大学や町)を口頭と筆記で描写する能力を養い、様々なリスニング材料によって聴取能力を強化する。ドイツ語Ⅰとドイツ語Ⅱ、ドイツ語Ⅲとあわせて、ドイツ語検定試験4級レベルに達する。</p>	
		ドイツ語Ⅴ	<p>一年生時に受講したドイツ語に基づいて、簡単なテキストを耳で理解し、テキストを解説し、テキストの語彙を使いながら、テキストについて自分の意見を表現する。また、新しい文法事項を学生によるテキストの要約活動や問題提供をとおして学ぶ手法を取り入れる。多様なテキストによってドイツの多面的な文化・社会・環境の理解を促進させる。</p> <p>時制(過去形)や、副文、関係代名詞、そして受動態、ドイツ語に特有の文法事項に習熟し、英語や日本語と対比のもとに言語の多様性を理解する。</p> <p>国際化・グローバル化の進む現代に、多文化共生の平和な社会を築いていくという観点から、ドイツ言語文化の日常的な調査をうながして、人間力向上の一貫としてのドイツ語学習を動機づける。</p>	

授 業 科 目 の 概 要				
(国際文理学部 環境科学科)				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学部 共通 科目	外国 語 科 目	ドイツ語Ⅵ	<p>ドイツ映画をつかって、聴取能力を強化し、その歴史的・社会的な背景を学習することによってドイツの理解を高める。映画を台本や簡単な参考文献の解読によりドイツ語のテキストの扱いを慣れ、学生一人一人自分でドイツ語のインターネットで情報を検索するによって、ドイツ語でのネットになじませ、あらゆる研究にドイツを視野に入れさせる。</p> <p>国際化・グローバル化の進む現代に、多文化共生の平和な社会を築いていくという観点から、ドイツ言語文化の日常的な調査をうながして、人間力向上の一貫としてのドイツ語学習を動機づける。</p> <p>ドイツ語Ⅴとドイツ語Ⅵは一年生の目標であるドイツ語検定試験4級取得を踏まえて、ドイツ語検定試験3級レベルを目指す。</p>	
		フランス語Ⅰ	<p>新たな外国語を学ぶことの意義を確かめて、フランス語圏の多方面の魅力的な文化に親しみながら、フランス語の単語と文法知識を身につけることを目標にする。</p> <p>名詞の性や、名詞・冠詞類の格変化(名詞につく冠詞類の各変化)、そして動詞の人称変化(動詞の活用)、前置詞、不規則動詞の直説法現在形、非人称構文、さらに時制(近接未来・近接過去)等の、フランス語に特有の文法事項に習熟し、英語や日本語と対比のもとに言語の多様性を理解する。</p> <p>国際化・グローバル化の進む現代に、多文化共生の平和な社会を築いていくという観点から、フランス言語文化の日常的な調査をうながして、人間力向上の一貫としてのフランス語学習を動機づける。</p>	
		フランス語Ⅱ	<p>第2外国語の学習によって日本語と英語と異なる文法規則と出逢い、言語の多様性を感じ、言語の中で表れている社会関係によって世界観が広がる。この授業は会話とリスニングを中心的に学習する。小クラスで多くの会話の練習ができ、教員が細かく指導できる。</p> <p>フランス語の発音と簡単な挨拶から始める。自己紹介から自分の周囲の状況を簡単なフランス語で表現し、表現された他人の状況と似ている(類似点のある)話しを聞き取ることを練習する。選択的聞取を意識させ、短いリスニング問題で練習する。</p> <p>国際化・グローバル化の進む現代に、多文化共生の平和な社会を築いていくという観点から、フランス言語文化の日常的な調査をうながして、人間力向上の一貫としてのフランス語学習を動機づける。</p>	
		フランス語Ⅲ	<p>新たな外国語を学ぶことの意義を確かめて、フランス語圏の多方面の魅力的な文化に親しみながら、フランス語の単語と文法知識を身につけることを目標にする。</p> <p>前置詞や、不規則動詞の活用、非人称構文、そして時制(現在、近接未来、近接過去)等の、フランス語に特有の文法事項に習熟し、英語や日本語と対比のもとに言語の多様性を理解する。</p> <p>国際化・グローバル化の進む現代に、多文化共生の平和な社会を築いていくという観点から、フランス言語文化の日常的な調査をうながして、人間力向上の一貫としてのフランス語学習を動機づける。</p> <p>フランス語Ⅰとフランス語Ⅱ、フランス語Ⅲとあわせて、フランス語検定試験4級レベルに達する。</p>	

授 業 科 目 の 概 要				
(国際文理学部 環境科学科)				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学部 共通 科目	外国 語 科 目	フランス語Ⅳ	<p>第2外国語の学習によって日本語と英語と異なる文法法則と出逢い、言語の多様性を感じ、言語の中で表れている社会関係によって世界観が広がる。</p> <p>フランス語Ⅰとフランス語Ⅱで学習した語彙やコミュニケーション・スキルに基づいて、自分の周囲の環境(大学や町)を口頭と筆記で描写する能力を促進し、様々なリスニング資料によって聞取能力を強化する。自習的なリスニング練習を新しい情報技術で促進する。</p> <p>国際化・グローバル化の進む現代に、多文化共生の平和な社会を築いていくという観点から、フランス言語文化の日常的な調査をうながして、人間力向上の一貫としてのフランス語学習を動機づける。</p> <p>フランス語Ⅰとフランス語Ⅱ、フランス語Ⅲとあわせて、フランス語検定試験4級レベルに達する。</p>	
		フランス語Ⅴ	<p>一年生のときに受講したフランス語に基づいて、簡単なテキストを耳で理解し、テキストを解読し、テキストの語彙を使いながら、テキストについて自分の意見を表明する。新しい文法を学生の要約や問題提供で伝える。多様なテキストによってフランスとフランス語圏の多面的な文化・社会・環境の理解を促進させる。</p> <p>時制(直説法半過去・直説法大過去、複合過去)や、現在分詞、関係代名詞、そして受動態、などフランス語Ⅲで学習した文法事項を、テキストの文章を読解しながら応用する。フランス語に特有の文法事項に習熟し、英語や日本語と対比のもとに言語の多様性を理解する。</p> <p>国際化・グローバル化の進む現代に、多文化共生の平和な社会を築いていくという観点から、フランス言語文化の日常的な調査をうながして、人間力向上の一貫としてのフランス語学習を動機づける。</p>	
		フランス語Ⅵ	<p>フランス映画をつかって、聞取能力を強化し、その歴史的・社会的な背景を学習することによってフランスの理解を高める。映画の台本や簡単な参考文献の解読によりフランス語のテキストの扱いに慣れ、学生一人一人が自分でフランス語のインターネットで情報を検索することによって、フランス語でのネットになじませ、あらゆる研究にフランスの言語・文化を視野に入れさせる。</p> <p>国際化・グローバル化の進む現代に、多文化共生の平和な社会を築いていくという観点から、フランス言語文化の日常的な調査をうながして、人間力向上の一貫としてのフランス語学習を動機づける。</p> <p>フランス語Ⅴとフランス語Ⅵは一年生の目的であるフランス語検定試験4級を踏まえて、フランス語検定試験3級レベルを目指す。</p>	
		英語Ⅰ	<p>このクラスは初級のクラスとして次の段階に進むために、基本的な英文の復習をし、文章の中や会話の中での使用に慣れる。英語特有の音の変化を学ぶことで、英語での会話やアナウンスを聞くことになれる。ピンポイントで情報を聞き取る練習、全体の意味を把握する練習と同時にシャドウイング、ディクテーション、音読などの練習を取り入れ全体的なレベルアップを図る。同時に英語学習の根底をなす語彙の習得にも力を入れる。また次の段階への準備として多読の基礎を身につける。最後に英語の文化に触れ、動機付けや学習意欲の継続と向上を目指す。</p>	

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文理学部 環境科学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
外国語科目	英語Ⅱ	このクラスでは初級から中級への移行を確実なものにし、さらに英語力を高めることを目的とする。そのため初級でマスターした構文を復習するとともに、さらに複雑な構文を理解し、身につける練習をする。語彙の習得、および多読も引き続き重視し、授業の中に取り入れていく。よく使われるイディオムにも目をむけ、授業の中で紹介し習得を促す。教材として使用する英文は一般的な教科書の英文に加え、手紙、スピーチ、Eメール、簡単な小説などバラエティに富む内容となるよう気を配る。	
	英語Ⅲ	このクラスは中級のクラスとして現在の力を確実なものにし、次の段階に進む準備をすることを目的とする。中級の英語力を四技能すべてにおいて確実にし、さらに上級へと伸ばすために、より長い英文を読み、聞き、要点をまとめるといったアクティビティを取り入れる。また今まで習得したことを基に自分の意見を述べる練習をする。新聞、ニュース、インターネットなどから適切なものを教材として取り入れていく。	
	英語Ⅳ	このクラスでは中級から上級へ進むことを目的とする。特にアカデミックな読み物に対応できる語彙の習得、長い文章の要点の把握などに重点が置かれる。そのために精読とともに多読も取り入れ、英文を短時間で読む練習も予定している。またスピーチやプレゼンテーションを行うことにより、意見の発信を行う練習も取り入れる。 この授業に参加することによって自分の学習を計画し、学習進捗のテンポを自分で把握することが望まれる。	
学部共通科目 情報活用科目	情報インテリジェンス	この講義では、コンピュータやそのネットワークを利用して、主体的にさまざまな情報源から情報を収集し、その内容を吟味し、自分の知識として再構築していくための方法について学習する。また、その過程において必要となる、より深いコンピュータやその関連知識について学習する。具体的には、インターネット検索の方法(技術論、検索結果の信憑性の吟味、その活用方法)、書誌情報の検索およびその結果の活用方法、インターネット上の統計調査データの活用方法、表計算ソフトの高度な利用法などである。	講義 6時間 演習 24時間
	情報リテラシー	この講義では、コンピュータを活用していくために必要な基本操作を習得する。基本ソフト(OS)、文書作成ソフトウェア、表計算ソフトウェア、プレゼンテーションソフトウェア、ウェブブラウザの操作および活用方法について、演習を行う。また、ファイルやフォルダの扱いについて習得する。演習の中では、より効率的にコンピュータを操作できるように、ショートカットキーの活用や、タッチタイピングの習得を積極的に行う。	講義 6時間 演習 24時間
日本文化理解科目	日本の伝統文化	日本の伝統文化の多様性、社会と文化の相互作用、国際交流を考える。 国際交流が盛んな時代のなかで、日本に住む我々はいかなる情報を自分のものとし、また発信するかが問われている。本授業では、日本の伝統文化に焦点を当て、国際人として立つに必要な素養を養う。伝統文化は近現代に限定された範囲(能・歌舞伎・文楽)だけではなく、庶民の喜びや苦しみ、活気を表す様々な芸能でもある。伝統芸能が代々集積したアイディアの倉庫であり、それを自由に使う素材でもある。このような素材から自分の生き方のためのヒントが得られる。グローバル化の中で自分のアイデンティティ形成のためのヒントが得られる。グローバル社会をにらみ、温故知新を本授業により実体験する。	

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文理学部 環境科学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学部共通科目	現代日本文化	<p>19世紀末のジャポニズム以降、日本文化が欧米の文化にどのような影響を与えたか、また欧米における〈イメージとしての日本〉が、日本にどのように逆輸入されたかを考察する。ジャポニズムという現象を異文化理解の一つのあらわれとして捉え、絵画や文学の個々の作品にどのような日本的モチーフが含まれているかというだけではなく、思想史、建築、ファッション、音楽などの多分野に及ぶ、広く社会的・文化的な現象として理解したい。講義の流れは、帝国主義とジャポニズムの関係、ジャポニズムとオリエンタリズムの関係、非西洋圏におけるジャポニズムの問題を考察した後、現在進行形でのアニメ・マンガが欧米やアジア圏でどう読まれているかという国際的な文化交流の問題を具体的に考察する。</p> <p>「オリエンタリズム」「エキゾチシズム」といった概念を解説し、現代文化の具体的な事例を挙げながら論考する。例としては、文学、映画における「日本」表象、国内外におけるアニメの「日本らしさ」、グローバル化する「MANGA」とそこに見出される「日本」等を考えている。</p>	
	福岡の文化と社会	<p>福岡の文化と社会を、社会言語学的観点を中心としつつ、幅広く福岡学・博多学の観点から、地域の文化を反映する小説・雑誌資料、方言音声資料、地方CM・マンガ・アニメ等の画像・映像資料、関連する歴史的観光資源等の情報媒体を種々交えて、分析し紹介する。</p> <p>福岡県内は、①福岡都市文化圏、②北九州都市文化圏、③久留米都市文化圏の三大都市文化圏に区画でき、それぞれが言語上の筑前方言区画圏、豊前方言区画圏、筑後方言区画圏に対応している。この社会的文化圏と地域言語圏との区画対応を軸に、それぞれの具体的な地域方言文化について、歴史・言語・地理等のさまざまな観点を織り交ぜて福岡県文化の特徴を捉えて行く。</p> <p>筑前方言資料となる博多の禅僧仙厓の語録や、『はまおぎ』(久留米浜荻)等、歴史的文献のことばと現代方言との対照など、あまり知られていない福岡地域言語社会文化の歴史的な展開の諸相についても紹介する。</p>	
	日本女性文化	<p>近代以降の日本の女性をめぐる文化的諸相について紹介し、そのあり様を理解することを目的とする。女性がかつてどのような生活を送っていたのか、教育、労働、家庭、生殖、地域、余暇、自己表現など、様々な視点から考える。</p> <p>授業形態は主に講義形式であるが、適宜グループ討論も取り入れる。可能な限り視聴覚教材を用い、理解の助けとしたい。毎回質問・感想票を回収し、理解度を把握し、次回授業の初めに質問に対する回答、補足を行なうことにより、理解を深める。</p>	
語学研修科目	海外語学研修	<p>長期休暇中の海外での語学研修プログラムに参加する者を対象に、事前と事後の指導学習を行う。本学が提携する教育機関での研修プログラムを原則とするが、研修時間と内容が要件に適合する場合には「海外語学研修」として認定するものとする。</p> <p>事前学習として、①海外研修の諸注意点、②研修の目的と課題設定、③訪問国と日本及び福岡に関する研修言語による紹介、をワークショップ形式で行う。</p> <p>事後学習としては、研修成果を発表し合い、併せてレポートの作成を行う。</p>	
体験学習科目	フィールドスタディ	<p>本科目の目的は、現場体験を通して、ファーストイヤー・ゼミⅠで学んできたテーマについての理解を深めることである。同時に、現場で学ぶという営みを他者と共に自ら積極的に作り上げるために、コミュニケーション能力や自己管理能力、段取り・調整能力、適応力の涵養を目指す。また、現場で当事者や実務者から学ぶにあたって必要となる社会的マナーや、聞く・訊く力そして共感・想像力を培う。現場で学んだことをもとに、ファーストイヤー・ゼミⅡでの学びにつなげていく。</p>	

授 業 科 目 の 概 要				
(国際文理学部 環境科学科)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学部共通科目	体験学習科目	国際インターンシップ	「グローバリゼーション」に関連した課題を設定し、インターンシップを実施する。履修条件は、「学部共通専門科目」のいずれかを履修していること、また、現実社会にある組織で原則90時間以上の就業体験を実施すること。設定した「グローバリゼーション」に関連した課題の解決に向けた提案を、報告書作成および報告会実施を通して発信する。これによって、テーマに関する専門知識を深めると共に、コミュニケーション能力、自己管理能力、企画立案能力、課題解決志向性の涵養を目指す。専門分野にかかわらず、広く履修生を募集する。現実社会の問題を就業体験を通して学ぶことで、専門分野に囚われない多角的な視点と就業観を培うことを大切にする。	
		フィールドワーク	実社会に関する／実社会を対象とした／実社会における社会調査(例：質問票調査、エスノグラフィー、フィールドワーク)を実施する。履修条件は、「学部共通専門科目」のいずれかを履修していること。「学部共通専門科目」で学んだ知識をもとに、具体的調査を実施する体験を通して、社会調査の意味と意義、方法、倫理、そして調査対象に関する専門知識を深める。同時に、調査を遂行するに必要な、コミュニケーション能力、自己管理能力、企画立案能力、課題解決志向性の涵養を目指す。専門分野にかかわらず、広く履修生を募集する。現実社会の問題を社会調査実施を通して学ぶことで、専門分野に囚われない多角的な視点と就業観を培うことを大切にする。	
		サービスラーニング	本科目では、実社会における何らかの課題を解決するために活動する組織に入り、課題について学びながら、課題解決に向けた活動を実施する。履修条件は、「学部共通専門科目」のいずれかを履修していること。課題解決のための試行錯誤を通して、社会を構成する一員としての自覚を深め、その社会へserveする(仕える)視点を養う。また、現実社会で活動するために必要な、コミュニケーション能力、自己管理能力、企画立案能力、課題解決志向性の涵養を目指す。専門分野にかかわらず、広く履修生を募集する。現実社会の課題解決について、実体験を通して学ぶことで、専門分野に囚われない多角的な視点と就業観を培うことを大切にする。	
共通基盤科目	総合科目	グローバルズムと多様性社会	近代からの科学技術の発展、経済活動の拡大、にともなって、政治、社会、経済活動における人、物、情報の流通は地域、国境を越えて拡大の一途をたどり、文化の画一化による固有文化の消滅等、従来の社会が保有していた多様性に象徴される豊かさがなくなると同時に、民族間紛争、富の集中偏在、資源枯渇、環境破壊など、人類の存続に関わる重大な問題が発生している。 このグローバリゼーションの本質とその影響は、社会と人の暮らし、科学技術等の視点から多面的に捉えて始めて理解されるものである。本講義は、4人の教員がそれぞれの専門分野からグローバルズムについて解説し、グローバル社会に対する理解を目指す。  (オムニバス方式／全15回)  (46 甲斐 裕 / 4回) グローバリズムの担い手、情報メディアとインターネット (01 大住圭介 / 4回) グローバル経済と地域経済 (02 堀江浩一郎 / 4回) グローバル世界と地域社会 (42 鈴木絢女 / 3回) グローバリゼーションとライフスタイル	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要				
(国際文理学部 環境科学科)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学部 共通科目	総合科目	地球環境と人類の未来	<p>環境問題の現状について、身近な日本の廃棄物問題から説き起こし、地球規模に広がる大気汚染問題等について、自然現象と人間の活動のそれぞれに起因する環境変動に考慮しつつ、自然科学および社会科学の視点から分析をおこなう。その分析を踏まえながら、人類と自然とのあるべき関係とは何かを考え、環境先進国の事例などを参考にしつつ、実現可能な人間社会の取るべき政策について講義をおこなう。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(20 吉村利夫/3回) プラスチックの現状と廃棄の問題を、特に日本国内について解説する。            (21 馬 昌珍/3回) 地球環境と大気汚染について、東アジアの現状と対策に焦点をあてて解説する。            (14 佐藤一紀/3回) 日常生活に存在する化学物質およびその毒性について解説する。            (6 Holst, Sven-Ohle/3回) 環境先進国であるドイツの廃棄物処理の現状や政策などについて解説する。            (9 Jayasena Pathmasiri/3回) 地球規模の環境問題について国際社会はどのように考えるべきか、何ができるかについて、政治学の立場から講義をおこなう。</p>	オムニバス方式
		現代社会における生命と健康	<p>現代社会のグローバル化と生命科学の進展は、これまでの生命と健康についての考え方を根底から揺さぶりつつある。この講義では、生命の問題を自然科学のみならず、国際的な政治・経済や宗教・倫理といった観点から考察を加えつつ、生命科学がこれまで前提としてきた機械的な生命観について批判的な考察を試みることにより、学生自らが個々の生命観、健康観を深めていくことを目標とする。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(45 小泉 修/3回) 脳死と臓器移植をめぐる生命科学            (52 田村典明/3回) 生物の遺伝子改変と健康            (57 弓削昌弘/3回) 感染症の拡大と現代社会の健康観            (24 吉田 信/3回) 国際社会における命と健康の問題            (31 御園敬介/3回) 歴史的宗教観が生命と健康の考え方に与える影響</p>	オムニバス方式
	人文科学	国際文化論	<p>文化の流通と諸国のイメージ</p> <p>明治維新ごろから西洋の文化が大量に日本に入ってきた。そのプロセスで西洋側と日本側の思想的な背景やその実施をみる。また、日本の文化がジャポニズムとして西洋の文化に影響を与えた。この時期に構築したイメージが長い間に継続され、戦争と経済成長によって新しい一面が加わった。ポストモダニズムでモダニズムの限界を感じて、日本の現代文化が世界のポップス文化の重要な要素となった。</p>	
ジェンダー		<p>男と女をとりまく歴史と現状を確認し、自分たちの生活を考える手がかりを得ることを目的とする。</p> <p>人間にはさまざまなカテゴリーがあるが、「男女」も人間を分けるカテゴリーのひとつである。ここでは男女間の権力関係のあり方について、その歴史や現状を具体的な事例を挙げて確認し、それに基づき私たちの生活を考える手がかりとする。</p> <p>授業形態は主に講義形式であるが、適宜グループ討論も取り入れる。</p> <p>毎回質問・感想票を回収し、理解度を把握するとともに、次回授業の初めに質問に対する回答、補足を行なうことにより、理解を深める。</p>		

授 業 科 目 の 概 要					
(国際文理学部 環境科学科)					
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考		
学部 共通科目	共通 基盤科目	人文 科学	日本の言語と世界	世界の諸言語と比較することで見えてくる日本語の特徴について学ぶ。また、日本語が日本人だけではなく、広く世界の人々に学ばれ使われている現状に目を向けさせ、日本語を国際的な視点から捉える姿勢を養う。具体的な授業内容としては、「日本語の語彙・文法・音声・表記の特徴」「日本人の言語行動」「外国人からみた日本語」「日本語のバリエーション」「多文化共生社会と日本語」等を講じる。本授業は、海外に出て日本語や日本文化を教えようという、学生への動機付けの意味も持つ。	
			欧米言語文化概論	ギリシャ・ローマやゲルマンの神話・伝説、キリスト教の伝説など、ヨーロッパの多層的な文化をつくりあげている様々な要素を、中世以来の文献や文学作品、現代に伝わる単語の語源などを通して紹介し、欧米言語文化の世界への導入とする。 また中世から近代にかけて、ラテン語から自国語使用へと移行していく様子を、当時の文献や文学作品における言語使用の状況や辞書・文法書の出版の歴史などを通して概観し、さらにグローバル社会における英語の地位および英語の多様性についても触れることで、社会と言語の関係についても考えるきっかけとする。	
			言語とコミュニケーション	人間のコミュニケーションの特徴や、コミュニケーションにおいて言語が果たす役割について学ぶ。具体的な授業内容としては、「人間のコミュニケーションと動物のコミュニケーションの違い」「人間のコミュニケーションを構成する要素(会話のストラテジー、ポライトネス、相づち、スタイルシフト、言語コミュニケーションと非言語コミュニケーション)」等について講じ、異文化間コミュニケーションについても触れる。	
			歴史と文化	今日の歴史学において、文化史と呼ばれる領域における研究活動の進展には目覚ましいものがある。政治史や制度史を中心とした従来の歴史研究においてマージナルなものとして見過ごされてきた人や事象を正面から分析対象にする文化史研究は、歴史認識の方法を豊かにするとともに、歴史学の枠組みを拡大し続けた。この授業では、こうした文化史的観点から、近世ヨーロッパ(16世紀から18世紀)における宗教と道德の問題について講義を行う。	
			人間の思索	自分とは何か。人生とは何か。社会とは何か。学問とは何か。そして、そもそも人間とは何者か。そういう哲学的な問いと思索の入り口に、受講者を誘い導くことを科目の目標とする。 初学者に配慮して、現代の世界に生きる自分自身への問いを、考察の出発点に置く。そして受講者の問題提起と議論の展開に沿って、授業を柔軟に運営する。 哲学史上の関連テキストを紹介し、解説することも行うが、何よりも学生の思考能力の鍛錬をめざし、毎回のグループ討論や小レポート等の活動を重視する。	
			宗教学	現代社会において、宗教は生活や制度の中心的な位置を占めていないように見える。しかし、今日、宗教が原因で文化レベルにおける世界的な対立が激化していることは疑いようがないし、また、個人のレベルでも、宗教は様々なかたちで、人々の生活に影響を落とし続けている。どれが正しい宗教で、何を信仰することが正しい選択なのかという価値判断はさておき、この授業は、キリスト教文化圏を主たる対象としつつ、他宗教との比較論的視座も取り入れながら、そもそも宗教とは何なのかという点を歴史的に概説し、その現代的意義を探ろうとするものである。	



授 業 科 目 の 概 要					
(国際文理学部 環境科学科)					
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考		
学部 共通 科目	共通 基盤 科目	社会科学	ジェンダーと法	わが国の法制度をジェンダーの視点から学ぶことを通して、男女共同参画社会を創造し生き抜くために必要な基礎的法知識を獲得するとともに、法や社会制度を批判的にみる力を養う。授業計画としては、ジェンダー概念について概説し、ジェンダー統計を用いて日本の現状を把握させた上で、雇用および労働・家族・性と生殖・性暴力・社会保障および税制などの個別分野について、労働法・民法・刑法などの関連諸法および現行制度の内容と問題点を解説し、男女共同参画社会を支えるしくみとしてふさわしい法制度のあり方を考察する。	
			現代社会と法	本科目では、実際の裁判例を題材として、法律が社会のなかでどのような機能や役割を果たしているのかを講じる。とくに、憲法の人権問題に関する事例を取り上げ、初学者に「公正性(正義)」という法的感覚に触れさせる。また、事例学習を通して、法学への問題意識と学問的関心をもたせる。 具体的な授業計画としては、①人権からみた憲法の役割、②刑罰からみた刑法の機能、③結婚からみた民法の機能などである。	
			日本国憲法	本科目は、日本国憲法の基本理念を理解して、人々の生活における基本的人権の意義を受講者に探求させるところにその目的がある。この憲法は、制定されてすでに60年以上が経過する。日本国憲法が、国民生活との関係でどのように機能しているのか、また、国民の多くは憲法にどのような意識を有しているのかについて受講生と共に考察する。特に、実際に裁判で争われた憲法の事例を紹介しつつ、現在の人権保障の状況を明らかにする。憲法9条など、岐路に立っている現憲法のあり方(憲法改正)についても取り扱う。 具体的な授業計画としては、①憲法の基本構造、②基本的人権の総論、③各種の人権問題、④集団安全保障と恒久平和主義などを取り上げる。	
			現代日本社会論	現代日本は、経済生活においては格差社会を、社会生活においては少子高齢化を、地域生活においては過疎化を経験しています。かつてないほどの激しいこれらの変化は、日本の社会を大きく変貌することを求めています。総じてこれらの問題が発生する原因として、社会力の低下があげられます。家族の個人化にともなって、地域を支える人材、財源、組織の弱体化が、地域社会の崩壊をもたらしています。上記のような問題意識を通じて現代日本社会に対する理解を深めることを講義の目的とします。	
			今日の東アジア社会	今日の東アジア(*東南アジア諸国および中国、韓国、日本、台湾、北朝鮮からなる地域)の社会は、(1)異なる言語、宗教、文化を持つ集団からなる一方で、(2)急速な経済発展に伴う都市化や格差拡大をはじめとする急激な社会変化、(3)グローバル化に伴う意識の変化という共通した変化を経験している。この授業は、東アジア地域の社会の実態や変化について学び、これからの東アジア地域を見る目を養うことを目的としている。	
		国際関係の成り立ち	本講は ○現代の国際関係(国家間関係を中核)の原型を作ったとされる17世紀半ばの欧州政治体制とその時代、そして今日から見た同体制の意義等に言及する。 ○国際関係コース生にとり不可欠であるのみならず、深刻な環境、人口等の地球的問題に国家間関係が直面するような現代社会に生きる知恵を学ぶ意味で多くの一般学生の受講も望む。授業形態は講義の形をとるが、受講者の好奇心、主体性を引き出すために、個別に時間外議論、追加レポートの提出等も受け付ける。 ○授業計画の要旨以下のとおり： 1) 17世紀ヨーロッパの歴史環境 2) ウェストファリア条約下の新政治体制(構造、関与主体) 3) 「誰のための平和と戦争」：神聖ローマ帝国、国王と貴族、国家とブルジュワジー、国家政府と市民社会。		

授 業 科 目 の 概 要				
(国際文理学部 環境科学科)				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学部 共通科目	社会科学	国際経済のしくみ	本講義では、最初に、グローバル化のもとでの国際的な経済取引に関する状況をデータにより概観する。それを前提として、各国民経済の物的なつながりと金融的なつながり、つまり国際的な財取引の問題と国際金融の問題について初等的な内容を平易に解説する。まず、国際的な財取引の問題を考察するために、微視的な視点から、財の貿易に関する基本的な議論を行い、種々の政策の問題を議論する。さらに、巨視的な観点から、経常収支と資本収支の決定に関する議論を展開し、それを踏まえて、国際金融の仕組み、特に外国為替市場の機能に関して解説を行う。	
		組織運営のしくみ	ヒトは集団や組織と関わりあいながら、社会生活を営み、経済活動を繰り広げている。特に組織の時代といわれる現代社会では、ヒトと組織の関係は重要である。組織は経済活動を営む企業から行政をつかさどる政府や地方公共団体、さらにはボランティアな活動で市民生活をサポートするNPOなど実に多様である。それらの組織は固有の原理で編成され、特有の原則で運営されている。身近な組織を取り上げてケースディスカッションを取り入れながら、ヒトがより良い生活を営むために、組織とどのような関係を結び、どのように活動すべきなのか、またヒトはそのためにどのように働くのかを組織論をベースにして考えてみる。	
		情報と社会	グローバル化をもたらす本質は、放送、新聞等のマスメディアや、インターネットなどのコンピュータネットワーク等による膨大な情報の交流、交信であるといっても過言ではない。マスメディアによる情報の世界同時共有、政治社会活動や企業活動における情報活用、研究教育分野や文化活動における情報の収集・利用など、情報の活用を抜きにして今日の社会は維持存続できない。マスメディア、コンピュータネットワーク等による情報の社会的機能と価値について、社会科学と情報科学の両面から解説する。	
	自然科学	持続可能社会の設計	人間社会と自然環境が共生する社会の構築を目指すために必要な考え方(理論)や方法論について、様々な側面から総合的に学ぶ。  (オムニバス方式/全15回)  (51 大中忠勝/8回) 生活の中で消費されている資源やエネルギーの実態について講義し、持続可能社会構築に必要な事項について検討させる。 (50 森田 健/7回) 生活の中で行われる自然環境と人間の関わりを考えることを通して、共生するシステム構築に必要な事項について検討させる。	オムニバス方式
		人をめぐる生命科学	生命科学・脳科学の立場からヒトとは何かを考える。ヒトを他の動物と違った独特の存在にしているのは、脳機能の飛躍的な発達によってである。その意味では、脳科学の立場からヒトを考えてみることは、自然科学の視点での新しい人間像の考察に結びつく。自分自身について知るために、皆で「ヒトとは何か」を考えてみる。  具体的な講義内容は、ヒトの出現の歴史、ヒトの脳：言語を使ったコミュニケーション、ヒトの脳：睡眠と夢、ヒトの脳：ヒトの感覚と感覚世界、ヒトの脳：学習記憶のしくみ、脳科学の視点からヒトを考える：神経伝達物質によって操られるヒトの神経機能などである。	

授 業 科 目 の 概 要					
(国際文理学部 環境科学科)					
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考		
学部 共通科目	共通 基盤科目	自然科学	国際社会における食の安全・安心	食は、生存にとって最も根本的な問題であり、安全でない食料が流通する社会は人間の存在を根底から危うくしかねない。輸入食品に依存している日本においては、食品の経路・経緯が多様化しているため、食品の安全性を確保することが以前と比べても複雑で難しい問題となってきている。本講義では食品の安全・安心に関して、BSEやGMOなど、これまでに発生した問題とその原因を解説する。さらに、食の安全・安心を守るために行われている行政、企業、消費者の対応、世界各国の対応を紹介する。	
			物質と環境	地球環境の中での物質循環の様子とその物質循環によってどのような影響が環境に及ぼされるかをグローバルな視点から学習する。さらに、地球温暖化・オゾン層破壊・光化学スモッグ・ダイオキシン・酸性降下物・放射性物質汚染など化学物質の関係した種々の環境問題について、その原因物質の化学的な性質や化学変化について学習し、さらに、それを踏まえて問題が生じるメカニズムや環境への具体的な影響や対策等について、最近の報告資料(環境白書・環境省や経済産業省のパンフレット)等をもとに学習する。	
			物理学と現代社会	20世紀は物理学の世紀と言われるように新たな発見と理論の発展により、人類の世界像が大きく変わった。それに伴ない、科学技術という言葉がよく使われることからわかるように科学の発展と、我々の身近な生活の利便性を大きく発展させた技術の進歩は密接に関わっている。前半では、19世紀末から20世紀前半に続く物理学の理論の発展を軸に科学技術の発展を概観し、流れをつかむために必要な概念について解説する。後半では、20世紀後半から21世紀初頭にかけての物理学の社会へ直接関わる事柄への応用について解説する。	
			数理学と現代社会	数学・数理論理学は、社会を支える通信等のシステムや、産業、生活に用いる機器について、その原理をなす非常に重要な機能を果たしている。たとえば、飛行機をはじめとする機械の設計性能計算、構造物の設計計算、金融経済に代表される経済活動の分析、予測、それらの計算道具としてのコンピュータの原理等々、ほとんどすべてのシステムに数学が利用されている。数学が現代社会でどのように利用されているか、その理論はどのようなものか、理論と応用の両面を有機的に関連づけて解説する。	
			科学論	現代社会の人類にとっての課題の多くは、20世紀に爆発的に進歩した科学技術のもたらしたものである。科学技術がどのように我々の社会生活に影響を及ぼし、我々のものの考え方に食い込んでいるか、科学技術発展の負の側面に留意して探求する。特に、核エネルギーの利用について、その科学的基礎知識を学び、世界と日本における各施設の現状について考察する。	

授 業 科 目 の 概 要					
(国際文理学部 環境科学科)					
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考		
学部 共通 科目	共通 基盤 科目	芸術・ 感性	美術表現	論理のみでは不足する、五感活用によるコミュニケーションの手段が芸術であり美術はこの範疇の代表的な一つである。「美術表現」においては絵画表現(実技)を通して、視覚コミュニケーションの基礎を習得させ、柔軟な思考法を身に付けさせ、幅広く世界に通用する人材の育成を試みる。	実技 24時間 講義 6時間
			造形表現	造形は視覚に訴える芸術の総称であり、絵画や彫刻を始め、工芸・デザインなどがある。したがって、広義には美術表現の一種と言えるが、この授業においては、一般通年による、純粋美術以外の造形(デザイン、工芸など)をテーマとする。 さらに前期開講の「美術表現」と同様、視覚コミュニケーションの「リテラシー」の基本を、実際の表現(実技)を通して習得させる。	実技 24時間 講義 6時間
			音楽表現 I	論理のみでは不足する、五感活用によるコミュニケーションの手段が芸術であり、音楽はこの範疇の代表的な一つである。「音楽表現 I」においては唱歌の歌詞に込められた情感の表現などを通して、音楽によるコミュニケーションの基礎的手法を習得させ、柔軟な発想法を身に付けさせることによって、幅広く世界に通用する人材の育成を試みる。	実技 24時間 講義 6時間
			音楽表現 II	「音楽表現 II」においては、言語や論理からは得られない音楽の感情表現のコミュニケーションの方法に、同じ感情表現の方法である、絵画や美術の多様なイメージを結びつけ、課題曲の表現を唱歌でもって多視点的・多角的に試みる。	実技 24時間 講義 6時間
	健康 スポ ーツ 実習	健康スポーツ実習 I	健康や体力、スポーツに対する認識を深め、生涯をとおして心身の健康の保持増進をはかるため、その知識や方法を習得する事を目的として実習を行う。スポーツ実践をとおして自己管理能力、他者とのコミュニケーション能力に基づいた集団の運営能力、集中力を身につけることを目指す。筋力、持久力、柔軟性など自分の体力を認識した上でバランスのとれた体力の向上を目指し、生涯にわたって運動習慣が継続できる実践能力を体得する。また運動の習慣も身につける。健康スポーツ実習 I では、その中で、健康や体力づくりに重点を置き、その知識や方法を習得する事を主な目的として実習を行う。		
		健康スポーツ実習 II	健康や体力、スポーツに対する認識を深め、生涯をとおして心身の健康の保持増進をはかるため、その知識や方法を習得する事を目的として実習を行う。スポーツ実践をとおして自己管理能力、他者とのコミュニケーション能力に基づいた集団の運営能力、集中力を身につけることを目指す。筋力、持久力、柔軟性など自分の体力を認識した上でバランスのとれた体力の向上を目指し、生涯にわたって運動習慣が継続できる実践能力を体得する。また運動の習慣も身につける。健康スポーツ実習 II では、その中で、スポーツ実践をとおして、他者とのコミュニケーション能力を身につけることを主な目的として実習を行う。		

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文理学部 環境科学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 部 共 通 専 門 科 目	異文化理解	「グローバル化」という言葉は聞こえはよいが、実際には多くの問題を含んでいる。本科目は、文化背景の異なる人々がグローバル社会で暮らす際、どのような問題があり、それらはどのような要因で発生しているのか、また、解決方策にはどのようなものがあるのかについて講義していく。具体的には、(1)偏見、ステレオタイプ、(2)Uカーブ、Wカーブ、(3)カルチャーショック、(4)異文化適応、(5)異文化間コミュニケーション能力といった側面を理解してもらう。	
	国際社会とジェンダー	ジェンダーの視点から提示される国際的な諸課題のなかで、法的・政治的な性格のものを取り上げて検討することを通して、国際関係および国際社会を多面的にとらえる力を養う。女性差別撤廃条約による女性の人権の国際的保障、国際機構におけるジェンダー平等およびジェンダー主流化の取組、女性に対する暴力をめぐる国際刑事手続などを検討の対象とする。女性差別撤廃条約を特に重視し、国際人権保障の史的展開、条約の成立過程と日本の参加、禁止される差別の内容、条約の履行確保制度等について詳説する。	
	国際経済学	本講義では、国際経済学のオーソドックスな基礎理論、制度的機構の基本的な仕組み、および現在の国際経済問題などを取り上げます。前半は国際貿易論、後半は国際金融論を中心に講義します。国際貿易、直接投資、国際金融、主要な国際経済事象の動向を的確に把握し、現状分析を行うのに必要な基本的知識・理論・分析手法の習得を目指します。各受講者がこの講義を通じ、日本の直面する国際経済問題をよりの確に理解できるようになることを期待します。 授業の最初の1時間には、講義要項に基づいて講義します。残りの30分には、講義の内容に合わせて、日本経済新聞などの関連記事について解説したり、ビデオを見たり、質疑応答をしたりします。質問が出ないときには、出席をとるかわりに感想文を書いてもらいます。新聞やTVニュースで取り上げられた経済問題と結び付けて、分かりやすく講義することを心がけます。	
	生活と環境	日本を含む東アジア地域において、これからの環境調和型社会を創生するために理解しておかなければならない現状社会での環境問題、あるいはそのような状況に陥ったこれまでの経緯、さらには、東アジア地域における過去の種々の公害の歴史について学ぶ。ヒトの生活活動が今日の環境問題や健康リスクを及ぼしているかの歴史的経緯を明らかに、健康影響を低減させる制度(法律などを含む)の構築について学ぶ。(生活と環境に関する総合的講義)  【オムニバス方式/全15回】 (47 野馬 幸生/8回) 東アジア地域における循環資源の適正管理と資源回収過程における環境影響把握について (61 錦谷 まりこ/7回) 環境リスク把握と軽減策について	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文理学部 環境科学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学部 共通 専門 科目	食料経済学	食に関する諸問題に経済学的視点からアプローチするために、経済学の基礎理論を学び、さらに国内および世界で発生している食料・農業・農村に関する問題について理解を深める。関連科目(地域ブランド論、食経営管理論、食物危機管理論)を学ぶための入門科目であるため、関連科目を履修する前に受講しておくことを推奨する。	
	食健康論	食事・栄養は運動、休養と共に健康の維持・増進の重要な要素である。昨今その重要性は認識され、健康食品やサプリメントなどの情報の氾濫も招いている。食生活において過不足しているものを補正する目的で、これらの健康食品を利用する場合、逆に基本的な食生活がおろそかになり、健康を損なう可能性もある。当講義では、栄養機能食品や健康食品などに関する正しい知識を得ることで、機能表示、有用性、安全性、医薬品との相互作用を理解し、適切な利用により健康の維持・増進に役立てる知識を得ることを目的とする。	
	社会調査法	この授業では、どのような調査を社会調査というのか、社会調査はどのような意義を持っているのか、社会調査法の種類(質的調査、量的調査、質問票調査、インタビュー調査、参与観察法など)及びそれぞれの調査方法の長所と短所について概説する。それぞれの調査法について具体例に触れながら授業を進める。	
	フィールド実践・研究推進論Ⅰ	本科目の目的は、国内外のフィールド訪問やインターンシップ、スタディツアー、ボランティア等、現場での学びや体験を行うのに必要な能力そしてスキルを試行しながら学習することである。「能力」や「スキル」は、「現場」や「関心分野」へのまなざしや心構えに支えられて初めて機能していることを理解し、実践につなげていくことを学ぶ。特に、「調査する」「実践する」自分と、「調査される」「実践される」あるいは「一緒に調査する」「一緒に実践する」他者の関係性を意識し、行動できるようになることを重視する。	
	フィールド実践・研究推進論Ⅱ	国内外で実施したフィールド訪問やインターンシップ、スタディツアー、ボランティア等の現場での学びや体験についてふりかえり、学習したことに関して何らかの解決策を提案する報告書をまとめ、報告会を実施することで、自身の学習を発信することが本科目の目的である。フィールド実践・研究推進論Ⅰおよびフィールドスタディ、フィールドワーク、国際インターンシップ、サービスマーケティングのいずれかを履修していることが履修条件となるが、フィールド実践・研究推進論Ⅰで設定した目標に対して、実際の学習体験を照らし合わせ、自分自身の成長と共に、課題を洗い出すことで、今後のキャリア(大学での学習および就業)についての方向性を創り出す。	

授 業 科 目 の 概 要				
(国際文理学部 環境科学科)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学 科 科 目	学 科 基 本 科 目	基礎数学	今日、数学はデータ処理、データ解析の道具として様々な分野で利用されている。それは統計学、解析学、計算機数学などに代表されるものであるが、その基礎となる数学は微分積分学と線形代数学である。本講義では微分積分の基礎概念とその計算手法、及び線形代数における行列の性質、演算手法、また行列式の概念とその性質、その応用法について学ぶ。	
		基礎物理学	ニュートン力学を中心として、物理学の基礎を学ぶ。対象とする自然現象から特徴的な事柄に着目した数理的にモデル化の方法、新しい概念の導入による、新たな法則の発見や、より見通しの良い現象の分類・整理の進展などに重点をおいて解説する。前半で質点の力学について、ニュートンの運動の法則、仕事の定義と力学的エネルギー保存則等について解説する。後半は、質点系の力学について、運動量保存則、角運動量保存則について解説する。	
		基礎化学	高校課程の化学を基礎とした大学初年度課程の化学を学修する。特に、物質を構成している原子や分子の構造に関して、原子内の構造・電子の配置や軌道・原子の化学結合などについて理解する。 さらに、原子・分子の構造が、その物質の性質（状態変化に関連した性質や溶液中での性質など）や反応（置換反応、付加反応など）と密接に関係していることを学ぶ。	
		基礎生命科学	高校課程の生物を基礎とした大学初年度課程の生命科学（生命科学の基礎論）：生命科学は20世紀後半に劇的に進展し、生命科学の基本的な知識なしには、環境や日々直面する食料・医療などをめぐる問題に対処することすらできなくなっている。生物の基本的構造や生命活動を支える精妙な仕組みについて学ぶ。  【オムニバス方式／全15回】 (52 田村 典明／8回) 生物の多様性と一様性・細胞と遺伝情報・代謝の分野を主に担当 (57 弓削 昌弘／7回) 細胞の分裂／周期・発生と分化・生殖の分野を主に担当	オムニバス方式
		生態系の生物学	高校課程の生物学を基礎とした大学初年度課程の生態学として、生態学の基礎的事項を学習するとともに、生態学の観点から環境問題や社会・経済問題に取り組む姿勢を醸成する。 生態系の健全な姿、人間活動の悪影響の具体的事例および生態系の保全、修復そして創出方法などの基礎的事項を学ぶことにより、地球と人類の持続的共生方法を考え、行動する力を養う。 授業形態は主に講義形式であるが、穴埋め式のテキストを配布しそれに重要な用語を記入したりまたテキストの図表等を完成していくことにより、理解を深める。	
		基礎統計学	この講義では、さまざまな分野の研究における調査・実験によって得られたデータを分析する上で必要となる、統計解析手法の基礎を学ぶ。前半では、得られたデータを、その特徴を表現するいくつかの数値に要約したり、データについて直感的な理解をするために可視化したりする記述統計について学ぶ。後半では、母集団から得られた標本データとその確率的な性質に基づいて母集団の性質を推測する統計的推測および、検証すべき仮説についての評価を行う統計的仮説検定について学習する。	
		応用統計学	基礎統計学で学んだ記述統計、統計的推測、統計的仮説検定の知識に基づき、分割表の検定、分散分析、ノンパラメトリック仮説検定、回帰・相関に関する統計的推測などの発展的内容を学ぶ。また、実際のデータを使った例を多く扱い、実践的なデータ解析についての能力を身につける。	

授 業 科 目 の 概 要				
(国際文理学部 環境科学科)				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学 科 科 目	学 科 基 本 科 目	環境科学概論	環境科学は、環境と調和した持続可能な社会の構築を目指して、科学的な視点から、環境の状況や人間活動による環境への影響の的確な把握、環境への影響を軽減する方策の検討、それらの方策が確実に実行される社会システムのあり方の追究等を行う文理統合型の総合的な学問である。本授業では、環境問題の事案を取り上げ、その解決のための討議を通じて環境科学の役割を理解するとともに、環境科学の体系、手法等を把握し、環境物質、環境生命、環境生活および国際環境政策といった環境科学の各分野の概要を学ぶ。 【オムニバス方式/全15回】 (16) 大中 忠勝/3回) 環境生活分野 (17) 田村 典明/3回) 環境生命分野 (18) 柳橋 泰生/6回) 環境政策分野、環境科学の役割(討議)、体系、手法等 (19) 池田 宜弘/3回) 環境物質分野	オムニバス方式
		コンピュータサイエンス	この講義では、コンピュータシステム及び、ネットワークの仕組みを学ぶ。はじめに、これらの理解に必要なとなる離散数学の基礎を学習する。これらの知識をベースに、ハードウェア(CPU、メモリ、補助記憶装置、入出力装置)、ソフトウェア(OSとアプリケーションソフト)、ネットワーク(TCP/IPと関連プロトコル、LANとWAN)の仕組みについて学習する。離散数学の基礎の学習においては、演習を多く取り入れる。	講義 24時間 演習 6時間
		プログラミング	プログラミングは、コンピュータ技術の一部ではあるが、これを学習することで、ある目的に到達するための手順を、論理的に構築するための能力が身につく。したがって、この科目は多くの学生にとって有用である。この講義では、コンピュータ上のプログラミングの基礎を学習する。具体的には、整数の計算、変数の概念、条件分岐、繰り返し、配列、実数・文字列の取り扱いなどである。簡単なプログラムを自分で作成できるようにするため、多くの演習を取り入れる。	講義 20時間 演習 10時間
		環境法総論	甚大な被害をもたらした悲惨な公害問題、日常生活における環境負荷による身近な環境問題、地球的規模の環境問題が次々と発生し、その克服のために、国、地方自治体、住民、国際機関等ではさまざまな仕組みをつくってきた。本講義では、環境問題の状況とともに、問題の解決・未然防止、持続的発展のために整備され、体系化されてきた法令、条約などの環境法制の全体像、原則、内容などを学ぶ。	
		経済学入門	グローバル化が益々進行している今日、経済はあらゆる分野に大きな影響を及ぼしている。新聞やテレビなどで日々報道されている多様な経済現象を正しく理解するためには、経済の正しい見方や経済メカニズムの基本原則に対する理解と応用力が重要である。本講義では、経済学の基本知識、特にミクロ経済学やマクロ経済学の基本概念を学びながら多様な経済現象についての理解を深めることを目的とする。	
		環境とジェンダー	環境の歴史における事例を性別や性差と関連付けて学び、さらに各国における様々な環境問題の原因・経過およびその対策に関して、ジェンダーとの関連性について学習する。具多的には、種々の環境破壊や公害問題を「ジェンダーに敏感な視点」に立って分析し、また種々の環境政策が男性と女性の視点から平等なものかどうかなどについて学習する。また、講義の一部は、世界的に環境関連分野で活躍している女性の講師を招き、ジェンダーの視点から、環境政策や企業における環境対策を今後どのように捕らえいくべきかについて学習する。	



授 業 科 目 の 概 要			
(国際文理学部 環境科学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 科 目  専 門 科 目  環 境 物 質 科 目	基礎物理化学	分子集合系を取り扱う熱力学の基本法則、反応の進む方向を決める自由エネルギー、および多成分系での各成分の化学ポテンシャル等について種々の関係式も含めて学習し、物質の状態変化や化学反応が生じる原因(メカニズム)についてエネルギー学的な視点から理解する。さらに、化学反応の速度について、種々の反応速度の理論をもとに、反応速度を左右する因子について学習する。	
	応用物理化学	環境科学の分野においてエネルギー、資源の回収や再利用、あるいは環境適応型技術の構築には、熱化学、電気化学、光化学、吸着および触媒についての分子運動論的な見地からの統合的な知識が必要である。応用物理化学の授業では物質の変化過程、反応速度、触媒化学、電気化学、光化学について学び、これらの知識の組み合わせと応用により、環境に適応した、エネルギー、資源の活用技術について学ぶ。	
	有機化学	暗記ではなく化学結合や反応の原理を理解することにより、有機化学の基礎を学ぶ。有機化合物を構成する元素は10種類ほどである。それらの元素の性質を理解すれば有機化合物の性質を理解できることを念頭に、各元素の性質および化学結合の基礎、有機化合物の立体構造、結合エネルギー、有機電子論を講義する。さらに、いくつかの官能基の性質と反応について講義する。 毎回授業アンケートを実施し理解度を確認するとともに質問を受け付け次回の講義の冒頭で質問に答える事により復習を兼ねる。	
	基礎分析化学	環境分析で利用される化学的分析あるいは機器分析において基礎となる種々の定性分析あるいは定量分析の原理および手法について、物理化学的な理論背景も含めて学習する。また、分析において必要となる濃度計算、理論計算、あるいは分析誤差の見積もり方法等についても学習する。	
	無機化学	地球にある鉱物資源の有効利用、環境問題の原因となる種々の無機化合物、および物質の循環プロセスに使用される無機材料について理解することを目的として、無機化学では、原子および化合物の構造化学、酸塩基反応、錯体、および酸化還元反応について学び、これらの基礎知識を基に個々の元素についての特性および反応性について学習する。さらに環境問題の原因となる無機化合物の物性を理解する。	
	高分子化学	日常生活で使用されるプラスチックや繊維などの合成高分子化合物について、合成方法や反応速度論、分子の集合状態、諸特性など、高分子を理解する上で必要不可欠な概念について学習する。 また、高分子化合物と金属やガラスなど他の材料との比較から、高分子材料の特徴を明らかにする。	
	環境物理学	自然・環境におけるさまざまな現象の数理構造には物理学的手法の適用によってモデル化が可能で、数値的な見積をすることが可能な事柄は多く存在する。このように環境を数理科学的に扱うための物理学の応用例を紹介する。具体的には、熱拡散、流体中の微粒子の拡散など拡散現象を中心に、大気・水・土壌の環境への統計力学の応用や、流体力学・熱力学などの大気・海洋への応用などの事例、原子核の分裂や放射線について、内容を絞り込みながら紹介していく。	

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文理学部 環境科学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 目  専 門 科 目  環 境 物 質 科 目	環境材料学	環境改善に貢献する各種機能を有する高分子材料や生分解性など環境に調和した高分子材料について、合成方法や物性を学習する。さらには近年見直されている天然高分子材料についても触れ、環境負荷の小さな材料とは何かを学ぶ。併せて耐熱性、力学特性、生分解性など、高分子材料の特性評価方法についても学習する。	
	環境有機化学	環境中の有機化合物の構造と作用を例に、有機化学に対する理解をさらに深める。2年次前期に学習した有機化学の基礎を発展させ、様々な官能基の性質と反応について詳しく講義する。講義の後半では「生活の中の化学物質」について有機化学の立場から理解を深めるようにするとともに、生体物質の化学についても、その基礎を講義する。 毎回授業アンケートを実施し理解度を確認するとともに質問を受け付け次回の講義の冒頭で質問に答える事により復習を兼ねる。	
	環境分析化学	環境と社会に興味を持ち、身近な生活環境から地球環境まで広範囲な分野を視野に入れさまざまな環境問題について理解した上で、環境汚染成分の多様化と規制基準値の厳格化に備えた種々の環境分析に関する専門理論・専門技術に関して学ぶ。講義では実際的な分析例を数多く取り上げ定性及び定量分析法に関する基本的な知識および統計的展開による解法の習得もねらいとする。	
	大気環境科学	大気環境は、自然的な要因と人間活動による要因によって変化する。さらに、人間活動による要因によって生じる環境変化には、公害と呼ばれる局所的な環境汚染と地球温暖化やオゾン層破壊と言った地球規模の環境破壊が顕在化している。このような様々な大気環境変化の事例について学習するとともに、環境汚染を引き起こす多様な化学物質に対して、その原因と発生メカニズムや環境における化学反応、生態系に及ぼす影響、除去メカニズムについて化学的に理解する。	
	土壌環境科学	土壌(広くは地圏という)は土と水(地下水)で構成され、動植物生存や人間活動(農産物生産、都市形成など)の基盤となっているばかりでなく、水・物質・熱の保持・輸送・浄化といった機能があり、地球環境や水資源のバランスを保っている。土壌中の水分や化学汚染物質の移動などの基礎原理を学習し、土壌環境科学について物理・化学的側面から理解できるようにする。加えて、昨今の土壌汚染問題について事例研究を試みる。授業は講義を中心とするが、演習により理解を深める。	
水質環境科学	環境に存在する水は飲料水・生活用水や工業用水、農業用水として利用されるとともに、水生生物にとっては生息環境そのものであり、水産業の場であり、地球規模の水循環により全ての生物を育てており、適切に保全されることが必要である。水質環境科学では、河川、湖沼、海洋等の水環境に関する科学的な知識や水道等の水利用システムについて学ぶとともに、水資源が世界的に枯渇する中での国際的な水環境問題について学習する。		

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文理学部 環境科学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 目  専 門 科 目  環 境 物 質 科 目	地球環境科学	海洋底拡大、地震、火山噴火、褶曲や断層など、地球環境と深く関係する地質現象は複雑な仕組みで生じると考えられがちである。その一見複雑そうな仕組みをプレートテクトニクスの基本的な考え方やプレートテクトニクスの新しい考え方で解き明かし、生きた地球環境の形成の仕組みについて学習する。その上で超大陸の形成による氷河発達や大陸衝突による山脈形成、大陸分裂時の火山活動など地質現象が気候変動を引き起こす仕組みや、炭酸塩岩形成と大気中の二酸化炭素濃度変化、生物の大量絶命や回復など生命現象との関連性を地球規模の環境科学として理解する。	
	環境機器分析学	機器分析は、定性、定量分析のみならず組成、性質、構造分析など化合物に関する様々な情報を得るために不可欠な手段である。特に、環境問題の解明及び解決に、機器分析の重要性が益々増してきている。本講義では主要な環境汚染物質の計測を目的として汎用される機器分析法について原理と実際の分析装置における測定法と測定誤差に関して学ぶ。また現在、高度に進化している最先端の分析機器についても紹介する。	
	東アジアの環境	アジア地域では、化石燃料の燃焼、家庭での木炭燃焼、森林火災などの様々な発生源から、汚染物質が大量に大気中に放出され、酸性雨、微小粒子や光化学オゾンの増加などの大気環境問題を引き起こしている。中でも中国をはじめとするアジアの発展途上国では今後も著しい経済成長が予想され、問題が一層深刻化して、健康や食糧生産、生態系に影響を及ぼすことが懸念される。特に東アジアにおいては、中国などから大量の汚染物質が流れ込むことにより、越境大気汚染が問題となっている。本講義では、中国を始めとする東アジアにおける大気汚染の現状と将来、並びに大陸からの酸性雨や光化学オキシダント、黄砂等の越境汚染について学習する。	
	基礎物理学実験	自然現象の測定についての基本的な概念の確立と具体的な実験中の作業における知識を身につける。理論による理想化(モデル化)された現象と実際に起こっている現象との違い、理論的な誤差の見積もりやその誤差を小さくする工夫、理論的限界と現実との差などを、与えられたテーマの中で常に意識しながら実験とレポート作成を繰り返すことで実験における物理学的なセンスが身についていくことを目指す。(コンピューター活用も含めて学習する。)	
	基礎化学実験	化学の基本的・基礎的な化学実験(金属イオンの定性分析、中和および酸化還元滴定による定量分析、無機・有機化合物の基礎的な合成実験等)を行う。この実験において、化学実験で用いる化学薬品および器具・機器類の正しい取り扱い方を学習するとともに、一連の実験過程を通して、実験計画・実験操作や結果の記録・解析・考察および実験報告書(レポート)の書き方についても習得する。(コンピューター活用も含めて学習する。)	
有機化学実験	有機化合物の性質および取り扱い方を理解するために、前半でガラス細工、薄層クロマトグラフィー、蒸留、融点測定、抽出などの有機化学実験の基本操作を学び、後半ではこれらを活用して、エステル化、ニトロ化、アルドール縮合などによりいくつかの有機化合物を合成する。各実験において、実験結果と考察を指定した期限までにレポートとして提出する。レポートは順次採点し、問題点があるものに関しては返却し、再提出させる。教員がレポートに書き込んだコメントを参考にして問題点の把握と理解を深めるようにする。		

授 業 科 目 の 概 要				
(国際文理学部 環境科学科)				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学 科 科 目	専 門 科 目	環 境 物 質 科 目	高分子化学実験	「高分子化学」および「環境材料学」で学習した内容に関連する実験を行うことで、高分子材料の合成方法や諸特性を体験的に学ぶ。具体的項目は以下の通り。高分子の合成方法(ラジカル重合、重縮合)、高分子の分子量測定(粘度法)、高分子の基本特性評価(力学強度、耐熱性、気体透過性、光学特性、吸水性など)。
			環境物質基礎実験	環境汚染の進行や環境浄化に関連した物質の物性あるいは反応を理解するために必要な実験を行い、さらに基礎物理化学等で学習した理論を用いて結果を解析する。具体的には、(1)有機化合物の溶解現象、(2)2相間での分配平衡、(3)物質の吸着現象、(4)化合物の分解反応速度などに関連した実験・解析を行い、物質の環境中での状態あるいは化学変化を化学的な観点から理解する。
			環境分析化学実験	実験では分析操作を行うにあたって基礎的な知識を得ることから始まり、大気環境・水環境・土壌環境に関わる定量・定性分析法の基本原則を理解し、基礎及び応用分析技術を習得する。また、各汚染物質に適した分析法の選択、環境公害問題の原因究明の判断力を養う。さらに、得られた実験結果をコンピュータにより統計処理を用いて汚染状況を評価する。
			機器分析学実験	環境分析や化学の各分野で利用される機器分析について実験する。おもな具体的項目は以下の通り。赤外分光法(FT-IR)による有機化合物の構造解析、質量分析ガスクロマトグラフ(GC-MS)による微量組成分析、電気伝導度計を用いた中和滴定、クーロメータを用いた生分解性評価(活性汚泥中の生物化学的酸素要求量)など。
			地球環境科学実験	地球環境を形づくる種々の鉱物・岩石・化石標本の観察・同定方法について実習し、さらに、野外における地学現象の観察と記載を行うとともに、地学現象の図的表現法を習得し、地質学的に地球環境の形成の歴史を理解できるようにする。自然史博物館での実習では講義室での観察を補う広範囲かつスケールの大きな標本観察によって地球史を実感する。そして、居住地域の地形図・地質図の読解と野外における実際の地学現象の対比では、身近な地域地質への理解を深め、居住環境への地学現象の影響を読み取る方法を習得する。(コンピュータ活用も含めて学習する。)
			基礎物理化学演習	基礎物理化学の講義内容の理解を深めるために、熱力学の理論や反応速度理論を実際の事例に適用する方法について演習を実施する。さらに、自然環境での現象や化学合成等において、物質の状態を理解するために必要となる物質の状態変化を表す相図について、その見方や活用方法について演習を含めて学習する。
			応用物理化学演習	応用物理化学で学習した物質の変化過程、反応速度、触媒化学、電気化学、光化学などの内容を理解するために、物質の混合速度、伝熱速度、反応速度定数、活性化エネルギー、比表面積、ターンオーバー数、触媒有効係数、電流効率、電池効率、量子収率、地球平均温度などを測定・評価する手法を学習し、これらの値を導出するために演習問題を解く。

授 業 科 目 の 概 要				
(国際文理学部 環境科学科)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学 科 科 目	環 境 物 質 科 目	環境科学演習	環境問題に関する実践的な知識、技能を習得し、環境管理活動を行う人材を育成するために、①地域環境調査法およびその統計処理、②大気、水質および土壌のサンプリング法、資料保管法についての演習、③簡易水質検査法、大気汚染物質の簡易分析法などの修得、④騒音、振動計測を含めた計量管理技術についての演習を行う。	
		環境物質論および実習Ⅰ	環境物質分野(環境中の化学物質の特性や環境での循環の態様、さらにそれが生物や人間社会に及ぼす影響などに関する分野)を総括する講義およびその実習。環境物質分野の専任教員によるオムニバス形式で、卒業研究テーマ選択の前段階として、環境物質の今日的課題や卒業研究のテーマについて学ぶ。  【オムニバス方式/全15回】 (48 佐藤一紀/3回) : 環境物質の生命に及ぼす影響について (53 藤岡祐一/2回) : 資源と地球環境について (55 池田宜弘/2回) : 環境物質の状態分析について (56 吉村利夫/3回) : 生活を改善する材料について (58 黒木昌一/2回) : 環境物質の現象理論について (59 馬 昌珍/3回) : 大気環境、水質環境について	オムニバス方式 講義 20時間 実習 10時間
		環境物質論および実習Ⅱ	環境物質を総括する講義およびその実習。コース履修学生が専任教員の卒業研究テーマを選択(想定)して、環境物質の特定の専門分野での現在の理論や現実の課題およびその課題を解決するこれからの研究手法について学ぶ。	講義 20時間 実習 10時間
	環 境 生 命 科 目	遺伝子の生物学	メンデル遺伝学から分子遺伝学までの研究の流れを概観し、遺伝学的考え方や、具体的な遺伝学実験法を学ぶ。次に、遺伝子そのものの構造、存在様式や遺伝子の発現過程などを学びながら、生命現象の遺伝学的捉え方を理解する。	
		生命の分子的基盤	生命体を構築する生体高分子であるタンパク質・核酸・糖・脂質などの物理化学的性質やこれらの構造の理解を深める。また、酵素のカイネティックス・遺伝子情報とその伝達機構などを例にして、生体高分子の発現する機能と構造の間にどのような関連があるのか分子レベルで考える。	
		生体の機能学	様々な生体の機能について、主にヒトに注目して、高等哺乳類を主に解説する。対象とする生体系は、感覚系、運動系、内分泌系、免疫系、循環系、消化系などを考えている。 これらのそれぞれの系がそのような構造的とメカニズムに支えられて機能しているのか、また、どのような分子基盤に支えられているのかを理解する。そして、環境との相互作用において、どのような影響を受けるのかを生命科学的に理解する。	
		分子生物学	生命現象を分子レベルで理解する上で重要な、遺伝子の基本構造、遺伝子の発現とその制御、遺伝子損傷の修復等の基本的な過程(原核生物及び真核生物)について解説する。さらに分子生物学研究に劇的な進展をもたらした遺伝子工学技術の理解に必要な基本事項にもふれる。	

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文理学部 環境科学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 目  専 門 科 目  環 境 生 命 科 目	遺伝学	古典遺伝学・集団遺伝学の基礎を学ぶ。古典遺伝学では「個体」を対象とした親から子への遺伝の仕組みを理解する。集団遺伝学では「個体」の集合である「集団」を単位とした遺伝の仕組み、つまり、「個体」に生じた遺伝的変異(突然変異)が「集団」の中で変化していく機構、について学ぶ。	
	バイオインフォマティクス	バイオインフォマティクスは生命科学と情報科学の学際的分野である。現在、多様な生物について、様々なタイプのデータベースが構築されている。それらの多くは公開されており、それぞれの研究者の研究目的に応じて、利用できる状況が作り出されている。データベース活用に向けて、バイオインフォマティクスにおける生物学的・情報科学的原理とその応用について学ぶ。	
	細胞の生物学	生物の基本構造である細胞について、その構造と機能についての講義を通じて、生命科学全般を理解する基礎的な知識と考え方を養うことを目標とする。特に、細胞内で遺伝子の情報がどのような過程を経て発現するのか、オルガネラの役割に注意を払いながら解説をおこなう。 授業形態は主に講義形式であるが、毎回質問票を回収し理解度を把握する材料とするとともに、次回の授業の初めに質問に対する回答、解説を行うことにより理解を深める。	
	発生生物学	動物の発生について主に脊椎動物の講義を行い、形態学的、細胞の働きと遺伝子の発現調節機構、遺伝子産物が機能する分子メカニズムについての理解力を養成する。内容としては、卵から受精、卵割、形態形成運動、器官形成を経てどのように形づくられているかなど発生の概略を講義した後、形態形成遺伝子の発現の調節機構およびその機能について、細胞増殖因子やホメオボックス遺伝子などを例にとりながら解説する。卒業研究において用いる種々実験手法の理論についてもその基礎がわかるようにする。	
	系統進化学	生物の多様性を理解する上で、進化と系統は基本的な概念である。本科目では遺伝学・発生学・生態学・分類学等の現代生物学の多様な領域の研究成果を進化と系統という観点から融合させることをはかり、生物の多様性を統合的に理解することを目的とする。そのため、生物の進化と系統の概念の歴史的成立、進化の理論、分類学の方法、地質時代と生物の進化についての概説し、主要な分類群について最新の知見を紹介する。講義は板書とパワーポイントによるスライド等および配付資料により行い、質疑・レポート・コメントシート等を通じて理解の促進を図り、筆記試験により評価する。これらの講義を通じて、将来の研究と生物多様性保全のあるべき姿を考察する。	
	動物生理学	環境の影響を受ける主体である生体の機能について、動物全般について解説を行う。その場合に、外界の環境との相互作用を考えながら講義を進めていく。環境や環境物質が動物の機能にどのような影響を及ぼすかを知り、環境と生体との関係の理解を深める。具体的な講義内容は、驚異の動物行動、それを可能にする神経系の仕組み、神経機能の分子基盤、心の外界への窓、感覚の分子生理学、生物の外界との相互作用、神経系の起源と進化などである。	

授 業 科 目 の 概 要					
(国際文理学部 環境科学科)					
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考		
学 科 科 目	専 門 科 目	環 境 生 命 科 目	生物統計学	環境の悪化や化学物質が生物に及ぼす影響を科学的に評価するため、さらに生物浄化や生態的環境修復の効果を判定するため、生物の形態、生理、遺伝、生態などの生物諸現象の定量的把握と要因探索に必要な統計学について学ぶ。	
			環境生理学	生物は、生体外の物理的・物質的な環境変化に感知・応答するしくみをもっている。 特に、植物は光合成を行う独立栄養生物であり、動物とは異なり固着生活を行うことから外部環境の変化に適応する独特のしくみを発達させてきた。本講義では、まず呼吸や光合成に代表される代謝過程において、生体内での物質とエネルギーの流れについて学んだ後、植物がもつ環境応答機構について考える。	
			生態学Ⅰ	海洋生態系について基礎から学び、海域環境問題や食料問題を生態学的な観点から検討し、さらに過去から将来にわたる時間軸も加えて検討することにより、健全な海域環境と豊かな海の幸を得る手法について自らが考え行動する力を養う。 地元の海域の博多湾や和白干潟を授業で取り上げ、身近な環境問題を通じて授業を展開する。 授業形態は主に講義形式であるが、穴埋め式のテキストを配布しそれに重要な用語を記入したりまたテキストの図表等を完成していくことにより、理解を深める。	
			生態学Ⅱ	生物は、個体、個体群、群集、生態系、景観という、さまざまな階層レベルにおける他の生物や環境との相互作用を介して、その形態、生活史、行動、社会を進化させる。本授業では、生態学の理論研究と陸上生物を扱った実証的研究を紹介しつつ、個体群と群集における生物間の協力と競争が、生物進化の原動力になっていることを示す。対象となるのは、生活史の進化、個体群動態、性選択、行動の進化、生物群集の動態、動植物の相互作用である。授業の到達点は、自然選択理論によって多様な生物の「ワンダフルワールド」を理解することにある。	
			保全生物学	環境や生態系と人間活動の関係を、生物多様性や生態系サービスの観点から検討し、自然からの恩恵を持続的に享受できる生態手法を学ぶ。人類の経済活動による環境破壊で、生態系の環境保全機能および生物絶滅による生物資源の急速な消失が進行してきたことを踏まえ、保全生物学の基礎、生物多様性の意義・実態・管理・回復、ならびに生態系の機能と環境保全の関係を理解し、環境保全の方途を学ぶ。	

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文理学部 環境科学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 科 目  専 門 科 目  環 境 生 命 科 目	環境評価学	グローバル・ローカルな環境問題を解決するため、物理学、化学および生物学的手法を用いて環境の現状を正確に把握し、さらにシミュレーションすることにより将来を予測して、環境リスクを回避するとともに適切な環境浄化や環境管理を図る手法を学ぶ。	
	生命科学演習Ⅰ	生命科学に関連した英文と和文のテキストを用いて、英語科学論文の読み方や科学論文・レポートの書き方などを学ぶ。 研究者・技術者等に不可欠な科学英語を習得する実践的な入門編として位置づけられる。演習の進め方として、受講者から提出された英作文レポートから数名分を毎回教員が添削し、この添削レポートを題材として英文の書き方を説明する。 一方、英語論文の読解については、英語テキストを学生に自主的に適量訳してもらい、その都度、そこに書かれている内容について教員が説明を加える。	
	生命科学演習Ⅱ	国際化した学問の世界では、英語が共通言語である。生命科学の分野においても、最新の情報を得るためには英語で書かれた論文を自由に読む能力が不可欠である。本演習では英語の論文の読解力とその内容を発表する能力を養うことを目的とする。主に発生生物学の分野を中心に論文取り上げ、2～3人のグループで1報の論文を読み、その内容をパワーポイントの資料を作成してこれを利用して発表する。この過程を通して、論文英語を読解する能力を身につけるとともに、プレゼンテーションの能力の開発もおこなう。	
	生命科学演習Ⅲ	神経科学の学術論文(英文)の講読、発表を行い原著論文の理解の仕方を学ぶ。 本研究室では動物界で最も単純な神経系、散在神経系の神経生物学を研究し、発表してきた。それらの論文を読み、神経系の構造・機能・、神経伝達物質の構造・局在・機能、神経回路網の形成・変化・維持などの、神経科学の新しい考え方を理解する。	
	生命科学演習Ⅳ	教員が提示した環境生物学や海洋生態学にかかわる文献を翻訳・発表(プレゼンテーションを含む)・整理することにより、内容の理解を深めるとともに、英語表現を習得する。また、プレゼンテーションの行い方、研究論文の書き方、および環境調査報告書の書き方についても習得する。	
	生命科学演習Ⅴ	遺伝学、バイオインフォマティクスおよび保全生物学に関連した英語論文を読み、研究へのアプローチの仕方、実験方法や論理的思考などを学ぶ。また、この演習を通して、英語論文を読解する能力を身につけるとともに、プレゼンテーション能力をも修得する。	
	生命科学基礎実験	生命科学の基本的な実験手法とその背景を理解することを目的とする。とくに、生命の設計図であるDNAを取り扱う実験を中心に行う。また、細胞・組織の形態および生理現象の観察や、生体物質の分離・分析実験等を通じて、生命現象の基本的なしくみを知り、生物の共通性と多様性を学ぶ。(コンピューター活用も含めて学習する。)	



授 業 科 目 の 概 要			
(国際文理学部 環境科学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 目  専 門 科 目  環 境 生 命 科 目	発生生物学実験	脊椎動物の一連の発生過程を把握し、どのような構造がどのようなタイミングで形づくられるのかを理解できるようにする。 アフリカツメガエルの初期胚を材料とし、外部形態と内部形態の観察を通じて、脊椎動物の発生過程を理解できるようにする。内部形態の観察のために、様々な発生段階の胚の固定標本の観察を行うとともに、実際にオタマジャクシの切片標本の作製を行い、顕微鏡写真の撮影方法についても学ぶ。また、発生の研究手段の一つとして、初期胚の細胞への蛍光色素の注入により、細胞の運命の追跡実験も行う。	
	動物生理学実験	動物の行動とそれを可能にする神経系の観察、脊椎動物の解剖を通じての各種器官の配置、構造の観察を体験し、動物の機能の理解を深める。 具体的な実験項目は、散在神経系各種動物観察、散在神経系動物の摂食行動観察、散在神経網の抗体染色による観察、散在神経系動物からの単離神経細胞の観察(含む神経前駆細胞、幹細胞の単離、観察)、平均的な脊椎動物(カエル)の動物解剖:内臓緒器官、呼吸系、循環系、消化器系、泌尿生殖系、平均的な脊椎動物(カエル)の動物解剖:神経系、平均的な脊椎動物(カエル)の動物解剖:筋肉系、平均的な脊椎動物(カエル)の動物解剖:骨格系	
	生態学実験	我が国の中でも重要とされまた本大学の近隣に位置する和臼干潟を対象地域として、野外調査の基本的な実施方法を実習・体得する。 具体的には、干潟域の理化学的調査方法、アオサやアサリなどの干潟生物の調査方法、さらに調査データのまとめ方や報告書の作成方法などを習得するとともに干潟の有用性を体得する。 この実習は、このように体験学習的要素を取り入れて自然に対する感性を重んじながら自ら考え行動できる力を身につけるのみでなく、社会に出ては即実践力として研究所や企業に役立つ能力を備えるべく行うところに特徴がある。	
	環境生理学実験	様々な環境変化に応答する生物の環境応答を理解するための実験技術や考え方の習得を目的とする。主に植物を中心として、生体からの核酸・タンパク質などの生体高分子の単離や、光・温度・塩濃度等の環境変化や内分泌攪乱物質の添加等によって影響される代謝測定等を行う。	
	環境生命論および実習 I	環境生命(生命体の構造や機能、生命体と周囲の環境や物質との相互作用に関する分野)を総括する講義およびその実習。環境生命分野の専任教員によるオムニバス形式で、卒業研究テーマ選択の前段階として、環境生命の今日的課題や卒業研究テーマについて学ぶ。  【オムニバス方式/全15回】 (45 小泉 修/3回) 神経系の構造・機能・神経回路形成などの研究について (49 山田 真知子/3回) 生物を用いた環境の測定・評価および生態系の保全と修復法の研究について (52 田村 典明/3回) 藻類・高等植物における外部環境の変化を感知・応答・適応する機構の研究について (57 弓削 昌弘/3回) 脊椎動物の形態形成や両生類胚の調整機構の研究について (60 猪股 伸幸/3回) 遺伝情報学分野	オムニバス方式  講義 20時間 実習 10時間

授 業 科 目 の 概 要				
(国際文理学部 環境科学科)				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学 科 科 目	環 境 生 命 科 目	環境生命論および実習Ⅱ	環境生命を総括する講義およびその実習。コース履修学生が専任教員の卒業研究テーマを選択(想定)して、環境生命の特定の専門分野での課題およびその課題を解決するための基本的理論・研究手法について学ぶ。	講義 20時間 実習 10時間
		エコライフスタイル学	人間を取り巻く自然的、物理的、科学的環境と人間集団や人間社会の諸々の相互関係について学習し、社会的な側面から環境調和型社会を構築するための方法論および生活者の視点から環境社会における情報収集・選択の在り方、ライフスタイルの設計などについて学習する。	
	環 境 生 活 科 目	化学物質管理	化学物質の環境汚染状況、使用、排出実態を物性等との関連や、国内および国際的な化学物質管理に関する規制、及び化学物質の測定法や汚染評価法と制御技術についての講義を通じて、社会環境中の化学物質の動態を理解するための基礎知識を取得し、化学物質のライフサイクルと環境汚染、リスクとの関連を理解し、リサイクル社会における望ましい化学物質管理方策について学ぶことを目標とする。(リサイクル社会における化学物質管理に関する講義)	
		都市空間デザイン	人が地球環境に負荷をかけず、安心して生活できる居住環境を創るために必要な課題について理解する。特に都市居住における人と環境の相互作用、循環システムなどの点について現状の課題を理解し、考察するとともに、それらの課題解決を図る計画について学ぶ。	
		循環・廃棄物管理	廃棄物処理の歴史と廃棄物の定義・種類・発生量などの現状から、循環型社会への転換の必要性と目標や展望、リサイクル社会における物質の流れについての講義を通じて、循環型社会形成に向けた転換(資源循環)と環境負荷の低減や更にはコスト低減というトレードオフの関係を理解し、両立させることの必要性を習得し、また、国内および国際的な有害廃棄物管理制度と管理方策を理解することを目標とする。(廃棄物に対する社会的対策の講義)	
		内空間環境工学	安全・衛生的かつ快適な生活環境を実現するために必要な、音・熱・光・空気環境に関わる物理現象の基礎的な理論を理解し、それらの物理量の定義と意味を理解するとともに、それらの把握法、および評価について学習する。	
		環境生活学	人の暮らしは、環境との調和を保ちながら維持されねばならない。しかしながら経済活動の発展と、それに伴う消費活動の拡大は、日常の市民生活が環境に過重の付加を与え、環境汚染、破壊を招いている。経済活動による環境問題も、大本は市民の消費活動に根ざしている。従って、市民生活のレベルにおいて環境に与える影響を、線形計画法などの数学理論を用いて計量分析し、環境と調和する生活スタイルの創出について考察する。	

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文理学部 環境科学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 目  専 門 科 目  環 境 生 活 科 目	環境人間工学	人間工学領域のなかで、特に、人間・環境系について学ぶ。現在、人間・環境系に対する社会の関心は高く、我が国の研究水準も高い。最近の研究成果を含めて、最先端の知見を紹介する。 主として物理環境(温熱環境、光環境、気圧環境、空気環境等)が人体生理反応、心理反応および作業能に及ぼす影響を明らかにする。検討する環境は、住宅環境、ビル環境、衣服環境さらには特殊労働環境まで、広範囲なものとなる。企業との共同研究事例をも含め紹介する。	
	環境生活生理学	環境変化に対応した人間の生理作用等を理解し、生理学の立場から生活環境のあり方について学ぶ。特に、日常生活において経験する温熱環境、空気汚染、光環境、音環境の人体への影響について学習する。	
	環境衛生学	人間の生活の場を対象として、衛生学の観点から人と環境との関係を学ぶ。特に、人の健康影響に着目し、持続可能な社会の構築に必要な生活環境の整備などについて学習する。対象とする環境要素は、地球温暖化と関連した温熱環境、大気汚染と関連した空気環境、都市化に伴う光環境の変化、騒音と関連した音環境を取り上げ、ヒトの健康との関連で環境の整備について学習する。	
	生活環境デザイン	生活の場に求める要件は「個」の視点から「共生」の視点まで複雑化している。これに対応するためには、人間の行動や自然、社会との関わりを踏まえた人の要求の抽出と分析が必要である。本講義ではその抽出・整理手法と、その空間化手法について学習する。	
	環境リスク	人間の健康を追求し社会活動を行う際に問題となるリスクを削減することは、自然環境を保全することとしばしば矛盾し対立する。このような状態を把握し、解決していく方法を学習する。特に、環境リスク対策を中心として、科学的な知見によってリスクの発生確率を推定し評価するリスク・アセスメント、環境リスクを低減させるためのリスク・マネジメント、リスクに関する情報を共有し適切な行動を促すためのリスク・コミュニケーションなどを学習する。	
	環境生活基礎実験	生活環境における様々な環境要因を正確に把握する測定法を習得する基礎を学ぶ。対象とする環境要因は、音・熱・光・空気質とし、それらの物理量の実態測定を行うことにより、その測定方法と結果の意味を理解するとともに、内空間環境工学での講義内容をより深く理解する。	
	エコ・リサイクル実験	地球環境の保全や資源・エネルギーの有効利用の観点から、生活活動によって生じる生活環境材料の廃棄物・不用品およびエネルギーの再利用について実験を通して学ぶ。身近な素材の物性や組成の理論をもとに利用・加工を実践し、各プロセスにおける反応の効率化やエネルギーの保存の状態について測定、評価を行うことで理論への理解を深める。	
	環境影響検査法	生活環境や自然環境がヒトの生理・心理機能へ及ぼす影響を測定する技法を習得する。検査項目は、生理機能検査法(循環動態測定、呼吸機能測定、自律神経機能測定、エネルギー代謝測定、体温測定など)、心理機能検査法(心理負荷測定、ストレス度測定、性格検査など)、行動調査法(身体活動量、時間調査法など)を取り上げる。	

授 業 科 目 の 概 要				
(国際文理学部 環境科学科)				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学 科 科 目	専 門 科 目	環境生活演習Ⅰ	衛生学・生理学的な生活環境設計に関する講義(環境生活生理学、環境衛生学)における理解を深めるための演習を行う。	
		環境生活演習Ⅱ	環境社会を創生するためのライフ空間の設計に関する講義(内空間環境工学、生活環境デザイン)における理解を深めるための演習を行う。	
		環境生活演習Ⅲ	循環型社会を創生するための社会システムに関する講義(循環・廃棄物管理、化学物質管理)における理解を深めるための演習を行う。	
		環境生活演習Ⅳ	環境リスクに基づく人間社会システム構築に関する講義(環境リスク、エコライフスタイル学)における理解を深めるための演習を行う。	
		環境生活論および実習Ⅰ	環境生活を総括する講義およびその実習をおこなう。卒業研究テーマ選択前の環境生活全般にわたる現在の問題やこれからの研究テーマについて教育する。  【オムニバス方式/全15回】 (47 野馬 幸生/4回) 循環型社会分野 (50 森田 健/4回) 生活デザイン分野 (51 大中 忠勝/4回) 環境衛生学分野 (61 錦谷まりこ/3回) 環境リスク分野	オムニバス方式 講義 22時間 演習 8時間
		環境生活論および実習Ⅱ	環境生活を総括する講義およびその実習を行う。卒業研究テーマを選択(想定)して、生活デザイン分野での現在の理論や現実の問題およびその問題を解決するこれからの研究手法について教育する。	講義 20時間 実習 10時間
	国 際 環 境 政 策 科 目	環境法Ⅰ	環境法は、産業公害、公害による健康被害、生活環境問題、化学物質汚染問題など次々と発生する環境問題に対応するため整備され、体系化されてきた。本講義では、種々の環境問題を解決するための法制度について、制定された背景や主旨、内容とともに、社会情勢などの変化に対応した改正の状況、法制度の施行状況と環境の改善効果について学ぶ。また、改正が予定されている法制度について課題等を理解する。	
		環境法Ⅱ	気候変動、オゾン層破壊をはじめ地球的規模の環境問題や国境を越えた環境問題に対応するため、国連等が中心となって条約が制定され、各国が法制度を整備してきた。本講義では、種々の地球的規模の環境問題を解決するための法制度について、整備された背景や主旨、内容について学ぶ。また、現在、国際的に議論が行われている問題に関する条約・議定書・法律について論点等を理解する。	

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文理学部 環境科学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 科 目  専 門 科 目  国 際 環 境 政 策 科 目	国際機構法	相互依存とグローバル化が深化する国際社会において、国家間の利害関係を調整し、国際社会の共通利益を実現するために、国際機構を通じた国際協力がどのような法的枠組のもとで行われているかを学ぶ。国際機構の史的展開、種類と活動、国際法主体性と特権免除、内部構造と権限、国際公務員制度などを主な内容とする。さらに、国際機構の成立と発展がもたらす国際社会の組織化という現象が、分権社会の法としての国際法に及ぼす影響についても考察することにより、国際関係の法的理解を一層深める。	
	地域環境政策論	水俣病をはじめわが国では悲惨な公害問題が発生し、その後も廃棄物問題や様々な環境問題を経験し、その克服に努力してきた。本講義では、過去から現在に至るさまざまな環境問題について、問題の内容とその背景事情、解決に向けた取組を学び、政策の手法とその効果を考える。また、環境問題の中から社会的関心の高い事例を取り上げ、政策立案の過程などを深く掘り下げて学ぶ。	
	国際環境政策論	気候変動、オゾン層破壊、廃棄物の越境移動、酸性雨などの地球規模や国境を越えた環境問題が発生し、国や国際機関等では条約の締結、国内法の整備、経済的手法の導入、調査・研究、技術開発などさまざまな政策が実施されてきている。本講義では、問題の内容とその背景事情、解決に向けた取組を学び、政策の手法とその効果を考える。また、国際的な環境問題の事例について、条約交渉の過程などを深く掘り下げて学ぶ。	
	国際協力・NPO/NGO論	現在の国際社会は、単に諸国家が共存する時代から、国家やそれ以外のNGOなどのアクターが積極的に協力し合わなければならない時代へと移行しつつある。しかしながら、その現実には、政治的にも経済的にも様々な矛盾に満ちている。そうした矛盾はどのように解消されようとしているのか。そこで、本講義は国際開発協力を中心に、国際協力のあゆみや国際協力の仕組みなどについて考えながら、そうした問題について検討する。特に、国際協力のトップドナーである日本は国際協力分野でどのような貢献をしてきたかを考察する。 実施される授業計画の要旨次のとおり：1) 国際協力とは何か、2) 国際社会の現状：なぜ国際協力が求められるのか、3) 南北問題と国際協力、4) 日本の国際協力(ODA)と開発援助、4) 日本のNGOと国際平和協力、5) 国際協力のジレンマなど。	
	社会環境設計論	環境変化と経済発展の中で、持続可能な発展(サステイナブル・ディベロップメント)という概念とそれを可能にする社会設計はどうあるべきかについて学習する。つまり、科学および社会的な意志決定と行動の両面から環境の諸点に関し基礎を学び、持続可能社会の構築に向けて重要な基本的視点を獲得する。	
	環境統計学	この講義では、環境データに適用可能な統計手法について学ぶ。前半では、多変量解析(重回帰分析、クラスター分析、主成分分析、因子分析)について学ぶ。また、環境データの多くは、位置情報を伴うデータであり、これを積極的にデータ解析に取り込んだ空間統計解析の手法の概要、およびコンピュータの地図上にそれらのデータを可視化して分析を行うことのできる地理情報システム(GIS)の概要について学習する。また、統計解析ソフトウェアやGISソフトウェアによる演習も取り入れる。	講義 24時間 演習 6時間

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文理学部 環境科学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 科 目  専 門 科 目  国 際 環 境 政 策 科 目	環境(負荷)評価	社会・経済活動や、市民生活を環境負荷の面から捉えることで、多面的なものの見方を築く。また、このような活動に対する環境負荷を集約し評価する手法として、Life cycle assessment (LCA)やLife cycle cost (LCC)等を理解する。さらに、持続可能社会実現に向けた政策等に、このような評価手法が何故必要になるのか、様々な環境負荷の評価やISO14000の事例等に基づき、その関係を学ぶ。	
	ミクロ経済学 I	経済を理解するにあたって最も重要なのは市場経済のメカニズムに対する理解である。本講義ではまず、各経済主体の行動理論、特に消費者の行動と生産者の行動に関する理論を学んだ上、それらに基づいて機能している市場経済のメカニズムについて学ぶ。また、多くの応用例を用いてミクロ経済学の理論が現実の経済社会にどのように適用されているかについて検討する。	
	環境経済学	環境経済学は、環境問題の発生メカニズムを明かにし、環境破壊の影響を評価することで、今後の持続可能な社会の実現に向けて具体的な対策を示す。本講義では、これらの環境問題に関してどのような対策が考えられるかを検討する。環境経済に関する理論も具体的な事例を紹介しながら、経済による問題の取り扱い方、考え方を身につけることが目標である。	
	国際環境経済論	この講義では、環境経済学(1年後期)の基礎的な講義内容を発展させ、国際社会の視点に立って環境経済学について学習する。 国際間の環境、経済、資源、食料、エネルギー問題を経済学の側面から解析し、国際経済に関係する環境問題をテーマとしている。具体的には、グローバリゼーションの進展、国際貿易や直接投資による地域的及び国際的な環境にどのような影響を与えるのか、さらに地球温暖化への対応の国際協力などを基本的な課題として、それに関連する理論を紹介する。	
	環境ビジネス	クリーンエネルギー、水質汚濁防止、土壌汚染防止、浄化、リサイクルなど多岐にわたる環境ビジネスの事例とこれからの社会における環境ビジネスの展望について学習する。	
	環境会計論	環境会計は、国や地域を単位とするマクロ環境会計と企業などの組織を単位とするミクロ環境会計に大別される。本講義では、企業組織を中心に、企業外部に向けて情報開示目的とする環境会計および企業の内部管理目的とする環境会計の基礎知識を学ぶ。その上、企業の社会的責任(CSR)並びにその第三者による環境監査を含んで、如何に持続可能な循環型社会システムを構築するかについて考える。	
	企業経営と環境	実践的企業経営と環境問題との接点に関する現実的問題を解説し、企業における環境保護を意識した経営活動の在り方を環境会計の活用法なども含めて学習する。	
	環境影響論	地球温暖化、大気汚染、廃棄物汚染などのグローバルおよび地域の環境問題が、各国の経済あるいは社会活動に及ぼす影響について学ぶとともに、それを経済学的な視点から評価し、それをもとに、最適な政策をどのように選定するかについて学習する。	

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文理学部 環境科学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 科 目  専 門 科 目  国 際 環 境 政 策 科 目	環境マネジメント演習Ⅰ	社会環境を把握するための環境データの分析や考察に必要な数理統計学の手法に関する演習を行う。	
	環境マネジメント演習Ⅱ	環境経済学は、環境問題の発生メカニズムを解明し、環境破壊の影響を評価することで、今後の持続可能な社会の実現に向けて具体的な対策を示すことを課題としている。本演習では、この環境経済学に基づくいくつかの対策(事例)に関する文献あるいは研究論文等も参考にしながら、持続可能な社会の実現に向けたこれからの対策をどのように行うべきかについて討論を行い、学習する。	
	環境マネジメント演習Ⅲ	環境政策に関する国内外の古典的文献を会読するとともに、最新の論文について分担して抄録を作成し、発表・討論を行う。文献・論文は、公害問題、化学物質汚染、気候変動、生物多様性、政策手法、他国の環境政策など幅広い分野から学生の希望により選定する。また、環境政策に関してパブリックコメントが募集されている事案について、内容を検討し、討論を行う。	
	環境マネジメント特別講義Ⅰ	企業活動あるいは企業経営において、種々の環境問題がどのような影響を及ぼし、その対応をどのようにすべきか、さらには、環境保護について企業としてどのような取り組みを実施する必要があるかなどについて学習する。なお、講義の一部は、2～3名の企業の経営者・環境部門の責任者等をゲストスピーカーとして招き、環境を視野に入れた企業活動の現状について学習する。	
	環境マネジメント特別講義Ⅱ	経済学、政策学およびその他の社会科学の視点から、環境と経済・政策の関わりについて理論的・実証的な研究活動、あるいは国際的な研究活動について学習する。なお、講義の一部は、2～3名の他大学の教員・研究者を講師として招き、環境経済学、環境政策学における最新の理論あるいは研究内容について学習する。	
	環境マネジメント特別講義Ⅲ	国あるいは地方公共団体において種々の環境問題に対して、どのような政策を構築し、それによってどのような効果が生まれているか等の具体的な事例について学習する。なお、講義の一部は、環境省、経済産業省などの国の機関や地方公共団体の環境関連部署の環境行政・事業等の担当者をゲスト講師として招くほか、シンポジウム形式の講義(学生、教員および一般参加の討論会)も行う。	
	国際環境政策論および実習Ⅰ	国際環境政策(環境調和型社会の構築を主要課題として、地域・国の政策経済、国家間の連携政策と環境との相互作用)を総括する講義およびその実習をオムニバス方式で、卒業研究テーマ選択の前段階として、環境政策、環境経済および社会における数理分析での今日的課題や卒業研究のテーマについて学ぶ。 【オムニバス方式/全15回】 (54 柳橋泰生/5回) 環境政策について (62 藤野友和/5回) 環境統計について (63 周 夏露/5回) 環境経済について	オムニバス方式 講義 18時間 実習 12時間
	国際環境政策論および実習Ⅱ	国際環境政策を総括する講義およびその実習。コース履修学生が専任教員の卒業研究テーマを選択(想定)して、環境政策、環境経済および社会における数理分析などの特定の専門分野での現在の理論や現実の課題およびその課題を解決するこれからの研究手法について学ぶ。	講義 20時間 実習 10時間

授 業 科 目 の 概 要					
(国際文理学部 環境科学科)					
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考		
学 科 科 目	専 門 科 目	関 連 科 目	東アジアの歴史	東アジアは、歴史的に文化交流が活発であり、かつ経済的にも競争と協調関係にあるものの、一方で領土権・歴史認識問題などで政治的にも敏感な問題を抱えている。したがって、日中韓の緊密な連携を模索するためには多角的な研究とアプローチが必要であり、アジアのゲートウェーの地にある福岡女子大学は先端研究機関としてその解決に向けた責務を果たすべき立場にある。それゆえに東アジアの歴史を論じながら、文理を越境する東アジアに関する幅広い視野を持ち、環境、エネルギー、貧困、医療、災害、都市問題、水問題のような、東アジア地域に山積する地域共通課題を適切に認識し、それに対する対応策を構築、評価できるように、努力する。	
			国際開発論	グローバル社会では、人の活動、経済活動の拡大に伴って、農林水産、鉱物、エネルギー等の資源を大量に消費し、その量はさらに急激に増大している。このような資源の多くは開発途上国にあり、資源開発のために自然破壊、環境破壊を引き起こし、その国の人々の健康を阻害し、生存をも脅かす事態が発生している。本講義では、国際開発の実態の紹介と、それに対する各国の取り組みや国際的な対応について、国際法の視点を中心に考察する。	
			アジアの現代文化	本講義は、アジアにおける近現代の美術に現れた「文化的」な特質を受講生と共に考察するところにその目的がある。これらの美術は、西洋の模倣でもなく、伝統の繰り返しでもない、変化しつつあるアジアの「いま」を生きる作者の心的な描写である。従来の「美術」の枠にとらわれない、アジア美術の独自性や固有の美意識を示した作品を取り上げながら、新たなアジア文化の価値とその意義を紐解いていくことにする。具体的な授業計画としては、①アジア美術の近代から現代の潮流、②アジアの民俗芸術および大衆芸術、③現代における伝統美術および工芸などである。	
			東アジアの法と社会	本科目では、東アジア諸国の法について、各国の社会でいかなる役割や機能を果たしているのかを明らかにする。単に法制度だけではなく、人々の生活にある法意識や法感覚まで分け入り、東アジアの生活実態における法のあり方を学習する。「法律」という切り口で東アジアの社会に接近しようとするのである。 具体的な授業計画としては、①現代中国法と社会、②現代台湾法と社会、③現代北朝鮮法と社会、④現代韓国法と社会などである。	
卒 業 研 究		卒業研究演習	学生が設定した学習目標に沿って学科基本科目、専門科目を履修した後、主体的に設定した課題について、毎週のセミナーを通じてその課題に関する知識の習得、課題の分析を経て、課題解決に至る研究計画を策定する指導を行う。その計画に沿って、資料収集、セミナーを行って課題解決に至る迄の研究を指導する。このとき必要に応じて関連する他学科、他コースの科目を履修する。この全過程を通じて、学生の主体性を尊重し、学生自らが課題に取り組む姿勢を養うとともに分析、判断、洞察による課題解決能力を養成する。		
		卒業論文	環境科学科の学科基本科目、専門科目を履修した後、設定した課題について卒業研究を行い、それによって培った知識、能力を基に、その課題について自ら解決に至る道を探って完成に至るまでの指導を行うとともに、その研究課程と、それによって得られた結論について、明晰な日本語あるいは外国語による論文を作成する指導を行う。		



授 業 科 目 の 概 要			
(国際文理学部 環境科学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教 職 科 目	教職基礎論	<p>教職の意義と教員の役割、研修やサービスや身分保障などを含む教員の職務内容について、基礎的な知識を習得させ、教職への適切な導入を図るとともに、進路選択に資する各種機会を提供することを目標とする。</p> <p>教職の意義と教員の役割については、現状の課題を踏まえていねいな解説を行う。教員の職務内容については、各職務内容を関連させながら解説を行う。</p> <p>授業の方法は主に講義であるが、協同学習方式を適宜取り入れる。毎回の授業内容を復習させるために400字の作文を課題として課し、その作文を担当者が添削したものを発表させて討論させる。</p>	
	教育哲学	<p>教育に関する理念や歴史や思想について、必要な知識を確実に習得するだけでなく、そもそも教育がどうあるべきかを考え抜き、そのみずからの考えを現行の教育制度において積極的に適切に実践しようとする態度と能力を養うことを目標とする。</p> <p>主として、教育研究方法論、欧米教育思想史、日本教育思想史の3分野に分けて授業を行うが、この3分野が相互に関連するような展開を行う。</p> <p>授業の方法は主に講義であるが、協同学習方式を適宜取り入れる。毎回の授業内容を復習させるために400字の作文を課題として課し、その作文を担当者が添削したものを発表させて討論させる。</p>	
	教育心理学	<p>障害のある幼児児童生徒に関しても適切に言及しながら、幼児児童生徒の心身の発達や学習の過程について、確実な理解を図ることを目標とする。</p> <p>教師が学校でさまざまな教育活動を行う場合に、教育心理学の知見が十分に身に付いていれば教師として専門的な学習支援ができることを学ばせる。</p> <p>授業の方法は主に講義であるが、協同学習方式を適宜取り入れる。毎回の授業内容を復習させるために400字の作文を課題として課し、その作文を担当者が添削したものを発表させて討論させる。</p>	
	教育行政学	<p>日本の教育に関する社会的、制度的、経営的事項について、確実な理解を図ることを目標とする。</p> <p>教育は単独で存在しているのではなく、政治や経済や社会に深く結びついて存在しているので、教育政策がゆらぐことを理解させ、教育政策の動向を読み解く理論と方法を学ばせる。</p> <p>授業の方法は主に講義であるが、協同学習方式を適宜取り入れる。毎回の授業内容を復習させるために400字の作文を課題として課し、その作文を担当者が添削したものを発表させて討論させる。</p>	
	教育課程論	<p>日本の学校における教育課程(カリキュラム)の意義とその編成方法について、確実な理解を図ることを目標とする。</p> <p>教師の仕事は、何を、何のために、どう学習させ、学習成果をどう評価するかを思案し実践することであることを理解させ、その理論と方法を学ばせる。</p> <p>授業の方法は主に講義であるが、協同学習方式を適宜取り入れる。毎回の授業内容を復習させるために400字の作文を課題として課し、その作文を担当者が添削したものを発表させて討論させる。</p>	
	理科教育法 I	<p>本授業では、まず、学校教育全体における理科教育の位置づけを明らかにする。そのために、学習指導要領などを参考にしながら、理科教育の目標、内容及び方法について基本的な理解を図る。次に、理科の授業を構成するにあたり必要となる基本的な考え方に習熟する。これらを踏まえて、中学校及び高等学校の理科学習指導案が作成できるようにする。</p>	

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文理学部 環境科学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教 職 科 目	理科教育法Ⅱ	本授業では、教育実習に臨むにあたり必要とされる、中学校および高等学校における理科授業の設計に関わる理論を学ぶ。学習指導案に基づく展開と評価、発問・板書の方法、観察・実験の意義、教材研究、安全教育及び理科室の管理運営などに関する内容について理解を図る。これらを踏まえて、授業を計画し実施できるようにする。	3年毎開講
	理科教育法Ⅲ	本授業では、教育実習において、生徒の観察・実験を中心とする学習指導を行うにあたり必要となる実践的能力を育成するため、教師の立場から単元目標を分析し、教材研究を行う。特に物理分野と生物分野を中心として、教科書に標準的に掲載されているいくつかの観察・実験を参考としながら、学習指導の方法について検討する。	3年毎開講
	理科教育法Ⅳ	本授業では、教育実習において、生徒の観察・実験を中心とする学習指導を行うにあたり必要となる実践的能力を育成するため、教師の立場から単元目標を分析し、教材研究を行う。特に化学分野と地学分野を中心として、教科書に標準的に掲載されているいくつかの観察・実験を参考としながら、学習指導の方法について検討する。	3年毎開講
	道徳教育の研究	日本の学校教育における道徳教育の意義と役割を確実に理解させ、学校の教育活動において道徳の指導が効果的にできるための能力を養うことを目標とする。 そもそも道徳を教えるということはどういうことかという問題、道徳教育の歴史、道徳教育の現状を踏まえたうえで、実際の道徳授業の事例研究を行う。 授業の方法は主に講義であるが、協同学習方式を適宜取り入れる。毎回の授業内容を復習させるために400字の作文を課題として課し、その作文を担当者が添削したものを発表させて討論させる。	
	特別活動の研究	教育課程(カリキュラム)の意義とその編成の方法を踏まえたうえで、特別活動の指導法について、確実な理解を図ることを目標とする。 特別活動の特質、目標構成、内容構成、指導計画の作成と実施の仕方、特別活動の現状と課題などについて理解させ、特別活動における実践的指導力の基礎を身に付けさせる。 授業の方法は主に講義であるが、協同学習方式を適宜取り入れる。毎回の授業内容を復習させるために400字の作文を課題として課し、その作文を担当者が添削したものを発表させて討論させる。	
	教育方法学	情報機器や教材の活用の仕方についても必要に応じて紹介しながら、教育の方法と技術について、確実な理解を図ることを目標とする。 教師が行う学習指導の成果は、教師が教育方法学の知見を十分に身に付けているかどうかにかかっていることを理解させ、具体的な「教育の方法と技術」を学ばせる。 授業の方法は主に講義であるが、協同学習方式を適宜取り入れる。毎回の授業内容を復習させるために400字の作文を課題として課し、その作文を担当者が添削したものを発表させて討論させる。	
	生徒指導論	生徒指導の理論と方法、進路指導の理論と方法の両方について、確実な理解を図ることを目標とする。 生徒指導と進路指導は、生徒の人生行路にとって計り知れない重要な指導になることを理解させ、生徒にとって効果的な生徒指導と進路指導ができるように、その理論と方法を学ばせる。 授業の方法は主に講義であるが、協同学習方式を適宜取り入れる。毎回の授業内容を復習させるために400字の作文を課題として課し、その作文を担当者が添削したものを発表させて討論させる。	

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文理学部 環境科学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教 職 科 目	教育相談論	<p>カウンセリングに関する基礎的な知識を習得させながら、教育相談の理論と方法について、確実な理解を図ることを目標とする。</p> <p>教師が効果的なカウンセリング技法を身に付けたいという教育相談を行うことができれば、生徒の健全な人格的発展が大いに促されることを理解させ、その理論と方法を学ばせる。</p> <p>授業の方法は主に講義であるが、協同学習方式を適宜取り入れる。毎回の授業内容を復習させるために400字の作文を課題として課し、その作文を担当者が添削したものを発表させて討論させる。</p>	
	教職実践演習(中・高)	<p>教職課程の総まとめとして、大学4年間で学生が学んだ学習知と教育実習等で得られた実践知の統合を図り、確かな教師力を涵養することを目標とする。</p> <p>特に、教師としての使命感や責任感や教育的愛情、社会性や対人関係能力、幼児児童生徒理解や学級経営力、教科の指導力について、教員養成段階で必要とされる水準に確実に達するようにする。</p> <p>履修カルテに基づいてこれまでの学習を振り返りつつ、発表・討論・ロールプレイング・模擬授業等を演習として行う。</p>	
	事前・事後指導	<p>この科目は、高等学校教育実習と連動した科目であり、この実習の事前に5回、事後に3回授業を実施する。</p> <p>第1回 事前指導Ⅰ(実習の心得) 第2回 事前指導Ⅱ(事務手続きと模擬授業) 第3回 事前指導Ⅲ(高等学校長による講義) 第4回 教育実地研究Ⅰ(高等学校での授業観察と合評会) 第5回 教育実地研究Ⅱ(高等学校研修主任による指導) 第6回 事後指導Ⅰ(高等学校長による講義) 第7回 事後指導Ⅱ(模擬授業) 第8回 事後指導Ⅲ(模擬授業とまとめ)</p>	
	中学校教育実習	<p>本学近隣の4つの中学校(福岡市立香椎第1中学校、香椎第2中学校、香椎第3中学校、城香中学校)において、中学校教育現場を実際に観察させ、必要に応じて教育活動に参加させる「観察・参加実習」を行う。</p> <p>この実習では、教職を志望する2年次学生に、教職の何たるかを実感・体得させることによって、実習後の勉学意欲を増進させることを重視する。</p> <p>効果的な実習成果が得られるように、各時間の教育活動過程について記録をとったうえで、それをまとめるかたちでの「観察・参加実習日誌」を作成させる。</p>	
	高等学校教育実習	<p>学生がこれまでに培ってきた能力を高等学校の教育現場で発揮させることによって、教師の仕事の意義と役割を深く理解させることを目標としている。</p> <p>実習を通して、学習指導・生徒指導・学級経営等を十分に行うことができるようになるだけでなく、学生自身の人生観・職業観・社会観をさらに深めさせる。</p> <p>このような体験によって得られた成果を、教職課程の最後の総まとめである教職実践演習で振り返ることができるようにする。</p>	

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文理学部 環境科学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教 職 科 目	学校経営と学校図書館	<p>学校教育において学校図書館が果たす役割を明らかにして、学校図書館の理念、発展過程とその課題、教育行政とのかかわり、学校図書館経営のあり方などをはじめとして、学校図書館全般についての基本的理解を形成することを目標とする。</p> <p>学校図書館経営の責任者として司書教諭が担うべき任務と役割を明らかにして、学校内の協力体制づくりや司書教諭としての研修の重要性について解説する。今日の学校教育の諸課題を踏まえて、学校図書館の教育的意義と司書教諭の果たすべき任務を明確に理解させるために、意欲的で創造的な活動を学生に促す学習内容を提供する。</p> <p>主な内容は、次の4項目である。(1)学校図書館の理念と教育的意義、(2)教育行政と学校図書館、(3)学校図書館の経営、(4)司書教諭の任務と役割。</p>	隔年開講
	学校図書館メディアの構成	<p>学校図書館メディアの構成に関する理解と実務能力の育成を目指すとともに、司書教諭としての基本的な考え方の構築を図ることを目標とする。</p> <p>高度情報社会における学習環境の変化に伴うメディアの教育的意義と役割について取り上げ、各種メディアの種類と特性について理解させ、適正な資料の選択と収集を目的とした評価を行うことができる能力を育成する。</p> <p>主な内容は、次の5項目である。(1)高度情報社会における学校図書館メディア、(2)学校図書館におけるメディアの種類と特性、(3)学校図書館メディアの構築、(4)学校図書館メディアの組織化の意義と展開、(5)学校図書館メディアの組織化の実際。</p>	隔年開講
	学習指導と学校図書館	<p>学校図書館は学習指導の展開に寄与するという役割を有するので、学習指導を行う場合に学校図書館メディアをどう活用するかについて理解させることを目標とする。</p> <p>児童生徒が学校図書館に備えられた多様なメディアを活用して自主的、効果的、かつ積極的な学習を行うためには、学習目的に合致したメディアを選択収集し、活用し、学習結果をまとめて発表する能力が一定の計画のもとに育成されていなければならない。この能力は、高度情報社会ではきわめて重要である。</p> <p>主な内容は、次の5項目である。(1)教育課程の展開と学校図書館、(2)主体的学習と学校図書館メディア活用能力の育成、(3)学習過程における学校図書館メディア活用、(4)学習指導における学校図書館の利用、(5)学校図書館における情報サービス。</p>	隔年開講
	読書と豊かな人間性	<p>司書教諭には、児童生徒の豊かな人間性の涵養に資するために、全教職員の指導活動を援助し、父母や社会の人々に働きかけるなどの活躍が要求されている。このことを踏まえた上で、児童生徒の発達段階に応じた読書教育の理念と方法について理解を深めさせることを目標とする。</p> <p>読書から遠ざかっている児童生徒の現状や、読みの多様化が進展している実態から、児童生徒に読書を促し、読書の生活化を図る方法を探る。</p> <p>主な内容は、次の5項目である。(1)児童生徒の読書の意義と目的、(2)発達段階に応じた読書の指導と計画、(3)児童生徒向け図書の種類と活用、(4)読書の指導方法、(5)家庭、地域、公共図書館等との連携。</p>	隔年開講

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文理学部 環境科学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教職 科目	情報メディアの活用	<p>学校図書館における多様な情報メディアの特性と活用方法を理解させることを目標とする。</p> <p>各メディアは、それが扱う情報形態の特性・特色のみならず、物理的媒体としての特性・特色をもつ。これを生かした活用方法を習得させ、同時に情報メディアが有する「負の要素」にも目を向けさせて、それに児童生徒が染まらないように指導することの重要性についても認識させる。</p> <p>主な内容は、次の5項目である。(1)高度情報社会と人間、(2)情報メディアの特性と選択、(3)視聴覚メディアの活用、(4)コンピュータの活用、(5)学校図書館メディアと著作権。</p>	



授 業 科 目 の 概 要				
(国際文理学部 食・健康学科)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
ファーストイヤー・ゼミ	ファーストイヤー・ゼミⅠ	<p>教養教育を享受し十全なアカデミックライフを送るための基本となるスタディースキルおよび論理的思考能力と的確な日本語の運用能力の育成を図る。</p> <p>その目的の下、ファーストイヤー・ゼミⅠでは、「学術言語プログラム」と関連させながら、図書館利用法、文献資料の収集・活用法、情報収集と編集の方法などの基本的なスキルに始まり、文章表現、プレゼンテーション、日本語による討論を通じて実践的な主体的学習能力を育成する。</p> <p>本学で学ぶことの意義を学生に自覚させ、学習の動機付けを図るため、本学固有の学校文化（大学史や教育理念等）に関する教育やキャリア形成の導入学習を実施する。また、フィールドスタディの事前学習としても活用する。</p> <p>長期留学生向けには、日本語の基礎教育の一環とする。</p>	講師以上の教員全員が輪番制で担当する。	
	ファーストイヤー・ゼミⅡ	<p>ファーストイヤー・ゼミⅠで養った論理的思考能力と言語による運用能力をさらに発展させるために、担当教員の指導の下、特定のテーマについて学生が調査・研究・発表をおこなう。発表においては、学生同士のピア・レビューをおこなうことにより、主体的な学習の結果に対する相互の批判能力を養う。</p> <p>また、フィールドスタディの事後学習としても活用する。</p>	講師以上の教員全員が輪番制で担当する。	
学部共通科目	学術英語プログラム（AEP）	学術英語コミュニケーションⅠ	<p>福岡女子大学(FWU)で英語を駆使して知的にかつ充実した学生生活を送るための「必須の知的生活術」を修得する。</p> <p>大学の部局や施設の名称、授業の履修システム、学期のスケジュールの立て方、学習や生活面の助言の受け方、図書館やメディア・センターの活用法、クラブやボランティア活動、キャリア設計など、英語により理解し、英語により問題解決する態度を養う。身近にある英語を発見し、英語でコミュニケーションをとる意義を考える。また英語での自己紹介のグループでの練習を通してほかの学生との係わり合いを深めていく。</p>	
		学術英語コミュニケーションⅡ	<p>学術英語リーディングⅡと連動したクラス運営をおこなう。</p> <p>報道記事、科学コラム、エッセイ、小説などを扱う読解授業の思考をさらに深めるためグループ・ディスカッション（簡単な発表と質疑応答）を中心におこなう。同時にコミュニケーションの相手と情報や意見交換をする上で必要なアウトプットのためのスキルを学ぶ。口頭での発表の場合には話す速度、声の大きさ、抑揚などを身につけることも必要である。音読などで英語を声に出す練習を取り入れたり、聞いて理解してもらうための言葉の選び方、パラフレーズの練習も取り入れていく。</p>	
		学術英語コミュニケーションⅢ	<p>学術英語コミュニケーションⅠ、Ⅱで学んだことを発展させ、スキルとストラテジーの活用を促す。</p> <p>ブレイン・ストームやマインド・マップなどの手法を取り入れ、情報の整理をする練習をする。既習科目の仕上げとして「ポスター発表」に向けた準備と発表をおこない、コミュニケーションの発表者と聴取者としての側面を実践的演習形式で学ぶ。発表者に対しては、学術英語コミュニケーションⅠで修得した図書館の活用法と情報収集法の定着を確認し、聴取者へはノート・テイキング、質疑応答の方法の定着ぶりを確認する。</p>	

授 業 科 目 の 概 要					
(国際文理学部 食・健康学科)					
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考		
学部 共通 科目	学術 言語 プログラム	学術英語 プログラム (A E P)	学術英語コミュニケーションⅣ	学術英語リーディングⅤと連動。学術英語コミュニケーションⅢまでに学んだことを生かし、専門領域に特化した高度な内容について発言することを目標とする。 決まり文句や表現を含めた効果的なディスカッション方法を学ぶことで、話題変更の方法、グループで交わされた意見の集約、意見の分析の仕方を体得する。学術英語リーディングⅤで読んだ資料を基に、学術英語コミュニケーションⅢで学んだブレイン・ストーミングやマインド・マップを使い学生自身が興味と知識をもつ話題に関し発表課題を決定し、学期末にはファイナル・プレゼンテーションを行う。同時に質疑応答をおこない受講者間で批評・評価をおこなう。	
			学術英語リスニングⅠ	英語で開講されるアカデミックな講義を理解し効果的にノートをとれるよう訓練をおこなう。 まず音声学の基礎、特にアメリカ英語に見られる音の変化を学ぶ。さらに英語のバリエーションに触れ、それぞれの特徴を学ぶ。これらを精聴することで英語の音を身につける練習をする。また英語での講義の基本構成を学んだ後、ノート・テイキングの技術と授業後に理解の展開を図るためのノート構成法を学ぶ。ここでは多聴がとりいれられ、短い講義やショート・トークから要点をつかむ練習をする。	
			学術英語リスニングⅡ	学術英語リスニングⅠで学んだ知識の定着を図るためにe-learningを用いた多聴をおこなう。 学術英語リスニングⅠでいろいろな英語に慣れたので、ここではやや長い会話や講義を聞いてその内容を把握する練習をする。またコミュニケーションによるインタラクティブな側面を重視しTAによるチュートリアルをおこなう。学術英語コミュニケーションⅡと連動して、アウトプットのためのリスニング指導をおこなう。要点をつかみ、その内容に対する質問を考えるという一連の作業を練習することにより、受動的なリスニングから能動的なリスニングへの転換を図る。	
			学術英語リーディングⅠ	大学に入るまでに学んだ文法事項を再確認し、文から段落、セクションに至る談話の構造を理解して正確に文章を把握する力を身につける。長文を読む準備として、文章同士の論理的なつながりも理解できるようにする。また、パラフレーズの考えを導入して日本語から英語、英語から日本語の語彙だけでなく、英語で発信するための英語から英語への語彙の増加も目指す。 これらの目標を達成するために精読とともに、次の段階の英語を英語として理解する力の育成のために多読も取り入れていく。	
			学術英語リーディングⅡ	学術英語コミュニケーションⅡと同じ教材を使用する。このクラスでは主に受動能力が問われる読解力から、発信する能力への橋渡しが目標とされる。そのため、報道記事、科学コラム、エッセイ、短い小説など様々な内容の英文に触れ、それぞれの特徴を理解し、内容を理解することを中心に授業を展開する。 また小さなグループの中でその内容について英語で口頭発表し、学生自身の意見も簡単な英語を使って言えるようにする。また語彙の育成や多読も学術英語リーディングⅠに引き続き行われる。	



授 業 科 目 の 概 要					
(国際文理学部 食・健康学科)					
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考		
学部 共通 科目	学術 言語 プログラム	学術英語 プログラム (A E P)	学術英語リーディング Ⅲ	学術英語リーディングⅠ、学術英語リーディングⅡで学んだことを発展させ、さらに読解能力を高める。 学生の専門と関係の深い国際、環境、食・栄養等を扱う内容を対象に、多読・速読の訓練を行い、長文を読んで大意を汲み取りつつ、思考のフレームを構築する。また読解を深めるために読んだ内容を図表化するなどのリーディング・ストラテジーの導入も行う。語彙の育成などの必要に応じて、コンピュータの自学システムを活用する。 さらに自分で興味を持った簡単な英語の記事や論文をインターネットで探して読む練習も取り入れ、「自分で学ぶ姿勢」を育成する。	
			学術英語リーディング Ⅳ	学術英語ライティングⅢと同じ教材を使用する。学術英語リーディングⅠ、学術英語リーディングⅡで学んだことを発展させ、さらに読解能力を高める。質の高い英語で書かれた論文や小説に親しむ。また精読によって英文の構造が持つ論理性に配慮できるようにする。 学術英語リーディングⅢに引き続き、自分で学ぶ姿勢の育成のためにも、興味のある分野で簡単なリサーチを行い、英語によるレポートを書き、読んだものの内容を要約するとともにその内容に客観的な批評を加味する。またそれを口頭発表することで発信力の育成にもつなげる。	
			学術英語リーディング Ⅴ	学術英語リーディングⅠからⅣで学んだことを生かし、さらに高度な内容の長文を多読できるようにする。クラスによって「国際」「環境」「食」などの専門領域に特化した英文が集中的に読めるものを用意し、学生が想定する専門と興味に応じて受講できるようにする。 また学術英語ライティングⅣでの資料として英文で書かれた研究論文を読み、要点をまとめ、批評し、論文を書く準備をする。ひとつの論文だけではなく、複数の論文や資料を読み、それらをまとめる練習をする。	
			学術英語ライティング Ⅰ	節および文の基本的なつくりを学び、センテンス単位から、さらにパラグラフ単位の文章を書く力をつける。同時開講の学術英語リーディングⅠと連動させ、語彙を増やし表現力を高める。学術英語ライティングⅠとⅡは共通のテキストを使用する。 日本人の英文では主語のあいまいなものが多く、能動的な表現を避ける傾向にある。簡単な英文でも読む側がわかりやすい英文を書く能力は、特に研究論文の場合に必要となる。読みやすい英文を身につけるために受講生の作文は、教員が添削し、その結果をクラス全体にフィードバックする。	
			学術英語ライティング Ⅱ	学術英語ライティングⅠをふまえ、500語程度のショート・エッセイを書く練習をする。学術英語ライティングⅠとⅡは共通のテキストを使用する。 ひとつの話題に関して自分なりに簡単なリサーチをし、複数のパラグラフを論理的に積み重ねて、効果的に情報を伝える力をつける。表現方法や構成について、受講生どうしで批評し合い、協同編集を経て読み手に理解される文章の書き方を実践的に学ぶ。受講生のエッセイは、教員が添削し、その結果をクラス全体にフィードバックする。	

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文理学部 食・健康学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学部 共通 科目	学術英語プログラム	学術英語ライティングⅢ	同時開講の学術英語リーディングⅣと連動した授業を展開する。 リーディングのクラスで扱うテキストの要約を行うことを通して、文章の論理的構成を理解し、自身の作文に応用できるようにする。また要約に加え、テキストに対する批評を書くことを通して、自分の考えを論理的に伝える方法を学ぶ。表現方法や構成について、受講生どうしで批評し合い、協同の編集作業を経て、読み手に理解される文章の書き方を実践的に学ぶ。受講生の作文は、教員が添削し、その結果をクラス全体にフィードバックする。
		学術英語ライティングⅣ	各自の専門に沿ったテーマを定め、関連文献を読んだり、データの収集・分析などを行い、その結果を踏まえ、自身の考察を含めた学術小論文(3000語10ページ程度)を書くことを目標とする。 学術論文に用いられる表現や、文献の引用の仕方など、論文執筆に向けた技術的な指導も行う。表現方法や構成について、受講生どうしで批評し合い、読み手に理解される論文の書き方を実践的に学ぶ。小論文は教員が評価し、その結果をクラス全体にフィードバックする。
	学術言語プログラム	学術日本語リーディングⅠ	様々なテーマの比較的短い論理的文章を読む。授業では、レポートや学術論文などの論理的文章を読むのに必要な文法知識、構造に関する知識を学び、各自の専門分野の論文を独力で読んでいくための基礎的読解力をつける。また、レポートや論文の文体・語彙・表現に慣れ、内容・論旨を正確に把握する力を身につける。
		学術日本語リーディングⅡ	「リーディングⅠ」で学んだことを発展させ、さらに読解力を高める。いくつかのテーマに関する一定の長さの文章を精読し、内容を正確に理解しクラスで共有したうえで、異なる視点からの関連資料を読む。読んだ資料の論点を整理し、まとめて発表し、自分の意見を述べ、クラスで話し合う。また、文中の語彙・表現に関しても、適宜説明し、理解・習得させる。
		学術日本語リーディングⅢ	「リーディングⅠ・Ⅱ」で学んだことを生かし、さらに高度な内容の長文を多読できるようにする。「国際教養」クラスと「環境科学」「食・健康」クラスに分け、各専門領域に関する分野の基礎知識が得られる文章を用意し、専門科目を学ぶための読解力をつける。各学生に読む部分を分担させ、内容をまとめさせ、発表させる。同じ専門の学生同士で協働することにより、理解を深めさせる。
		学術日本語ライティングⅠ	レポートや論文に必要な論理的文章の書き方の基礎を学ぶ。まず「文の基本」として、今まで習ってきた文法項目や表現の再確認を行い、ミスのない正確な文章が書けるようにする。また、文章表現の規則を学び、文と文のつながりを考えて、まとまった内容の文章を分かりやすく書く練習をする。「リーディングⅠ」と連動し、論理的文章に使われる語彙・表現の習得を進める。学生の作文は、教師が添削し、それをクラス全体にフィードバックする。

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文理学部 食・健康学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学部共通科目 学術言語プログラム 学術日本語プログラム(AJP)	学術日本語ライティングⅡ	新聞記事や論説文を読むためには、書き言葉に特有の漢字語彙の学習が必要となる。非漢字圏の学生はもちろん、漢字圏の学生も漢字熟語の運用についてはなかなか習得が難しい。この授業では、学生が自分の専門分野や興味の対象に応じて、漢字語彙力を伸ばせるよう、専門分野別に「アカデミックな読解のための共通漢字」を拡張していく。前期では、基礎漢字の再確認もしながら、また、読み書きだけでなく文中での用法や使用場面などを含めた練習活動を行う。	
	学術日本語ライティングⅢ	「ライティングⅠ」を踏まえ、論理的文章の書き方を学んでいく。後期では、レポートなどを書くために必要な論理の組み立て方や文章の書き方を学ぶ。論理的展開や表現のモデルを示した読み物を読み、それを参考に作文課題に取り組む。また、引用や討論などに必要な要約力の養成にも力を入れる。要約するテキストは「リーディングⅡ」と連動させる。学生の作文は、仲間同士の合評(ピア・レビュー)を経た後、教師が添削し、それをクラス全体にフィードバックする。	
	学術日本語ライティングⅣ	「ライティングⅡ」に引き続き、専門分野別「アカデミックな読解のための共通漢字」を学んでいく。前期ではテキスト16課中の8課を学ぶので、後期では残り8課を学習する。読解、作文、口頭コミュニケーションなどの活動とも関連づけた総合的な学習も取り入れ、その後の専門性の高い文献を読むための基礎を作ると同時に、自立して専門漢字語彙を習得していける力を養う。	
	学術日本語ライティングⅤ	レポートや論文作成に必要な文章の書き方を学ぶことを目指す。そのために、1年次開講の「ライティングⅠ」「ライティングⅢ」での学習事項を応用しながら以下の1.～3.のことができるようになるように取り組んで行き、各学生の専門に沿った最終課題(期末レポート)完成という成果に結び付ける。 1. 論理的な思考方法を身につける 2. 論理的な文章の展開方法を学び、それを意識して文章の構成を考える 3. 説明的な文章をなるべく多く読む。読む時には、内容だけでなく文章の構成や論理の組み立て方にも注意する	
	学術日本語リスニングⅠ	日本語の音声・音調の特徴を知り、必要な情報を聞きとる・発話意図をつかむ・話の展開を予測する・大意をつかむ等の聴解ストラテジーを身につける。大学の講義の基本構成を理解し、効果的にノートがとれるような訓練を行う。また、各自の自分の発音についても弱点を知り、相手に分かるように聞いてもらえるための練習をする。	
	学術日本語リスニングⅡ	様々な音声素材を聞き、場面や状況を把握したり、スピーチレベルから話者の関係を理解したりして、正確な内容理解に繋げる。聞いて分かる語彙を増やし、高度な内容、抽象的な内容も聞けるようにする。また、聞いた内容をまとめて話す・書く練習も行う。録画したTV番組などから、ある程度まとまった日本人の話聞かせ、ノートをとり、聞いた内容を簡潔にまとめて発表させる。	

授 業 科 目 の 概 要				
(国際文理学部 食・健康学科)				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学部 共通 科目	学術 言語 プログラム (AJP)	学術日本語コミュニケーションⅠ	日本語の口頭能力向上を目指すための授業。 自分が今興味を持っていることについて、詳しく説明できるようになること。話をした相手に自分と同じように興味を持ってもらえるようになること。また、日本人や日本語を勉強している人と話をしている、円滑に会話が続けられるようになるための授業活動を行う。その後に、現代的な話題について扱ったテキストの内容理解および理解した内容に関するグループディスカッションを行う	
		学術日本語コミュニケーションⅡ	「コミュニケーションⅠ」で学んだことを発展させ、スキルアップを促す。さまざまな授業の仕上げとして「ポスター発表」に向けた準備と発表を行い、コミュニケーションの発表者と聴取者としての側面を実践的演習形式で学ぶ。発表者に対しては、図書館の活用や情報収集法の定着、聴取者へはノート・テイキング、質疑応答の方法の定着ぶりを確認する。ビジターとして日本人学生にも参加してもらう。	
		学術日本語コミュニケーションⅢ	「リーディングⅢ」「ライティングⅤ」と連動。「コミュニケーションⅡ」で学んだことを生かし、専門領域に特化した高度な内容について発言できることを目標とする。決まり文句や表現を含めた効果的なディスカッションの方法を学ぶことで、話題変更の方法、グループで交わされた意見の集約、意見の分析の仕方を体得する。学期末にはファイナル・プレゼンテーションと質疑応答を行い、受講者間で批評・評価を行う。	
		学術日本語日本事情Ⅰ	日本語を駆使して、大学で知的にかつ充実した学生生活を送るための「必須の知的生活術」を習得する。また、日本語で授業を受け、日本人学生とともに学び、寮生活を送るために必要な日本についての基本的知識(生活・地理・社会)を再確認する。また、世界の中の日本と自国を客観的に見る視野を持ち、自国について紹介したり、説明したりできるようになる。	
		学術日本語日本事情Ⅱ	新聞やTVニュース・番組、雑誌などから、現代日本社会で起きていることを知り、その背景にある歴史や文化、日本人の考え方などを学ぶ。現代日本における諸問題が自国のメディア、世界のメディアでどのように扱われているかにも目を向け、理解を深めさせる。	
	アド バン スト ・ イン グリ ッシ ユ	英語上級Ⅰ	必修の学術英語をすべて履修した学生に対して、開講される授業科目である。したがって学術英語プログラムでは取り入れられていない種類の英語を学ぶことができ、より高度で総合的な英語力の育成を目的とする。  English and Films 映画は視覚、聴覚教材として優れており、映画を媒体として、文化・環境・自然・食・健康に関する問題を考察する。併せて、映画の見方や映画の文法を学びつつ、教室の枠を越えた英語との接触を促す効果をねらう。	

授 業 科 目 の 概 要				
(国際文理学部 食・健康学科)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学部 共通 科目	アド バン スト ・ イン グリ ッ シ ユ	英語上級Ⅱ	<p>必修の学術英語をすべて履修した学生に対して、開講される授業科目である。したがって学術英語プログラムでは取り入れられていない種類の英語を学ぶことができ、より高度で総合的な英語力の育成を目的とする。</p> <p>English Literature for Non-major 英語を学ぶ上で、英語圏の文化に対する興味は学習動機を高めるという役割を果たすことが多い。やさしい作品を原文のまま読み、英語特有の表現や場面描写を学び、作品の特徴を理解する。併せて、文学作品を分析・解釈するに際して、政治、哲学、思想、心理学などの知見を総動員する必要があることを学び、読む行為は学際的営みであることを体得する。</p>	
		英語上級Ⅲ	<p>必修の学術英語をすべて履修した学生に対して、開講される授業科目である。したがって学術英語プログラムでは取り入れられていない種類の英語を学ぶことができ、より高度で総合的な英語力の育成を目的とする。</p> <p>General English for Science 科学技術に関する語彙や表現を学ぶことによって、さらに高度な論文を読む練習をする。また英語での論文を発表することを念頭に置き、American Psychological Association (APA) のマニュアルに従って研究論文の基本的な構造を学ぶ。</p>	
	外国 語 科 目	中国語Ⅰ	<p>中国語入門 この科目の目的は口語中国語の基礎力を身につけることにある。とくに正しい発音のマスターと初歩文法の学習に主力をそそぐ。書き取りを重視する。 【発音】中国語の母音・子音・声調を、聞き分けることができ、自分で発音でき、ピンイン（ローマ字による中国語表記法）で書き取れるように訓練する。 一音節から二音節、さらに短文になっても、声調が正しくできることが目標である。 前期は発音とピンインの習得に時間の7割、簡単な断定文、形容詞文、動詞文の学習に時間の3割を使う。 【ピンインと漢字】発音の習得とあわせて、ピンインによる表記法を学ぶ。 【単語・文章・運用】教科書の単語と文章を使って、簡単な中国語の読み書きができるようになることが目標である。</p>	
		中国語Ⅱ	<p>中国語入門 この科目の目的は口語中国語の基礎力を身につけることにある。とくに正しい発音のマスターと初歩文法を用いた簡単な会話ができるようになることを目標とする。発音応用訓練を重視する。 【発音】中国語の母音・子音・声調を、聞き分けることができ、自分で発音でき、ピンイン（ローマ字による中国語表記法）で書き取れるように訓練する。 一音節から二音節、さらに短文になっても、声調が正しくできることが目標である。 前期は発音とピンインの習得に時間の7割、簡単なあいさつ、自己紹介等の練習に時間の3割を使う。 【ピンインと漢字】発音の習得とあわせて、ピンインによる表記法を学ぶ。 【単語・文章・運用】教科書の単語と文章を使って、状況に応じた簡単な中国語を自分で言えるようになることが目標である。</p>	

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文理学部 食・健康学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学部 共通 科目	外国 語 科 目	中国語Ⅲ	中国語Ⅰ履修済みの学生向け。 学んだ発音とピンイン表記法を生かして大学中国語初級文法の学習と応用を継続する。口頭作文の能力のレベルアップに力を入れる。テキストの例文を100%身につけ、それを自分で書き、口で話し、そして聞き取れるまで練習する。
		中国語Ⅳ	初級会話を中心とする授業で、中国語の発音と初歩文法を一応習得した学生を対象とする。ある程度の中国語読解力が必要である。 聞き取りと会話力の強化に全力を注ぐ。テキストの内容はもちろん、簡単な日常会話から設定した話題をめぐって会話訓練を行う。
		中国語Ⅴ	初級中国語を一応習得した者を対象とし、すでに学んだ発音、語彙、文法を復習しながら、中級レベルの表現や文法を覚え、語彙の拡大や表現力の向上、特に実用会話能力を身につけることを目指す。 教材としては大学生中国語中級レベルに相当するものを選ぶ。
		中国語Ⅵ	この授業は、中国語の初級文法を一通り終え、継続学習を希望する者を対象とする。実用性を重視し、日常生活や、仕事の場面でよく使われる平易な会話文から入り、徐々に程度を高めて今日の中国社会の姿や中国人の生活習慣、ものの考え方などに触れながら、「聴く、話す、読む、書く、訳す」という五つの技能を身につける。長文の読解や作文などに特に重点を置く。 教材としては大学生中国語中級レベルに相当するものを選ぶ。
		韓国語Ⅰ	韓国語学習の入門として、基本的な日常会話を題材に、韓国語の文字を覚え、正しい発音を身に付けることを目標にする。 具体的には、簡単な挨拶と会話に始まり、韓国語の基本母音と子音、激音と濃音、発音のルールを学習する。徹底して口語韓国語の習得を図り、韓国人とコミュニケーションを図る積極的な姿勢を持つことを目指す。
		韓国語Ⅱ	韓国語Ⅰを補完する学習として、ここでは基礎的は文法を徹底して学習する。前半は日常会話で簡単な表現を題材にして、文法の初歩を学び、後半では平易な文章を読むことが出来るよう韓国語の文法基礎を習得する。テキストの例文を100%身につけ、文法的解説ができるようにする。
		韓国語Ⅲ	韓国語Ⅰ(前期)の授業を踏まえ、韓国語によるコミュニケーションの訓練を中心に授業を展開する。円滑な会話を行うには、先ずは定型表現を習得するとともに、描写、要求、依頼、質問、主張などの自己表現を行うために必要な構文と語彙の習得が求められる。本授業では、こうした表現力の養成を中心に行う。

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文理学部 食・健康学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学部 共通 科目	外国 語 科 目	韓国語Ⅳ	韓国語Ⅱ(前期)の授業を踏まえ、韓国語の文法と言語構造についての理解を図る。文法と構文問題に焦点を当て、中から上級程度の言語構造の理解を図る。また、中級程度の読解教材を用いて、韓国語を正確に読み取る力を養成する。
		韓国語Ⅴ	韓国語で書かれた文献を正確に読み取る読解力を養成する。1年次に習得した文法構造を再確認しながら、より高度な構造と語彙で書かれたテキストを扱う。併せて韓国語による作文力をも養成し、書くこと・表現することを意識しながら読解活動を行う姿勢を養う。
		韓国語Ⅵ	2年生前期の韓国語Ⅴで用いた教材を更に発展させ、環境や食・健康問題、或いは国際関係論を扱った韓国語で書かれたテキストを正確に読み取る読解力を養成する。併せて韓国語による作文力をも養成し、書くこと・表現することを意識しながら読解活動を行う姿勢を養う。
		ドイツ語Ⅰ	新たな外国語を学ぶことの意義を確かめて、ドイツ語圏の多方面の魅力的な文化に親しみながら、ドイツ語の単語と文法知識を身につけることを目標にする。 名詞の性や、名詞・冠詞類の格変化、そして動詞の人称変化等の、ドイツ語に特有の文法事項に習熟し、英語や日本語と対比のもとに言語の多様性を理解する。 国際化・グローバル化の進む現代に、多文化共生の平和な社会を築いていくという観点から、ドイツ言語文化の日常的な調査をうながして、人間力向上の一貫としてのドイツ語学習を動機づける。
		ドイツ語Ⅱ	第2外国語の学習によって日本語と英語と異なる文法法則と出会い、言語の多様性を体得し、多言語学習をとおして日本語が固有に持つ世界観を広げる。 この授業では会話とリスニングを中心に学習するが、小クラスであることを活かし、会話練習に十分な時間を割く。ドイツ語の正しい発音を身に付け、自己紹介から自分状況を簡単なドイツ語で表現する訓練を行う。 国際化・グローバル化の進む現代に、多文化共生の平和な社会を築いていくという観点から、ドイツ言語文化の日常的な調査をうながして、人間力向上の一貫としてのドイツ語学習を動機づける。
		ドイツ語Ⅲ	新たな外国語を学ぶことの意義を確かめて、ドイツ語圏の多方面の魅力的な文化に親しみながら、ドイツ語の単語と文法知識を身につけることを目標にする。 前置詞や、助動詞、文構造、そして時制等の、ドイツ語に特有の文法事項に習熟し、英語や日本語と対比のもとに言語の多様性を理解する。 国際化・グローバル化の進む現代に、多文化共生の平和な社会を築いていくという観点から、ドイツ言語文化の日常的な調査をうながして、人間力向上の一貫としてのドイツ語学習を動機づける。 ドイツ語Ⅰとドイツ語Ⅱ、ドイツ語Ⅳとあわせて、ドイツ語検定試験4級レベルに達する。

授 業 科 目 の 概 要				
(国際文理学部 食・健康学科)				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学部 共通 科目	外国 語 科 目	ドイツ語Ⅳ	<p>第2外国語の学習によって日本語と英語と異なる文法法則と出会い、言語の多様性を体得し、多言語学習をとおして日本語が固有に持つ世界観を広げる。</p> <p>既習の語彙・構文やコミュニケーション・スキルに基づいて、身の回りの生活環境(大学や町)を口頭と筆記で描写する能力を養い、様々なリスニング材料によって聴取能力を強化する。ドイツ語Ⅰとドイツ語Ⅱ、ドイツ語Ⅲとあわせて、ドイツ語検定試験4級レベルに達する。</p>	
		ドイツ語Ⅴ	<p>一年生時に受講したドイツ語に基づいて、簡単なテキストを耳で理解し、テキストを解読し、テキストの語彙を使いながら、テキストについて自分の意見を表現する。また、新しい文法事項を学生によるテキストの要約活動や問題提供をとおして学ぶ手法を取り入れる。多様なテキストによってドイツの多面的な文化・社会・環境の理解を促進させる。</p> <p>時制(過去形)や、副文、関係代名詞、そして受動態、ドイツ語に特有の文法事項に習熟し、英語や日本語と対比のもとに言語の多様性を理解する。</p> <p>国際化・グローバル化の進む現代に、多文化共生の平和な社会を築いていくという観点から、ドイツ言語文化の日常的な調査をうながして、人間力向上の一貫としてのドイツ語学習を動機づける。</p>	
		ドイツ語Ⅵ	<p>ドイツ映画をつかって、聴取能力を強化し、その歴史的・社会的な背景を学習することによってドイツの理解を高める。映画を台本や簡単な参考文献の解読によりドイツ語のテキストの扱いを慣れ、学生一人一人自分でドイツ語のインターネットで情報を検索するによって、ドイツ語でのネットになじませ、あらゆる研究にドイツを視野に入れさせる。</p> <p>国際化・グローバル化の進む現代に、多文化共生の平和な社会を築いていくという観点から、ドイツ言語文化の日常的な調査をうながして、人間力向上の一貫としてのドイツ語学習を動機づける。</p> <p>ドイツ語Ⅴとドイツ語Ⅵは一年生の目標であるドイツ語検定試験4級取得を踏まえて、ドイツ語検定試験3級レベルを目指す。</p>	
		フランス語Ⅰ	<p>新たな外国語を学ぶことの意義を確かめて、フランス語圏の多方面の魅力的な文化に親しみながら、フランス語の単語と文法知識を身につけることを目標にする。</p> <p>名詞の性や、名詞・冠詞類の格変化(名詞につく冠詞類の各変化)、そして動詞の人称変化(動詞の活用)、前置詞、不規則動詞の直説法現在形、非人称構文、さらに時制(近接未来・近接過去)等の、フランス語に特有の文法事項に習熟し、英語や日本語と対比のもとに言語の多様性を理解する。</p> <p>国際化・グローバル化の進む現代に、多文化共生の平和な社会を築いていくという観点から、フランス言語文化の日常的な調査をうながして、人間力向上の一貫としてのフランス語学習を動機づける。</p>	



授 業 科 目 の 概 要				
(国際文理学部 食・健康学科)				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学部 共通 科目	外国 語 科 目	フランス語Ⅱ	<p>第2外国語の学習によって日本語と英語と異なる文法法則と出逢い、言語の多様性を感じ、言語の中で表れている社会関係によって世界観が広がる。この授業は会話とリスニングを中心的に学習する。小クラスで多くの会話の練習ができ、教員が細かく指導できる。</p> <p>フランス語の発音と簡単な挨拶から始める。自己紹介から自分の周囲の状況を簡単なフランス語で表現し、表現された他人の状況と似ている(類似点のある)話しを聞き取ることを練習する。選択的聞取を意識させ、短いリスニング問題で練習する。</p> <p>国際化・グローバル化の進む現代に、多文化共生の平和な社会を築いていくという観点から、フランス言語文化の日常的な調査をうながして、人間力向上の一貫としてのフランス語学習を動機づける。</p>	
		フランス語Ⅲ	<p>新たな外国語を学ぶことの意義を確かめて、フランス語圏の多方面の魅力的な文化に親しみながら、フランス語の単語と文法知識を身につけることを目標にする。</p> <p>前置詞や、不規則動詞の活用、非人称構文、そして時制(現在、近接未来、近接過去)等の、フランス語に特有の文法事項に習熟し、英語や日本語と対比のもとに言語の多様性を理解する。</p> <p>国際化・グローバル化の進む現代に、多文化共生の平和な社会を築いていくという観点から、フランス言語文化の日常的な調査をうながして、人間力向上の一貫としてのフランス語学習を動機づける。</p> <p>フランス語Ⅰとフランス語Ⅱ、フランス語Ⅲとあわせて、フランス語検定試験4級レベルに達する。</p>	
		フランス語Ⅳ	<p>第2外国語の学習によって日本語と英語と異なる文法法則と出逢い、言語の多様性を感じ、言語の中で表れている社会関係によって世界観が広がる。</p> <p>フランス語Ⅰとフランス語Ⅱで学習した語彙やコミュニケーション・スキルに基づいて、自分の周囲の環境(大学や町)を口頭と筆記で描写する能力を促進し、様々なリスニング資料によって聞取能力を強化する。自習的なリスニング練習を新しい情報技術で促進する。</p> <p>国際化・グローバル化の進む現代に、多文化共生の平和な社会を築いていくという観点から、フランス言語文化の日常的な調査をうながして、人間力向上の一貫としてのフランス語学習を動機づける。</p> <p>フランス語Ⅰとフランス語Ⅱ、フランス語Ⅲとあわせて、フランス語検定試験4級レベルに達する。</p>	
		フランス語Ⅴ	<p>一年生のときに受講したフランス語に基づいて、簡単なテキストを耳で理解し、テキストを解読し、テキストの語彙を使いながら、テキストについて自分の意見を表明する。新しい文法を学生の要約や問題提供で伝える。多様なテキストによってフランスとフランス語圏の多面的な文化・社会・環境の理解を促進させる。</p> <p>時制(直説法半過去・直説法大過去、複合過去)や、現在分詞、関係代名詞、そして受動態、などフランス語Ⅲで学習した文法事項を、テキストの文章を読解しながら応用する。フランス語に特有の文法事項に習熟し、英語や日本語と対比のもとに言語の多様性を理解する。</p> <p>国際化・グローバル化の進む現代に、多文化共生の平和な社会を築いていくという観点から、フランス言語文化の日常的な調査をうながして、人間力向上の一貫としてのフランス語学習を動機づける。</p>	

授 業 科 目 の 概 要				
(国際文理学部 食・健康学科)				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学部 共通 科目	外国 語 科 目	フランス語VI	フランス映画をつかって、聞取能力を強化し、その歴史的・社会的な背景を学習することによってフランスの理解を高める。映画の台本や簡単な参考文献の解説によりフランス語のテキストの扱いに慣れ、学生一人一人が自分でフランス語のインターネットで情報を検索することによって、フランス語でのネットになじませ、あらゆる研究にフランスの言語・文化を視野に入れさせる。 国際化・グローバル化の進む現代に、多文化共生の平和な社会を築いていくという観点から、フランス言語文化の日常的な調査をうながして、人間力向上の一貫としてのフランス語学習を動機づける。 フランス語Vとフランス語VIは一年生の目的であるフランス語検定試験4級を踏まえて、フランス語検定試験3級レベルを目指す。	
		英語I	このクラスは初級のクラスとして次の段階に進むために、基本的な英文の復習をし、文章の中や会話の中での使用に慣れる。英語特有の音の変化を学ぶことで、英語での会話やアナウンスを聞くことになれる。ピンポイントで情報を聞き取る練習、全体の意味を把握する練習と同時にシャドウイング、ディクテーション、音読などの練習を取り入れ全体的なレベルアップを図る。同時に英語学習の根底をなす語彙の習得にも力を入れる。また次の段階への準備として多読の基礎を身につける。最後に英語の文化に触れ、動機付けや学習意欲の継続と向上を目指す。	
		英語II	このクラスでは初級から中級への移行を確実なものにし、さらに英語力を高めることを目的とする。そのため初級でマスターした構文を復習するとともに、さらに複雑な構文を理解し、身につける練習をする。語彙の習得、および多読も引き続き重視し、授業の中に取り入れていく。よく使われるイディオムにも目をむけ、授業の中で紹介し習得を促す。教材として使用する英文は一般的な教科書の英文に加え、手紙、スピーチ、Eメール、簡単な小説などバラエティに富む内容となるよう気を配る。	
		英語III	このクラスは中級のクラスとして現在の力を確実なものにし、次の段階に進む準備をすることを目的とする。中級の英語力を四技能すべてにおいて確実にし、さらに上級へと伸ばすために、より長い英文を読み、聞き、要点をまとめるといったアクティビティを取り入れる。また今まで習得したことを基に自分の意見を述べる練習をする。新聞、ニュース、インターネットなどから適切なものを教材として取り入れていく。	
		英語IV	このクラスでは中級から上級へ進むことを目的とする。特にアカデミックな読み物に対応できる語彙の習得、長い文章の要点の把握などに重点が置かれる。そのために精読とともに多読も取り入れ、英文を短時間で読む練習も予定している。またスピーチやプレゼンテーションを行うことにより、意見の発信を行う練習も取り入れる。 この授業に参加することによって自分の学習を計画し、学習進捗のテンポを自分で把握することが望まれる。	

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文理学部 食・健康学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
情報 活用 科目	情報インテリジェンス	この講義では、コンピュータやそのネットワークを利用して、主体的にさまざまな情報源から情報を収集し、その内容を吟味し、自分の知識として再構築していくための方法について学習する。また、その過程において必要となる、より深いコンピュータやその関連知識について学習する。具体的には、インターネット検索の方法（技術論、検索結果の信憑性の吟味、その活用方法）、書誌情報の検索およびその結果の活用方法、インターネット上の統計調査データの活用方法、表計算ソフトの高度な利用法などである。	講義 6時間 演習 24時間
	情報リテラシー	この講義では、コンピュータを活用していくために必要な基本操作を習得する。基本ソフト（OS）、文書作成ソフトウェア、表計算ソフトウェア、プレゼンテーションソフトウェア、ウェブブラウザの操作および活用方法について、演習を行う。また、ファイルやフォルダの扱いについて習得する。演習の中では、より効率的にコンピュータを操作できるように、ショートカットキーの活用や、タッチタイピングの習得を積極的に行う。	講義 6時間 演習 24時間
学部 共通 科目	日本の伝統文化	日本の伝統文化の多様性、社会と文化の相互作用、国際交流を考える。 国際交流が盛んな時代のなかで、日本に住む我々はいかなる情報を自分のものとし、また発信するかが問われている。本授業では、日本の伝統文化に焦点を当て、国際人として立つに必要な素養を養う。伝統文化は近現代に限定された範囲（能・歌舞伎・文楽）だけではなく、庶民の喜びや苦しみ、活気を表す様々な芸能でもある。伝統芸能が代々集積したアイディアの倉庫であり、それを自由に使う素材でもある。このような素材から自分の生き方のためのヒントが得られる。グローバル化の中で自分のアイデンティティ形成のためのヒントが得られる。グローバル社会をにらみ、温故知新を本授業により実体験する。	
	日本文化理解科目	現代日本文化	19世紀末のジャポニズム以降、日本文化が欧米の文化にどのような影響を与えたか、また欧米における〈イメージとしての日本〉が、日本にどのように逆輸入されたかを考察する。ジャポニズムという現象を異文化理解の一つのあらわれとして捉え、絵画や文学の個々の作品にどのような日本的モチーフが含まれているかというだけではなく、思想史、建築、ファッション、音楽などの多分野に及ぶ、広く社会的・文化的な現象として理解したい。講義の流れは、帝国主義とジャポニズムの関係、ジャポニズムとオリエンタリズムの関係、非西洋圏におけるジャポニズムの問題を考察した後、現在進行形でのアニメ・マンガが欧米やアジア圏でどう読まれているかという国際的な文化交流の問題を具体的に考察する。 「オリエンタリズム」「エキゾチシズム」といった概念を解説し、現代文化の具体的な事例を挙げながら論考する。例としては、文学、映画における「日本」表象、国内外におけるアニメの「日本らしさ」、グローバル化する「MANGA」とそこに見出される「日本」等を考えている。

授 業 科 目 の 概 要				
(国際文理学部 食・健康学科)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学部 共通 科目	日本文化理解科目	福岡の文化と社会	<p>福岡の文化と社会を、社会言語学的観点を中心として、幅広く福岡学・博多学の観点から、地域の文化を反映する小説・雑誌資料、方言音声資料、地方CM・マンガ・アニメ等の画像・映像資料、関連する歴史的観光資源等の情報媒体を種々交えて、分析し紹介する。</p> <p>福岡県内は、①福岡都市文化圏、②北九州都市文化圏、③久留米都市文化圏の三大都市文化圏に区画でき、それぞれが言語上の筑前方言区画圏、豊前方言区画圏、筑後方言区画圏に対応している。この社会的文化圏と地域言語圏との区画対応を軸に、それぞれの具体的な地域方言文化について、歴史・言語・地理等のさまざまな観点を織り交ぜて福岡県文化の特徴を捉えて行く。</p> <p>筑前方言資料となる博多の禅僧仙厓の語録や、『はまおぎ』(久留米浜荻)等、歴史的文献のことばと現代方言との対照など、あまり知られていない福岡地域言語社会文化の歴史的な展開の諸相についても紹介する。</p>	
		日本女性文化	<p>近代以降の日本の女性をめぐる文化的諸相について紹介し、そのあり様を理解することを目的とする。女性がかつてどのような生活を送っていたのか、教育、労働、家庭、生殖、地域、余暇、自己表現など、様々な視点から考える。</p> <p>授業形態は主に講義形式であるが、適宜グループ討論も取り入れる。可能な限り視聴覚教材を用い、理解の助けとしたい。毎回質問・感想票を回収し、理解度を把握し、次回授業の初めに質問に対する回答、補足を行なうことにより、理解を深める。</p>	
	語学研修科目	海外語学研修	<p>長期休暇中の海外での語学研修プログラムに参加する者を対象に、事前と事後の指導学習を行う。本学が提携する教育機関での研修プログラムを原則とするが、研修時間と内容が要件に適合する場合には「海外語学研修」として認定するものとする。</p> <p>事前学習として、①海外研修の諸注意点、②研修の目的と課題設定、③訪問国と日本及び福岡に関する研修言語による紹介、をワークショップ形式で行う。</p> <p>事後学習としては、研修成果を発表し合い、併せてレポートの作成を行う。</p>	
	体験学習科目	フィールドスタディ	<p>本科目の目的は、現場体験を通して、ファーストイヤー・ゼミⅠで学んできたテーマについての理解を深めることである。同時に、現場で学ぶという営みを他者と共に自ら積極的に作り上げるために、コミュニケーション能力や自己管理能力、段取り・調整能力、適応力の涵養を目指す。また、現場で当事者や実務者から学ぶにあたって必要となる社会的マナーや、聞く・訊く力そして共感・想像力を培う。現場で学んだことをもとに、ファーストイヤー・ゼミⅡでの学びにつなげていく。</p>	

授 業 科 目 の 概 要				
(国際文理学部 食・健康学科)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学部 共通 科目	体験 学習 科目	国際インターンシップ	「グローバリゼーション」に関連した課題を設定し、インターンシップを実施する。履修条件は、「学部共通専門科目」のいずれかを履修していること、また、現実社会にある組織で原則90時間以上の就業体験を実施すること。設定した「グローバリゼーション」に関連した課題の解決に向けた提案を、報告書作成および報告会実施を通して発信する。これによって、テーマに関する専門知識を深めると共に、コミュニケーション能力、自己管理能力、企画立案能力、課題解決志向性の涵養を目指す。専門分野にかかわらず、広く履修生を募集する。現実社会の問題を就業体験を通して学ぶことで、専門分野に囚われない多角的な視点と就業観を培うことを大切にする。	
		フィールドワーク	実社会に関する／実社会を対象とした／実社会における社会調査(例：質問票調査、エスノグラフィ、フィールドワーク)を実施する。履修条件は、「学部共通専門科目」のいずれかを履修していること。「学部共通専門科目」で学んだ知識をもとに、具体的調査を実施する体験を通して、社会調査の意味と意義、方法、倫理、そして調査対象に関する専門知識を深める。同時に、調査を遂行するに必要な、コミュニケーション能力、自己管理能力、企画立案能力、課題解決志向性の涵養を目指す。専門分野にかかわらず、広く履修生を募集する。現実社会の問題を社会調査実施を通して学ぶことで、専門分野に囚われない多角的な視点と就業観を培うことを大切にする。	
		サービスラーニング	本科目では、実社会における何らかの課題を解決するために活動する組織に入り、課題について学びながら、課題解決に向けた活動を実施する。履修条件は、「学部共通専門科目」のいずれかを履修していること。課題解決のための試行錯誤を通して、社会を構成する一員としての自覚を深め、その社会へserveする(仕える)視点を養う。また、現実社会で活動するために必要な、コミュニケーション能力、自己管理能力、企画立案能力、課題解決志向性の涵養を目指す。専門分野にかかわらず、広く履修生を募集する。現実社会の課題解決について、実体験を通して学ぶことで、専門分野に囚われない多角的な視点と就業観を培うことを大切にする。	
共通 基盤 科目	総合 科目	グローバリズムと多様性社会	近代からの科学技術の発展、経済活動の拡大、にともなって、政治、社会、経済活動における人、物、情報の流通は地域、国境を越えて拡大の一途をたどり、文化の画一化による固有文化の消滅等、従来の社会が保有していた多様性に象徴される豊かさがなくなると同時に、民族間紛争、富の集中偏在、資源枯渇、環境破壊など、人類の存続に関わる重大な問題が発生している。 このグローバリゼーションの本質とその影響は、社会と人の暮らし、科学技術等の視点から多面的に捉えて始めて理解されるものである。本講義は、4人の教員がそれぞれの専門分野からグローバリズムについて解説し、グローバル社会に対する理解を目指す。  (オムニバス方式／全15回)  (46 甲斐 裕 / 4回) グローバリズムの担い手、情報メディアとインターネット (01 大住圭介 / 4回) グローバル経済と地域経済 (02 堀江浩一郎 / 4回) グローバル世界と地域社会 (42 鈴木絢女 / 3回) グローバリゼーションとライフスタイル	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要				
(国際文理学部 食・健康学科)				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学部 共通科目	共通 基盤科目	地球環境と人類の未来	<p>環境問題の現状について、身近な日本の廃棄物問題から説き起こし、地球規模に広がる大気汚染問題等について、自然現象と人間の活動のそれぞれに起因する環境変動に考慮しつつ、自然科学および社会科学の視点から分析をおこなう。その分析を踏まえながら、人類と自然とのあるべき関係とは何かを考え、環境先進国の事例などを参考にしつつ、実現可能な人間社会の取るべき政策について講義をおこなう。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(20 吉村利夫/3回) プラスチックの現状と廃棄の問題を、特に日本国内について解説する。            (21 馬 昌珍/3回) 地球環境と大気汚染について、東アジアの現状と対策に焦点をあてて解説する。            (14 佐藤一紀/3回) 日常生活に存在する化学物質およびその毒性について解説する。            (6 Holst, Sven-Ohle/3回) 環境先進国であるドイツの廃棄物処理の現状や政策などについて解説する。            (9 Jayasena Pathmasiri/3回) 地球規模の環境問題について国際社会はどのように考えるべきか、何ができるかについて、政治学の立場から講義をおこなう。</p>	オムニバス方式
		現代社会における生命と健康	<p>現代社会のグローバル化と生命科学の進展は、これまでの生命と健康についての考え方を根底から揺さぶりつつある。この講義では、生命の問題を自然科学のみならず、国際的な政治・経済や宗教・倫理といった観点から考察を加えつつ、生命科学がこれまで前提としてきた機械的な生命観について批判的な考察を試みることにより、学生自らが個々の生命観、健康観を深めていくことを目標とする。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(45 小泉 修/3回) 脳死と臓器移植をめぐる生命科学            (52 田村典明/3回) 生物の遺伝子改変と健康            (57 弓削昌弘/3回) 感染症の拡大と現代社会の健康観            (24 吉田 信/3回) 国際社会における命と健康の問題            (31 御園敬介/3回) 歴史的宗教観が生命と健康の考え方に与える影響</p>	オムニバス方式
	人文 科学	国際文化論	<p>文化の流通と諸国のイメージ</p> <p>明治維新ごろから西洋の文化が大量に日本に入ってきた。そのプロセスで西洋側と日本側の思想的な背景やその実施をみる。また、日本の文化がジャポニズムとして西洋の文化に影響を与えた。この時期に構築したイメージが長い間に継続され、戦争と経済成長によって新しい一面が加わった。ポストモダニズムでモダニズムの限界を感じて、日本の現代文化が世界のポップス文化の重要な要素となった。</p>	

授 業 科 目 の 概 要					
(国際文理学部 食・健康学科)					
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考		
学部 共通 基盤 科目	共通 基盤 科目	人 文 科 学	ジェンダー	<p>男と女をとりまく歴史と現状を確認し、自分たちの生活を考える手がかりを得ることを目的とする。</p> <p>人間にはさまざまなカテゴリーがあるが、「男女」も人間を分けるカテゴリーのひとつである。ここでは男女間の権力関係のあり方について、その歴史や現状を具体的な事例を挙げて確認し、それに基づき私たちの生活を考えるてがかりとする。</p> <p>授業形態は主に講義形式であるが、適宜グループ討論も取り入れる。</p> <p>毎回質問・感想票を回収し、理解度を把握するとともに、次回授業の初めに質問に対する回答、補足を行なうことにより、理解を深める。</p>	
			日本の言語と世界	<p>世界の諸言語と比較することで見えてくる日本語の特徴について学ぶ。また、日本語が日本人だけではなく、広く世界の人々に学ばれ使われている現状に目を向けさせ、日本語を国際的な視点から捉える姿勢を養う。具体的な授業内容としては、「日本語の語彙・文法・音声・表記の特徴」「日本人の言語行動」「外国人からみた日本語」「日本語のバリエーション」「多文化共生社会と日本語」等を講じる。本授業は、海外に出て日本語や日本文化を教えようという、学生への動機付けの意味も持つ。</p>	
			欧米言語文化概論	<p>ギリシャ・ローマやゲルマンの神話・伝説、キリスト教の伝説など、ヨーロッパの多層的な文化をつくりあげている様々な要素を、中世以来の文献や文学作品、現代に伝わる単語の語源などを通して紹介し、欧米言語文化の世界への導入とする。</p> <p>また中世から近代にかけて、ラテン語から自国語使用へと移行していく様子を、当時の文献や文学作品における言語使用の状況や辞書・文法書の出版の歴史などを通して概観し、さらにグローバル社会における英語の地位および英語の多様性についても触れることで、社会と言語の関係についても考えるきっかけとする。</p>	
			言語とコミュニケーション	<p>人間のコミュニケーションの特徴や、コミュニケーションにおいて言語が果たす役割について学ぶ。具体的な授業内容としては、「人間のコミュニケーションと動物のコミュニケーションの違い」「人間のコミュニケーションを構成する要素（会話のストラテジー、ポライトネス、相づち、スタイルシフト、言語コミュニケーションと非言語コミュニケーション）」等について講じ、異文化間コミュニケーションについても触れる。</p>	
			歴史と文化	<p>今日の歴史学において、文化史と呼ばれる領域における研究活動の進展には目覚ましいものがある。政治史や制度史を中心とした従来の歴史研究においてマージナルなものとして見過ごされてきた人や事象を正面から分析対象にする文化史研究は、歴史認識の方法を豊かにするとともに、歴史学の枠組みを拡大し続けた。この授業では、こうした文化史的観点から、近世ヨーロッパ（16世紀から18世紀）における宗教と道徳の問題について講義を行う。</p>	

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文理学部 食・健康学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学部 共通科目	人文科学	人間の思索	自分とは何か。人生とは何か。社会とは何か。学問とは何か。そして、そもそも人間とは何者か。そういう哲学的な問いと思索の入り口に、受講者を誘い導くことを科目の目標とする。 初学者に配慮して、現代の世界に生きる自分自身への問いを、考察の出発点に置く。そして受講者の問題提起と議論の展開に沿って、授業を柔軟に運営する。 哲学史上の関連テキストを紹介し、解説することも行うが、何よりも学生の思考能力の鍛錬をめざし、毎回のグループ討論や小レポート等の活動を重視する。
		宗教学	現代社会において、宗教は生活や制度の中心的な位置を占めていないように見える。しかし、今日、宗教が原因で文化レベルにおける世界的な対立が激化していることは疑いようがないし、また、個人のレベルでも、宗教は様々なかたちで、人々の生活に影響を落とし続けている。どれが正しい宗教で、何を信仰することが正しい選択なのかという価値判断はさておき、この授業は、キリスト教文化圏を主たる対象としつつ、他宗教との比較論的視座も取り入れながら、そもそも宗教とは何なのかという点を歴史的に概説し、その現代的意義を探ろうとするものである。
	社会科学	ジェンダーと法	わが国の法制度をジェンダーの視点から学ぶことを通して、男女共同参画社会を創造し生き抜くために必要な基礎的法知識を獲得するとともに、法や社会制度を批判的にみる力を養う。授業計画としては、ジェンダー概念について概説し、ジェンダー統計を用いて日本の現状を把握させた上で、雇用および労働・家族・性と生殖・性暴力・社会保障および税制などの個別分野について、労働法・民法・刑法などの関連諸法および現行制度の内容と問題点を解説し、男女共同参画社会を支えるしくみとしてふさわしい法制度のあり方を考察する。
		現代社会と法	本科目では、実際の裁判例を題材として、法律が社会のなかでどのような機能や役割を果たしているのかを講じる。とくに、憲法の人権問題に関する事例を取り上げ、初学者に「公正性(正義)」という法的感覚に触れさせる。また、事例学習を通して、法学への問題意識と学問的関心をもたせる。 具体的な授業計画としては、①人権からみた憲法の役割、②刑罰からみた刑法の機能、③結婚からみた民法の機能などである。
		日本国憲法	本科目は、日本国憲法の基本理念を理解して、人々の生活における基本的人権の意義を受講者に探求させるところにその目的がある。この憲法は、制定されてすでに60年以上が経過する。日本国憲法が、国民生活との関係でどのように機能しているのか、また、国民の多くは憲法にどのような意識を有しているのかについて受講生と共に考察する。特に、実際に裁判で争われた憲法の事例を紹介しつつ、現在の人権保障の状況を明らかにする。憲法9条など、岐路に立っている現憲法のあり方(憲法改正)についても取り扱う。 具体的な授業計画としては、①憲法の基本構造、②基本的人権の総論、③各種の人権問題、④集団安全保障と恒久平和主義などを取り上げる。



授 業 科 目 の 概 要					
(国際文理学部 食・健康学科)					
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考		
学部 共通 科目	共通 基盤 科目	社会 科学	現代日本社会論	現代日本は、経済生活においては格差社会を、社会生活においては少子高齢化を、地域生活においては過疎化を経験しています。かつてないほどの激しいこれらの変化は、日本の社会を大きく変貌することを求めています。総じてこれらの問題が発生する原因として、社会力の低下があげられます。家族の個人化にともなって、地域を支える人材、財源、組織の弱体化が、地域社会の崩壊をもたらしています。上記のような問題意識を通じて現代日本社会に対する理解を深めることを講義の目的とします。	
			今日の東アジア社会	今日の東アジア（*東南アジア諸国および中国、韓国、日本、台湾、北朝鮮からなる地域）の社会は、（1）異なる言語、宗教、文化を持つ集団からなる一方で、（2）急速な経済発展に伴う都市化や格差拡大をはじめとする急激な社会変化、（3）グローバル化に伴う意識の変化という共通した変化を経験している。この授業は、東アジア地域の社会の実態や変化について学び、これからの東アジア地域を見る目を養うことを目的としている。	
			国際関係の成り立ち	本講は ○現代の国際関係（国家間関係を中核）の原型を作ったとされる17世紀半ばの欧州政治体制とその時代、そして今日から見た同体制の意義等に言及する。 ○国際関係コース生にとり不可欠であるのみならず、深刻な環境、人口等の地球的問題に国家間関係が直面するような現代社会に生きる知恵を学ぶ意味で多くの一般学生の受講も望む。授業形態は講義の形をとるが、受講者の好奇心、主体性を引き出すために、個別に時間外議論、追加レポートの提出等も受け付ける。 ○授業計画の要旨以下のとおり： 1) 17世紀ヨーロッパの歴史環境 2) ウェストファリア条約下の新政治体制（構造、関与主体） 3) 「誰のための平和と戦争」： 神聖ローマ帝国、国王と貴族、国家とブルジョワジー、国家政府と市民社会。	
			国際経済のしくみ	本講義では、最初に、グローバルゼーションのもとの国際的な経済取引に関する状況をデータにより概観する。それを前提として、各国民経済の物的なつながりと金融的なつながり、つまり国際的な財取引の問題と国際金融の問題について初等的な内容を平易に解説する。まず、国際的な財取引の問題を考察するために、微視的な視点から、財の貿易に関する基本的な議論を行い、種々の政策の問題を議論する。さらに、巨視的な観点から、経常収支と資本収支の決定に関する議論を展開し、それを踏まえて、国際金融の仕組み、特に外国為替市場の機能に関して解説を行う。	
			組織運営のしくみ	ヒトは集団や組織と関わりあいながら、社会生活を営み、経済活動を繰り広げている。特に組織の時代といわれる現代社会では、ヒトと組織の関係は重要である。組織は経済活動を営む企業から行政をつかさどる政府や地方公共団体、さらにはボランティアな活動で市民生活をサポートするNPOなど実に多様である。それらの組織は固有の原理で編成され、特有の原則で運営されている。身近な組織を取り上げてケースディスカッションを取り入れながら、ヒトがより良い生活を営むために、組織とどのような関係を結び、どのように活動すべきなのか、またヒトはのためにどのように働くのかを組織論をベースにして考えてみる。	

授 業 科 目 の 概 要				
(国際文理学部 食・健康学科)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学部 共通科目	共通 基盤 科目	社会科学	<p>グローバリゼーションをもたらす本質は、放送、新聞等のマスメディアや、インターネットなどのコンピュータネットワーク等による膨大な情報の交流、交信であるといっても過言ではない。マスメディアによる情報の世界同時共有、政治社会活動や企業活動における情報活用、研究教育分野や文化活動における情報の収集・利用など、情報の活用を抜きにして今日の社会は維持継続できない。マスメディア、コンピュータネットワーク等による情報の社会的機能と価値について、社会科学と情報科学の両面から解説する。</p>	
		持続可能社会の設計	<p>人間社会と自然環境が共生する社会の構築を目指すために必要な考え方(理論)や方法論について、様々な側面から総合的に学ぶ。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(51 大中忠勝/8回) 生活の中で消費されている資源やエネルギーの実態について講義し、持続可能社会構築に必要な事項について検討させる。</p> <p>(50 森田 健/7回) 生活の中で行われる自然環境と人間の関わりを考えることを通して、共生するシステム構築に必要な事項について検討させる。</p>	オムニバス方式
		人をめぐる生命科学	<p>生命科学・脳科学の立場からヒトとは何かを考える。ヒトを他の動物と違った独特の存在にしているのは、脳機能の飛躍的な発達によってである。その意味では、脳科学の立場からヒトを考えてみることは、自然科学の視点での新しい人間像の考察に結びつく。自分自身について知るために、皆で「ヒトとは何か」を考えてみる。</p> <p>具体的な講義内容は、ヒトの出現の歴史、ヒトの脳：言語を使ったコミュニケーション、ヒトの脳：睡眠と夢、ヒトの脳：ヒトの感覚と感覚世界、ヒトの脳：学習記憶のしくみ、脳科学の視点からヒトを考える：神経伝達物質によって操られるヒトの神経機能などである。</p>	
		国際社会における食の安全・安心	<p>食は、生存にとって最も根本的な問題であり、安全でない食料が流通する社会は人間の存在を根底から危うくしかねない。輸入食品に依存している日本においては、食品の経路・経緯が多様化しているため、食品の安全性を確保することが以前と比べても複雑で難しい問題となってきた。本講義では食品の安全・安心に関して、BSEやGMOなど、これまでに発生した問題とその原因を解説する。さらに、食の安全・安心を守るために行われている行政、企業、消費者の対応、世界各国の対応を紹介する。</p>	
		物質と環境	<p>地球環境の中での物質循環の様子とその物質循環によってどのような影響が環境に及ぼされるかをグローバルな視点から学習する。さらに、地球温暖化・オゾン層破壊・光化学スモッグ・ダイオキシン・酸性降下物・放射性物質汚染など化学物質の関係した種々の環境問題について、その原因物質の化学的な性質や化学変化について学習し、さらに、それを踏まえて問題が生じるメカニズムや環境への具体的な影響や対策等について、最近の報告資料(環境白書・環境省や経済産業省のパンフレット)等をもとに学習する。</p>	

授 業 科 目 の 概 要				
(国際文理学部 食・健康学科)				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学部 共通科目	共通 基盤 科目	物理学と現代社会	20世紀は物理学の世紀と言われるように新たな発見と理論の発展により、人類の世界像が大きく変わった。それに伴ない、科学技術という言葉がよく使われることからわかるように科学の発展と、我々の身近な生活の利便性を大きく発展させた技術の進歩は密接に関わっている。前半では、19世紀末から20世紀前半に続く物理学の理論の発展を軸に科学技術の発展を概観し、流れをつかむために必要な概念について解説する。後半では、20世紀後半から21世紀初頭にかけての物理学の社会へ直接関わる事柄への応用について解説する。	
		数理学と現代社会	数学・数理論理学は、社会を支える通信等のシステムや、産業、生活に用いる機器について、その原理をなす非常に重要な機能を果たしている。たとえば、飛行機をはじめとする機械の設計性能計算、構造物の設計計算、金融経済に代表される経済活動の分析、予測、それらの計算道具としてのコンピュータの原理等々、ほとんどすべてのシステムに数学が利用されている。数学が現代社会でどのように利用されているか、その理論はどのようなものか、理論と応用の両面を有機的に関連づけて解説する。	
		科学論	現代社会の人類にとっての課題の多くは、20世紀に爆発的に進歩した科学技術のもたらしたものである。科学技術がどのように我々の社会生活に影響を及ぼし、我々のものの考え方に食い込んでいるか、科学技術発展の負の側面に留意して探求する。特に、核エネルギーの利用について、その科学的基礎知識を学び、世界と日本における各施設の現状について考察する。	
	芸術 ・ 感性	美術表現	論理のみでは不足する、五感活用によるコミュニケーションの手段が芸術であり美術はこの範疇の代表的な一つである。「美術表現」においては絵画表現(実技)を通して、視覚コミュニケーションの基礎を習得させ、柔軟な思考法を身に付けさせ、幅広く世界に通用する人材の育成を試みる。	実技 24時間 講義 6時間
		造形表現	造形は視覚に訴える芸術の総称であり、絵画や彫刻を始め、工芸・デザインなどがある。したがって、厳密には美術表現の一種と言えるが、この授業においては、一般にいう、純粋美術以外の造形(デザイン、工芸など)をテーマとする。 さらに前期開講の「美術表現」と同様、視覚コミュニケーションの「リテラシー」の基本を、実際の表現(実技)を通して習得させる。	実技 24時間 講義 6時間
		音楽表現 I	論理のみでは不足する、五感活用によるコミュニケーションの手段が芸術であり、音楽はこの範疇の代表的な一つである。「音楽表現 I」においては唱歌の歌詞に込められた情感の表現などを通して、音楽によるコミュニケーションの基礎的手法を習得させ、柔軟な発想法を身につけさせることによって、幅広く世界に通用する人材の育成を試みる。	実技 24時間 講義 6時間

授 業 科 目 の 概 要					
(国際文理学部 食・健康学科)					
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考		
学部 共通科目	共通 基盤 科目	芸術・ 感性	音楽表現Ⅱ	「音楽表現Ⅱ」においては、言語や論理からは得られない音楽の感情表現のコミュニケーションの方法に、同じ感情表現の方法である、絵画や美術の多様なイメージを結びつけ、課題曲の表現を唱歌でもって多視点的・多角的に試みる。	実技 24時間 講義 6時間
	健康ス ポーツ 実習	健康スポーツ実習Ⅰ	健康や体力、スポーツに対する認識を深め、生涯をとおして心身の健康の保持増進をはかるため、その知識や方法を習得する事を目的として実習を行う。スポーツ実践をとおして自己管理能力、他者とのコミュニケーション能力に基づいた集団の運営能力、集中力を身につけることを目指す。筋力、持久力、柔軟性など自分の体力を認識した上でバランスのとれた体力の向上を目指し、生涯にわたって運動習慣が継続できる実践能力を体得する。また運動の習慣も身につける。健康スポーツ実習Ⅰでは、その中で、健康や体力づくりに重点を置き、その知識や方法を習得する事を主な目的として実習を行う。		
		健康スポーツ実習Ⅱ	健康や体力、スポーツに対する認識を深め、生涯をとおして心身の健康の保持増進をはかるため、その知識や方法を習得する事を目的として実習を行う。スポーツ実践をとおして自己管理能力、他者とのコミュニケーション能力に基づいた集団の運営能力、集中力を身につけることを目指す。筋力、持久力、柔軟性など自分の体力を認識した上でバランスのとれた体力の向上を目指し、生涯にわたって運動習慣が継続できる実践能力を体得する。また運動の習慣も身につける。健康スポーツ実習Ⅱでは、その中で、スポーツ実践をとおして、他者とのコミュニケーション能力を身につけることを主な目的として実習を行う。		
学部 共通 専門 科目	異文化理解	「グローバル化」という言葉は聞こえはよいが、実際には多くの問題を含んでいる。本科目は、文化背景の異なる人々がグローバル社会で暮らす際、どのような問題があり、それらはどのような要因で発生しているのか、また、解決方策にはどのようなものがあるのかについて講義していく。具体的には、(1)偏見、ステレオタイプ、(2)Uカーブ、Wカーブ、(3)カルチャーショック、(4)異文化適応、(5)異文化間コミュニケーション能力といった側面を理解してもらう。			
	国際社会とジェンダー	ジェンダーの視点から提示される国際的な諸課題のなかで、法的・政治的な性格のものを取り上げて検討することを通して、国際関係および国際社会を多面的にとらえる力を養う。女性差別撤廃条約による女性の人権の国際的保障、国際機構におけるジェンダー平等およびジェンダー主流化の取組、女性に対する暴力をめぐる国際刑事手続などを検討の対象とする。女性差別撤廃条約を特に重視し、国際人権保障の史的展開、条約の成立過程と日本の参加、禁止される差別の内容、条約の履行確保制度等について詳説する。			

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文理学部 食・健康学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 部 共 通 専 門 科 目	国際経済学	<p>本講義では、国際経済学のオーソドックスな基礎理論、制度的機構の基本的な仕組み、および現在の国際経済問題などを取り上げます。前半は国際貿易論、後半は国際金融論を中心に講義します。国際貿易、直接投資、国際金融、主要な国際経済事象の動向を的確に把握し、現状分析を行うのに必要な基本的知識・理論・分析手法の習得を目指します。各受講者がこの講義を通じ、日本の直面する国際経済問題をよりの確に理解できるようになることを期待します。</p> <p>授業の最初の1時間には、講義要項に基づいて講義します。残りの30分には、講義の内容に合わせて、日本経済新聞などの関連記事について解説したり、ビデオを見たり、質疑応答をしたりします。質問が出ないときには、出席をとるかわりに感想文を書いてもらいます。新聞やTVニュースで取り上げられた経済問題と結び付けて、分かりやすく講義することを心がけます。</p>	
	生活と環境	<p>日本を含む東アジア地域において、これからの環境調和型社会を創生するために理解しておかなければならない現状社会での環境問題、あるいはそのような状況に陥ったこれまでの経緯、さらには、東アジア地域における過去の種々の公害の歴史について学ぶ。ヒトの生活活動が今日の環境問題や健康リスクを及ぼしているかの歴史的経緯を明らかに、健康影響を低減させる制度（法律などを含む）の構築について学ぶ。（生活と環境に関する総合的講義）</p> <p>【オムニバス方式／全15回】            (47 野馬 幸生／8回) 東アジア地域における循環資源の適正管理と資源回収過程における環境影響把握について            (61 錦谷 まりこ／7回) 環境リスク把握と軽減策について</p>	オムニバス方式
	食料経済学	<p>食に関する諸問題に経済学的視点からアプローチするために、経済学の基礎理論を学び、さらに国内および世界で発生している食料・農業・農村に関する問題について理解を深める。関連科目（地域ブランド論、食経営管理論、食物危機管理論）を学ぶための入門科目であるため、関連科目を履修する前に受講しておくことを推奨する。</p>	
	食健康論	<p>食事・栄養は運動、休養と共に健康の維持・増進の重要な要素である。昨今その重要性は認識され、健康食品やサプリメントなどの情報の氾濫も招いている。食生活において過不足しているものを補正する目的で、これらの健康食品を利用する場合、逆に基本的な食生活がおろそかになり、健康を損なう可能性もある。当講義では、栄養機能食品や健康食品などに関する正しい知識を得ることで、機能表示、有用性、安全性、医薬品との相互作用を理解し、適切な利用により健康の維持・増進に役立てる知識を得ることを目的とする。</p>	

授 業 科 目 の 概 要				
(国際文理学部 食・健康学科)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学部 共通 専門 科目	社会調査法	この授業では、どのような調査を社会調査というのか、社会調査はどのような意義を持っているのか、社会調査法の種類(質的調査、量的調査、質問票調査、インタビュー調査、参与観察法など)及びそれぞれの調査方法の長所と短所について概説する。それぞれの調査法について具体例に触れながら授業を進める。		
	フィールド実践・研究推進論Ⅰ	本科目の目的は、国内外のフィールド訪問やインターンシップ、スタディツアー、ボランティア等、現場での学びや体験を行うのに必要な能力そしてスキルを試行しながら学習することである。「能力」や「スキル」は、「現場」や「関心分野」へのまなざしや心構えに支えられて初めて機能していることを理解し、実践につなげていくことを学ぶ。特に、「調査する」「実践する」自分と、「調査される」「実践される」あるいは「一緒に調査する」「一緒に実践する」他者の関係性を意識し、行動できるようになることを重視する。		
	フィールド実践・研究推進論Ⅱ	国内外で実施したフィールド訪問やインターンシップ、スタディツアー、ボランティア等の現場での学びや体験についてふりかえり、学習したことに関して何らかの解決策を提案する報告書をまとめ、報告会を実施することで、自身の学習を発信することが本科目の目的である。フィールド実践・研究推進論Ⅰおよびフィールドスタディ、フィールドワーク、国際インターンシップ、サービスマーケティングのいずれかを履修していることが履修条件となるが、フィールド実践・研究推進論Ⅰで設定した目標に対して、実際の学習体験を照らし合わせ、自分自身の成長と共に、課題を洗い出すことで、今後のキャリア(大学での学習および就業)についての方向性を創り出す。		
学科 科目	学科 基本 科目	調理学	調理は、食行動における人間らしさの最大の特徴であるとされる。調理の意義を理解し、食品の選択から食するまでの一連の工程についての基礎的な知識を得る。 調理を行う重要な目的のひとつは、食べ物の嗜好性を向上させることであり、おいしい食べ物を作ることである。まず、おいしさを感じさせる要因について学び、さらに、非加熱操作、加熱操作など調理操作の概要、調理中の食品の化学的・物理的変化の基礎などについて学ぶ。	
		調理学基礎実習	基礎的な調理を実際に行うことにより、調理学において学んだ調理の理論の習得をより行えるようにする。また長年の経験の積み重ねが特に必要とされてきた調理技術の習得を、調理学で学んだ科学的知識をもとに短期間に行う。 調理学基礎実習では、計量や洗浄、切断、加熱などの基礎的調理操作を、科学的知識をもとに習得する。また、これらの調理技術を活かし、基礎的な料理や菓子の作製を行う。	
		生化学Ⅰ	食・健康学科において中心となる科目、栄養学と食品学を学ぶうえで必須の基礎知識である生体成分について学ぶ。具体的には生体(人体)の主要構成物質であるタンパク質、糖質、脂質および核酸の化学構造、性質、機能・生体内における役割等について学ぶ。	

授 業 科 目 の 概 要				
(国際文理学部 食・健康学科)				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学 科 科 目	学 科 基 本 科 目	生化学Ⅱ	栄養士・管理栄養士にとって最重要科目である栄養学を真に理解するための基礎となる生体内エネルギー生産の機構および生合成について学ぶ。また、生体の主要構成成分であるアミノ酸・タンパク質、糖質、脂質および核酸の生体内における変化、すなわち代謝について講義する。	
		基礎実験	管理栄養士になるためには数多くの実験科目を履修しなければならない。本科目では、様々な専門的な実験を行うための準備として基礎的な知識と手順を学ぶ。すなわち、実験するときの姿勢、服装、基礎的な器具の使用法、器具の洗浄方法、溶液の混合の仕方、国際単位、有効桁数、レポートの書き方、発表の仕方、廃液の処理などである。また実験を安全に行うために注意すべき点などについても学ぶ。15回のうち講義を6回、実験を9回行う。	講義 12時間 実験 18時間
		基礎化学	高校課程の化学を基礎とした大学初年度課程の化学を学修する。特に、物質を構成している原子や分子の構造に関して、原子内の構造・電子の配置や軌道・原子の化学結合などについて理解する。 さらに、原子・分子の構造が、その物質の性質(状態変化に関連した性質や溶液中での性質など)や反応(置換反応、付加反応など)と密接に関係していることを学ぶ。	
		化学	食品と健康の関係に重要な役割を果たす食品の主要成分である糖・タンパク質・脂質・ビタミン等の構造や化学的性質を理解するために必要な有機化学の基礎知識を修得することを目的とする。授業は、1. 有機化合物の化学結合(ルイス構造式・原子軌道と分子軌道・共有結合とイオン結合・混成軌道)、2. 有機化合物の構造(構造異性体・立体異性体・共鳴構造)と命名法、3. 官能基の種類と性質(炭化水素・アルコール・エーテルとエポキシ・アルデヒドとケトン・カルボン酸とその誘導体・アミン・芳香族化合物)、4. 生体物質(糖・脂質・アミノ酸とタンパク質)の内容で計15回、講義形式で行う。	
		基礎生命科学	高校課程の生物を基礎とした大学初年度課程の生命科学(生命科学の基礎論):生命科学は20世紀後半に劇的に進展し、生命科学の基本的な知識なしには、環境や日々直面する食料・医療などをめぐる問題に対処することすらできなくなっている。生物の基本的構造や生命活動を支える精妙な仕組みについて学ぶ。  【オムニバス方式/全15回】 (52 田村 典明/8回) 生物の多様性と一様性・細胞と遺伝情報・代謝の分野を主に担当 (57 弓削 昌弘/7回) 細胞の分裂/周期・発生と分化・生殖の分野を主に担当	オムニバス方式
		基礎数学	今日、数学はデータ処理、データ解析の道具として様々な分野で利用されている。それは統計学、解析学、計算機数学などに代表されるものであるが、その基礎となる数学は微分積分学と線形代数学である。本講義では微分積分の基礎概念とその計算手法、及び線形代数における行列の性質、演算手法、また行列式の概念とその性質、その応用法について学ぶ。	

授 業 科 目 の 概 要				
(国際文理学部 食・健康学科)				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学 科 基 本 科 目	基礎統計学	この講義では、さまざまな分野の研究における調査・実験によって得られたデータを分析する上で必要となる、統計解析手法の基礎を学ぶ。前半では、得られたデータを、その特徴を表現するいくつかの数値に要約したり、データについて直感的な理解をするために可視化したりする記述統計について学ぶ。後半では、母集団から得られた標本データとその確率的な性質に基づいて母集団の性質を推測する統計的推測および、検証すべき仮説についての評価を行う統計的仮説検定について学習する。		
	応用統計学	基礎統計学で学んだ記述統計、統計的推測、統計的仮説検定の知識に基づき、分割表の検定、分散分析、ノンパラメトリック仮説検定、回帰・相関に関する統計的推測などの発展的内容を学ぶ。また、実際のデータを使った例を多く扱い、実践的なデータ解析についての能力を身につける。		
	英文講読	研究は日々進歩している。そのため、最新の国際的な論文を理解することは研究を実施するにあたり前提条件になることがしばしばある。したがって、卒業研究を開始するにあたり、英語論文の読解能力が求められることがある。「英文講読」では、国際的に重要な論文を取り上げて、論文の読解について学ぶ。自身で検索した国際的な論文を、自由に読解し世界で通用している理論や技術などに触れることができるような能力を養うことが目標である。		
学 科 科 目	グ ロ ー バ ル 社 会 の 食 と 健 康	保健医療福祉論	現在の日本におけるさまざまな福祉対策と関連する医療法規と制度を中心に講義する。2002年、従来の栄養改善法に代わり、国民の健康維持と現代病予防を目的として健康増進法が制定された。健康増進法は、2001年に策定された医療制度改革大綱の法的基盤としても位置付けられている。高齢化社会の疾病構造の変化による関連法規の変遷を学び、国民一人一人が求められる健康増進への努力と、国、地方自治体、医療機関、企業などにそれぞれ課された役割を理解する。	
		実践栄養活動論	人間栄養学、実践栄養学あるいは公衆栄養学の意義と目的を理解し、実践栄養活動に必要な基礎知識と技術を知って、有意義な大学生生活に繋げることを目的とする。 地域保健、医療機関、福祉施設、学校、給食経営における栄養指導活動の事例や先輩の講話などから、実践栄養活動には、健康・栄養状態、食行動・食環境に関する情報の収集・分析、それらを総合的に評価・判定する能力が要求されることに気づき、基礎知識・技術の習得、食や栄養に関わることへのモチベーションを高める。 また、実践栄養活動において必須となる、食品成分表の見方・使い方、栄養計算、食事摂取基準と食生活のあり方、食事計画等について学び、実際に栄養指導を受け、自分の食生活を振り返ることを通じて、基礎知識と技術を習得する。	
専 門 科 目				



授 業 科 目 の 概 要					
(国際文理学部 食・健康学科)					
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考		
学 科 科 目	専 門 科 目	グ ロ ー バ ル 社 会 の 食 と 健 康	国際食文化論	情報と流通の国際化による「食のグローバル化」が拡大する一方で、「食」の地域性はむしろ以前にも増して人々が意識を強める傾向にある。食文化は、世界の国々、または地域の自然、風土、宗教、歴史の上に成り立っているため、食文化の地域的比較検討を行うことは、「食」の地域特性のみならず国や地域の自然、経済、そして社会的条件との関わりを読み解くことができる。国際食文化論では、食を通じた異文化理解と、国際化社会における多元的な視点を養う。	
			栄養マネジメント論	身体状況や栄養状態に応じた栄養マネジメント（栄養管理）の考え方を理解し、食生活をコントロールすることによって健康の維持・増進、健康の回復、疾病の予防対策を効果的に行うための、栄養マネジメントの基本を修得することを目的とする。 栄養状態の評価・判定（栄養アセスメント）の基本的な考え方を理解し、身体状況や栄養状態に応じた栄養アセスメント手法、栄養ケア・栄養プログラムの計画と目標設定、実施、評価の基本的な流れと方法を学び、評価の種類や評価結果のフィードバックについても、具体的な事例を通して、栄養マネジメントの基本を修得する。 また、保健・医療・福祉・介護システムの中で、栄養上のハイリスク集団の特定とともに、あらゆる健康・栄養状態の者に対し適切な栄養関連サービスを提供するプログラムの作成・実施・評価の総合的なマネジメントに必要な理論と方法を修得する。	
			公衆栄養学	地域や職域等の健康・栄養問題とそれを取り巻く自然、社会、経済、文化的要因に関する情報を収集・分析し、総合的に評価・判定する能力を養うことを目的とする。 わが国の高齢社会と健康・栄養問題、健康状態の変化、食事や食生活、食環境の変化等、健康・栄養問題の現状と課題、及び公衆栄養活動の歴史、管理栄養士・栄養士制度の沿革、食生活・運動・休養指針、健康日本21と地方計画策定等、栄養政策について講義する。 また、各種サービスやプログラムの調整、人的資源など社会的資源の活用、栄養情報やコミュニケーションの管理などの仕組み、食事摂取基準や食事バランスガイドの考え方や活用方法について理解し、公衆栄養マネジメントの枠組みを組み立てるための知識と技能を修得する。	
			公衆栄養学実習	個人の集まりとして集団の栄養問題やニーズを把握し、適切な公衆栄養プログラムを計画・実施・モニタリング・評価・フィードバックするための、基礎知識と技能の修得を目的とする。 栄養アセスメントに不可欠な身体計測と種々の食事調査を実施して、食事摂取量の測定方法を習得し、人を対象とする調査のあり方、データの処理、コンピュータの利用、結果の見方考え方を理解し、総合的な評価に基づく的確な栄養アセスメント手法を身につける。 また、プリシード・プロシードモデルを使って、実際に公衆栄養プログラムの計画策定・実施・評価までを行い、栄養・健康問題の把握方法を理解し、公衆栄養プログラムの策定に具体的に活用できる知識と技能を修得する。	

授 業 科 目 の 概 要					
(国際文理学部 食・健康学科)					
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考		
学 科 科 目	専 門 科 目	グ ロ ー バ ル 社 会 の 食 と 健 康	公衆栄養学臨地実習	<p>保健所・保健センター等において公衆栄養活動の実態を把握するとともに、栄養行政の実際について習得することを目的とする。</p> <p>保健所や保健センター等の性格や業務の概要を学び、環境衛生・予防防疫・食品衛生、母子老人衛生、衛生行政・衛生教育・保健婦事業・栄養改善などの保健所業務の実態と、妊産婦・乳幼児・成人・高齢者等に対する個人指導、栄養教室・料理講習会・研修会・展示会等を通しての集団指導、給食施設指導、指導者養成や地区活動等の実際を研修する。</p> <p>なお、福岡県の保健所、福岡(政令)市あるいは宗像市の保健センターでの実習から、地域保健法の下にどのような栄養行政が行われているか、その重要性と同時に業務上の問題点や課題に気づき、課題解決への取り組み等についてまとめ、学科全体の(同期と下級生・関連領域教員)報告会で発表を行い、実習で得られた情報を共有する。</p>	
			国際健康栄養科学	<p>英語授業。今日、学術論文において英語は国際共通言語となっている。研究計画作成に先立つ先行研究検索の幅を広げるためにも、英文論文を読む力を養うことは重要である。国際健康栄養学講義では、世界的に広く購読されている食科学および健康科学分野の英文ジャーナルから最新のトピックを扱った論文を抜粋し、テキストとして使用する。各トピックに関するエッセイ形式の英文レポート作成を講義後の課題とし、学生の論文内容理解力と考察力の向上を図る。</p>	
			実践疫学	<p>食品や食行動が、その成因に深く関与する生活習慣病の増加が深刻化する現代、食事を通じて疾病予防や治療を行なうための科学的根拠を明らかにする調査研究のニーズが高まっている。実践疫学では、集団、または地域を対象とした疫学的手法を用いて、食・栄養と疾病の関連を分析する能力を養うことを目的とし、集団食事アセスメント法、さらには栄養モニタリングとサーベイランス法の理論と方法を学ぶ。</p>	
			地域ブランド論	<p>世界各地で取り組みが進む地域ブランドについて、マーケティング論の視点からアプローチする。講義では、マーケティングの基礎理論を学び、国内外の事例を通して地域ブランドの実態や課題について学ぶ。授業は講義だけでなく、グループワークを取り入れ、地域ブランドのマーケティング・プランの立案やプレゼンテーションを行う。「食料経済学」を受講していることが望ましい。</p>	
			食物危機管理論	<p>人々の生活に不可欠な食料について危機管理の視点、とくに食料安全保障と食の安全からアプローチする。食料安全保障については食料自給率や国際的な食料の生産と消費、貿易について学ぶ。食の安全については、食中毒など食の安全に関する諸事例を学び、その対策や新たな取り組みについて学ぶ。授業は講義形式で行うが、ディスカッションを随時行う。「食料経済学」を受講していることが望ましい。</p>	

授 業 科 目 の 概 要					
(国際文理学部 食・健康学科)					
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考		
学 科 科 目	専 門 科 目	グ ロ ー バ ル 社 会 の 食 と 健 康	公衆衛生学	<p>集団、または地域を対象とした疾病予防、ならびに健康増進を、環境、行動、社会状況、生活環境、保健医療制度、さらには社会保障など多面的な要因を分析し、対策設計を行う手法的知識を習得する。</p> <p>疫学、生物統計学および疾病死亡統計、行動科学および社会科学、および実験科学に関する基礎知識の習得と調査手法の理解を深める。近年世界的な流行となったH1N1、ミレニアム開発目標達成が危ぶまれているHIV/エイズ問題、経済不況が深刻さを増すにつれて増加する自殺率など、公衆衛生学的視点から考察する最新トピックを盛り込む。</p>	
			公衆衛生学実習	<p>実習を通して、集団または地域を対象とした疾病予防、ならびに健康増進について、多面的な要因から分析し対策設計を行なう手法を習得する。</p> <p>実習では、公衆衛生活動における実践的な場面・テーマを選定し、そのテーマ別課題に必要な情報収集、情報の批判的吟味と選別、及び情報の整理を行なう。また、統計学的手法による情報収集、データ処理を行ない、データの解析や分析、及び管理、またそれらによる結果を基に対策設計を行ない、情報を開示するための表現方法について学ぶ。</p>	
			生化学実験	<p>生体の主要成分であるアミノ酸、タンパク質、糖の基本的性質を調べるとともに、これらの代表的定性、定量実験をおこなう。さらに酵素の基本的取り扱い方や、酵素反応の特徴を学ぶための実験をおこなう。</p>	
	人 間 の 体 と 心 の 健 康		基礎栄養学実験	<p>分析装置の取り扱いと事故防止に向けての安全教育など、実験における基本的手技、並びに各種ビタミン類やミネラル類、脂質などの栄養素の分析法、血中脂質成分の測定法など、さらには実験結果やデータ処理の方法などの一連の報告書の作成方法などについて、実習を通じて学ぶ。</p>	
			人間構造機能学 I	<p>この授業は学ぶべき内容が多いため、人間構造機能学 I・IIの全30回で履修する。</p> <p>授業は講義形式とし、期末試験により成績を評価する。</p> <p>人間の体の構成とその機能を学ぶことは医学を含めたすべての健康科学の基礎となる。本講義では、まず必要最低限の細胞の構造と機能について学ぶ。次に、細胞が集まって構成される組織（上皮組織、結合組織、筋組織、神経組織）がどのようなものか理解する。さらに人体を機能別の器官系（骨格系、筋系、循環器系、呼吸器系、消化器系、血液系、免疫系、内分泌系、神経系、感覚器系）にわけて、器官系毎に組織学および肉眼解剖学、機能発現のしくみを理解する。また、器官系内あるいは器官系間でどのようなしくみで情報伝達が行なわれ、全体として統合された機能を発揮できるのかについても理解してもらおう。前半となる本講義では、前半の消化器系までを学ぶ。</p>	

授 業 科 目 の 概 要					
(国際文理学部 食・健康学科)					
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考		
学 科 科 目	専 門 科 目	人 間 の 体 と 心 の 健 康	人間構造機能学Ⅱ	この授業は学ぶべき内容が多いため、人間構造機能学Ⅰ・Ⅱの全30回で履修する。授業は講義形式とし、期末試験により成績を評価する。 人間の体の構成とその機能を学ぶことは医学を含めたすべての健康科学の基礎となる。本講義では、まず必要最低限の細胞の構造と機能について学ぶ。次に、細胞が集まって構成される組織(上皮組織、結合組織、筋組織、神経組織)がどのようなものか理解する。さらに人体を機能別の器官系(骨格系、筋系、循環器系、呼吸器系、消化器系、血液系、免疫系、内分泌系、神経系、感覚器系)にわけて、器官系毎に組織学および肉眼解剖学、機能発現のしくみを理解する。また、器官系内あるいは器官系間でどのようなしくみで情報伝達が行われ、全体として統合された機能を発揮できるのかについても理解してもらう。後半となる本講義では、血液系以降を中心に学ぶ。	
			人間構造機能学実験Ⅰ	人間構造機能学Ⅰ・Ⅱを履修もしくは履修中の学生のみを対象とする。 この授業は学ぶべき内容が多いため、人間構造機能学実験Ⅰ・Ⅱの全30回で履修する。授業は実験・実習形式とし、出席を含めた実習態度と提出されたスケッチ・レポートで評価する。 人体の構成を学ぶため、ヒトおよびサルを主とした組織標本を観察・スケッチし、各種組織や器官の成り立ちを理解する。また、マウス等の小動物の解剖を行い、生体における各種器官の観察を行う。	
			人間構造機能学実験Ⅱ	人間構造機能学Ⅰ・Ⅱを履修もしくは履修中の学生のみを対象とする。 この授業は学ぶべき内容が多いため、人間構造機能学実験Ⅰ・Ⅱの全30回で履修する。授業は実験・実習形式とし、出席を含めた実習態度とレポートで評価する。 人体構造機能学実験の後半となる本講義においては、主に人体を用いる、あるいは人体から採取した材料を用いる生理学的検査、生化学検査、遺伝子検査を行う。	
			臨床医学論	前半の総論では、問診や理学的所見の取り方、疾病に一般的にみられる症候、主な臨床検査、主要な治療法について学ぶ。また根拠に基づく医療とはどのようなものかを理解する。さらに疾患の本質を理解するために必要な、疾病に伴う細胞・組織の変化、すなわち病理学についてもその概要を理解する。後半では各論として、食・健康科学の分野で重要な疾患を中心に、その疾患の生じるメカニズム、診断の方法、一般的な経過、主な治療方法の概要について学ぶ。 授業経過は主に講義形式とし、学期末試験により成績を評価する。	
			栄養生理学	栄養生理学では、栄養学を生理学の視点から学ぶ。すなわち、食べ物を摂取した後の消化・吸収、栄養素の移動経路、代謝、排出、エネルギー収支、窒素出納、情報伝達、恒常性の維持などについての知識を学ぶ。近年、健康志向が強まる中で大腸の重要性が増している。そのため、健康からみた大腸の意義についても習得する。さらにケーススタディーを交えることで、思考能力の深化を目指す。また、遺伝子発現の調節、遺伝子操作、情報伝達の機序に関しても併せて学ぶ。	

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文理学部 食・健康学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	人間の 体と心 の健康	栄養生理学実験	栄養生理学実験では、栄養学を生理学の視点から動物を用いた実験や体外実験を通じて学ぶ。すなわち、食べ物を摂取した後の消化・吸収、栄養素の移動経路、代謝、排出、エネルギー収支、窒素出納、情報伝達、恒常性の維持などについての知識を学ぶ。近年、健康志向が強まる中で大腸の重要性が増している。そのため、健康からみた大腸の意義についても習得する。また、分子生物学的な実験から遺伝子発現の調節、遺伝子操作、情報伝達の機序に関しても併せて学ぶ。
		分子生物学	生命現象を分子レベルで理解する上で重要な、遺伝子の基本構造、遺伝子の発現とその制御、遺伝子複製、損傷の修復等の基本的な過程(原核生物及び真核生物)について解説する。さらに分子生物学研究に劇的な進展をもたらした遺伝子工学技術の理解に必要な基本事項を解説し、ゲノム研究、組換えDNA技術応用の現状について紹介する。
専門 科目	保健・ 医療・ 福祉・ 介護に おける 食と健 康	基礎栄養学	栄養素の基本的知識、健康維持・疾病予防・栄養と食生活の関係、栄養学の歴史的背景、栄養現象の意義、栄養素の生理的作用、栄養素の体内相互変換とその機能、摂食行動、消化・吸収、栄養素の体内運搬、代謝排泄の過程について学ぶ。
		生物物理・統計論	本科目は生体内あるいは調理行程で、必要な物理学の知識および統計学の知識を学ぶ。熱力学の法則、エントロピーとエンタルピー、栄養学で扱うエネルギー、ボディーサイズとエネルギーの関係、生体内の対向流熱交換システム、流れと混合の仕方、食品物性の測定方法、食品物性と機能性などについて理解を深める。統計学については、測定値の種類、精度、バラツキ、母集団や標本の分布と統計的な検定の考え方、検定の考え方、あるいは線形モデルおよび一般線形モデルについて理解を深める。
		食行動科学理論	われわれの食生活・食行動は、社会の変化とともに年々に変化し、食生活習慣の乱れによる過剰栄養や低栄養による弊害、そして、疾病の発症へと大きく社会・生活環境から影響を受けている。この対処法として、行動の原点とその歪みから来される心身の変化を知り、心理学的側面から生活の変容を通じて、身体を正常化する行動科学の理論を学ぶ。行動科学理論を知り食への応用実践法として、食に変容事例を用いながら食習慣変容に到達する食行動科学理論を学ぶ。
		食事摂取基準論	策定された「食事摂取基準(2010年版)」とその背景となるわが国の現状を解説する。また、「日本人の食事摂取基準(2010年版)」における考え方を理解し、基礎栄養学において学んだ知識をもとに栄養指導に活用できるようにする。

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文理学部 食・健康学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 科 目  専 門 科 目  保 健 ・ 医 療 ・ 福 祉 ・ 介 護 に お け る 食 と 健 康	栄養教育論	管理栄養士取得課程では、栄養学を始め解剖生理学、調理学等様々な専門の学問を学ぶ。それらの知識を対象者の様々な条件に合わせて構築し直し、手法を用いて栄養教育することは、対象者の食生活の歪みを整え良好な食生活習慣へと促す一歩に繋がる。栄養教育論は栄養教育の考え方とその手法を学ぶ。到達目標は個人・集団の栄養状態・心理状態に応じて効果的な教育手法を選択でき、栄養教育の運用を可能にすることである。本講義では栄養教育の概念及び背景、栄養改善に関わる計画・評価からライフステージ別の特性、指針の普及等講義する。	
	栄養教育論実習	栄養教育の理論を応用して、教育モデルや変法技法を実習する。実習対象は臨床事例を使った栄養管理・栄養教育、特に生活習慣病発症の患者を対象とした栄養指導、またライフステージ別の特性を実践に展開した栄養教育、ライフスタイル別の栄養管理・栄養教育の骨子と手法について実習を通じて学ぶ。また、対象把握の目的でも数値化された情報は用いられており、且つ、教育媒体としても、パソコン（IT）を活用した対応は現代の栄養教育方法の1つとしては欠かせないことから、栄養情報処理実習も平行して実習する。	
	ライフステージ栄養学	乳児期から高齢期に至るまで幅広い年齢層を抱えるなか、それぞれのライフステージ毎の必要栄養素、栄養所要量は必然的に異なる。健康を維持・増進するために必要な各ライフステージにおける適正な栄養の摂取のあり方、身体状況や栄養状態に応じた栄養マネジメントを学ぶことを目的とする。 妊娠や成長、発達、加齢などに伴う栄養状態等の変化、生理的特徴、栄養状態の評価・判定（栄養アセスメント）、ライフステージ別病態および疾病や、栄養ケア計画の作成、個別の栄養マネジメント知識、技術、栄養必要量の科学的根拠について学ぶ。	
	ライフステージ栄養学 実習	妊娠や成長、発達、加齢などに伴う生理的特性を理解し、栄養実態の把握、対象の栄養状態に応じた栄養ケアマネジメント立案・実施・評価・判定ができ、ひいては各年代のQOL維持向上への配慮が出来ることを目的とする。人の一生の各ライフステージ（調乳・離乳期、幼児期、学童期、思春期、成人期、前期高齢期、後期高齢期、妊娠・出産・産褥期）別の生理・栄養学を、事例をもとに調査し、個別の栄養必要量算定の科学的根拠について、各ライフステージの特徴を実習を通じて学ぶ。	
	栄養カウンセリング論	栄養カウンセリングに必要な基礎理論、技法および対象別栄養教育（ライフスタイル別、病態・疾患別）について学ぶ。 さまざまな原因による体調の乱れや生活習慣病の予防、病態コントロールに有用なライフスタイルの改善をもたらすための理念とツールを学ぶことを目的とする。 ライフスタイル上の問題点を発見し、問題点解決に向けた面談・行動療法に基づいた変容を促す手法を学ぶ。	

授 業 科 目 の 概 要					
(国際文理学部 食・健康学科)					
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考		
学 科 科 目	専 門 科 目	保 健 ・ 医 療 ・ 福 祉 ・ 介 護 に お け る 食 と 健 康	スポーツ栄養学	健康の維持・増進からスポーツ活動・運動を支える栄養学的基礎を理解することを目的とする。スポーツにおける栄養・食事摂取の重要性を理解し、コンディショニングと競技力向上を目指した食事の実践方法を探っていく。スポーツを通して健康を増進し、さらにパフォーマンスを高めるための栄養のあり方について理解する。運動時の水分補給、体重コントロールのための食事立案などを具体的かつ実践的に学び、実際にスポーツ活動の場で活用できる能力を養成する。	
			臨床栄養管理学	疾病別、ライフステージ別、および傷病者個々の身体状況、栄養状態に対応した栄養ケア・マネジメントを行うための基礎知識となる病理・病態と栄養状態の特徴を理解する。また、対象者の栄養状態のスクリーニング、アセスメントを行い、栄養ケア・プランの作成と実施、さらに、モニタリング、評価までの総合的な栄養ケア・マネジメントの手法を理解し、多職種からなる栄養サポートチーム (NST) の中枢的役割を担う管理栄養士の仕事の意義と価値を学ぶ。	
			臨床栄養管理学実習	疾病別、ライフステージ別、および傷病者個々の身体状況、栄養状態に対応した栄養ケア・マネジメントに関する実践的知識の活用技術を学ぶ。模擬NSTなどの実習を通して、基本的な病理病態と栄養状態の特徴に関する知識、ならびに総合的な栄養ケア・マネジメントの実践的知識に基づき、具体的な事例に対応できるケア・マネジメントのスキルを取得する。また、多職種からなるNST内における円滑なコミュニケーション・スキルについても学習する。	
			研究解析論	栄養学研究には、化学分析、体外実験、動物実験、ヒト試験、疫学研究などが含まれる。それらに用いられる統計学を中心に、英文を中心とした文献検索方法、そして、情報解析から発表までの一連の流れについて学ぶ。また、研究の速やかな遂行には目的とデザインの設定が重要な位置を占める。目的を設定する場合には、予想される結果の意義、目的の妥当性、研究にかかる費用や時間および労力、緊急性、実現性などを熟考する必要がある。デザインを設定する場合には、予想される結果の表やグラフと結論の文章を到達点として、統計的な知識を活用する。研究目的とデザインについても学ぶ。	
			臨床薬理学	臨床薬理学とは、薬の作用とその動態を正しく見極めることで、薬の効果の最大化と副反応の軽減を目指す学問である。 我が国の医療現場における臨床薬理学の実践は比較的新しい。患者を取り巻く各医療従事者が臨床薬理学の基礎知識を習得することは、チーム医療による治療の発展に有効である。 具体的には、薬力学、薬物動態学、適正処方、医薬品による有害事象、毒物学、薬物相互作用(飲み合わせ)、創薬と治験などの基礎的概念をテキストにそって体系的に習得する。	

授 業 科 目 の 概 要					
(国際文理学部 食・健康学科)					
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考		
学 科 科 目	専 門 科 目	保 健 ・ 医 療 ・ 福 祉 ・ 介 護 に お け る 食 と 健 康	臨地実習事前・事後指導	<p>栄養指導の実践の場として、小学校、保健所・保健センター、および病院における栄養指導の計画と評価を行うことを目的とする。</p> <p>「栄養教育論」と「給食経営管理論」、「公衆栄養学」、「臨床栄養学」、それぞれの専門分野に特異的な栄養マネジメントの展開を理解し、学校や保健所・保健センター、病院における栄養業務の全体像が把握できるように、実習前に関連分野の知識と技術の習得、現場専門家による課外講演の実施等を行い、実習の予備教育に努める。</p> <p>実習後は、各実習先で対象者の身体状況や栄養状態に応じて、どのような栄養マネジメントが行われていたか、他職種との連携体制はどうであったか、管理栄養士業務の重要性や業務上の問題点や課題についての発見(気づき)、問題点や課題への取り組み等についてまとめ、実習報告会で発表・協議を行い、知識と技術の統合を図る。</p>	
			食事療法学	<p>食事療法、栄養補給の方法について学ぶことを目的に、経口・経腸、経静脈栄養補給について理解するとともに、ライフステージ別、各種疾患別に身体状況や栄養状態に応じた具体的な栄養管理方法について修得する。病態別栄養マネジメントについては、糖尿病、脂質異常症などの内分泌疾患、肝臓病、クローン病などの消化器疾患、高血圧などの循環器疾患、透析を中心に学び、入院患者の栄養ケア・マネジメントのほか傷病者・妊婦への栄養教育についても学習する。</p>	
			食事療法学実習	<p>食事療法、栄養補給の方法について学ぶことを目的に、経口・経腸、経静脈栄養補給について理解するとともに、ライフステージ別、各種疾患別に身体状況や栄養状態に応じた具体的な栄養管理方法について実習を通じて修得する。病態別栄養マネジメントについては、糖尿病、脂質異常症などの内分泌疾患、肝臓病、クローン病などの消化器疾患、高血圧などの循環器疾患、透析を中心に学び、入院患者の栄養ケア・マネジメントのほか傷病者・妊婦への栄養教育についても学習する。</p>	
			病態栄養学	<p>傷病者の病態や栄養状態の特徴を理解し、適切な栄養管理を行うための理論を学ぶことを目的とする。傷病者の病態、病状の実態把握および、身体計測、各種検査の結果に基づく適切な栄養アセスメントによる栄養診断、栄養評価について理解する。それぞれの疾患ごとに具体的な栄養管理計画を立案し実践するための方法論について学ぶ。栄養評価、栄養管理方法について具体的な事例、実際の食事指導例もとに傷病者に対する栄養管理・栄養指導の問題点を見出し、臨床における栄養管理について理解を深める。</p>	
			栄養治療学	<p>糖尿病、高脂血症、腎疾患、炎症性腸疾患など、管理栄養士として遭遇する頻度の高い各種疾患に関して、病態そのものを把握するとともに、的確に栄養アセスメントを行い、疾患の病態に応じた栄養学的治療を処方できる能力を養う。また、経口摂取できない患者に対する経腸栄養法および経静脈栄養法の治療的目的や意義や臨床現場での実施例なども含めて、各種栄養治療法を学ぶ。</p>	



授 業 科 目 の 概 要			
(国際文理学部 食・健康学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 科 目	保 健 ・ 医 療 ・ 福 祉 ・ 介 護 に お け る 食 と 健 康	臨床栄養アセスメント	栄養アセスメントは栄養状態だけでなく疾患の病態および進行度を評価する手段であり、健康の増進、疾患の予防または治療の栄養学的対策をたてるうえで必須である。栄養管理の対策をたてるためには、疾患の家族歴や食事歴などの問診、身体計測、臨床検査、さらに栄養摂取量および消費量を把握することが必要である。これらのことを統合的に学び、臨床での栄養アセスメントのありかたを理解する。医師の治療計画がスムーズに行える栄養治療計画についても学ぶ。
		臨床栄養臨地実習	臨床栄養学実践活動の場である病院において、医療の一環としての栄養管理業務の実際を理解すると共に、課題への気づきや問題解決への取り組みを促し、栄養評価・判定に基づく適切な栄養補給を行うために必要とされる専門的知識と技術の統合が図れることを目的とする。 入院患者への治療食の提供や栄養食事指導の実際を体験し、さらに総合的な栄養ケア・マネジメントの現場から栄養サポートチーム (NST) の中枢的役割を担う管理栄養士の仕事の意義と価値を学び今後の実践に役立てる。
	食 の 安 全 ・ 安 心 と 機 能	微生物学	生命の起源と発展について概説し、原核細胞と真核細胞の違い、各種微生物の系統分類学的位置及びその分類について解説する。また、真菌、細菌、ウイルス等の微生物に関し、その形態、生理・生態や機能を詳述し、微生物と地球環境との関係、物質循環に果たす役割、病原体としての微生物像、生体防御機構、微生物の利用についてわかりやすく解説する。
		微生物学実験	有用微生物利用の観点から、微生物取り扱いの基礎を習得させる。細菌、カビ、酵母を対象とし、各種殺菌法、微生物の無菌的取り扱い法、純粋分離法、顕微鏡観察法について習熟させる。また微生物形態観察を通じて各種微生物の分類同定の基礎的手法について習熟させるとともに、増殖実験及び代謝能実験を行う。
		食品安全学	各種の食中毒とその原因ならびに予防法、食品の加工・保存のために使用される食品添加物、食品衛生対策について解説する。また、種々の食品汚染物質の毒性、汚染実態とその対策、食品産業における衛生管理等についても講義する。
		食品安全学実験	飲食物などにより引き起こされる食中毒を未然に防ぎ、食生活を安全に保つために必須の食中毒細菌検査法とその同定法について実習する。また、遺伝子組換え食品についての専門知識修得の基礎となる遺伝子組換え体の作出と組換え蛋白質の検出法についても実習する。

授 業 科 目 の 概 要					
(国際文理学部 食・健康学科)					
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考		
学 科 科 目	専 門 科 目	食 の 安 全 ・ 安 心 と 機 能	バイオテクノロジー論	「バイオテクノロジー論」では、未来への地球環境保全の観点から、世界経済における食・環境課題の解決に向けたバイオテクノロジーの重要性について教授する。特にバイオ食品を中心に講義を行い、遺伝子組み換え作物、クローン牛、機能性食品などを例示して、その技術内容を概説する。さらに、国際社会における食の安全・安心の観点から、バイオ食品の問題点を考え、今後の発展性について解説する。授業形態は、レポート課題を積極的に与え、その内容について相互討論することにより、「バイオテクノロジー」に関する総合的理解を深めさせる。	
			食品機能学	「食品機能学」では、食品を構成する個々の成分特性について概説するとともに、食品の二次機能（おいしさ）と三次機能（体調調節機能）について解説し、「食」と「健康」に関わる基礎的・応用的知識を習得させることを目的とする。特に、講義では国内外の食品研究の動向をもとに最新の情報を提供する。授業形態は主に講義形式であるが、必要に応じてレポート課題を与え、その内容について議論することにより、「食品機能」に関する総合的理解を深めさせる。	
			食品機能学実験	「食品機能学実験」では、食品の二次機能（おいしさ）と三次機能（生体調節機能）に関わる成分の定量と機能解析を行い、「食」と「健康」に関わる基礎的・応用的技術を習得させることを目的とする。特に、食品成分の抗酸化活性評価では、国内外で注目されている複数の評価技術を紹介し、最新の機能性評価法の習得を目指す。実験は班毎に行い、得られた実験データを解析するとともに、相互討論することにより食品機能解析（評価）の重要性を理解するとともに、食品研究の「おもしろさ」を体感させる。	
			食品加工・貯蔵学	種々の食品の加工方法、貯蔵中の食品の品質変化とその要因、貯蔵変化の防止法などについて講義する。食品の栄養・嗜好・機能性の高度・長期保持、流通過程の品質低下防止などに関する諸問題解決のための基礎知識を修得できる。テキストを中心に重要な内容について解説をする。また、講義中に生じた疑問点を質問として授業終了時に回収し、次の授業の際に回答を配布し、講義内容の理解度を高める。	
			食品分析化学	「食品分析化学」では、個々の食品特性をより広く理解するために、食品分析法、分析技術に関する基礎的・応用的基礎的・応用的知識を習得させることを目的とする。講義では、一般食品成分の分析に重点を置き解説するが、近年注目されている食品の二次機能（おいしさ）、三次機能（生体調節機能）に関わる食品成分の分析と機能評価法に関しても概説する。特に機能評価に関しては、国外の動向も含めて詳細な解説を行う。授業形態は主に講義形式であるが、必要に応じてレポート課題を与え、その内容について議論することにより、「食品分析」に関する総合的理解を深めさせる。	

授 業 科 目 の 概 要					
(国際文理学部 食・健康学科)					
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考		
学 科 科 目	専 門 科 目	食 の 安 全 ・ 安 心 と 機 能	食品分析化学実験	「食品分析学実験」では、学生が将来「食」の専門家として活躍するために必要な食品分析に関する基礎的知識・技術を習得することを目的とする。本実験科目では、特に基礎的な一般食品成分の分析技術の習得に重点を置き、実験では食品試料中の一般成分(水分、灰分、繊維、脂質、タンパク質)の定量操作を行う。実験は班毎に行い、得られた実験データを解析するとともに、相互討論することにより食品分析の重要性を理解する。	
			給食経営管理論Ⅰ	特定給食施設における「給食」とは、特定多数人に継続的に食事を供給することであり効率的な給食の運用がなされ、対象者への栄養改善に資する食事の提供と、食教育が行われなければならない。そのために必要な栄養管理、食材料管理、生産管理、作業管理、衛生安全管理、施設設備管理、経営管理の理論を修得し、各種特定給食施設の種類と特徴や運営管理に必要な法規等について学ぶ。さらに、給食の組織、人事、労働、事務管理、会計について事例を見ながらその方法、理論についても学ぶ。	
			給食経営管理論Ⅱ	給食経営管理論Ⅰと密接に関わりながら行う講義である。特定給食施設における管理栄養士の業務を理解し、給食管理で基本となる栄養計画の立案から供食管理までの一連の業務を学び、管理栄養士に必要なフードサービスに関する知識を学ぶ。病院・福祉・学校等の特定多数人を対象とし、継続した食事を提供する施設における利用者の身体状況、栄養状態、利用の状況等に応じた栄養計画や特別の配慮を必要とする給食管理を行うために必要な知識を具体的に学ぶ。また、関係法令や行政指導等、法との関連についても学ぶ。	
			給食経営管理実習Ⅰ	学内給食施設において、教員の指示のもとに学生が食関連科目の知識や技術を活用させて、給食の計画、実施、評価、再検討と改善を経験するものである。昼食として100食の提供を通して、給食マネジメントのあり方を考え、人・経費・物・安全性の確保等の限られた条件の中で特定多数人を対象に栄養的にバランスのとれた美味しく安全な給食を供給することと、食事を提供する組織の動かし方を学び、給食管理に必要な技術と経営管理能力を養う。	
			給食経営管理実習Ⅱ	給食経営管理論Ⅱで習得した給食経営管理技術に対して、ライフステージ別に各種給食施設に応じた栄養・食事管理の展開を学び、対象者別の栄養管理技術を習得する。 また、病院・福祉・学校などを対象とした食事を提供する対象者を想定した、栄養・食事管理の視点に立って、身体状況、栄養状態、嗜好等、対象者の状況に応じた栄養管理計画や食形態・調理法・食器の選択など特別な配慮を必要とする給食経営管理を実習し、給食施設の種類やニーズ、提供方法の違いを理解し実践することで、業務全体のマネジメント能力を養い、応用力や判断力を習得する。	
			給食の運営(校外実習)	給食経営管理論・栄養教育論に関わる講義および学内実習を履修した後、小・中学校において、給食経営管理、栄養教育の実際を研修するとともに、学校給食法に基づいた学校給食の充実に向けた食育、および小中学生の食生活や健康状態等の実態の把握、食育基本法に沿った個人又は集団を対象とした食の指導の実際を研修する。 本実習を通して、学童期に対応する実践活動の場での課題発見、解決を通して、栄養評価・判定に基づく適切なマネジメントを行うために必要とされる専門的知識及び技術の統合を図り、管理栄養士として具備すべき知識及び技術を修得させることを目的とする。	

授 業 科 目 の 概 要					
(国際文理学部 食・健康学科)					
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考		
学 科 科 目	専 門 科 目	食 の 安 全 ・ 安 心 と 機 能	調理学応用実習	調理学において学んだ調理の理論の習得を、応用的な調理を実際に行うことにより深める。また、調理学基礎実習で学んだ基礎的な調理技術を確実に会得するとともに、それを応用的な調理につなげ、得られた知識を総合的に活用する能力を身につけることを目指す。 日本料理の基礎を学ぶと同時に、フランス料理、中国料理など世界の各国の調理についてもふれていく。これらの知識を応用して、自ら献立を立て、料理を作製する能力を身につける。	
			調理科学	調理中の諸変化をコントロールし、おいしい食べ物を作る技術は従来「調理のこつ」とされてきたが、伝承の難しいものであった。従来「調理のこつ」とされてきたものをふくめ、調理に関して科学的に明らかにされた理論を学び、調理技術を会得することに活かす。調理科学では、調理学で学んだことを基礎とし、さらに幅広く、詳細な知識を得ていく。さらに、調理を科学的に考え、調理上の問題点を解決する力を身につけることを目指す。 得られた知識や調理を科学的に考える力を、調理技術を伝達していくことに応用できるようにする。	
			調理科学実験	調理科学及び調理学で学んだ理論について、実験を通じてより理解する。また、官能評価の方法など調理に関する実験を行う上で、欠くべからざる実験方法を会得する。さらに、調理を科学的に考える力を養い、調理科学の新たな理論の解明を行える力を得ることにつなげる。 得られた知識や調理を科学的に考える力を、調理技術を伝達していくことに応用できるようにする。	
			食経営管理論	フードシステムの各主体に、ビジネスの視点からアプローチし、各主体の組織、管理、経営戦略について学ぶ。授業は講義だけではなく、フードビジネスに関わる企業の事例調査と分析を行い、レポートの作成およびプレゼンテーションを行う。「食料経済学」「地域ブランド論」を受講していることが望ましい。	
	演 習 科 目		食・健康科学基礎演習	「食・健康科学基礎演習」では、現代の食や健康に関する課題を主体的に解決するために、食・健康に関する高度専門知識の習得を目指す。本科目は、食・健康科学系各教員のもと、演習形式(論文検索、読解、資料作成、討論)で実施する。特に、本科目では英語論文を題材にすることを特徴とし、講義では国内外での研究の動向をもとに最新の知見を提供する。授業では、学生間でのディスカッションを積極的に行わせ、各学生のコミュニケーション能力の向上を図るとともに、食・健康に関する課題の総合的理解を深めさせる。	
			食・健康科学総合演習	本科目では、学生を各研究室に配属し、食・健康科学系各教員のもと、各テーマに基づいた演習を通して、食・栄養・健康に関する専門的知識及び技術の統合発展につなげる。本科目では、特に学生各個人に独自の課題設定、情報収集、プレゼンテーションを行わせる事により、課題設定能力、情報処理能力、表現能力の向上を図る。さらに、グループ討議によりコミュニケーション能力の向上を図るとともに、食・健康研究の実際を模擬体験させる事により関連知識の定着を図り、学生の総合的能力を向上させる。	

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文理学部 食・健康学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 科 目	卒 業 研 究	卒業研究演習	学生が設定した学習目標に沿って学科基本科目、専門科目を履修した後、主体的に設定した課題について、毎週のセミナーを通じてその課題に関する知識の習得、課題の分析を経て、課題解決に至る研究計画を策定する指導を行う。その計画に沿って、資料収集、セミナーを行って課題解決に至る迄の研究を指導する。このとき必要に応じて関連する他学科の科目を履修する。この全過程を通じて、学生の主体性を尊重し、学生自らが課題に取り組む姿勢を養うとともに分析、判断、洞察による課題解決能力を養成する。
		卒業論文	食・健康学科の学科基本科目、専門科目を履修した後、設定した課題について卒業研究を行い、それによって培った知識、能力を基に、その課題について自ら解決に至る道を探って完成に至るまでの指導を行うとともに、その研究課程と、それによって得られた結論について、明晰な日本語あるいは外国語による論文を作成する指導を行う。
教 職 科 目		教職基礎論	<p>教職の意義と教員の役割、研修やサービスや身分保障などを含む教員の職務内容について、基礎的な知識を習得させ、教職への適切な導入を図るとともに、進路選択に資する各種機会を提供することを目標とする。</p> <p>教職の意義と教員の役割については、現状の課題を踏まえていねいな解説を行う。教員の職務内容については、各職務内容を関連させながら解説を行う。</p> <p>授業の方法は主に講義であるが、協同学習方式を適宜取り入れる。毎回の授業内容を復習させるために400字の作文を課題として課し、その作文を担当者が添削したものを発表させて討論させる。</p>
		教育哲学	<p>教育に関する理念や歴史や思想について、必要な知識を確実に習得するだけでなく、そもそも教育がどうあるべきかを考え抜き、そのみずからの考えを現行の教育制度において積極的に適切に実践しようとする態度と能力を養うことを目標とする。</p> <p>主として、教育研究方法論、欧米教育思想史、日本教育思想史の3分野に分けて授業を行うが、この3分野が相互に関連するような展開を行う。</p> <p>授業の方法は主に講義であるが、協同学習方式を適宜取り入れる。毎回の授業内容を復習させるために400字の作文を課題として課し、その作文を担当者が添削したものを発表させて討論させる。</p>
		教育心理学	<p>障害のある幼児児童生徒に関しても適切に言及しながら、幼児児童生徒の心身の発達や学習の過程について、確実な理解を図ることを目標とする。</p> <p>教師が学校でさまざまな教育活動を行う場合に、教育心理学の知見が十分に身に付いていれば教師として専門的な学習支援ができることを学ばせる。</p> <p>授業の方法は主に講義であるが、協同学習方式を適宜取り入れる。毎回の授業内容を復習させるために400字の作文を課題として課し、その作文を担当者が添削したものを発表させて討論させる。</p>

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文理学部 食・健康学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教 職 科 目	教育行政学	日本の教育に関する社会的、制度的、経営的事項について、確実な理解を図ることを目標とする。 教育は単独で存在しているのではなく、政治や経済や社会に深く結びついて存在しているので、教育政策がゆらぐことを理解させ、教育政策の動向を読み解く理論と方法を学ばせる。 授業の方法は主に講義であるが、協同学習方式を適宜取り入れる。毎回の授業内容を復習させるために400字の作文を課題として課し、その作文を担当者が添削したものを発表させて討論させる。	
	教育課程論	日本の学校における教育課程(カリキュラム)の意義とその編成方法について、確実な理解を図ることを目標とする。 教師の仕事は、何を、何のために、どう学習させ、学習成果をどう評価するかを思案し実践することであることを理解させ、その理論と方法を学ばせる。 授業の方法は主に講義であるが、協同学習方式を適宜取り入れる。毎回の授業内容を復習させるために400字の作文を課題として課し、その作文を担当者が添削したものを発表させて討論させる。	
	学校栄養教育法Ⅰ	発育発達期にある児童生徒を対象としてとりあげ、健康的な生活習慣の形成を目標とする食生活のありかたを学習する。	
	学校栄養教育法Ⅱ	連携を組む教科目の学習指導要領に沿いながら、食に関する指導について児童の食を取り巻く現状から課題を抽出し、栄養の専門的な視点に教育上の観点を考慮に入れながら教科目学習指導案を建て、模擬授業、教育の現場を想定しての児童への食育の術・実践を検討しながら学校における食育の重要性を学ぶ。  (オムニバス方式/全15回)  (65 沖田 千代/12回) 栄養教諭の必要性、小学校での授業法、学習指導案の書き方等 (68 濱田 俊/1回) 児童のからだのしくみ (71 水元 芳/2回) 世界、また特にアジアにおける学校給食	オムニバス方式
	道徳教育の研究	日本の学校教育における道徳教育の意義と役割を確実に理解させ、学校の教育活動において道徳の指導が効果的にできるための能力を養うことを目標とする。 そもそも道徳を教えるということはどういうことかという問題、道徳教育の歴史、道徳教育の現状を踏まえたうえで、実際の道徳授業の事例研究を行う。 授業の方法は主に講義であるが、協同学習方式を適宜取り入れる。毎回の授業内容を復習させるために400字の作文を課題として課し、その作文を担当者が添削したものを発表させて討論させる。	
	特別活動の研究	教育課程(カリキュラム)の意義とその編成の方法を踏まえたうえで、特別活動の指導法について、確実な理解を図ることを目標とする。 特別活動の特質、目標構成、内容構成、指導計画の作成と実施の仕方、特別活動の現状と課題などについて理解させ、特別活動における実践的指導力の基礎を身に付けさせる。 授業の方法は主に講義であるが、協同学習方式を適宜取り入れる。毎回の授業内容を復習させるために400字の作文を課題として課し、その作文を担当者が添削したものを発表させて討論させる。	

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文理学部 食・健康学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教 職 科 目	教育方法学	<p>情報機器や教材の活用の仕方についても必要に応じて紹介しながら、教育の方法と技術について、確実な理解を図ることを目標とする。</p> <p>教師が行う学習指導の成果は、教師が教育方法学の知見を十分に身に付けているかどうかにかかっていることを理解させ、具体的な「教育の方法と技術」を学ばせる。</p> <p>授業の方法は主に講義であるが、協同学習方式を適宜取り入れる。毎回の授業内容を復習させるために400字の作文を課題として課し、その作文を担当者が添削したものを発表させて討論させる。</p>	
	生徒指導論	<p>生徒指導の理論と方法、進路指導の理論と方法の両方について、確実な理解を図ることを目標とする。</p> <p>生徒指導と進路指導は、生徒の人生行路にとって計り知れない重要な指導になることを理解させ、生徒にとって効果的な生徒指導と進路指導ができるように、その理論と方法を学ばせる。</p> <p>授業の方法は主に講義であるが、協同学習方式を適宜取り入れる。毎回の授業内容を復習させるために400字の作文を課題として課し、その作文を担当者が添削したものを発表させて討論させる。</p>	
	教育相談論	<p>カウンセリングに関する基礎的な知識を習得させながら、教育相談の理論と方法について、確実な理解を図ることを目標とする。</p> <p>教師が効果的なカウンセリング技法を身に付けたうえで教育相談を行うことができれば、生徒の健全な人格的発展が大いに促されることを理解させ、その理論と方法を学ばせる。</p> <p>授業の方法は主に講義であるが、協同学習方式を適宜取り入れる。毎回の授業内容を復習させるために400字の作文を課題として課し、その作文を担当者が添削したものを発表させて討論させる。</p>	
	教職実践演習（栄養教諭）	<p>大学4年間で学んだ学習知と教育実習等で得られた実践知の統合を図り、栄養教諭としての確かな教師力を涵養する。演習形式の授業を実施し、栄養教諭としての教師力を高めるための発表・討論・ロールプレイング・フィールドワーク・模擬授業を行う。</p>	
	栄養教諭教育実習事前・事後指導	<p>教育実習受入承諾済みの小・中学校へ教育実習の前年度12月および実習1ヶ月前事前指導から、教育実習の査定授業の連携教科科目を知り、当該連携教科目の学習指導要領を整理する。学習指導要領の要点を目標や評価に置きながら、教科目の中で食に関する連携内容を学習指導案に展開する。小・中学校で添削を受ける前に、大学教員により指導案添削を受け改善してそれを反復する。指導案に沿って教材を作成し、模擬授業を大学内で実施し、受講者全員でコメントを出し、より良い授業に伸ばすように討議する。小・中学校で学習指導案の添削を受け、各実習受入先の教育方針を調べ、小・中学校における教育実習事前指導において年間指導計画、学級指導計画、および学級の配属学級を知る。且つ、実習の事後に、各小・中学校での教育実習の内容を報告し、コメントを出し合って栄養教諭教育実習を統括する。</p>	

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文理学部 食・健康学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教 職 科 目	栄養教諭教育実習	小中学校において、児童・生徒を対象にした食に関する指導の実際、あるいは食に関する指導の連携授業の実際を研修するとともに、児童・生徒に直接触れ合いながら栄養教諭として理解、自覚を深め、教師としての実践的な指導能力を育成することを目的とする。実習内容は児童生徒への教科等と連携した食の教育指導を45分間の査定授業の実習を通して、児童の食の現状を知り、食に関する課題を踏まえて栄養教諭としての使命を自覚する。栄養教育の理論を計画的に臨機応変に教育の場で実践する教育手法を具体的に学ぶ。	